

赤軍

【総特集】

RED ARMY

1969→2001

独占掲載

重信房子意見書

重信房子アンソロジー

『わが愛わが革命』

『十年目の眼差から』

『ペイルート 1982年夏』他

何も知らないあなたのための赤軍ガイド

声明文で読む赤軍

初公開 人民革命党綱領草案

手記 足立正生、山本萬里子

【インタビュー】中山千夏、松田政男 他

【対談】鵜飼哲・平井玄

【論考】平岡正明



KAWADE 夢ムック
文藝別冊

赤軍

1969→2001

【独占掲載・意見書】

重信房子

日本赤軍は何を考えていたのか？

2

重信房子アンソロジー

わが愛わが革命

10

十年目の眼差から

22

大地に耳をつければ日本の音がする

38

ベイルート1982年夏

46

赤軍・PFLP・世界戦争宣言

65

【赤軍入門】

何も知らないあなたのための赤軍ガイド

68

声明文で読む赤軍 1969-1979

84

吉村和江 日本赤軍とは何かこれだけは知ってほしいこと

108

赤軍マップ

82

【手記】

山本萬里子 私が日本赤軍メンバーであり続ける理由

126

足立正生 2000年・ベイルート・春

130

【インタヴュー】

中山千夏 本当の革命家ということ

112

大谷恭子 なぜ彼女たちはこんなにも柔軟なのか

118

オマーヤ・アブード・アダチ 足立正生の妻として

120

植垣康博 連合赤軍事件の核心とは何か？

160

【資料】

人民革命党綱領草案

148

救援のよびかけ

159

河出夢ムック 文藝別冊

【総特集】赤軍

RED ARMY 1969→2001

目次 CONTENTS

【ロングインタビュー】

松田政男

〈党〉という悪霊を超えて
重信房子——出会いと別れ、そして再びの出会い

164

【対談】

鶴飼哲
平井玄

難民の時代と革命の問い

180

【論考】

平岡正明

赤色残侠伝

194

平沢剛

〈過激派〉映画の系譜 日本赤軍と映画をめぐって

190

崎山政毅

テロリスト？ 表現者？

9

【兵士の文庫】

大槻節子

117

奥平剛士、安田安之

65

森恒夫

189

梅内恒夫

147

カナフアーニー

129

バーダー、マインホフ

179

■装幀 岩瀬聡
■目次 本文 A D 岩瀬聡
■写真 眞「赤軍 P F L P 世界戦争宣言」より

【総特集】

赤軍

1969 → 2001

日本赤軍は何を考えていたのか？

重信房子
Shigenobu Fusako

第一、今回の私自身の違法行為に対し、すべての被害者に謝罪します。

一、令面、有印私文書偽造・同行使、旅券不実記載、旅券法違反で、再逮捕されています。私は私自身の出入国の目的の為、吉田節子名義、山田昌子名義の旅券申請書を作成し、旅券の発給を受け、それを行使しました。すべての違法行為に対して、私自身に責任があることを表明します。とくに、旅券を使われた被害者の二名の方々、および、今回の違法行為の発覚によって知らずに被害を被られたすべての人々に謝罪します。

現在、捜査段階にありますので、黙秘を続けますが、裁判の中で、私自身の責任においてなされたことを明らかにする考えです。しかし、裁判までの間、黙秘を続けることが、被害者に不要な捜査の追究をもたらし、被害者を更に苦しめるに違いないと考え、裁判の開始を待たず、この場を借りて謝罪します。被害者である方々が、あたかも違法行為の加担者の様にあつかわれ、報道され

ていることに対し、申し訳ない気持ちで一杯です。

すでに、警察・検察は、「日本赤軍は、弱者の立場に立つと言いながら、弱者の名義を使って旅券を取り、行使し、ヒレツな犯罪である」点を法的道義的責任を私に追及しており、マスコミも、その様に宣伝しているかもしれせん。私の願いは、合同捜査本部が、この機を利用して、民主的進歩的人々に対し、捜査弾圧を無制限に拡大しないことのみです。

私は、被害者、関連当事者に謝罪の気持ちでいっぱい、どのような言い訳をする考えもありません。しかし、だからと言って、捜査段階において今、事実関係を明らかにする考えはありません。裁判長、私は、被疑事実を認め、公正な裁判を受ける立場にあります。そうである以上、長期の勾留と接見禁止の解除が認められるべきだと思います。

二、今回の逮捕に関する被害者である吉田節子さん、山田昌子さん、ならびに御家族の皆様には謝罪します。

私は、人々に役立つ活動をめざしながら、逮捕状が出ている自分の判断された活動をカバーする為に、吉田節子さん、山田昌子さんの名前、戸籍など勝手に盗用してしまいました。こうした違法行為は、どのような言い訳も許されず、私自身の責任としてあります。弱者の立場にある方々の名前、戸籍などを利用した恥ずべき反社会的、反人民的行為だったと反省し謝罪します。御本人のみならず御家族の皆様は驚きと怒りは、いかばかりかと恥ずかしいばかりです。

今回被害者として直接名前が公表された結果、生活を乱され、現在、将来にいたる様々な迷惑と被害を受けられたと推察します。申し訳ありません。又、病院と病院関係者が私のこの違法行為にかかわっているかの報道がなされておりますが、そうした人々は一切関係ない、むしろ被害者であることをこの場で明言しておきます。本当に申し訳ありません。被害を受けた方々には拒否されるとしても、会って非をお詫びしたい心境ですが、唯今は、それも叶いません。

私はみな様の非難、告発を当然のことと受けとめ、謝罪しつつ、司法の裁きをうけ、理解されないまでも、直接会って謝罪できる日が来ることを望んでおります。

三、中途半端な非公然非合法活動を清算し、公然と公明正大に世直しをめざします。

私は、大阪において逮捕され、また、押収品を多数奪われまし。その結果、血と汗の歴史の中で築いてきた綱領、組織、戦略・戦術にかかわる内容が矮小化されて、大阪府警をはじめと

する合同捜査本部によって、ゲーム感覚で、マスコミにリークされていきます。大阪府警しか知り得ない情報、小出しにされて、格好のマスコミの話のツマになっています。裁判長は、こうした捜査当局の不当な情報操作に注目すべきではないでしょうか。もちろん、こうした現実には弁解の余地なく、私自身が招いた敗北と考えています。そして、そのことによって、多くの被害者を作り出してしまったことに日々胸が痛み、反省の念に耐えませんが、被害者の方々、協力者と目された方々が、公安当局とマスコミのマジキとなっている現実、家宅捜索の拡大など、見ず知らずの方々に、害毒を与えている点を謝罪します。

そして、こうした起こっている現実を直視し、中途半端な非公然非合法を実行してきたこれまでのあり方をきっぱりと清算します。非公然・非合法は、逮捕状の出ている私自身の存在に多分に規定された要素がありました。しかし現在逮捕によって失うものは何もない状態におかれた以上、逆に、大胆に公明正大に合法性を最大の武器として戦いはじめます。冷戦思想を越え、左右を問わず、あらゆる人々と共に世直しを求める活動へと転換を目指します。

アラブの地で、輝く歴史を築いてきた思想を継承し、日本の地において合法性を最善の武器として、日本赤軍がそのように再生することは、日本赤軍の同志たちの願いでもあろうと確信しています。日本赤軍の誇りある一員として、私はその様に再生を誓います。

四、日本を神の国ではなく、人間の国へ

私たち日本赤軍は、世界中で、とくにパレスチナで起こっている不正義で不公正な戦争と和平交渉の現実に対決し、公正で包括的な正義に基づく平和の実現をめざして三〇年近く戦ってきました。そうした眼から見て、そして現在のアラブとイスラエルの戦争の現実を見て、日本が今問われていることは明確です。アメリカに追従する外務官僚の外交政策をやめ、日本が日本の独自の利害に基づいて日本の進路を決めるべきだという事です。日本の国際戦略と外交政策は三〇年前から現在に至るまで、米國に作ってもらった米國に迎合してきた代物です。

この三〇年、日本が、自分の運命を自分で決定する道を行くのであれば、日本は、世界からどれだけ尊敬される國となっていたか、私にはよくわかりません。

今、アラブの戦場では、そうした公正な日本の役割を待っています。離れたアラブ・パレスチナ戦場ですら、日本が政策を正すにはよくなりました、平和に近づくとです。

今こそ、アメリカ頼りを止め、神の國ではなく、人間の國として、人間の尊厳、人間らしさを國の大本とする日本の國へ、とつくりかえる世直しをもとめたいと思います。

こうした世直しをおして、日本の人々と出合える道をつくり、アラブの中で実感した生活の中の闘いをめざします。人として、ありきたりの、あたりまえの、当然の願いを、人々と共に実現していきたいと思えます。私たちは二〇世紀型の冷戦思考の闘いから、グローバル時代にふさわしい公明正大な二一世紀型の闘いへと今から歩きはじめるでしょう。日本を神の國ではなく人間の國として育てる為。

この場を借りて、私の為に被害にあわれた方々、尋問逮捕された方々、警視庁まで、カンパや街宣車で激励に来て下さっている方々に謝罪と感謝を再び表明し、新年、新世紀にむけたあいさつとします。

第二、人民革命党とは何だったのか？ 日本赤軍は何を考えていたのか？

現在接見禁止中の為、意見を表明する場合は、こうした場しかありませんので、この間の思いを以下伝えます。

歴史的に、私たち日本赤軍は、赤軍派の理論に基づいてアラブへ国際根拠地形成として一九七一年二月出発しました。そして、一九七一年秋、赤軍派の考え方の誤りに気付き、日本で起こった連合赤軍を否定する中から、パレスチナ解放勢力との共同を出発点に、日本赤軍は一九七二年に生まれました。

人は誰でもそうですが、いつも役立つ存在でありたいものです。役立つ。パレスチナ革命に役立つ存在として何をすべきなのか？ という観点から、アラブの地での共同を重点に、七〇年代を共同武装闘争を含むさまざまな領域で闘いました。当時、日本の中では連合赤軍事件のダメージに、多くの人々は闘いから去って行った時です。人々を幸せにできず、仲間を殺している人々に未来など託せない人々は思っただけです。私たちが連合赤軍で親しい友を失った悲しみ、自分たちを送り出したかつての

母体の崩壊に対して、さらば連合赤軍、という立場に立ってアラブでの闘いを開始しました。今から考えれば、連合赤軍という加害の側に立って、真剣に自分たちをも含む日本の闘いの教訓を導くという考え方に立てずにはいられないと思えます。むしろ連合赤軍の被害者の側に立って、アラブの地での輝く闘いの肯定的位置に身を寄せて、自分たちの主体のありさまを問わずに来たことも、否めません。

私たちは七〇年代は、日本の新左翼的色彩を色濃く持ちながら、リッタ空襲襲撃作戦をPFLPとの共同を軸に、国際連帯の中で闘いました。その中で敗北や、自分たちのあり方を問う機会を得て、七七年、これまでの闘い方を転換してきました。八〇年代、九〇年代は、その八〇年代に築いた私たちの立場観点に基づいて闘ってきました。

その立場は、第一に人間主義。第二に無謬の党観の否定。党の無謬性に立脚するこれまでの日本の左翼の闘い方を止める。この党観は、内ゲバの思想でもありません。第三に、我々がどうしたいかではなく、人々にとって党が果たすべき役割を果たす。それはさまざまな人民の闘いの流れを支援し統一の流れを作り出すこと人々が必要とする闘い方を第一にするという意味です。

中東においては、八〇年代インテリファータを象徴とした石つぶでの戦場で、人民の主体・主権を形成することが問われていました。私たち日本赤軍にとって、アラブで武装闘争を含む石つぶでの闘いは、八〇年代以降、日本においては民主主義の徹底、合法的な政治力量の拡大と同一の闘いだと考えてきましたし、今もそう考えています。

八〇年代以降、私たちは、日本においては、安保を軸に支配するアメリカを追放し、独占資本中心の政治社会を人民自治・自決の社会革命として実現することを、人民革命、として目指してきました。その方法は、人民参加という意味での民主主義の徹底を求めながら合法的な闘いを目指してました。日本の人々が武装することを求めていない以上、私たちは、民主主義の徹底を通して選挙を含む多様な変革を目指そうとしました。そして、民主主義を求める以上、自らも方法において民主主義に制約されるし、その様に闘うべきであることを、知っています。

以来、八〇年代から現在にいたるこの基本は変化しません。以上のこれらの、私たちの基本内容です。

八九年以降、東欧ソ連崩壊の中で、人民が革命の主体として登場する時代を求めた国際潮流が世界各地にありました。私たちは、そうした、人民の時代！ ポピュラー・エイジ、を実現する日本の主体として、国内の人々と出会う形態として、八〇年代来の路線を、一九九一年、人民革命党、として自己確立しました。この党は、変革を通して、日本で作られる党の一構成部分として自己規定し、日本の変革を求める人々と出会いはじめる出発点として九一年確立されたものです。でも、私たち自身の存在条件に規定され、公然とした合法的条件をもち得ないまま、問題意識の検証にとどまり、実態としては形成されていません。人民革命党は二〇世紀の日本赤軍の党的姿だったので。

当時から一〇年を経て、私自身の日本での学習、レバノンでのJRA五同志逮捕・亡命問題などを経て、今、新しい千年代に向けて、人民革命党の新たな公然とした転換にむけて模索していま

した。国際的地平でとわれていることと日本の現実とは、大きなちがいがあります。そうした中、私自身の逮捕がありました。破壊され、のぞかれた組織の条件では、非公然活動は、もはや不要です。なまじつかの非公然は、うさんくさい実体を作ります。今、逮捕を契機に、大胆に清算、転換します。合法・公然と、正々堂々と人々と出会い、心に触れ合う中で、世直しを求め合う人間関係を基礎に、もう一度『正義』（中東では、まっすぐで正当なこと）であり、日本では、口はばつたくなっている）を目指したいと思います。

その方法形態は、明らかに、日本の現実に立脚した公然・合法のものに他なりません。獄中の同志と共に、今後、出会うことができるかもしれない昔の友、又若い世代の人々と共に、『正義』を多様に実現したいと思っています。

だから、日本赤軍—人民革命党という形態は、世界の二〇世紀の歴史として刻み、二一世紀へのメッセージを日本から発信する新しい公明正大な世直しを運動として再生させたいと思います。みなのお知恵を拝借し、共に何かを作り上げたいです。新生のフェニックスとして！

第三、リッダ空港襲撃闘争について思う

一九七二年突然の「血の海の映像」「日本人が犯人」で、報道されたリッダ空港襲撃事件は、結果の一面のみが報道され、アラブ・パレスチナ民族のおかれた現実をはじまりとする物語を正しく伝えることが出来ませんでした。

逆に、リッダ闘争後、日本政府がイスラエル政府に見舞金をもった特使を派遣した時、「リッダ闘争の意義を台なしにする」と日本商品ポイコット運動がクウェート、エジプトなどから提唱された程です。また、パレスチナ日本人戦士よりも、イスラエル兵が殺した乗客の多さを銃弾の弾丸で証明する為に、欧州からの調査団が派遣されましたが、イスラエルは調査を拒否しました。

リッダ闘争の闘い方における評価は、日本でなぜ闘わないのかという批判を受けましたが、まず、私たちは、アラブの地で、アラブの人々の闘いに沿って、闘いに参加するという立場にありました。戦争下で、戦術的にはアラブの人々にとって最良の闘い方であったと思います。追放され、帰れない祖国のその地で闘ったことの意味は大きいからです。作戦に参加した私たちの同志たちは、どんな形であれ、アラブ・パレスチナの人々が闘いにくい側面をカバーする作戦に参加することに誇りをもっていました。

また、日本国内の連合赤軍事件で『革命の生き様、死に様』を目的にしたりした直後だったので、闘いそして死ぬことを当然と考えていたと思います。特に、リッダ闘争を闘った日本人の彼らと寝食を共にしていた目の見えないコマンドが、イスラエルの拷問で水晶体の液を抜かれて目が不自由になった人だったこと、背骨脊髓のひたかけらを、拷問で取られてヒョコヒョコ歩かざるをえない人とか、周りにいた人々を多く見ていました。拷問に耐えて闘いぬくのも一つの道だけれど、連合赤軍の人々のように同志を恨みながら死ぬのではなく、解放と革命にこそ命を捧げようという決心は固かったと思います。裸で遊ぶこの子どもたちが、我々の後ろに続くことを確信して生き、闘い、そして死すべし。

アラブの人々にとってのリッダ空港襲撃闘争も、私たちにとってのリッダ空港襲撃闘争の見方とは又ちがいます。ここに私たちがとって、リッダ空港襲撃闘争について若干ふれておきます。

連合赤軍でまだゆれている日本と別れて、私たちは、PFLPの同志と共にリッダ空港襲撃作戦を一九七二年五月三〇日に行いました。

この作戦は、何千何万何十万何百万というパレスチナ人民の涙と命の歴史の中に刻まれたアラブとイスラエルの戦争の一コマに、日本人が戦士として参加したことを示しました。

パレスチナ・アラブの側はイスラエルからの解放を求める戦争下に行われました。この交戦中の一戦闘作戦としてリッダ空港襲撃作戦が行われました。何千キロも離れた日本の人々が、抑圧され、無権利状態におかれたパレスチナ人民の側に立って連帯の共同作戦に加わったことで、パレスチナ解放運動は、人民戦争の盛り上がりをも後拡大します。パレスチナ・アラブ全勢力と政府は、戦死した日本人同志を称えると同時に、戦闘交戦に巻きこまれて死亡した人々への哀悼の意を表明しました。その後、報復によって、PFLPのガッサン・カナファール編集長が、姪と共に爆殺されるなど、戦争の攻防は続きました。そして今も、その戦争状態は続いています。

アラブの地におけるリッダ闘争の評価は、今もかわっていません。二八年後の現在に至るまで、日本赤軍同志支援や、リッダ闘争を闘った岡本同志に政治亡命を与えざるを得なかったレバノン政府の姿勢にも示されています。

と考えていたと思います。

現時点から、リッダ空港襲撃闘争を評価してみると、

① 戦争・交戦行為であった。だから、アラブ・イスラエル戦争の一面面としてとらえてほしいと思います。どの戦争にも言えることですが、戦争によって民間人が被害を受けたり命を失ったことに対し、哀悼の意を表します。が、同時に、アラブ・イスラエル戦争を根本からなくす公平な解決案を求めます。国連決議を無視しているのは、イスラエルです。

② 戦争時下でPFLPの解放闘争に参加した私たち自身の主体状況は、連合赤軍のショックを乗り越えて闘い始めようとした状況でした。パレスチナの解放闘争の要求に沿って、彼らの望む闘いを共にするところから闘いました。当時の条件において最良の戦術として戦闘があったと思います。パレスチナ人が追われた祖国にもどって祖国の土に立つて闘うことを熱望していたし、それをささやかに助けたからです。

③ リッダ闘争のおかれた条件、意義など、日本の人々にとって理解できないものだったでしょう。戦争に反対する立場からの戦争もどの犠牲者も出さなければならぬという平和の願いと、中東の現実には距離があります。そのギャップを、私自身伝えることを放棄してしまいました。その後も国内とのギャップをうずめず、いけません。それはリッダ闘争を闘った後残された私の弱点であったと思いますが、パレスチナ革命の側は部分的に身を寄せて必死で闘っていました。そして一方で、日本の闘いの否定的部分を批判していました。当時私には、心情とか、献身とかであり、展望がきちんとあつたわけではありませんでした。「でも、闘う」

という意思があったと言っても過言ではありません。その点の未熟さの責めは、私自身が日本赤軍の礎を継承した者として負うべきだと考えています。

4 日本赤軍として、戦死した同志への誇りと哀悼の気持ちと同時に、不幸にして巻き添えとなった乗客の方々、民間人の方々に哀悼の意を表します。これは一九七二年にPFLP、JRAとして表明した立場でもあります。

第四、JRAの再生に向けて……二世紀メッセージ

世界の人民・同志・友人の皆さん！

二一世紀を人民の変革の時代として生き、闘う意思を、連帯のあいさつとして送ります。親愛なるアラブの兄弟たち、レバノンのパレスチナの兄弟たち！

JRAはリッジ空港襲撃闘争を始めとするアラブの兄弟たちとの共同の中で、二〇世紀を歩んできたことを誇りとしています。アラブの兄弟たちとの共同の歴史の結果として、戦死した同志も、獄につながれた同志もいますが、アラブで共に人間らしい共同を築いた誇りは輝くばかりです。

私たちJRAは、アラブの地で歴史と共に築いた誇りを込めて、二〇世紀のJRAをアラブの地と歴史に刻みます。同時に、敵のテロ攻撃と地下戦争を強いられたJRAの負の側面も二〇世紀の歴史として終止符を打ちます。

今始まる二一世紀の人民の意思に基づく希望と変革の担い手としてJRAは、日本の中からまったく新しい姿に転生することを

宣言します。二〇〇一年を、日本を起点に「変革と連帯の主体」として、私たちは、ゆつくりと人々と出会い、世界の平和を求める人々との再会を目指します。人間らしさ、人間性で結ばれた二〇世紀の国際連帯の価値を日本の中に返し、二一世紀へと引き継ぎながら、変革と連帯を目指します。私たちのこの宣言を世界の兄弟、友人たちに送ります。

世界の中の日本として、日本がすばらしい国となる様私たちは以下闘います。

- ① 平和・正義・公正をめざして闘う世界の人々と共に進む。
- ② 抑圧され虐げられた人々、弱者の立場に立ち、人間主義に根ざして問題を解決する。
- ③ 自治・自決に基づく社会をたゆまず作り上げるために、民主主義の徹底を推し進める。
- ④ 日本においては、アメリカの言いなりな政治・経済・外交をやめ、確固とした進路を確立する。
- ⑤ アジアとの共生を基本に、日米安保を善隣平和友好条約に置き換え、環境平和立国として、日本独自の外交展開を図る。
- ⑥ 人民と共にすすむ合法的で公然とした活動の中で、私たちは、JRAは、二一世紀を、連帯を基礎に、国際的な未来の政治を実現する。

（二〇〇〇年二月二日、勾留理由開示法廷に際して）

テロリスト？ 表現者？ 崎山政毅

Sakiyama Masaki

赤軍派を知ったような身振りで安易にひとくりにするつもりはない。無党（頭）の運動の入口までどうにかたどりついた地点から、連合赤軍の問題を取り上げることでもできるだろうし、その「否定性」に縛られずに思考し批判する可能性を考えるのも必要だと思ふ。

けれども、このところますますひどくなっているキナ臭さ——石原慎太郎発言から東京都の「防災の日」での自衛隊全面動員による治安訓練計画、さらに警察と自衛隊との合同による「対テロリズム体制」にむけた策動など——から、ここでは「国際テロリスト」あつかいをされている日本赤軍を軸に考えておきたい。

エドワード・サイードが「テロリズム」とは思考停止のことばだと述べていたが、じつさい、みことなまでにおめでたい用語だ。

「テロ」のレッテルを貼っておけば、何か語ったような振りができ、あとはテロリストの野蛮さや異常さの解釈を垂れ流せば事が足りるのだから。あるいは加藤典洋が東アジア反日武装戦線に投げ掛けたような「批判」で、よしとされるのだから。

だが、ほくにとつてのさしあつての関心は、日本赤軍のメンバーたちの表現者としての側面である。すぐに頭に浮かぶのは、「リッジ空港事件」にかかわった奥平剛士の「天よ、我に仕事を与えよ」である。生真面目としか言いがたない奥平の、頑ななまでの倫理と決意の強さが読み手に迫ってくる。あるいは、重信房子の「ペイルート 1982年 夏」。サブ

ラ・シャティエラの虐殺に先立つ時期、ますますパレスティナの人

びとを追い込んでいくレバノンの内戦のさなかに書かれたこの本を、ほくは現代のルポルタージュ文学の傑作だと思ふ。そして「大地に耳をつければ日本の音がする」。出版当時には、「パレスティナからわざわざ日本の音を聞かんでもええんちゃうか」などを茶化してもみたが、平易なことばで綴られているばかりか読み手に開かれたこのテクストは、左翼の自己批判としても希有な質をもっているだろう。さらには足立正生の映像表現……。

彼らに彼ら自身のたたかいは必然とした国境を越える関係の創出や、ときに押し出されるロマンテイズムは、この世紀の中の連帯（それが「義勇兵」的であるにせよ）の決定的な経験のひとつを浮き彫りにしている、そして同時にパレスティナ解放闘争をめぐるイ

メージを固定する力としてもあつただろう。

インティファダという新たなたたかいの到来や、リアル・ポリテイクスのなかでの「パレスティナ和平」、移民・難民を弾きだし押しつぶそうとする「新世界秩序」といった「流れ」は、日本赤軍も捲き込んですすんでいくにちがいない。ほくたちと彼らの「距離」も否応なく変わっていく。

だが、少なくとも、彼らは表現者でもあつてきたし、状況の制約があろうと彼らの作品を消し去ることはできないだろう。それは、「テロリズム」の名付けを突き進めていこうとする陳腐さ感鈍さに抵抗するかけがえのない力でもあるように、ほくには感じられるのだ。（文藝）二〇〇〇年秋号初出

わが愛わが革命

重信房子
Shigenobu Fusako

「アラブの恋と革命」

アラブ名はサミーラ

ベイルートへついて三日目、わたしたちはいよいよここへ来た目的の実行にうつった。

その日、奥平君は、ひそかに覚えて来た電話番号を、しずかにダイヤルした。

すでに、日本にいたときから、文通によってパリの友人から、ひとりのベイルートの友人を紹介されていた。

アブ・ジハードというその人は、PFLPの国際局長である。いわば、PFLPのハイジャック闘争の指導者で、あの画期的な革命飛行場の現出者でもあった。

一九七〇年、ハイジャックした飛行機を、砂漠の真ん中にズバリと並べて一斉に爆破するという、前代未聞の革命飛行場は、こ

の人によって創出されたのである。

すでに五十歳はすぎているであろうか、アブ・ジハード氏は、わたしのパリの友人の友人で、革命飛行場闘争のとき、パリの友人に協力してもらったこともあって、わたしは彼への紹介をうけていたのである。

電話の返事はこうであった。

「夜の八時、ホテルを出て、前の道を五十メートル歩け。そこで右に曲って三十メートルくらい進め。時間は絶対に間違えるな。夜の八時だ」

その電話の音が、わたしたちを、新しい革命運動への第一歩へとみちびいてくれた。

もともと、わたしたちは、日本にいる時から時間の観念は正確であった。一見、他人からみればわたしたちの仲間、時間にルーズのようにみられるかもしれないが、それは逆だ。特に「よど号」ハイジャック闘争以来、次々と逮捕状が発行され、尾行がつけられる状況の中で、一分二分の狂いが、大きな支障になること

が多い。わたしたちは、時間だけは正確に守るよう、いつの間にか自分を訓練していた。

夜の八時――。

ベイルートの目抜き通りは、映画館を中心にして、まだかなりのにぎわいを見せている。

テラス喫茶やレストランのテーブルは、ほとんど埋まっている。

新鮮なオレンジのしぼりたてのジュースを売る店。お好み焼に似たアラビヤパンを売る店。それらの店頭には、若者たちが群がっている。わたしたちは、その人ごみの中を、よりそうようにして歩く。

ホテルの前の通りを五十メートル

そこに、たしかに十字路がある。

右へ曲って三十メートル。

時計はちょうど八時を示している。

すると、まるで待っていたかのように一台の黒い車が、すつと

わけがない。

どこをどう走ったのか、初めての街、初めての道なのでわかる

た。それは、わたしたちの車を、護衛している仲間たちなのであつた。

心配になって奥平君にそつと耳うちする。

わたしたちの様子に気づいたのか、助手席の一人が、微笑みながら英語で教えてくれる。

後から、一台の車がつけてくる。

わたしたちは、ためらわずにすばやく乗りこむ。

車は、目抜き通りの人ごみを縫って走り出す。ふと気がつく、

後部下アが、大きく開いた。

車の中でも、わたしたちの写真をすばやくみつめているらしい。

中には三人ばかりの、もちろんアラブ人が乗っている。わたし

たちは、すでに送ってあったのと同じ写真を示す。

わたしたちの前の前に止った。



1974年11月4日、講談社刊。

重信房子、最初の著書。足立正生らとともに『略称連続射殺魔』の制作に関わった脚本家佐々木守が、重信の手記、ならびに重信の語ったことを構成した。佐々木は「一、より感情過多であること、一、よりアクション的な部分、よりものごたりの部分、一、事実がフィクション化している、フィクションが事実化している部分」は、自分の責任である旨、あとがきで明記している。71年のベイルート行きからリッダ闘争までを回想する「アラブの愛と革命」、少女時代から出国前夜までを描く「嵐の中の青春」、リッダ闘争以降を綴る「砂漠は燃えている」の三部からなる。ここにひいたのは、第一部の第二章、第九章の前半部分、そして第二部の第五章である。

二十分以上も走ったろうか。
やがて車は、ベイルートの市街をはずれた。

そして、暗い道をしばらく走る。
ベイルートは、木の少ない街である。それは東京や大阪に似て、緑の乏しい街である。

しかし、いま、わたしたちの車は、こんもりと茂った森に近づいて行く。

いや、それは森ではない。

なんという木なのか、しつとりと夜の闇の中に枝をひろげている樹林にかこまれた、一軒の家に向っているのであった。

大きな鉄の門がある。車がつくと、すぐ中から静かに開けてくれる。

門を入って、樹林の中を、しばらく走る。

そして大きな家だ。いや、家というより館といった方がいいだろう。

静かだった。さすがにベイルートのざわめきもここまではきこえて来ない。

扉の前に止った車から、わたしたちは降りる。

シンとして、物音ひとつしない。車のエンジンの音がやけに大きくひびく。

無人の館なのだろうか。

それとも、昼間は誰かいるが、夜は無人となるのだろうか。

助手席の、さつき護衛の車を教えてくれた人が、しずかにベルを押す。

ドアがゆっくりと開けられる。わたしは、奥平君のあとにつづいて中に入った。

うすぐらい灯りが廊下に、あわい影を落している。

入口のドアが閉められると、今度は、靴音だけが、やけに大きくひびく。じゅうたんがしきつめられているというのに――。

それほど、静かなひと気のない館だった。

そんなに長くは歩まなかった。

一室の木の扉がひらかれた。どっと、人いきれが流れ出すのが感じられた。

中をのぞいて、わたしは思わず小さく叫んだ。何と、その部屋には、五十人以上の人がわたしたちを待っていたのである。

そこはいったいどういう部屋だったのだろうか。とにかく古い家で、五十人の仲間たちが坐っている部屋には、何故か、天井から電車の吊革みたいなものが数本ぶら下っていて、丸い輪がプランプラン揺れていた。

電気は、おそらく警戒のためだろう、手前の方はつけてあるが、奥の方のは消してある。だから、ずっと奥は、暗い中に、白い吊輪がプランプランと揺れている。

初対面のあいさつがすみ、自己紹介がすんで、いよいよ、わたしたちがなぜアラブへ来たのかを話しはじめた。

長い話の間じゅう、何人かの仲間は、その吊輪につかまって運動をしている。

不まじめなのかというと、そうではなくて、ちゃんとわたしたちの話はきいているらしい。

あとで「まるで死刑執行の部屋みたいね」といったら、ゲラゲ

ラ笑われた。とにかく、この吊輪は最初からあって、いい運動の器械になつてるとのことだった。

その広い、奇妙な吊輪のさがった部屋には、あのハイジャックで一躍有名になった、ライラ・ハレドや、PFLP議長のジョルジュ・ハバシユもいた。

おそらく、わたしたちを紹介してくれた人の信用もあつたのだろう、みんなは、はじめから何一つ疑うこともなくわたしたちの話をきいてくれたのだった。

もちろん話したのは奥平君ばかりだったけれど……。

その奥平君だって、大汗を流しながら、英語の辞書と首っ引きで、手真似、身ぶりを入れながら、話しても通じないところは筆談をしたりというありさまで、わたしたちのことを説明していくのだった。

どうしてもわたしたちは日本でやっていた運動の感覚があるため、まずはじめに綱領から説明し、戦略戦術について語りたいと思ってしまう。

とにかく赤軍派の路線をわかってもらわなくちゃ、というわけで、あらかじめ送っておいたパンフレットや、わざわざもつていったレジュメなどを見せながら必死の会話である。

そのうちに、これは抽象的すぎるかもしれないと気がついて、具体的に今までにわたしたちがやって来た闘いを、ひとつひとつ話してみることにした。たとえば、こうこうこういうわけで、こんな私たちの日本共産党と絶縁したのだ、といった風に、わたしたちの歴史もまた説明の中へ入れた。

そして、結論的には、「PFLPの戦略、またはその他の闘う

党派の戦略論を、日本と交流させながら、相互逆流させるような運動を媒介にし、共同武装闘争へもって行きたい」というところまでどうにかこぎつけた。

いや、共同武装闘争へもっていきたくないじゃない！ すぐにもやりたいんだ！

わたしたちは強調した。

きいていたアラブの仲間たちは、ここまでくると目を輝かした。

「あなたたちは、ハイジャックをやった日本の赤軍派ですね」

「そうです」

それがやはり、両者を結ぶ大きな目に見えない絆だったのだろうが。

「いま、あのとときの九人が、朝鮮民主主義人民共和国で何をしているか知ってますか」

「いいえ、はつきりしたことは何も……」

「もし必要なら、連絡をとることは、できないこともないですよ」

それは、彼らの私たちへの連帯のあいさつだったのかもしれない。

しかし、わたしたちはきつぱりと断つた。

「よど号」ハイジャック闘争の仲間たちに、会いたくなかったわけでは決してない。

ただ、闘いを開始する前に、会う必然性もないし、必要もないと思っていたのだ。

おそらく、会えるものならば、闘う過程で出会えるだろうし、また、闘いを媒介にせずとも何の意味もない……、わたし

たちはそう考えていたのである。

とにかく、自分たちが闘いを継続し、広げて、天井を大きくしていくこと、その過程で会えるものならば会えるだろう。

アラブの仲間たちは、わたしたちのことは一つ一つうなずいてくれた。

「あなたたちの来たことは画期的なことですよ」

そのうちの一人が、そう話してくれた。

今まで、共同武装闘争をもちこんで来た個人は、決してなかったわけじゃない。しかしそれは、義勇兵とか、ボランティアでいるる人たちが来たただけであって……

「党派としてはあなたたちが初めてですよ」

わたしたちは、わたしたちが組織戦略としても、世界的な同時革命軍をつくっていくための構想を持っている、と説明すると、異口同音に「すぐやろう！」と叫ぶ。

さつき出会ったばかりの人たちなのだ。

わたしは、アラブの仲間たちのあけつびろげな態度に、おどろきと同時に、だんだん興奮してくる胸をじつとおさえていた。

話ほとんど拍手に進んでいった。

すくくブラックティカルな人たちだった。

言葉なんかは、全然信用していない。

お互いの言葉を復唱することも、聞きかえすこともない。

いま、現実には、何をやるうとしてしているのか。現実には、国境を越えてアラブまで来て聞きたいといっている人間がいる。この人たちは闘う気があるにちがいない。

信じるものは行動だけだ。

そんな彼らの気持が、びんびんわたしの胸にはねかえってくる。言葉のすばらしさ、文字のうつくしき、そんなものは何の力にもなりやしない。

その部屋の五十人の仲間たちが、すべてそういつているようだった。

日本を発つときは、三年後ぐらいまでに、何とか闘える努力をして、基礎を作るんだという風に思っていたのに、それが、たった一晩のうちに、いや数時間のうちにここまで進んでしまったのだ。

わたしは、うれしがり屋のところがあるのだろうか。気がつくとは、はずむ胸をおさえかねて、よくわかりもしない英語で、いつか一生懸命に、とにかくかまわっている気持だけでもわかっている、と、しゃべりまくっているのだ。

「ウェル・カム」

「ウェル・カム」

の言葉が渦まいた。

「あなたたちの住所を、好きなところに用意させよう。そして、あなたたちが秘密裡に来たことを保持できるような態勢をとろう」

そして、いったい誰がいい出したのだろうか、わたしたちにアラブ名をつけることになったのだ。

それは、楽しい作業だった。仲間たちが、さまざま名前を口にする。

「何だ！ それ、お前の奥さんの名前じゃないか！」

「お前だって、旦那の名前をつけようとしてやがって」

「おれのかわいいベビーと同じ名前だ。いいだろう」

それこそ、五十人が、二つか三つの名前を上げたのだから、少なくとも百をこえるアラブ名が出たろうと思う。

その中で、やつとしまった名前はこちらだ。

奥平君は「パーシム」

わたしは「サミール」

「サミール」——口の中で、ちよつとつぶやいて、横にいた奥平君をチラと見ると、彼も小さく唇を動かしている。おそらく口の中でわたしと同じように「パーシム、パーシム」とつぶやいているのに相違なかった。

「パーシムとサミール」

なんだか、その時を期して、わたしは新しい人間になったような気がした。その日が、新しい女・サミールの誕生日なのだ。

このころになって、ようやく心のゆとりが出て来て、部屋を落着いて見回すことができた。

表からみた、古いかめしい洋館のイメージとはがらりとかわって、その部屋にはポスターなどがいっぱい貼ってある。おそろしく、長い間事務所として使われて来たのだから、みんな

「ここへ爆弾が落ちるか、権力の手が介入して来たら、みんな網打尽じゃない。こんなこととしていいの」

わたしは、日本の体験から、心やすくそんなこともいつてみる。

みんなは声を上げて笑った。そして、ひとりひとり、自分が何をして来たかを、手短かに話してくれるのだった。

ライラが、わかりにくいアラブ英語を、はつきりとした英語に

して話してくれる。ライラの親切は、このあとも、わたしがどうにか英語で会話できるようになるまで続いた。

夢中で話しているあいだ、わたしは、その五十人の仲間たちが、みんな若い仲間だとばかり思っていた。

しかし、落着いて、いまよくみると、中年以上の人、いや年寄りといつていくらいの人がすくく多いのだ。

「あつ」と気がついた。そうだが、ここでは生活の中に革命があるのだ。生活が革命であり、革命が生活なのだ。

ひたひたに、深いしわを刻んだおじいさんの、早口のなまりの多い英語をききながら、つくづくとそう実感したのである。

窓の外には、まだ闇がつづいている。

冬のペイルートの夜は、まだ明けない。

そのとき、わたしは気づいた。この館の庭に、まるで森のようにならんでいるのはジャスミンの木であることに。

まだ花はつけていなかったが、そのジャスミンの林の中の家で、わたしはサミールとしての第一歩をふみ出したのである。

「アラブの恋と革命」

九 テルアビブ闘争前夜

アラブとはいえ、ペイルートを吹く二月の風は、まだつめたかった。

「大変だよ、いま、日本で赤軍ががんばってるよ」

新聞記者の一人から、そう教えられて、わたしは、急いでラジオをつけた。BBC放送の英語のニュースでも、かんにんに報道している。

しかし、それがどういうことなのか、さっぱり、わからない。わたしは、「アル・ハダフ」の事務所へ行った。

「サミーラ！ やつてるよ。日本で赤軍派が銃撃戦をやつてるよ」

本当だったのだ！

本当に、いま、日本で銃撃戦が行なわれている！

「アル・ハダフ」の事務所では、みんな、拍手して、がんばつてくれと叫んでいる。

わたしは、急いでパーシムたちに連絡をとつた。うれしかった。

無性にうれしかった。

連絡も途絶えて、どんどん間違つた方向へ進んでいって、「この野郎」と思っていた、あの赤軍派が、つい三カ月ほど前、訣別の手紙を送つたばかりの赤軍派が、銃撃戦をやっている！

わたしは、ベイルートの街を、叫びながら走りたいたいような衝動にかられた。

わたしたちの方がまちがっていたのだ。

連絡が途絶えたのは、今日のために、彼らは忙しすぎたのだ。

パンフレットの間違った論理も今日を準備するための試行錯誤だったのだろう。

やっぱり、わたしの愛した赤軍派は正しかった！

「どうしたんだ、サミーラ」

パーシムたちが集つて来た。わたしは、興奮して叫んだ。

「やつてるわよ、日本の赤軍派。あんなにわたしたち悪口いってたけど、逆に、わたしたちの方が、がんばらなくちゃいけないよ。いま、東京で銃撃戦やつてるのよ！」

「ほんとかー」

「やつてるのかー」

「東京で銃撃戦を！」

パーシムたちも興奮した。

とにかく、正確なニュースを知ろう。

わたしは、日本語の新聞を配達している事務所へとんでいって、一日おくれの新聞を買ってくる。

ところが、銃撃戦の場所は、軽井沢となっている。

おかしい、どういうことなんだ、これは。

パーシムたちも、だんだん心配そうな顔になってくる。

そのうちに、新しいニュースが、どんどんつたわってくる。

そして、事実が一つ一つわかってくる。

「銃撃戦、断固支持」と、様々な党派が声明しているということも知るようになる。

「なぜ、これが銃撃戦だ！」

正確な事実になづくにつれて、わたしたちはだんだん絶望して

くる。もちろん、アラブの状況と、日本の状況とは、まったくちがっていて、武装闘争においても、大きな開きのあることはわかっている。しかし、戦略的にいっても、現実の情勢からいっても、こ

れでいいんだろうか、いや、ちがう、これじゃ間違いだ……わたしたちの絶望はだんだん深くなる。

しかし、しかしだ！ とパーシムたちと話しあう。

防禦陣型の中での、最後攻勢なのだ、これは。そのバトスとモラルみたいなものは、理解できるではないか。

きつと、あの銃撃戦をやつた中には、坂東君がいるにちがいない。わたしたちは、みんなそのことを確信する。坂東君だ。坂東君がやつたのだ。

坂東君は、日本で出会つた仲間たちの中では、奥平君と並んでもっとも革命的であった。そして、奥平君は、坂東君とは、とても仲がよかつたのだ。

「坂東、やつてるか、よし」

奥平君は、うなずく。

奪還闘争だ！

パーシムたちがうなずく。

銃撃戦が、東京ではなかつたことで、一つ落胆し絶望したものの、わたしたちは、最終的に、軽井沢闘争をそのようにうけとめたのであつた。

しかし、次の日、事務所へ行ったわたしは、そこで、思いがけない電話をきかなければならなかつた。

「サミーラ、日本から国際電話がかかつてるんだけど、重信房子って誰だ」

「わたしよ」

そのころになると、わたしは、もうサミーラとしてのみ存在していたのである。

「もしもし」

電話にでると、相手は女の人だった。

「三時のあなた、の山口淑子でございます。そちらも、いま、三時かしら」

「いいえ」

わたしたちの電話は、そんな会話から始つた。それは、まったく、とつぜんの電話であつた。

そして、わたしは、山口さんの口から、山田君が殺されたという話をきいたのである。

わたしはがくぜんとした。

どうということなのか、瞬間、何もわからなかつた。

山田君とは、日本にいる間、ずっと一緒に仕事をして来たし、スパイであるなどは考えてもみなかつた。しかし、わたしは、スパイである以外、わたしたちの党派が殺すなどということはないと信じていた。

山口さんは、電話の向うで、どうということなのかとしきりに問いつめる。

わたしは、苦しい思いで答えた。

「きつと、スパイの疑いがあつたのだと思います」

受話器をおいた。床がぐらぐらゆれるように思えた。

何人も殺されたということは、そのときはまだ、もちろんわか

つていない。

アパートへ帰ると、奥平君が来ていた。

「パーシム」

彼の顔をみたとたん、ポロポロ泣けて来た。

「日本で、仲間、殺したわ」

彼も、一瞬、息をのんだ。

わたしは、電話で聞いた内容を、声をつまらせながら話した。奥平君は、山田君のことは知らなかった。

そのせいとか、彼はなぐさめるようにいった。

「それは、きつとスパイだったんだよ。そうにきまってる」

しかし、彼のなぐさめの言葉も、わたしの耳には入らない。日本で、何かとんでもないことが起きている。同じことを口ばしりながら、わたしはポロポロ泣いた。

「よせよ、バカ！ そんなことがあり得るものか。日本で銃撃戦やるくらいがなばつたんだ。坂東たちがいるんだから大丈夫だよ」

いつもは無口な奥平君が、その時だけは、多弁であった。

そして、その翌日、わたしは「遠山美枝子さんが殺された」という話と、それにつづくすべての事実を知らされたのである。

だが、そのときは、それほどおどろかなかった。「やっぱり……」という気持であった。山田君のことで、自分の中に、ある種の覚悟ができていたのだろうか。

バーシムが、その日も、わたしのアパートに待っていた。

「一人じゃなかったわ。十何人殺されたのよ。ミエコも殺されたのよ」

わたしから、すべてを聞いたとき、奥平君の顔がゆがんだ。

しばらく彼は、必死に涙をこらえているようであった。そして、何か、言葉にならない言葉をつぶやきはじめた。

「おれたちが、何のために、ここで、ここに、いると思ってる

んだ。おれたちの、おれたちの……」

それは、言葉とはいえない、声でしかなかった。つぶやきでしかなかった。

わたしもだまって坐りつづけた。

バーシムは、もう何もいわなかった。彼の中には、おそらく、ひと月前、海で死んだオールドのことが重なっていたのである。しかし、バーシムたちは、オールドの死は、自分たちがひきうけて、背負っていく決心であった。それなのに、日本で死んでいった多くの仲間たちは……。

部屋は、だんだん暗くなっていった。

わたしたちは、電気もつけずに、黙ったまま坐りつづけていた。つと、バーシムの手がのびた。

テーブルの上に、日本から送って来た雑誌が置いてあった。白っぽい表紙の「映画批評」という雑誌を、バーシムはパラパラとめくった。

そこに竹中芳が書いた「毛沢東・青春残侠传」という文章がのっている。

バーシムは、その中の一節「帰れ、同志の言葉」という部分を、声上げて読みはじめた。

涙をいっばいためて読みはじめた。

つまりそうなる声をはげまして、読みつづけた。

すっかり日が落ちた、暗がりの中で、声を出して読んでいった。

「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間のことであり、仲間ではない隊伍が、うまくいくはずがないじゃありませんか。全軍は、九十一人と七十二挺の銃を残すのみとなった。しかしながら、

われわれはどんな困苦欠乏にも耐え得る。もはやわが血肉、革命の志で結ばれた同志である」

くりかえし、くりかえし、バーシムは、読んだ。

この部分だけを、バーシムは何度も、何度も読んだ。

ポタポタ、涙がほおをつたわった。

その涙をぬぐおうともせず、バーシムは同じ文章を読みつづけた。

すべての哀しみを、それを読むことによつてしっかりと自分の中にかみしめようとするかのように、バーシムの声は、だんだん大きくなっていった。

ペイルトは、いつか、夜になっていた。

いったい、わたしたちの死に方とはどういうことなのだろうか。真の死に方、真に革命的な死に方とは何か。

自分が死ぬことを避けて通っている限り、殺すことは間違いない。ある。

殺すということは、自分の死を代償とする以外にはあり得ないのだ。そのことを、日本の仲間たちはわかっていない。

かけつけて来たバーシムたちは、黙って、下をむいて、同じように、同じことを、たしかめあった。

今、このとき、わたしたちのとるべきなのはどんな行動か。真の闘いと、真の死を、すべての人たちにわからせる作戦とはいいたい何か。

オールドの死を前にして、わたしたちが決心したこと、連合赤軍のあり方との間には、ものすごいへだたりがあるように思われていった。

それは、哀しみではなかった。くやしきであった。

そのくやしきの中から、わたしたちは、わたしたちの闘争を組織しなければならぬという感覚をつかみとっていった。

「嵐の中の青巻」

いま、国境を越える

久しぶりで家へ帰った。

奥平君が発発してから、わたしは猛烈に忙しい日々を送っていたのである。おそらく、二度と帰ることのできない旅であった。

いろいろなお知らせが、一度にどっと押し寄せた。あれもしなくてはいけない、これもやっておかなくては……。

そんなこんなで、すっかり日数をつぶし、家へ帰ったのは、出発のすぐ前の日であった。

「外国へ行ってくるわね」

わたしはさりげなく両親にきり出した。

父は、しばらくじつとわたしをみつめていた。

「そうか。外国へ行くのか」

そこで一度言葉を切って、またしばらくわたしをみつめた。

「ま、お前が行くんだから、人並みのことをやるんじゃないだろう。とにかく、帰って来られるなどとは思わずに行つてきなさい」

父の言葉は、それだけだった。

どこへ行くとも、何しに行くとも、聞かなかった。父のそんな態度に、母も安心したのだろうか、いとも気易くいつてくれるのだった。

「外国行くのなら、いい洋服持ってた方がいいわね。出発までに何とか買っといてあげよう」

母は、わたしが、少し長い外国旅行をするぐらいの感じであうけとめていてくれたようだった。

「でも、お母さん、ひよっとしたら、帰って来ないかもしれないわよ」

「バカいってないで、たまには帰ってくればいいでしょ。そうするのよ」

母には、母らしい気持があったようだ。

日本にいたら、いつ逮捕されるかわからない。しかし、外国にいれば安全だ。そういう母のやさしさがうれしかった。

父は、おそらく、これっきりもう遠くはなれてしまうのだということはわかっていたと思う。しかし、自分が納得したことはやりたいようにやれ、自分は正義だという信念に忠実であれ、それは父の生き方だったのである。

「さよなら」

わたしは、父と母の家をあとにした。

あと、別れをいいたい人は、遠山美枝子さんだけであった。

わたしたちは「ミエコ」「フー」と呼びあっていた。

一つ年下で、目もとの涼しい美人であった。わたしたちはよく二人で「明大反民青の二美人」などといって笑いあっていたものだ。

ミエコとは、同じ明治大学夜間部の、研究部連合会執行委員として、知りあっていた。

わたしが三年生のときだったろうか。そのとき、わたしたちは夜間部学生会を、やっと民青から奪還していた。そして中央執行委員会を作ることになった。わたしもその中執に入ることになったのだが、そうなるも研究部連合会の委員を誰かにやってもらわなければならない。

だれかいないか、というときに「法学部から出てる変な女の子がいるぞ」という者がいた。だが「あいつ民青じゃねえか」と反対の声も上った。「とにかく、わたし、会ってみるわ」

それが、わたしとミエコの出会いである。

かわいい子だった。

おとなしそうな子だった。

たしかに民青に入って、歌をうたったりダンスをしたりしている方が似合っているような人だった。それに、話しているうちにも「暴力はいけないわ」などという子だった。そのころはちっとも戦闘的ではなかった。

しかし、妙に話が合った。

彼女は、そのころ、昼間はキリンビールにうらめていたのだ。

キッコーマンにとめたことのあるわたしと、だから話がはずんだ。その話の中で、偶然、わたしの高校時代の友だちが、キリンビールで彼女と一緒に働いていることがわかった。あれやこれやで、わたしたちは、まるで井戸端会議のようにペラペラおしゃべりをつづけた。

そして、ミエコは、ついに研究部連合会の執行委員をやること

になったのである。

出会いが会いだったせいもある。

運動の中で、女の子が少なかつたせいもある。

年齢が一つちがいで、お互い、相談したりされたりしやすかつたということもある。

ミエコとわたしの仲は急速に近づいていった。

やがてわたしがプリントに所属すると、しばらくして彼女も入ってくる。そして赤軍派へも……。

その日、ミエコの部屋を訪ねたわたしの前で、ミエコはおそろしく無口だった。いつもは、二人つきりで会おうと、まるで両方が競争するようにおしゃべりに時間を忘れたものだったのに、なぜか、その日のミエコは無口だった。

反対にわたしの方が、陽気によくしゃべった。そんなわたしの話を、ミエコは、だまっとうなずきながら聞いていた。

お互いの出会いから、数々の闘いのこと、そして、パレスチナへの思い、友だちや仲間たちのうわさ、何でもかでもごちゃまぜにしてわたしはしゃべった。

いつか夜になっていた。

「そんなわけだから、行くわ。あとたのんだわね」

わたしは、そっと立ち上った。

ミエコは、まだ何もいわない。

わたしは、ドアを開いた。

と、とつぜん、ミエコが思いつめたような声でわたしを呼んだ。

「フー」

わたしは、はっとふりかえった。

ミエコは、いつの間にか立ち上っていた。

わたしは、そんなミエコをみつめた。

「フーの方が、先に死ぬんだねえ」

ミエコはいった。

わたしは、何も答えなかった。

ミエコの目に、みるみる涙がうかんできた。

わたしに「死ぬ」という言葉をいったのはミエコがはじめてだった。

そんなわたしに、ミエコは、もう一度くりかえした。

「フーが、先に死ぬんだわね」

涙が、すーっとミエコのほおをつたわって落ちた。

わたしは、何もいわずに外へ出ると、ドアをしめた。そして、一気に階段を駆けおりました。

あくる日、わたしは国境を越えていた。

一年後、連合赤軍の中で、ミエコは、わたしより先に、死んだ……。

十年目の眼差から

重信房子

Shigenobu Fusako

二 出発

私がバイルート空港に降りたのは、71年3月1日のことである。

その日が、古い価値観の否定を通して新しい価値観を獲得していく第一歩であったことを、10年目を迎えて今、ふりかえりながら認めることが出来る様な気がします。

新しい土地に降りた時、新しい街並みや生活臭のちがいにとまどったり、感慨を新たにするとすることも実は始めのうちにはなかったのです。ただやみくもに、東京から大阪へ、大阪から、又ちがう街へと、仕事の為にとび歩くことに慣れていた為には、その延長上に、国境を越え、ちがう街に来たのです。実際のところ、目的——武装闘争を実現しながら、国際的な連携を強め、国内の

赤軍派の闘いに貢献すること——にむけて、すべてのことが副次的であり、無感動に街を見わたし、どうしたら、早く、所定の連絡方法を貫徹出来るだろうか？ ということに私の頭の中は占領されてきました。そういう最初の一カ月位をすごしながら、徐々に街や生活が私の体内にしみわたったり始め、アラブ世界に居る自分をよく認めることが出来る様になりました。それは同時に、25年間の、生活感覚や、価値観のちがいを、毎日発見し、考え、実践し、価値観を再構築していく過程でもありました。

アラブ人は陽気で直接的で隣人愛、同胞愛にあふれた民族性をもっています。人と話し、人と共に居ることが何よりも楽しい私にとっては、なかなかの相棒であり仕事をしてくれ上でも共通の気分で協力する関係はたちまちつくられていきました。

私と、奥平同志は、友人を介して確認した連絡にもとづいて、数日のうちにPFLPと連絡をとり、それからすぐ討議をして「共通の敵に対して、帝国主義本国革命主体と、民族解放闘争主体の共同武装闘争を媒介にして、国際主義を世界中に実現する」

為の合意を得ました。

出発に至る赤軍派の状況は、いわば解体状況にありました。「69年秋の階段蜂起に一切を賭けて闘う」というスローガンは、そのまま赤軍派という組織自身の準備状況を示すものでありませんでした。

「一切を賭けて」闘ったあとどうなるのか？ という見通しや、現実的な想定は何かしら日和見主義的言辞に聞こえ、現実的に考える「前段階蜂起」は、その無理さを証明していくことに他ならなかったし、越えねばならないやらねばならないということの中に一切の赤軍派の発生、登場、実践を導いて来たのです。その分、69年秋の大菩薩峠での先行的弾圧は組織の結果が「秋の蜂起」という戦術で結合しあっていただけ分、目標を失いかけてました。使命感にもえた後統部隊が、大菩薩峠の闘えなかった敗北をひきうけようと全国から更に結集して来ました。時代は、ベトナム戦争をおしどめする反戦平和の世界的な波の中にあつたし、佐藤首相の訪

米阻止の高揚の中にあつたので、全共闘運動の拡がりを背景に戦闘的突出、革命的行動が望まれていたという自然発生的な高揚に支えられていました。

赤軍派は、闘わずに破れた現実を自らの建党上の問題や、路線上の問題の検証として深めずにやりすごしました。そして、日本での蜂起の準備が困難であるという点を「世界の各国党が、地域主義と受動性に陥っている為に、世界革命情勢を一挙的な革命勝利へと実現しえないのだ」と世界の党のあり方へと敗北の責任を転嫁し、それをきりひらく闘いとして、国際根拠地論をうちたてました。国際根拠地論は即自的には日本における蜂起の戦術を準備する軍事拠点という程度の日本中心主義の産物であり、又、理念的には、国際党派闘争・世界党・世界赤軍の物質的、政治的根拠地の形成であるという二元化した理論と実践の乖離を孕んでいました。その為各々の同志の関心角度によって解釈がまちまちでありました。しかし、この「国際根拠地論」の定立により、



十年目の眼差から
重信房子

1983年1月20日、話の特集刊。

「話の特集」に82年2月号から7月号まで連載された手記を中心に、同誌10月号掲載の「レバノンからの報告」、「人民新聞」80年6月5日号に掲載された「同志への手紙」も収めて構成されている。手記は、前著に似て、バイルート到着の回顧にはじまり、自らの青春期をたどりつつ、77年ダッカ闘争などをへて、82年までの日本赤軍の歩みを総括したものの。文字通り、世界を震撼させた闘いの時期の記述がメインにもかかわらず、文章には高揚感や露ほどもなく、自分たちのありようを担々とした筆致で率直に問うている。ここにひいたのは、「第二章 出発」から「第四章 父との出会い」まで。アラブへ行き、日本的新左翼からの脱皮を迫られる部分も重要だが、血盟団であった父との関係の中で自らをとらえかえすところも興味深い。

より世界的な戦場づくりの戦術が、PBM作戦などと呼ばれ生まれて来ました。自然発生的な大衆基盤の左傾化を背景に新たな戦術を組織的結束としながら赤軍派は海外志向を強めていったのです。その一つの集約点として、よど号H・J（ハイ・ジャック）作戦が担われた訳です。ここにおいて戦術の質的飛躍にともなう敵との攻防が先鋭化したのです。しかし担う側である赤軍派は、旧態然とした団結、準備の無さ、学生運動の延長というすべてのあり方に制約され、逮捕、シンパ層との分断によって、まず物質的な生活条件すら困難な事態に直面しました。その中で、闘いに疑問をもつもの、指導する人々の逮捕や戦線離脱などが少なからずありました。同時に、よど号の闘いを実現した組織として、これまでもそうであった様に運動的な突出に価値を置く「闘う赤軍派」は、新たな運動的飛躍によって、乗りこえることが要求されました。70年の4月から6月にかけては、日米同時蜂起——ペンタゴン突入、霞ヶ関占拠——という方針が出されました。そして、よど号作戦による朝鮮民主主義人民共和国行きが、「毛沢東との党派闘争をさせた日和見主義である」という見解が討議されたりしていました。

話は空想的に拡がるけれども、どの様にペンタゴンへ突入するのか、米国潜入はどう果たすのか？ ねばならないということと、現実の間で、指導放棄していく人々も出て来ました。私は、例えば、学生運動に入ってから、新鮮なことの連続の中で、いわばよりかかって来たようなところがありました。戦術や、現実的対応は自分の頭で一生懸命考えるけれども、こむずかしい議論はわかん、それは高尚な理論家がつくり出すもので、私の様に世の

中を唯良くしたいという人間は、その高尚な人々の真理に満ちているであろう方向を実現することだという考え方がありました。革命主体というよりも同伴者意識です。そして学生運動の中の新しい価値観、たとえば、無政府的なまでのプントの仲間意識や、だらしなさと同居した道徳観やらに、当初はおどろき、そしてその怠惰さが、唯ひらきなおりという自己肯定のうえに欲求を吐露し人々と結びあえることに魅力を感じていた様に思います。そして深刻に考えることなしにやりすこしている安易さののっかつて、唯、使命感に比較的もえて歩いて来たようなものでした。しかし、「よど号」以降は、だんだんと、頭を使う方向を変え始めたのです。それまでは、どうやって人を結集するか、どうやって資金をあつめるか、どうやって行動にあわせた準備や配置をするかということに頭を使っていたのですが、米国行き部隊に入ったこともあって、何故蜂起なのか？ 何故「よど号」が朝鮮なのか？ 何故国際根拠地なのか？ という方向へ考え始めたのです。古い人々がいなくなり、継承して方向を出す位置においてしまっただけでもありません。

その中で私は、このままでは自滅に至るということを考え始めたのです。そして、世界は本当に私たちがいう様な情勢分析になっているのだろうか？ 赤軍派が世界一すぐれた理論体系をもっているのだろうか？ これをまず自分自身の問題として疑うことから出発し、外の現実を把握することから出発しなければならず、ペンタゴン突入どころではないと実感したのです。そして、国家の制約と依存の範囲にある「よど号」の闘いは、「国際根拠地」たりえないこと。むしろ、同じ様に、革命実現の過渡を闘いぬい

ている流動的な戦場の中で、自分たちの闘いの価値がどう「普遍性」に到達しているのかを闘いを通して検証しなければならぬと考えました。それまでは、あまり路線上の発言をしなかったのですが、徐々に、その素朴な問題意識を提起するところから派遣部隊の目的、場所、人材を準備していきましました。米国への突入部隊としてでなく、自らを検証しながら、世界革命の利益となる国際根拠地を形成していくこと。その為には世界の人々と共に闘う中で、世界中の人々と交流し、日本の闘いとらえ返すこと、だから秋の蜂起の為に、永続的な陣型を作る為に行く必要がある



ペイルト近郊

ることなどです。そしてパレスチナ革命の闘いが「存在」としては「第三世界」でありながら、敵が帝国主義そのものであり、断に民族解放闘争と、帝国主義本国の闘いの質を同時的に要求される戦場であることから、パレスチナ革命を世界革命の最前線、矛盾の集中環であるところから場所を選択しました。もちろん深い知識があるわけではなく直感に依拠してました。組織的には、「よど号」以降の組織の解体状況で、それを克服する闘いとして確認しました。しかし、70年後半から、71年2月の出発までの間、更に組織的解体が進みました。議長奪還闘争をするかしないかで統轄責任者が当時副責任者の森君と話が合わず、「森を残念ながら信用できん。指導にも自信ない」と断わりもなく去ってしまっただけです。森君は、やさしい人でしたが、彼のやり方——迎合、信念のなさ、わからない事をわかつた様にふるまう等——が気に入らぬとよく私は対立していましたがそれ以降、対立を拡大させてしまったのです。当時の私は政治的内容で、ちがいや問題点をとらえて統一する為に討論するという風に考えきれていない分、森君という個人に対立するというあり方であったと思います。封建思想の強かった赤軍派では「女のくせに」という言葉をよく耳にしましたが、「そうよ、私は女よ、それが何よ」とひらきなおつてやりあう関係はまだまだしなのですが、森君は、本音でそう思つても、言えない風の人でした。出発間際になって、軍の決定で出発中止の指示が来ました。私は、中央委員会が決定されている事項を軍が勝手に変えるのは正しくない、それなら中央委員会を開くこと、出発迄の時間がないなら森君自身が来ることを要求して拒否しました。この困難な時に外へいかず金を集めろという要

求に対し「困難だから行かねばならず、金が必要なら出発資金を渡す、森君のやり口は、汚ない。自分で話しに来い」ともめ、仲介に来た同志が二人の間をいったりきたりして、「組織日和見主義といわれようと、日本革命の為に行く必要があるから赤軍派をやめてでもいく」という強引な私の主張をおし通したのです。その結果、出発前夜、そこまでいうなら赤軍派としてやってほしいということになったと仲介の同志の伝言をうけ、森君への手紙をしたためて旅立ったのです。私が、森君に対する不信の側からしか対話してこれなかつた反省と、組織的に問題を解決しなかつたあやまりと、この出発を共にするところから、自己批判としても赤軍派の一員として、すべてをかけて闘っていくという私自身の決意をのこして。

そんな風に旅立ったものですから、何もわからず、一つ一つ価値観をとらえ返しながら実感し、つみ重ね、そして実践し、論理化するという連続でありました。それは、これまでの赤軍派や、日本で生半可に習い覚えた革命のやり方を、一つ一つ否定し、自分の頭でその否定を通して組み立てていく闘争であつたともいえるでしょう。

丁度、その頃、パレスチナ革命勢力は、ヨルダン内戦の評価と総括をめぐって意見が不一致の状況にありました。一方でPFLPなどの、革命飛行場による連続H・Jが、革命の防御能力をもたず敵を先鋭化させた為に、ヨルダン内戦の階級的形成・革命成就を台無しにしてしまったと考えるPDFLPや、ファタハなどの意見が存在していました。他方、国際遊撃戦を評価し、ナセルと、フセインの妥協と、それに制約されたPLO指導部の、戦術

方針への批判が大別して存在していました。しかしパレスチナ革命総体として共通して、ヨルダン人民の決起をつくり出せなかつた弱さを自覚していました。そして、ヨルダン内の、パレスチナ人への弾圧への対策におわれている風でした。そして、PFLP内においても、それは、あとで知ることになったのですが、同様の意見の相違が党内闘争として進行しており、国際遊撃戦の戦略的価値を防衛し、更にその戦術を継続しようとするグループと、人民組織化、解放区における人民戦争を主張するグループとの分岐がおこり始めていました。私たちが接した国際活動部は、革命飛行場の作戦本部であり、国際遊撃戦の推進派であつたので、共同武装闘争という共通の目的の前で合意に達したので、しかしPFLP内部は、69年結成以来、それまでの、アラブナシヨナリスト運動の運動体を反映して、シンパ層が広いかわりに、M・L主義という人ばかりでもなく、又、派閥的傾向をもつていて、指導機関が、調整機関のような力量しか当時はもちあわせていなかったようです。

とりあえず、私は、機関紙編集局のアルハダフを中心に他の外人ボランテアと一緒に活動を開始し、奥平同志は、国際活動部の人々と軍事訓練、軍事行動任務として任務を分担しながら現状を把握しあつていく方法をとりました。

三 新しい環境の中で

やベトナムや中国という区別はさして重要でないようです。とにかくアシアンは一人なので、質問にこたえようと四苦八苦です。「日本の面積は、アジアの社会主義圏の何分の一か」「日本の軍隊は何人か?」日本革命の歴史実情、ベトナム革命の歴史と党の路線、朝鮮革命と金日成理論、中国革命と人民公社の発展過程、などなど。ああ私はアジア人、日本人なのだとすることを逆に知らされると同時に、日本アジアについて、まったく知らないことに気づかされました。頭の中は知識の断片や興味で覚えたこと位しかたまっていないからです。中国の歴史は知らないが毛沢東の路線の限界は「知っている」という程度のみか、ベトナム革命の歴史を、史学科出身の割に知らず、順序だつて説明しえないのです。いつも手軽な「物」たとえば自分で考えず人の書いたもので、用をたすという安直なやり方は、「物」がないと、自分で、要点をおさえないのでした。

アジアを知らない割にクリーヴァーや、ローザや、カルロスマリゲラは少々知っている「つもり」でもそれはその国の人々の話をきくと、ほんの一部なのです。文学においても西欧しか知らず、無自覚なる欧米崇拜——あの明治維新以来の——の価値体系を発見して自分でもびびくりしました。とくに、ブラジルの革命家カルロスマリゲラを知っていれば、党創設者のプレステスや誰それを知つて当然と話が進み、パレスチナの人々は「カルロスマリゲラは何者?」ときくし、ずいぶん断片に依拠した知識、しかも、役立つように組立てられない知識に愕然という風でした。レーニンの教えを継承するといつて、「ロシア資本主義の発達史」

「英語は「ハウイズゴイングオン」すら通じず、その割に、やたらメモをとって、彼女は何か書いているんだらうと、もっぱら驚かされたよ。しかも、仏語ブレティン一号を出したところへきて、英語ブレティンの方が有効であると紙にかいてもちこみ、賛成が得られた翌日から、タイプの前に座つて打ちだすのみでたら、まったくタイプは、うったことないんだというのがわかつたんだからね」先日、昔の悪友にひやかされたところですが、まったくおかしな姿だつたようです。私としては、一言でも語彙を書き取つて、あとで辞書を引いて、話の方向を理解しようとしていたんですけれど。タイプなども出来ないのだからと本人は夢中だつたのです。当時は英字新聞の記事一つの内容を把握するまで食事しようと自己統制して、毎日辞書と首つびき。そのうち、選ぶ記事の基準が「重要そうなものから「小さい記事」へと変化し、毎日毎日高校大学の不勉強を後悔しながらすこしたの思い出します。それでも三週間位で、なんとか通じる様になると、「あとは勘と心の通じあい」とかなんとかなげ出したままなので、文法も正確でなく今日に至つてしまいました。

アメリカとか英国とか、伊とか、スエーデンとか仏とか、比較的帝国主義民族の子孫がパレスチナ連帯にかかわつていて、私も一緒にパレスチナ難民キャンプ活動や、宣伝活動を始めたのです。そうした仲間たちの中でアシアン、アシアンと、まるで私が、アジアのことは当然答える義務をおつているという風に、たちまち質問の洪水の前にさらされ始めました。そういう風に「アシアン」と意識したのは初めてだつたのですが、他の人々から見れば日本

を読み、日本資本主義発達史として学びなさい、ロシアそのものを分析する様な片手落ちの滑稽さに気が始めました。

部分しか知らず、しかもそれすら、アジアは含まれていないこと、これが国際主義の実体かといささかうんざりしました。ブックパンサーや、ウエザーマンやドイツSDSとか招待して国際主義を提唱した68年国際反戦集会の場面を思い出しながら考えたのです。帝国主義の側しか知らず、問題をとらえきれずに平気でいたこと、毛沢東は地方主義、金日成はスターリニズムと、革命の教訓も知らずに日本ですごした「革命家」達だなんて。批判は出来るが、その対象の歴史と中味を知らないなんて。私はあわてて本をとりよせ始めました。

又時々、日本の友人が、日本の党派の新聞や、パンフレットを送ってくれるのですが、それが又、苦勞の種なのでした。

日本語だから、よめないまでも、大きな活字の白ぬきなので、何と書いてあるのだ、何と書いてあるのだとせがまれるのです。悪い予感をもちながら、比較的忠実に訳すのですが、それが「震ヶ岡占拠」だったり、「内乱」だったり、「世界革命戦争を組織せよ」だったり、「首相官邸占拠」だったりするのです。みなは怪訝気にまずまゆをしかめ、それから「イツ コレクト、トランスレーション？」ときき、それからつばをのみこんでまるで明日にでも革命がおこるといふ風なスローガンではないか、本当にそう考えているのか？ とくるのです。私の方は自分でもオーバードだと思っている分、「スローガンよ」とにげるのです。「スローガン」だったら余計ひどいじゃないか」と逆襲をくらひ、あらゆる党派機関紙の責任をおわされるのでした。私はそこでもやたら防

衛してつじつまをあわなくするよりも自分の考えをのべることを学びました。やはり語句上のエスカレートで、セルフサティスファイにおちこんでいるという現状を伝えることになりました。「ザッツ チャイルディッシュ、レフティスト」と諸帝国主義本国の友人たちは追いつけかけられるのですが、パレスチナの友人たちは、まったく理解出来ないと言えぬのが常なのでした。

そんな風なやりとりの中から、私は自分の価値基準で、わからないことになると「組織的立場にたつ」としてやりすごしていたことに気づきました。理論神祕主義の帽子をぬぎすてて逆に、自分の地で行ける方、実践的理解の中から、納得する方向へと即座にきりかえてしまいました。「観念論はいらぬ」と、自分にとつてもその方が楽なので、しかしついでに、革命的理論をもなげすてている自分にあとで気づくのですが。

自分の眼で確かめながら検証する気できたものの「世界党建設」とか「国際根拠地論」とかの一つか二つではなく、物の考え方、見方すべてを、改めなくては通用しないことを実感しはじめました。そして、ただの「人」として学生運動に入る前に持っていた尺度の方がより即自性を含むけれども、現実対応能力を持つことに気づき始めました。この即自的な社会的実践の中から出発する方向にだから流れていきました。何故ならそれが自身の私自身だからです。こうしてあるがままの感覚の側から見渡した時、アラブ世界は、私に資本主義が一過性の制度であることを強く教えてくれました。もちろん、マルクス主義の歴史発展の法則から言えば、あたりまえのことです。しかし、日本の中で、日本の社会の現実と価値を否定しM・L主義を導き手として組み立てた筈の思

想は、やはり、根本的理解において資本主義が、固定的絶対的という生活感覚の中に陥ったままで資本主義をとらえていることに気づかれました。自分を発見するのに人ととの関係において自己を知ることが出来る様にアラブ世界の生活を通して、資本主義が変化発展の産物であり、新しい歴史の創造過程にあることを知るわけです。それは、書かれた理解ではなく、生きることの衣食住の中から実感されるものでした。

アラブは、様々な社会が共存しているといつても過言ではありませんが、民族主義政権、いわば国家が毎日テレビや新聞を通して、反米帝反帝反シオニズムを伝達しています。だから日本でテレビ・新聞をよくの反対の立場からニュースが流れています。それが常識、世論なのです。政治や、こむずかしいことを知らないその辺のおじさんおばさんたちも、米国は悪い国でありソ連や中国、ベトナムは、いい国だというのは、あたりまえのことなのです。

「アメリカがいい国であれば、どうしてアメリカの爆弾が自分たちを苦しめるでしょう。」丁度、ソ連や、朝鮮が悪い国で、米国のいい国である様に日本のテレビや新聞が言うのと反対です。又、キャンプや村人の生活家族制度における封建制の強さは一世紀も前を思わせる価値観に貫かれています。

丁度私がついて何カ月もしないうちに、コマンドが村人の娘を車にのせてやったことで、問答無用の娘の家族の銃撃攻撃となり、コマンドが殺されるということがありました。夫以外に素顔を見せないという習慣さえ残っています。自分の育った「国」の一般常識が世界の構成要素の一部であることに気がつかないわ

けにはいきません。そうしないと人々と出会えず、自分の置かれている位置を客観的に見れない為に自分に似せて世界を見、自分に似せて世界をつくるという独善的なものの方に陥ってしまうからです。こうした流動の中で、日本の社会制度を再認識する時、封建制の中から資本主義がその否定として育ち、そして資本主義の中から、人々が真に結びあう為の社会制度として、社会主義が生まれていく過程を見る様な気がします。資本主義は歴史の一過程の流れ、闘争しながら流れていることを見てとることが出来ます。

又みなで飲みさわぐ時すら、新たな発見にいきつきます。比較的恥しらずで、守るべきものをもたないアマチュアであった為に、学ぶことは、やぶさかではなかったもので、「うまいかない時には、まずもって自分の頭を疑う」という出発点を自分でつくり、それにそってなんでも見、考える方向へ徹していきました。

こうして見る時、様々なことが見えて来ます。情勢分析にしても現実を交える運動に役立つ内容としてつくり変えなければならぬと思いました。帝国主義が悪いということ科学的に分析していたつもりなのに、情勢分析をする時、「主体」はとまったままで、「客体」を分析し、戦術をたてる時には、情勢は万里の長城のかたで、主観的願望に忠実な戦術を導いて来たことを思い知らされます。それでは法則をつかめず戦略も戦術も失敗します。ちくはくで、おかしいなあというところさえ、主体をも含む情勢把握の中で、解決しないといけないのだということ位が当初わかったことでした。

だから、「先進国プロレタリアートが世界性をもつことは、自

分の民族の文化が他の民族の文化よりもすぐれていると考えることはちがうのだ」と気づかされたのもそんな生活の中からでした。私たちは伝統すべてを拒否してマルクス主義にとびついたようなところがあつたように思います。その民族性にあつた文化、人々が生活史の中で築いて来た文化を自民族の文化を愛するが故に他民族の文化をも理解し愛する心を革命家もつことは何も「民族的」でもないのです。自分の民族の文化が他の民族の文化よりもすぐれているという考えは、支配抑圧へ転化していきます。文化に誇りを持ち、解放の力、生活の力にしながらパレスチナの人々が闘っているのを見る時、共にうたい、愛する文化が、私たち日本の革命家の中に枯渇していた生活史に、ひそかな恥ずかしさを感じずにはいられませんでした。人民の文化を作つてこれなかつたし、歌を忘れたカナリヤみために、アシアンのうたう番がまわつてくると戸惑いを感じるのです。ここでは「プリント流れ者」を歌う訳にもいけません。

新しい環境の中で私は、赤軍派の「普遍性」の中味のなさ、もつといえは私自身の「ひらきなおる人生」の貧しさ、その非弁証法的なあり方を、日々、発見する毎日でありました。

赤軍派の先進国主体革命論的傾向も又、第三世界の抑圧された人民が革命主体であるという第三世界革命主体論をも一面的であると考えました。抑圧された人々のところにおりていっても被抑圧の内部に更に重層的な抑圧——被抑圧構造が存在しています。ヨーロッパ人がアラブを差別し、アラブ民族の中でパレスチナ人を差別し、パレスチナ人はベドウィンを差別しています。差別の帰結ではなく、その根源に対決し、その場所的条件において闘

わなければ、問題は解決しえません。世界を一元的にとらえた時、敵は一つの根拠を形成している以上、自分の持場、生きてる場が、前線であり、他の闘いの力は後方として支えていることを知ります。だから私は、国内で論争途中にあつた「革命主体論」を陣型的な「前線はすなわち後方である」ということの中から、とらえ返しました。簡単な話、闘っているところは前線で、闘っている場所からみたら、他が後方として支えているし、視点を変えればいつでもどこでも前線であり後方だという闘う側の主体的問題だということ。パレスチナ組織に対しては、日本で育つた眼からみれば、新しい発見はたくさんあります。

当時、日本の中からパレスチナ革命、国際遊撃戦をみている時、ゲリラ組織に対する武装闘争に対する少なからぬ神秘主義がありました。比較的職業革命家の規律が貫かれ、党的にもピシツとして常に政治理論的ケジメがあり等々。だから、私は、好ききらいでいえば大の苦手の、赤軍派文獻、難解中の難解といわれる赤軍パンフNo.4を、暗記する位、熟読し、辞書と首つびきで毎日訳し、かなり当初は真剣そのものだったのです。

ところが私たちの接した比較的「党的」なM・L主義に依拠したPFLPにしても、どちらかといえば、どこにでもいる生活者のおじさんおばさんが主体であり、赤軍派の「武装プロ論」コミンテルン批判はフンフンとききながし、「それで今どうするの?」という所に力と関心角度が集中するのでした。平和に暮らしていたら、突然追い出され、こんな不合理なことはないと、一族郎党、自分の家と土地をとり返す為に闘っていたら、帝国主義に対決し、勝ちぬく為に、少しずつ利口になる、そんな生活の闘いだからで

しよう。よく言えば大衆性人民性、悪く言えば、大衆レベルの私闘さえ政治化するあり方の中から生活をかけて闘うその力の強さ、持久力を、まああたりにみる気がしました。だから、トロツキーを評価する人も、スターリンを評価する人も共存し、パレスチナ革命の具体的成就の中で、考えを統一していけばよしということ。ろです。今を変える闘いで団結し、団結の中から統一することの価値を学びながら、私は「党派闘争」という形態や自己目的化でなく、党派闘争を手段として、レーニンが求めた革命主体の同質化の意義と再認識するに至つたものです。

しかし現実の中では、欠陥もたくさんあります。ケンカにすぐ銃が出るとか、組織内、組織間矛盾で銃撃戦もあります。それは非常に自然発生的な姿を示しています。

しかしそれでも、日本の「内ゲバ」と、ちがうなと思います。彼らは敵と闘う為に銃を取り、時々（永遠の宿敵でなく）「くそ、許せないぞ」と素手でなぐる勢いにつて銃をぶつばなす風の対立があります。そして、又、敵の前で共同して闘います。

永遠の反対派を打倒する為にひたすら武器を鍛錬する発想と根本においてちがっているなと思いました。もちろんそれらは肯定しません、発想のちがいは大事なことだと思ひました。

又、封建制を否定した勢いに乗つてまちがったモラリティーも横行しています。個人主義とか享楽主義とか。それらは、日本で闘っていた自分たち自身に似ていました。

特別視、神秘化していた私の主観がおかしくて、現実を見、現実、どこにでもある人々の闘いとして、共感し、目的にむけて一つになつていくことをとらえ返しました。

でも、帝国主義本国から来た友人たちの中には、「だからアラブはダメ」と口ぐせになりそのうちに失望して去るということも少なくなかつたのも事実です。

そういう友人を私は説得しようとしたことも何度かありますが、「あなたの考え方中心でなく現実から先に」という私の話に対し、「ユー・アー・センチメンタリスト」と、やり返されること往々にしてありました。

四 父との出会い

新しい環境の中で、発見したことは、生活こそ闘いであるという現実だったので。生活を通し、親、兄弟たちが、力をあわせて、様々な苦難を克服しながら、喜びをわかちあう姿は、もつとも自然な姿であるからこそ、革命の必然性に導かれていることを実感せずには、いられませんでした。

それは又、生活の欲求に導かれて、世の中をよくしたいと切望した子供時代の感覚を想起させました。

そして又、革命組織の中で、ひたすらに目指していた信念が、何か土台のない、革命の名のもとに自己肯定と和解除していたような強靱さも、したたかさも欠けたものの様に感じられました。

自らの自然成長したあり方を、ひらきなおる人生の中で、革命せず、「革命組織」を体現していたような、身勝手さを恥入る程に、素朴な自分の価値観が逆に、赤軍派の価値観を凌駕してい

く様な気がしていました。何故なら生活の中の闘いは、そうしたところに宿っていて、そこまで戻らなければ土台のない様な宙ぶらりんを感じたからなのです。それは主要には父を媒介に形成されていった自然成長的な私自身の行動原理を再発見することでもあったと思います。丁度私自身の歴史は、戦後日本の長さと同じ程の長さです。配給制の時代から、消費物質の氾濫という日本資本主義の復興・高度成長と二人三脚して来た様な生です。家は戦後すぐ食料品店を営みはじめたようです。しかし生憎にも武士の商法である父の見通しの甘さ故に、高度成長は、小売業を零落させていく過程でもあったので、貧乏の末に結局食いつぶして、「日の出屋」という屋号にあさわしい時代を見ることなく店を借金に抵当にして、借家すまいにおちのびる羽目となりました。父の見通しというのは、外国侵略者に土地は占拠され、通貨は役立つ時代が待ちうけているのだから、人間食べられる土台を築かねばならぬという程の見通しだった様です。父の哲学的基礎は、どうもその辺に由来している様なのです。「人間食べられなければ動物にもおとる。人間の生命はその信念にありながら、食をもてねば他人を踏みつけて欲望がまざる。日本民族の危機は、米の生産を果たせない限り他民族を略奪する動物的行為に走る。何より米にかわる食物を日本民族の力で再製し、もって米食人種である日本民族の発展の土台を築かん」というのがテーマで、デンブンといもの関係から、米又はそれに近い物の再製を信念として物理学校に学び、そこで民族主義的政治傾向を深めるに至るということです。それ以来、日本民族の危機を資本主義的再編に諸悪の根源ありとして時の政府に対決する民族的運動に参加していった

らしいのです。その辺の事情や教訓はあまり語りたがらず、私自身、父の前歴を知ったのが、10・8羽田闘争の時だったから、ずいぶん後まで、子供たちは知らずにいたことになりました。10・8羽田闘争の日、私はBUNDの隊列の後方で救対ということで控えていたのだけれど「走れ！走れ！羽田はすぐそこだぞー」という檄に励まされ、身軽な棒一本もった連中と、人々の荷物を肩や両手にかかえた救対部は、不利な条件を同じ様に走り、突撃隊の殴りたおした蛙のようにのびた機動隊が、高速道路のあちこちに散らばるのを踏みわけながら必死に疾走したのです。どう先導隊があやまったか渋谷方面へとまちがった方向へ突走しているらしいと判った時には狭みうちで、メッタうち機動隊の逆襲に合い、高速道路の上からとびおる者、頭を割られる者、逃げのびた者、大童のていだったのです。

運よく私は、頭を割られず、血の海の中に打撲傷でひっくりかえっていたのですが、おきあがりさま殴りかかってきた機動隊に「この死んだ様な人たちをどうしてくれるー」と叫んだところで相手もひるみ、丁度走って来た公団の心優しい運転手さんと協力して（その人は名もつげず多額の金を病院代にと差し出してくれました。）何十人かを病院に運び込み朝になって自宅に戻りました。家に入りざま、敵の滅茶苦茶な所業の数々を家中の者たちに話しまくり、意気揚々茶一杯飲みほした時、父がなんとなくおこやかな感じで、昔の話をしてくれたのです。「いや、房子、本気で革命をやるならあの様に闘ってはいかん。まず民心を重んじてければならぬが第一。民族の心を知らぬ者が世界革命をと立てても、それはコスモポリタンにすぎぬ。井上和尚は一人一殺といわ

れているが、そういうたのではなく、一人多殺といったのだ。一人多殺は一人では出来ぬ」と始まったのです。中々興味のある話でありました。5・15クーデターの日の作戦上の失敗は、まず陸上部隊による発電所の破壊で東京を暗黒状態とし、それを合図に海上部隊が砲撃し、要人逮捕というプランながら電気がきえず、計画が長びき、敵に包囲され敗北したということです。「やたらに発電所を破壊せずとも、スイッチをおろせばよかつたのだ」と父は非科学的な作戦を借しむ様な口調でありました。しかし父はどういう役割を果たしたのか、その辺はさだかではないのです。一度、私が卒論の為に入手したみすず書房の資料集の中から父の教え子（昔、寺子屋の様なもの在全国につくり人々を結集させていたようです。）で、死刑になった人の上申書をよみながら涙ぐんでいたことがありました。あまり話したがらない父と、私は私で我革命の大義と根本において違ふと考えていて、鼻息荒く世界革命を対置したりして、詳しく聞く機会を失して日本を離れてしまいました。

子供の頃は、父の前歴は知らなかつたけれども、人ほどの様に生きるべきかということと天下国家を語るのが父と子の対話の中心であつたようです。

「物知りだけにかなるな」茶碗一杯の焼酎を静かに飲みながら、いつも遠くを見る様な眼で語った父の眼差が今も浮かびます。

人間はその信念によって貴賤が決定されるのであつて、人間の權威や、高々の知識や能力で決めてはならぬ。人間は、人間社会の正義を実現するのに生命の価値があり、うわべの価値にまどわされる浅薄な人間になるな。人間は、自己の信念に忠実に生きて

こそ価値があるというようなことを、物心つく頃からいつも聞き聞き育ちました。私は父の無限の知識、時には、教師の解答のまぢがいを正す、程の知識の中で、とくに、自然の摂理や、人類史や、生物の生命や、ことあるごとに、店番の合間に、風呂屋の中ですら、いつでもねだつては聞き、父の話を世界へのかけ橋として育つたようです。祖父は漢学者士族の出で、堅物だったようです。子供の頃、父は祖父の前でせき払い一つしても殴られた様な家庭で、祖母も父が生まれてまもなく下男とかけおちするという様な家庭環境だったせいも、父の子供に対する態度は、対等な人格として接しようという風にみえました。

しかし、子供心にもいつも二つのことに頭を痛めながらすごしていました。一つはその貧しさです。「人間の価値を金で解決する様な生き方をするな」という割に、毎日、明日の店の仕入れも出来ず、給食費が払えないという有様でした。人間の価値といつたつて、やはり金無しでは軽蔑される世の中。現実への不満は父への不満でもあり、いつも父より一歩先んじて考えないと不安という生活感覚を身につけたようです。小学校にあがった頃から、給食費が払えない子がいつもまきまきしているのに、「もつて来なかつた人は手をあげなさい」という先生の心ない制裁に腹を立て、悲しい思いをし、こういう屈辱を阻止する為の一計を案じてばかりいました。給食費は毎月始めに支払わなければならぬ。月始めに先生から納金袋を渡されてから家に催促しても、いつも遅れてしまう。だから月半ばに予め、父に、すでに給食費の支払いが始まっていることを度々告げ、クラスの中で遅れない様に支払う手筈を整えようと思いました。クラス役員だったりで手を手を拳

げさせられる前に職員室に全部袋をあつめてもちこんで先生に報告し、みなの前で私や、私の仲間たちが手を挙げなくてすむ様にと、気をつかったりしたものです。しかし父への戦術は通じず、逆に見破られては「見栄をはるな」と、やられてしまうのです。父の言うことは正しいかもしれないけれど、世間に通用しないじやないか。貧しいことで、人格が差別されるなんてまっぴらだ。

学校の中では陽気で快活ではあってもいつも心の中では、そういうことに対する腹立ちと悲しさをあたためていた様に思います。だから、勉強の出来ない子は、貧乏人の子という風潮といつても対決しないわけには、いかなかったのです。それは同情ではなく、「私たち」そのものへの差別に対する怒りであり、同時に、だからこそ、貧しいこと、勉強が出来ないことに甘んじて宿題すらしない同類へのいらだちであり、「見栄をはる」自分自身への嫌悪としてありました。

もう一つは、商いのまずさについてです。正月を過ごせない程金がないのに、毎日の帳簿をつけながら、借金取りに行かないのです。あの家が行っても、払えないにきまつているとか、この家は、借金を払えば正月を過ごせないだろうなどと、帳簿をみてはあれこれ言い結局、いつも除夜の鐘が鳴ってしまうのです。店に買いくる人にも決して頭を下げず、「ねこちゃんにたべさせるのよ。そのアラを下さいな」と言われれば「うちは人間のものしか売ってません」とやり返し、「そのパン古くないかしら」と言えば「古いと思えば三軒先のパンヤで買いなさい」と売らず、子供心にも、それでは商売は、成り立たないと、ハラハラすることが多いのです。母が店番にたつと、「おじさんが来ないうちに」

強出来る子が中卒で働くなんてことないわよ」と言ってしまったから自分の差別観に愕然としているところに、姉が助け舟。「私が高校をやめるから、妹を高校へ行かせてあげてよ」という犠牲的精神に助けられて、借金と、アルバイトで、高校に姉共々、いけることになりました。

高校時代は、少し、ふてくされたところがあつて、普通校と商業校とかの差別で人生が決定されている様なあり方に腹が立ち、どうせ世の中、貧しさを克服出来ないし貧しい者同士がいたわりあつても世の中変わる訳でなく面白くもないと、不良っぽくなつたり、努力をしなくなつたり、小説を書きまくつたりして過ごしたようです。自分の価値の小ささに我慢出来ないという程の、行き場のない憤りに、そして、そういうことで自分をより失つていくことへのためらいに葛藤しながら『橋のない川』が情けなくて悲しくて、一ページずつ泣き泣き読んだのもこの頃でした。しかし、私のまわりには、それを解決する人も、社会的実践にかかわる道もみあたらなかつたので、小さな親切運動のよびかけがあつた時、自分をためす為に、就職迄かかわつてみました。数えきれない小さな親切のエピソードが全国各地からよせられ、その人々に、小さな親切運動本部としてパッチを送る奉仕作業でしたが、人々の善意の無限なことへの喜びと同時に、何か自己満足的な自分自身の結果の仕方に疑問をもちながら働きました。

それから当然のこととして大学など行けると考えることもなく就職しました。

入社配属前の、研修期間、「修養団」などというところから専門官が来て、「女は、はじらいと、笑顔をもってこそ女らしい」

と客が冗談言いながら、買物にくる有様で、母が店番にたつ時客が多く、父がたつ時はひまで、当時、朝鮮戦争の頃、世間からしめ出された「朝鮮部落」とよばれる近所の住人たちが逆に父をとりかこんで長話をしていました。しかし、私は、父の孤立した信念が、いつも大好きでした。父と一緒に世の中は、どうすれば、みなが幸せに生きることが出来るのか空想にみちて話し合う時、陽気な母が愚痴を言いだす程、私や兄弟、弟共、話に熱中するのです。私は四人兄弟の下から二番目なのですが、たまたま四人兄弟が「おちゃおちゃとケンカをするのを父は何よりもきらい」、「兄弟ケンカは人間憎悪の始まりだ」と悲しげに説教するのが常でした。

そんな風な父の哲学、父の正義感を社会の窓口として、うけついできたのが、私の生き方人生観の始まりだったと思うのです。

世の中の為に尽くす人間として価値ある生き方、自分の意志に忠実に生き、失敗も誤りも、自分で、解決して生きる生き方、そういう生き方を父は伝えながら、その道は、自分の力で、きりひらくことだと、何をしろともとりたてて言わなかつたのです。だから私は自分でその道を何とどの様にして生きていくべきかわいわから探して生きて来た様ところがありました。小学校前は、交番に定期的な花を届けることから始まり、人の為に、何か出来ないだろうかと小さな親切運動にかかり、それから、学生運動、赤軍派へと、国境を越えてきたようなところがあります。「人間学歴などあつて腐るためしはあるが、人間を磨くことは出来ない」という父の持論を、丁度、私が中学を終える時の我家の家計の苦しさで、中卒で働いたらどうかという父の提案に「私みたいに勉強

などという哲学や原理のない人間論、いわば封建的処世術をもつて教育し、父言うところの軽薄な部類に入る説教にあきれてしまったのです。

一緒に参加した新入社員は、講師が去つたあとで「笑わすじやないの」「古いわねえ」とかなんとか言っておきながら、感想文を書かされた時「結構なお話でしたと書かなかつたのは君一人だ」と人事課長に入社配属以前から声をかけられるという具合でした。

「ああそうか。世間というのは、自分の思ったことを言つたら通用しないところなのか」と、遅ればせに自覚め、「思ったことを言ひ、その中で自分がまちがつていれば正すこと、そうしなければ、真に人と人が結ばれて生きることが出来ないのではないかと、やんわり自己主張しながら会社員としての一歩を踏み出したのです。会社は不合理なことの連続でした。ぐうたらでも大卒は大卒、人の為にまじめに尽くす人は高卒だからと、分界線がひかれていて運命が決定されていること、だから、必然的に、女子社員は、男性の出身大学や、コネ、財産を価値にして愛する様に条件づけられるのです。そういう馬鹿馬鹿さを拒む人々と連帯し仲間意識で集まるのだけれど、やはり茶店で、くだらない上役や、男たちの悪口をいって発散している程度なのです。創造性の欠如を感じて、文芸サークルを作り、おそろしく会社の為になる組合に失望して過ごしているうちに、夜間大学という存在を知りました。働く人の為の学校で、自分の給料で支払える程の入学金であること、そして現に、会社の高卒男性がその大学とやらに入つていくこと、そして、教師になる道も開かれていること。私は大学

に行かなければ教師になれず、大学に行けないのだから教師にはなれまいと小さい頃の夢を捨てていたのを、大急ぎで拾いあげはじめたのです。子供の頃、父の影響で生物、自然に興味をもち、数えきれない程、植物採集をしては、薬草や毒草、俗名の語源

——「継子の尻ぬぐい」とか、「弟切草」とか——についてやした情熱や自分の努力を重ねて植物学者になった牧野富太郎博士の話捨ててしまった情熱のよりどころを満開に開かせて理科の先生になりたいと進学の準備を、その日から始めたのです。あれこれ学部にも夢はあったけれども、とりあえず、勉強をせずに過ごした高校時代を穴うめする努力は大きすぎ、時間もないので、一番やさしそうな歴史学科に入ることに決めました。歴史上の弱者や、悪人といわれている人々、蘇我馬子にはじまっている人々をちがう価値観から小説をかいてみよう。子供たちに日本の歴史を伝えながら小説をかきこくこと。そういう風にきめて一番苦手な社会科の先生になる為に入学の準備を始めました。不言実行の父のやり方で、入学試験を経て、金を払い込んでから、家にその旨を告げるという風にして夜間大学生となりました。金を払い込みに入った日から、そうして、学生運動の中に入り込みました。丁度、学費値上げ阻止闘争で、退学になった中核派の人の復学闘争とかで、座りこみをやっていた為です。「ずいぶん汚ない格好でマツトをひいて座っているな」と足をとめ、アジテーションをきいているうちに道理にかなったことだと共鳴してすぐ座りこむというやり方から、学生運動に入った訳です。

入った頃は65年、丁度、安保闘争の後の、BUNDの分裂で、バラバラな状態と、日韓条約反対の政治闘争がさかんになりだしたところについてです。とか、被植民地の民族主義者は、共産主義者として革命しつづけたことについてです。

私は、民族主義者の限界は、だから、世界との連帯、国際主義者によって越えることが出来るのだと、父のエピソードに鼻息荒く、世界とか、国際主義とかを対置して父をとまどわせ、反論をくらい、それでも、世界とか、国際ということの中味を、よく吟味せずふりまわし、密かに、日本だけでは革命はおきないという日和見主義的確信を抱いていました。

赤軍派になってから、益々、父の意見は、反動的なものとして、しりぞける様になりました。けれどもしみわたった父の哲学、父と娘の対話は熱意に満ちたものなのです。「家族に話をするのは家族帝国主義との妥協である」などという訳のわからない批判「家族と縁を切る」などという同志たちの強がりに、私は、家族

た頃でした。私は日共とも、いわゆる三派とも始めはわからず區別せず、参加しはじめたのです。丁度平民学連と、全学連の再建とかで、学内に、自治会が二つ出来ていたり混乱がありました。

私たちのクラスは、事情がわかるまでどちらの大会にも代議員を出さず、オブザーバーということに決めたのですが、日共系の大会に、勝手に代議員が座っていること、それに対するクラスとしての異議申し立て却下という日共執行部に反発して、日共とは、だんだん離れてしまいました。反対に、自己満足的にアジリ意志疎通がへたで、少数派の、三派系に、なんとかしなければと足しげく通うというあり方から出発しました。

学生運動にかかわり始めて、とくに、世の中には、階級対立、非和解的なそれが存在しつづける限り、世の中が、共に幸福を享受しないという本質を知り、これまでの人生の、あらゆる価値が、音をたててくずれていくのを感じました。父は立派な人生観をもっていたかもしれないけれども、階級性のない正義、階級対立を物質的根拠とする社会を革新しない限り、父自身の人生観は、観念でしかないことを学んだ様な気がしました。父に階級の存在について話し、世の中をよくする為の道がここにあることを告げた時、自分でみつけた道を、自分の意志に着実に生きることをうなずいて父はきいていました。多分、あぶなっかしげな私の革命に対する信念を、娘を信じるが故に歓迎してくれたのでしょうか。

そうして、10・8羽田闘争の日、父の話をきいてから私は、一つの疑問にいつも考えをめぐらせていました。民族の未来を憂えた日本の民族主義者は抑圧者としてのみ残り、父のような人々は、市井の人になってしまったのに、中国とか、朝鮮とか、ベトナム

と共に信じあつて革命をやるべきだという持論をもちつづけて家族に又励まされてきたと思います。

「ちょっと仕事の都合で外国へ行つてくるからね」と旅立ちを告げた時、母は、陽気な人だから先々を深く考えず、着ていく洋服のこと、もちものことに気を配り、父は「安直、やすやすと、帰ろうと思つな。しっかりとがんばれ」と、もう会うことのない娘の旅立ちを理解して送った様などころがありました。その上おまけがついて、立った以降手紙は一通も来ず、問いあわせたら「家族が手紙を書けばいらぬ気をかける。誰も出さな」と父の指示があったとか。私と父の出会い、学生運動を通して新たな出会いを見た気がするので、そうして色々な折に、父の信条を、自分の信念にしている自分に気がつきます。

大地に耳をつければ日本の音がする

重信房子
Shigenobu Fusako

はじめに

3

同志、日本の革命は、なぜ、負けつづけているのでしょうか？世界的にも、日本も含めて資本主義支配を困難にする人民のめざめ、決起、社会主義の勝利があり、客観情勢は、有利に展開しています。にもかかわらず、指導勢力である党が、革命の指導的勢力として闘いていないことに根本的弱点があります。まず第一に、党派と名のつくものがたくさんありながら、その存在価値が不明です。第二に、「党」が、実際の姿から出発していないので、現実の戦力たりえていません。第三に、党を中味ではなく、形態で考えていることに問題があります。

第一の問題は、党がなぜ必要なのかわからない問題です。同志も、新左翼も政党もだめだ。だけど、やっぱり勝つには、党が必要

割をなす価値基準は、質的、量的な、人民の結集を促進しているのか、それとも分散させているのかにあります。それが、実践のなかで運動の方向を戦略的に、戦術的に統一を果たしているのか否かではかられます。中心の役割をなす党は、つねに、敵と味方、いま、自分のもとに結集しているか否かにかかわらず、階級全体の中心たりうるように、自己を革命化して、中心たりうる役割に向けて、変わっていかなければなりません。敵以外の味方であるべき全体を、どう反映しているのか、自己を批判的にとらえかえせるかどうかが生命力になります。党の革命しつづける姿に反映されて、人々の結束は、ますます、果たされていきます。

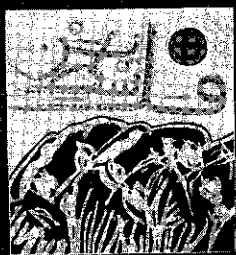
ところが、現在まで、私たち自身が、かかわった新左翼、あるいは、旧左翼は、どうだったのでしょうか？同志が、ダメだという根拠もそのへんにありそうですね。「権利だけを主張する悪質な民主主義者め」と、新左翼を罵倒する手紙を、旧共産党員からもらったとき、私たちも、耳痛くとらえかえしたことがあります。

した。結局、これまでの党のあり方は、「党が中心である」という役割ばかりを主張して終わっています。自分たちが中心だ、いやわれわれが中心だと。そう自己主張していかないところでも、実践のなかでは、そういう自己主張の姿がめだちます。味方の戦略的統一に向けて、誠心誠意尽力するから、中心たりうるのですが、何もそういうことをやらず、自分たちの党が中心だという前提にたつ考え方がまちがいをつくっています。階級全体味方全体からみて、自分たちの党的役割を、どう果たしていくのか、つまり、統一に向けて、どう中心たりうるように主体変革を果たすのかが、正しい基準です。自分たちのもとに結集したものが、革命的だとか、進歩的だとかはなんの基準にもならず、あたかも、その自分たち以外は、味方に数えないという自己中心性があります。階級の中心をつくる闘いとしてとらえず、すでに、所属している「党」へオルグするというあり方のなかに、分裂を促進してきました。そういうあり方は、ある一時期党派にとりつかれても、去って

だと思おう」といつていますね。同志も、そこで悲観せず、必要な党をつくってゆくにはどうしたらよいか、一歩ふみ出して考え、実践していく必要があります。現実には人々がともに生きられない、人の価値が金の価値におきかえられているために、安い人と値段の高い人がいたり、物質的にも恵まれているものと、そうでないものがある、人としての価値がそんなところで決まるのはゴメンだ、みんながともに生き、ともに享受しあう社会に、変えたい、これが、同志も、私たちも、単純な革命の欲求だと思えます。そして、社会を変えるために、その敵対対象に向かつてうちやぶりながら、みな、力をひとつにしていき、ひとつにしていく過程で、価値を創造しながら、新しい社会で、みな、主人公として生きる条件をつくっていきます。そのためには、みんなが結束しなければならず、みんなが、力と心をひとつにしていかなければ、社会を、変えられません。みんなの力と心、行動と考えを、質的にも、量的にも、ひとつにしていくには、結集する中心が必要で、中心の役割が党の役割です。だから、党が、中心としての役

大地に耳をつければ日本の音がする

重信房子



1984年7月25日、発行・ウニタ書舗、発売・重信書房。

副題は「日本共産主義運動の教訓」。『十年目の眼差から』のおわりでは、日本赤軍が80年代に入って70年代の闘いの教訓から、日本共産主義運動の総括をしつつあることが明らかにされていた。その総括を集成したものが本書である。日本赤軍の出自である第二次ブントの他の諸派にあって、日本共産党からの分派は自明の前提だが、彼らはそれをこえて日本共産党も含めた革命運動総体をとらえ返す。そこから不断の自己批判を原則とする党、人民を指導する党ではなく人民を援助する党という、党と人民の関係の転倒がうたわれる。ここにひいたのは、同章「はじめに」の後半、『十年目の眼差から』に収められた「同志への手紙」と同じものであり、リッダ闘争から8年めを期してのアピールでもある。

くものふやし、また、反共宣伝を許す原因となります。

第二に、党が実際の姿から出発していないという問題です。実際の姿から出発すれば、現実のかかりから現実を変える力も出てきます。現実を変えることに、最大の力を、注がないのも、そうした、観念的なところに、価値をもちすぎているためです。

実際の姿に価値をおかなかったことは、連赤(連合赤軍)の最大の敗北の根拠でもあります。いま、自分たちは、豆つぶのような勢力であり、共産主義化に向けて、何を克服していくのか？ありのままの姿、強さでなく弱さを、共通の問題として変えあっていくことが連赤のとき、問われていました。共通の弱さを、みんなの問題、自分の問題、人民の問題として変えあっていくことが、必要だったのです。ところが、その実際の姿を、どう変えるのではなく、あるべき姿、頭のなかの価値観から、現実をみようとするために、いま、自分たちが、何をしているのかが、みえないのです。なぜならいま、何をしているか(同志を殺している)に価値がなく、雄々しい共産主義化が、いまのあとにはつくられないという観念に価値をおき現状肯定、どう変えるかではなく現状肯定を、くりかえしてしまいました。

現実を、どう変えて、統一していくのか、そのためにはどういう中心たりうる主体の革命を果たすのかではなく、自分は座して現実を変えず、頭のなかをあれこれ変えて自分の都合にあわせて解釈し、納得する、あの阿Qの姿を、私たちは、忘れないようにしなければなりません。そのためには、まずもって、現実の姿、自分たちの客観的現実から出発しなければなりません。

どんな高尚な理論、高尚な分析をもついても、どんなに絶対

的な綱領をもっていると自負しても、それが、現実の姿とどういう差があるのか問題です。「絶対的に正しいわりには、人民の結集が悪いのは、どうも人民のせいばかりではないぞ、いつているだけで、何もやってないせいかもしれない、絶対的に正しい内容に問題があるのかな」と、疑うことから、大衆にかわって自己を点検することです。大衆点検をうける能力を、党が、もつことができるのは、実際の姿に、価値をおくからなのです。そして、その差のなかに党がまちがいを発見し、改造する発展の力が、宿っています。何をいつているかという「つもり」ではなく、何をいつているかというところを基準に、いつていることとやっていふことになるかというところを認め、誠実に、それを改造する観点を党がもてるようになるれば、日一日、何年かのち、徐々に、日本の革命が発展するということ確信を同志も忘れないでください。

まず、実際の姿をみることに、認めること、本音と建前といつてもいいし、本当の姿から出発して、建前で足もとをみれなくなる自分たちを変えていかないと、党は、いつまでも、現実を変える役割をつくれないうです。同志が送ってくれたいろいろな党派の機関誌を読んで学習しています。六〇年中期以降、七〇年代の闘いの総括として、新左翼の八〇年代にむけた動き、日本共産党の革新共闘の崩壊以降の動きがわかります。プントや毛派の流れのなかで、とくに、単一党をめざした統合の動きがたくさんありますね。客観的な情勢の要求というよりも、それに対応する主体上の問題から、活路をみいだすべく、統合が要求されているようにです。とくに、いくつかの新左翼世代と、旧共産党の老人同志世代との統合は、興味深いことです。私たちは、新旧世代が、教訓と

総括で固く結ばれ、革命勢力の結集をはかることを、日本革命の継承性を敗北から勝利に転化するために、たいへん必要なことと

考え、そのあり方を学んでいきたいと思えます。しかし現在の統合のあり方をとらえてみると疑問を感じます。これまでのように戦術、運動的な展開だけでは闘いえないがゆえに、思想軸を求めて統合しあうことが、旧世代との結合としてしか行いえない新左翼の限界を一方にものごとがたつています。同時に旧世代の革命と経験が、日本共産党を、革命しぬけなかつたことの総括として果たされていない現状を認識せざるをえません。なぜなら、統合の方法論そのもののなかに、主体的な敗北の総括が果たされていると考えられないからです。現在の日本の革命は、統一を要求しています。しかし、それは、日本革命を、敗北させてきた自己批判の総括のうえに、一致し、自派を否定して解体することをおして思想的に結集することが、要求されています。組織形態の継承のうえには、統合自身なりたちえないのです。

まずもって、実体、相互の主体実情を正しくとらえかえし(いつてきたことと、やってきたこと)の、総括を一致することぬきには、単一党形成を果たしえないと思えます。

日本共産党や新左翼も含めて、「現実を変えるために、みんながどう結集するのか」ということに価値基準がおかれていないのです。かれらは「自分たちが、どう正しい主張をおかしてきたか」を提起しています。その人々の考え方が正しかったかどうかは、革命の価値ではありません。正しかったかもしれないが、現実はどう勝つために、変えたのか、党と名のる以上、敵に対決して、味方全体に、どうしたのが中心問題なのです。そうしないと、客

観的には、「正当化」したまま、敵味方の関係は何も変わらないという、この現実を変えることができません。

第三に、党を中味ではなく、形態で考えるという問題です。党を形態でとらえているために、階級の党はひとつでなければならず、「中心であろう」とすると、そのひたむきな努力そのものが、内ゲバになったり、「連赤」になったりします。レーニンの党も、毛沢東の党も、カストロの党も、形態は、ちがつても、中味は同じだったと私たちは考えています。ピラミッド型でも、アルジェ方式でも、形は、その国々の条件にあわせてつくらなければ敗北します。

新しい社会をいまからつくっていくために、階級全体、さらには、敵以外の味方にすべき人々を、どういう実践をとおして結束させていくのかという、階級全体の、中心の役割の問題です。中心は、実践によってしか、中心たりえません。中心の役割はどういう形態であれ、質的、量的統一を果たす実践的先導者ですから、まず統一されなければなりません。

めざす社会を実現する方法とその実践に、その党の思想性が如実に示されます。そこに、階級全体をどのように結束させようとしているか否か、という姿があらわれます。そして、その党の内部分一のあり方がまた、階級全体を統一しようとするやり方と、共通しています。党は、形はどうあれ、中味がひとつでなければ力になりません。統一に中心があり、統一する実践に価値があります。敵に対決して力と心を統一しつづけることをとおして、ひとつの有機的意志体として、実践しつづけるなければなりません。会社のように、考えがバラバラでも、いわれたことは報酬のため

にやるという実践ではなく——自分にとって、価値のあることはやる——、指揮にしたがうことが、かたちだけのものではなく、中味の問題——勝利の目標、どういう方法でどう実現するために、いまの現実、敵と味方、その中心であるとする自分たちをどう変えていくのか——を、つねに実践によって示すことです。

党の役割からして党の価値の基準は、戦略的に味方がひとつになつていけるかにあります。戦略的にひとつになつていくことは、そのためにかたちをととのえることではなく、勝つために、いま何が必要かという考え方をつねに統一してすすむことです。もちろん、価値、考え方が統一されていくかどうかは実践に示されず、ひとつになるためには、現実のひとつになつていない根拠をとらえ、ひとつになるように実践していくことです。ひとつになれない根拠は、革命の価値が、どこかちがうことにおかれています。

もちろん、どの党も、「つもり」としては、ひとつになる気はあり、しかし実際の姿としては、ひとつに全体を結束させる気はないということであるので、一つ一つは、正しくないという価値基準も、マルクスや、レーニンがいったから正しいかどうかでなく（この考え方も形態なのです）、味方を統一する方向にすすんでいけば正しく、すすんでいなければ、まちがっているのです。でも、ミノもクソも一緒にひとつになることを私たちは主張しません。組織的合点とか、そういうかたちでひとつになることではなく、社会にたいする、人にたいする、自然にたいする考え方を、ひとつにしていくことです。

どうみなを統一しつづけて実践するのかわ、具体的に考えていく必要があります。いま、日本革命の全般からいえば、勝つために、敵をしつかり定め、それを、うちやぶるために、いま、何をしなければならぬのか、国際国内の帝国主義と対決して、味方を戦略的に結集していくために、どういう実践を中心に党を育成するのかが、問われています。私たちは、味方の全体のなかに、いま、党のかたちでなく、中味を、どうつくるのかを中心に考えていくよう、同志に提起します。

4

だから、同志、私たちがどういふ条件のなかで、党の問題を考えたのか、どうしてそういう考えに至ったか、いつておく必要があると思います。

まず、七一年段階では、率直なところ、理論的確信が赤軍派にあつたわけではありません。

「先進国プロレタリアートが、唯一世界性をもつ」とか「毛沢東の地方主義、赤軍派の普遍性」だとか、いろいろ、やはり実際の姿ではなく、頭のなかの価値を理論闘争としていたし、また、行動では、もつとも犠牲にもえて闘っている自分たちに価値と満足をもつていたでしょう。そういう実態ですから、国境をこえたときから、自分たちの実体に立脚していない論理が役立たず、それを、あれこれ修正手おしで、つじつまをあわせようとして、敗北し、はじめて、誤りを悟りました。敗北を認めるのは、まだ、たやすいのですが、誤りを認めることは、それよりも勇気のいる

形態は別々でも、そうして観点をひとつにしていけば、中味も統一され、また、形態も改造されていきます。ところが、党を形態で考えれば、いまの姿は別にして、「中心、前衛であるべき」ために、綱領、規約で統制されていなければならず、指揮にしたがわなければならず、いかに正しい中心であるかを主張するために、理論化されなければならず、他組織を認めることができなくなります。

党の役割は、勝利のためのものです。人民の力をひとつにしていく推進者である党がバラバラでは、バラバラを再生産します。力をひとつにするために、考え方をひとつにしていくこと、いきつづけるその闘いに思想統一がうまれます。それは、特別な人が統制するのではなくて、考え方をしあうこと自身、党員みなが一統に向けて統制しあうことになりす。党がこの思想統制を中心に、内発的結集によって指揮が統一されていかなければ、硬直したかたちだけの党、だめな人間は排除される党、人の中味が変わらず、人が、出たり入ったり入れかわるだけの党にしてしまします。

同志、知識や、能力は、あつたほうが、ないよりは、よいことです。党員の一歩不可欠の条件は、どのようなときでも敵をうちやぶるために行動を統一し、行動の観点を統一し、自分を変えながら実践することができるところかにあります。同志は、ダメな党派の現実を語り、自分のところでは、精いっぱい闘う力を、結集しようがなく、しかし、やるしかないといっています。どう精いっぱいなのでしょう、どうやるのですか？ 自分が、精いっぱいやるにしても、そこには、価値はなく、必要なことに向けて、

ことです。主観的には、率直な国内母体への提起は、誤りを認めよ、と自分たちのことは棚に上げて、つまり、総括として提起できず、ついに国内からは、指揮に従えという無内容な怒りをさそい、分裂してしまいました。そのとき、私たちは、自力でやる闘いにふみだしたのです。決意はそのように高らかに燃えても、自信はなく、自信のない分まけおしりも含めて、日本の人民を代表して闘うぞ、階級全体を代表して実践するぞと、耳をかたむけ、目を開き、学び学びぬくなかで、自分たちを変えようという闘いから始まりました。いまから考えれば、まちがったことをも学んだりしてきたことも多くあります。

知識や能力があるわけではなく、特別な人間ではなく、ふつうの人が革命をやるといふ、私たちの出発点は、逆にさまざまな地域で闘っている人々の革命をやると共通していることをむしろ発見しました。勝つために現実をどう変えるか、そして、変える主体として、自分たちをどう革命化していくのか、ここに人民の創意工夫があり人民を代表するふつうの人々が、変革しあい、変わっていく姿があります。

しかし一方で、「自分たちは、アラブ戦場で日本人を代表して闘い、国内に闘う党ができたら合流しよう」と考えていました。しかし、いっこうに、自分たちが望む党はできませんでした。自分たちが、真に、国際主義を実践する道は、自分たち自身が、力と心を尽くして、つくる闘いを担わないかぎり、そんなに虫のいい話はありません。党を望むなら、自らが、つくることぬきに存在しないということをとらえかえしてきました。そして、どのよな条件で、どのようにつくるかでは、やはり、運動的發展、戦

術のつかみかさね、軍事の実践からつくろうとしていました。その行動のなかで、どれだけ味方をひとつにしていくか、自分たちを変革していくかと、とらえきれず、敵を、どう物理的に解体していくのかを中心に考えていました（ちなみに、多くの解放勢力のなかで、どう敵を物理的にたたくかのみを終始した勢力は、ずいぶん霧散していきました。敵をたたくなかで、どう味方を統一していくのかを中心として考えた勢力は、この一〇年のあいだに、指導力を実体的にたくわえました。

私たちは、ひとつ軍事行動ができたたびに、何かやれた気分になつていきました。そして、その、いつてみたら自分の力を、わきまえないあり方が、七四年のバリでの敗北、ストックホルムでの逮捕、自供に結びついていきました。七四年の連続的な敗北は、多くを学ぶ機会を与えてくれました。同志も、知っているし、心配もしてくれましたね。あのとときの最大の教訓は、階級の責任は、とつてもとりきれない、ひとつのものだということ。革命の名において、あやまちを犯せば、人民全体に害毒が及び、こゝまで責任をとる、とれると思つていることと自分が、敗北を生起させる根拠となるということです。たとえば、バリで、私たちのやり方のまずさで、第三世界の同志友人、P.L.O、ヨーロッパの同志友人が、秘密の二重生活をあばかれ、追放され、暗殺される事態もありました。さらに、逮捕後の屈辱、どの国でどういう人々と、どういう場所で軍事訓練したのかという敵どもへの自供が、日帝のその国への攻撃を許し、その国は、不義理な私たちのために、訓練所を閉鎖するという措置をとりました。私たちは、なんという革命の犯罪をつくりだしてしまつたのでしょうか。「日本赤

的に、闘いぬくことによつて、党は、革命されつづけ、質的に統一性をつくり、そのことによつて、形態を規定していく必要がありません。

同志、そのためには、味方のやつている正しいことを学習しあひ、まちがいをひきうけて克服しあひ、何派、何党と組織は別々でも、中味をひとつにしていく求心性を発揮しあわなければなりません。だから、私たちは形態から出発し、中味が不統一のまま形態においてのみ強化される組織、つまり形式主義的なあり方を否定します。レーニンの名において、統合の前の分離を語り、組織的立場という名において、セクト主義をばひこらせるあり方、しかし中味は、思想的区別なく混在するいまの、党のあり方を、全面的に否定するところから、私たちは出発します。中味、党性をうちたてることを実践のなかで担い、その思想的きずな（単純にいえば、自己を批判する能力をもつ党、党を革命することを建

党の中心におく党性）によつて、一人から二人と、統一を促し、実践しつづけます。それは、まず、第一に、過去の経験教訓にもとづく総括を一致し、第二に「党の革命」の党性によつてたつ綱領的結集によつて、第三に、革命の道すじと、方法において統一していくことです。さらに、第四に、その思想的な力を、物質的な力に転化する組織が必要です。組織的な力として、革命化されつづける中心部を、組織形態をうちかためるでしょう。そしてこの組織は、いつも、中心たりうるように革命しつづけるがゆえに、全面的正しさに不断に変革しつづけるがゆえに、勝利を導く根拠をもつてると同時に、最後の党たりうる条件をそなえていくのです。同志、私たちは、現在、その最後の党を建設す

軍として責任をとりません」と口先でしかいえず、あやまることしかできません。しかし、損つたものを償えるのは、より正しく、より隊伍を強め、実践によつて点検をうける方法しかありません。たしかに責任を回避して生きのびる人々は、いつも脱落していきいます。しまいに人民のせいにして、正しくない自分たちを見れなくなりす。だれかのせいにして生きのびる貧しさよりも、流れる害毒がどの組織のものであれ、ひきうけて、自分たちの改造に結びつけるほうが、どれだけ、党と、革命を前進させることができるでしょう。私たちは、そのとき階級の責任は、ひとつであること、だからこそ階級の党は、全体を結集する立場と観点によつてしか、つくりえないことを学びました。つまり、敵に決しようとして犯した革命の誤り敗北は、主観的に他組織のものであると主張しても、客観的には、自分たちの闘いを左右させるものであること、逆に敵に対決した革命運動の一步一步は、日共の勝利であれ、何々派の勝利であれ、私たちの力となることを、党をひとつにしていく闘いと、結びつけて考えるようになりまし

どの指導勢力も、主観はどうあれ、客観的には、人民が結集する中心としての役割を要求され、自らも中心だと役割を主張し、しかし、中心としての役割をまったく果たさず存在している以上、人民は、敵の前で丸裸で対峙することになります。現在から、中心としての役割を果たすこと、つまり、現在の実際の姿が階級のほんの一部の力に立脚しているにすぎないが、にもかかわらず、不断に階級全体を結集しようように党を革命しつづけることが、建党の中心問題としてあります。味方の質的統一に向けて、自己を不断に革命化していくこと、この観点を軸に指導勢力が、実践

る一部の主体として、中心の役割へ自らを結集させていくこと、つまり、自己批判を指導思想とする主体確立を軸に実践展開してあります。その現在のあり方として、日共の実践も、諸派のやり方も、自分たちの姿の一部として、自分たちの問題として改造しあつてすすむ実践が問われています。

だれかエリートや、特別な人に従属するためではなく、ふつうの人民が、力と心をだしあひ、考え、連帯しあつて生きるために、私たちは、革命を求めている以上、革命の出発点から問い直すよう、同志にすすめます。実践論や党八股のなかでも、毛沢東が書いていたでしょう。知識におどかされたり、能力で、人をみたりせず、同志自身が「頼る」ためにではなく、解放を求めるために、党の建設に一步ふみだしたらいいのです。それは、現在のどこかの組織に入ることからではないのです。つくらなければならず、つくり方も、まず実践のなかで、思想的結集（立場観点の一致）をめざし、そして、政治路線をひとつにしていく闘い

のあとで、形態を規定していくことです。

世界中の闘いは、日本革命を包圍しています。同志の一步は、世界の闘いをも、また、援助するものとなるでしょう。アメリカの挑発的なイラン軍事介入は、いま、様々な味方の結集を促進しています。それについては、また、書きます。

リッダ闘争の戦士たちの出発点は、勝利の革命に一步一步自らを近づける実践によつて、継承されることを、私たちは忘れずすすみます。

同志の返事をふたたびまちます。

ベイルート1982年夏

重信房子

Shigenbu Fusako

攻撃のはじまり

奴らは昼寝時をねらって来た。六月四日三時十五分。アラブの生活習慣から言うと、昼食に一番ポリウムが置かれ、その後昼寝をとるのが常だ。ゲリラの大半もそうだ。やむをえない場合を除いて昼寝のあと、午後四時すぎから仕事が開き、再び夜半まで続く。奴らは、そんな「いいの時間」をねらって来た。

だいたいから空襲は日常的脅威で、特に陽のほる明け方五時すぎから、寝込みを襲うのが常だ。いつもいられない口実をもって空襲にみまわれることに、人々は慣れていて、前日のロンドンでの、イスラエル大使暗殺未遂のニュースから、明け方は特に緊張していた。

「ゴーツ」「キューン」これが脅威のサインだ。地の底からうねりがたちまちに広がる様なゴーツという音。金属音に似たキューンという音。必用品置場に走る。(この人々もこうした非常時に備えて、必要なものは一カ所にまとめてある。これも特別なことではない)。走りざま、その瞬間に訪れた爆風で窓ガラスが砕ける、あわてて伏せる。爆風をさける為、ガラス戸は、いつも閉めないのだが、それでも南側の窓がやられた。近いなあと思いつつ、必用品をつかんでドア口まで走る、居あわせた四人の同志も同様のスピードでドア口に到着。近い近い煙が部屋の中にまでたちこめる。三つむこのビルが直撃をくらったようだ。第二波の波状攻撃が始まっている。ドアの外は、すでに上の階から地下シェルターへ駆けおける人でひしめいている。「エレベーターにのるなよーッ」毎回のことだが、エレベーターに乗る人は居ない。一番危険だからだ。階段付近は、ビルの基礎鉄骨が他よりよく組まれビルの中心棒の様な位置にあるので、部屋に居るより、はるかに安全だ。上の階から降りてくる子供、赤ん坊を、男たちが頭の上で受け止めながら、早く早く、次々とリレーしながら降りていく。火



1982年夏

1984年10月10日、話の特集刊。
『十年目の眼差から』の一年後、83年6月から、84年7月まで「話の特集」に連載されたものに、書き下ろし「中東情勢をめぐる現在の史的位置」を加えた一冊。82年6月、イスラエルは、レバノンのベイルート、およびレバノン内パレスチナ難民キャンプへの爆撃を開始、国境をこえてレバノンへ侵攻し、その全土の半分を焦土と化し、9月には、サブラ・シャテララのキャンプでは、イスラエル包囲下、レバノン右派民兵によって3000人以上が虐殺される(これについてはジャン・ジュネが忘れぬテキストを残している)。ベイルート在住の日本赤軍メンバーは、住民たちの徹底抗戦に合流して共に闘った。本書は、そのレポートであり、体験的ノンフィクション、ルポルタージュ文学の傑作といってよい。文章家としての重信の才能がもっともよく発揮されたものである。82年、ベイルートからの撤退は、日本赤軍にも、パレスチナ闘争にとってもターニング・ポイントであった。その後の闘いの結果、ベイルートは84年に解放される。

ンというF16戦闘爆撃機の急降下の音が、あたりをつんざく。人々は一せいに仕事の手を止め、次の瞬間シェルターに走る。「ゴーツ、キューン」が聞こえた時は、自分のところへとりあえずは落ちない証拠だから(直撃をうける時は、キューンの音が聞こえずに命を失う)その音を聞きわけて方角、距離の見当をつけて、次の瞬間の体制をとらなければならぬ。南部に居る時も、ベイルートやサイタに居る時も、そんな風な中に生活がある。

六月四日の日のこと。徹夜の仕事疲れで、ちよつと昼寝をとって一週間ぶりの風呂に入って……などと考えながら、ベッドに横になった時ゴーツという音が附近に迫った。隣りの部屋で仕事をしていたM同志の声「来たぞーッ、シェルター！」飛び起きざま左腹あたりにも差し込んでいるブローニング銃の位置を瞬間右手で確かめながらベッドからとびおる。(ここでは銃をもっている人は普通の人。イスラエルや右翼のテロへの自衛手段だ。スミスアンドウエッソンや、ベレッタよりも少々重量はあるが、銃口が定まって私にはブローニングが一番使いやすい)。それから

薬の臭いがたちこめて、眼まで痛い。ビル住人のコマンドたちが、次々と所定の位置にたつ。Y同志、M同志も参加。クラシンコーフ片手に、人の波を下へ下へ整理し、急がせながら、次々と、階段の踊り場を守る役目だ。

「いつものことだ！心配するな！あわてるな！子供を先に！」住人を安心させる為に口々にかけ声をかける。

こんなに早く階段を駆け下りるのは普段は出来ないだろうな。しかもこんなに多くの人波が、階段を(二・五メートル巾位)すき間なく流れる速度で整然と……一緒に駆け降りながらいつも思う。

どのビルも地下シェルターがある訳ではないが、内戦や、空襲の教訓から、多くのビルが、ポイラー室を改造して、シェルター(避難所)に代えた。地下室のないビルの住人は、通常一階までかけおいておくまわっているか、シェルターのあるビルへと走る。私の居あわせたビルは大きな地下シェルターがあり、普段はやは

り、解放闘争の仕場に使われている。

地下室に飛び込むと、一樣にみな汗をぬぐいながら、ホツと顔を見あわせて、みな無事を確認する。どのビルも、レバノン人家族やパレスチナ人家族と解放闘争の事務所が混在して入居しているの、こういう時は自然にコマンドが指揮をとり、みなそれに沿って行動する。いつも同じ顔ぶれで結集するのは家族組だが、事務所は、丁度居あわせたいろいろの組織の様々な人で顔ぶれは決まっていらない。

「まだ上に残っている者は居ないか？」一応コマンドが確認するが、みないつものことなので、行動は早く、たちおくれる人はいない。

それから、コマンドたちの指揮にそって、思い思いに地下室を使う。家族組は、家族組で一カ所に陣取って赤ん坊に乳をふくませたり、寝かしつけたりしながら、イスラエルをのしり、誰々の家は大丈夫か、あの人はどうなつたと、情報交換しながら、世間話をしたり話込んでいる。

コマンドたちは、予想外の顔ぶれにヤー、と抱きあつて挨拶してから、いくつかの部屋に陣取る。私たち用の部屋は、いつももっとも安全なところを割あてられてしまう。挨拶が終わって、がやがやした一時がすぎると、地下室を管理しているコマンドが熱い紅茶をふるまう。(紅茶茶碗にのせられたそれを想像すると少しちがう。やかんに紅茶と砂糖を入れて煮つめたごつてりと甘いアラブ式のやつで、小さなガラスのコップについて飲む)。

*

ペイルート市内に居る私たち全員の仲間が合流したのは四時少し前だった。ある者は、この地域外に居た為にこの地域から出ていく大群衆の群に逆つてこちらに合流しようとする為、車、人の封鎖された検問で、日本赤軍メンバーであることを証明してやると合流出来た。(こういう時、敵の遊撃的なテロが集中的に行われるので、地域に入ってくる人間は嚴重チェックをうける)。ある者は、防衛任務についていた為、合流も遅れたし、ある者はケガ人を運んで病院からもどつて来た。その間に、各組織との大まかな見通しに関する話し合いを終えていたので、私たちは手短かに今後の体制について話合つた。今日の予定に入つていたカールドル学校のレクチャー準備の中止。(コマンドの政治教育の一環として「アジアと、日米安保の意味」について、夜報告することになっていた)。一部はこの地下室任務に加わること、他は最悪事態にそなえた陣型準備(こういう条件にそなえて、アメリカン大学周辺に、居住条件をととのえていた)と地域防衛体制に参加すること。夜、十時以降、このビルに全員集合することを決めた。南部最前線のナビタイエに居る同志たちとの交信を、それまでに果たしておくことを確認して、全員が配置についた。まだF16が上空を回し、時々、競技場を爆撃し、救急車のサイレンが鳴りひびきフル回転している様子。

夜、全員が無事に集つた。イスラエルとの最前線近くにいる同志たちからも元気だという知らせが入つた。

顔を見あわせる。この地下室も、もちろん完全に安全ではない。それだ弾がビルにあたつた位なら大丈夫だが、直撃をくらえば、生き埋めか、ビルの重さが地階にメリ込むので、つぶれてしまう。唯、一時の「雨やどり」の様に、とりあえず一時をしのごぎ、それから、次々と入る無線とレボで、奴らの攻撃の状況をつかんで次の動きを決める為の場ではない。奴らの攻撃が一次的であれば、静まつたのを待つて元の活動現場、部屋に帰る。地域的に、ここが集中攻撃の対象であれば、波状攻撃の合間をぬつて、みなを避難させる。

居あわせた各組織のコマンドが集つて、ラジオと無線、レボを集約しながら、広報の役割を果たしはじめる。私たちは、英語、仏語ニュースを担当し、他のビルの日本人との無線で、外部の状況を把握しはじめる。状況を把握しあつてもちより、それからコマンドが全体へ伝える。「兄弟たち、今、攻撃を受けているのはシテイススポーツセンター(競技場)と、このあたりだ。いつもの戦闘機の数と規模ではない。数はつかめていない。被害も、まだつかめていない。兄弟たち、タイミングをみて、この地域から避難しなければならぬだろう」

コマンドの手短かな報告が終わると、家族組は不安気に、子供たちを抱きよせる。一瞬ガヤガヤとあてのない行先をあれこれ話合う声がかきこえる。

私たちは、仲間たちとの連絡に出かけなければならぬので、A同志が、波状攻撃の合間をぬつて、地上にかけあがつていった。他のコマンドたち幾人かも、忙しく、地下に入ってくるもの、地上に出ていくものも居る。

私たちはすぐそれまでに集めた情勢や、被害状況を集約し、私たち自身の活動を、どの様に果たすべきかを検討した。

「今日の攻撃は、四時間もつづき数十波にわたるペイルートへの空爆を行った。この攻撃は、シテイススポーツセンター(競技場)の地下が、弾薬庫として使われている為に、そこが中心に行われたが、同時に、無差別攻撃が住民居住区になされ、少くもつても、五十人の死亡、数百人の負傷者を出す大規模な攻撃であった。更に、南部地域が同様の爆撃をうけたが、死傷者は相当な数にのぼるとみられる。南部からの報告によると、これまで、イスラエルの停戦違反と空襲に対し、批判と、その反撃に停めていたパレスチナ・レバノン民族運動の共同軍は、再三再四にわたるシオニストの停戦違反と、無差別攻撃による大量虐殺に、断固として反撃を決意し、継続的に反撃を行っている。その為、戦線は、更に拡大されるもようだ」という報告をA同志が行つた。

「シテイススポーツセンターの攻撃では、救急隊が出動したのを見計らつて、再爆撃された為集つたレバノン人民兵も、救急車ごと殺され相当被害をうけた。又、第一波と第二波、第二波と第三波の攻撃の合間に、現地視察に行つたPLO指導部も攻撃され、四十メートルから五十メートルの差で命びろいしたが、更に、ひきつづく波状攻撃で殺されかかった。結局無事だったが、下部が、指導部を猛然と批判し、指導部が戦闘現場に直接姿を出さないことを決めた。又、現場の側では、指導部が指導しやすい様な、体系に改めた」とその体系、そこにおける他の外人組織との連絡の仕方をC同志が説明した。折から、パリで開かれていたベルサイユ・サミットでは「イスラエル」大使暗殺未遂を一方的に非難し、

シオニストの無差別爆撃に同調的態度を示した。「パレスチナ側の見通しは？」私の質問にC同志が答えた。「どの組織も徹底して対決するという決意を固めている。敵に一步もひかないことこそ防衛だという立場にある。一応見通しとしては、米帝との矛盾もあり、南部一帯、又はリタニ川以南の占領も考えられるとのこと。味方は、一年分以上の兵力を保持しているので、対決しながら、レバノン南部を戦場にしようとするという構えだ」

私たちは暗い不安を覚えた。敵が本気になれば、一たまりもない程、軍事力には差がある。アラブ諸国側は、昨年の、フェズ首脳会議に示された様に、折合がつかなくて、会議自身を開けずにおわっている。シナイ半島の返還が行われ、二週間前に、ヘイグ米国務長官が、中東の支配構想を語っているところによれば、好戦的だ。

「味方は足なみかとのついでにない。困難だ。攻撃に一定はたえうるが、アラブ諸国の力は期待できない」と、パレスチナ指導部が数日前の会議で言っていたのを思い出す。

攻撃は、これまでとちがう様に感じられる。しかし、パレスチナ側の分析では、リタニ川以南の大侵略に備えてもやるという意味がなかった。あとで、こうした分析の甘さが混乱をひきおこすことになるのだが、当初、率直なところ、PLO指導部もベイルートに至る攻撃という風に考えていなかったと思う。それほど、攻撃が、日常的だったために、逆に、過去の条件に制約されていたといえるかもしれない。

私たちは、南部に在る我々の部隊の徹底抗戦への参加、パレスチナ側の主張と分析を、もう一度把握すること、他のアラブ諸組

織との情報交流、宣伝担当の同志は、早急にベイルート市内にいる外人コマンドの会議を招集して、「シオニスト・イスラエルの無差別虐殺抗議、パレスチナ・レバノン人民連帯声明」の作成にかかる体制をとった。

そして、私たちの居住体制を討議した。夜は、空爆はないが、あけ方、五時位から、空爆に備えて連絡本部を、アメリカン大学周辺の居住地におくこと。その地域は、日本人も居るし、敵の手先も多くすんでいるいわゆる白色地域とかわりないので、武装体制を強めること、停電に備えた、ローソクや食糧の保管など、あけ方まで、眠らぬままに新しい条件づくりを行った。

どの組織の事務所も、昼間、活動出来ずに地域から撤退していた分、昼間と同じ程、夜の街に人がざわざわしている。にぎやかなコマンドたちは、忙しい最中、情報の伝令に、私たちの部屋に来ては、戦闘意欲満々でVサインを送ってよこす。

*

五月下旬から六月上旬、この時期私たちは毎年忙しい。72年の五月三十日に、リッダ空港襲撃戦を行ってから、毎年のならわしで、五月三十日を、お祭騒ぎで明け方までです。僕らの為に決して葬式をするな。祭こそふさわしい」と、ローマから、出撃直前にリッダ戦士が送ってよこした手紙に由来する。とにかく五月三十日は、恒例の祭で国際主義を記念する日として、無名・有名を問わず、いろいろな人が集い、酒を飲み歌い、花束をかざして踊り、演説をし、新しい友だちも、旧い友だちも、リーダー

も兵士も、処狭しと騒ぎまくる。いろんな国の人が、その国の言葉で、インターナショナルをうたいあげておひらきになる時は、いつも朝になってしまふ。とくに今年は、闘争の十周年で、アラビア語のパンフレットと、街中に、ポスターが氾濫している。そして、このお祭騒ぎのあとは、きまってる、いろいろな人々との年間の計画づくり、方針づくりに忙しい。そんな風な時だったので、私たちは、客観的政治情勢からみて、この攻撃が、ベイルートの最後になるかもしれないという予感と、同時に、今ここを出る訳には、いかなないという実情から、本当のところ、最悪の事態への準備を一日のばしにしたい気持だった。

だから、パレスチナ側の分析で、リタニ川以南で、大戦闘をくりひろげて、徹底抗戦するという考えに賛成していた。それは、イスラエルが、もしも攻撃をそこまでにとめれば、の話だったのだが。

イスラエルは、くりかえし次の様に宣伝している。「イスラエル大使の暗殺行為に対する報復である。PLO側との停戦は、レバノン国境に限られたものではなく、世界中に適用されるものである。故に、イスラエル個人への攻撃は、停戦違反なのだ」レバノン停戦協定は、PLOを認めないという口実で、レバノン政府といたっておきながら、レバノン停戦協定をパレスチナ人の生存権の行使すら認めない方向へと悪用している。いつもの奴らの手口だ。PLO側は「七月の停戦は、レバノンと被占領下パレスチナ国境の間に、適用されるものであり、パレスチナ人は「イスラエル」と闘う権利をもっている。停戦違反は、シオニストの側にある」と明確に、その論拠に反論しつづけた。

すでにパレスチナ革命勢力・レバノン民族運動は、シオニストの大規模攻撃が準備されていることを知っており、アミン・ジェマイエル（現レバノン大統領）とそれに対する話し合いももっていたから、シナイ返還前に、そうした攻撃に出合うだろう覚悟をしていた。しかし、予想した大侵略なしにシナイ返還がエジプトとイスラエルの間で形式的に行われ、米軍が兵力ひきはなしの口実でシナイ半島に駐留した。このキャンプデービット「和平」の、次の獲物が、パレスチナ自治交渉という奴らにとつて「やっかい」なもので、PLOぬきには、進まない現状の突破に、どういう手をうってくるかと、丁度、PLO側も一つの山を越えた様な気分の時だった。

*

パレスチナ解放勢力・レバノン民族運動の共同軍は、リタニ川をはさんで、シオニストのかいらいサイドハダド少佐の支配地区（通称ハダド・ランド）、イスラエルの国境を臨むビューフオート城（十字軍の城跡で、山頂に君臨するその姿は壮厳であり、史蹟としても名高い）に最前線をかまえ、その後方の、ナバティーエに前線基地を置いていた。

ナバティーエ・ビューフオート城では、二年がかりで、コマンドたちによる地下道を使った要塞化が進められ、大量の弾薬が蓄積され、長期抵抗を可能とする体制がつけられていた。ここからパレスチナ側の攻撃は、シオニストの最大の脅威だ。

そしてPLOは、その丁度背後にあたるアイシーエ峠に、主力

部隊を置き、ナバテイエ・ビュート城の前線を支援する陣型をとっていた。アイシーエ峠は、レバノン山脈がとぎれる所にあり、海岸側からの補給路、ベカー地方の補給線を確保しうる戦略的地点にあたる。又、サイダ、ダムール、ベイルート等の海岸に面した都市の拠点も、長期持久に耐えうる体制をとっていた。更に、昨日、PLOは、抵抗戦争のための総動員体制をとっていた。

ベカー地方では、シリア軍の対空ミサイル・SAM6を中心とした防空陣型が作られADF(アラブ平和維持軍)すなわちシリア軍の拠点となっていた。このADFは、フアランジスト・カタイエブによる、レバノン回教徒、パレスチナ人に対する攻撃をとどめる力となっていた。首都ベイルートでは、博物館を境目に「グリムライン」をはさんで、東側に、キリスト教徒住民地域を根城にするカタイエブ民兵があり、西側に、レバノン民族運動や、パレスチナ勢力に守られた住民地区があり、ADFが、東側からの攻撃を監視している。対カタイエブ右翼との対峙においては、パレスチナ・レバノン共同軍二万、ADF三万の兵力を展開する能力をもち、一方カタイエブは、二万の兵力をもち米国、イスラエルの支援、補給路があり、77年の内戦後も、緊張関係はつづいていた。

(81年春にもカタイエブ・イスラエルの、ベイルート包囲の攻撃が行われたが、ADFが、カタイエブの戦力を規制した為に、カタイエブ右翼の思わくは成功しなかった。その後、くりかえしイスラエル・サードハダド軍、カタイエブの秘密討議が、重ねられていたのは、誰でもが知っていた)

こうした対峙状況にあったので、常に一触即発の条件下にあっ

外人ボランテアの人々との抗議声明作成などの作業で忙しい。昨日の被害地区の道一本へだてたビルにおちついた。

各国のボランテアの人々が集って、今後の体制を、あけ方から話し合うことになっている。これらのボランテアの人々は、いわゆる医療活動や、非戦闘的なボランテアではなく、各組織から派遣されて、パレスチナ革命との共同体制をとっている組織代表の人々を中心である。

抗議声明を出すのにみな賛成だが、それは、大して重要でないという声が多かった。今、やるべきことはどの戦闘単位に入り、どの様に今後にかかわるべきか、結論を急がねならないからだ。しかし同時に、現在の国際的な、米帝の戦争政策があり、ヨーロッパでもあがっている反核運動が、唯、核に反対するのみでなく、通常兵器、現在地球上で行われている侵略と戦争に反対する力にならなければならない。そして、このレバノンで闘うのみならず、各革命組織が、自国の本部や、運動体に、レバノンへの爆撃を糾弾する様な、国際的広がりをつくり出す為に努力すべきではないか。私たちは、そう主張した。そして全体で、外人ボランテア声明を確認した。ある国の人が「そこに組織名は書けないが、国籍だけでも署名しよう」と提案した。大半が賛成した。ところが、国名を言っただけで、問題が出る組織があったり、現在のベイルートの居住でも、公然とはがう国籍をなのおかなければならぬ人々が居る為に、その提案は結局通らなかつた。

すでに空が白々としはじめ、敵の偵察飛行が南部で再開されたらしい。あと数分でベイルートにくる様だ。昨日にくらべて外は比較のおちつきしている。行き場のない人々は、ゴザと、少しの荷

た。カタイエブと、サードハダド軍は、イスラエルとの意志一致の上で、常々挑発をくりかえした。しかもその挑発は、イスラエルの戦線拡大の野望に呼応している。シリア側、パレスチナ・レバノン共同軍側も、一定の反撃にとどめ、挑発の流れにのらない様に、しかし断固として対応するという立場を、いつも強いられてきたのだ。

*

六月五日のあけ方、まだくらくらいうちに、私たちはビルを出た。防衛隊のコマンドたちが、いつもの数倍の規模で、寝ずの番をしている。昨日の爆撃のあたりを通過して、爆撃地区から一角離れた部屋におちついた。まだ、火薬のにおいが、そこら中にたちこめている。くずれたビルの傷口が真新しく、暗い中でも白く光っている。破壊されたベランダに、白っぽい洗濯物がひるがえったままだ。

一方、アメリカン大学周辺に連絡本部をおく為に他の数人は、そちらへ移動した(私たちはその我々の連絡本部を通称「オリオン」と呼んでいた)。

いつも軍事訓練になると他のことよりもはりきるD同志がそちらに入るようになっていた。彼は、あらゆる銃器にくわしく、時には、大藪春彦のハードボイルドをよんでは、そのましがった記述に腹を立てる程の銃に関するわけ知りの人だ。車に、クラシンコーフ、シタイエル、ウージーまでつんで、出発した。

私たちの一行は、まだ他の人々と話をしなければならぬし、

物をまとめて、ラオシエ海岸や、サナイエ公園の方にもうあけ方からぞろぞろと流れていく。(ラオシエには日本大使館があり、どの内戦時でも、一番安全だった為に、日本人の居住者が集中している。サナイエ公園は、目ぬき通りハムラの裏側にあたる)

偵察飛行に対する威嚇射撃が一斉に始まった。

偵察飛行は、上空すぎて、こちらのSAM7がとどかない。それでも、SAM7をひっきりなしにうちこむ音、クラシンコーフまでうちつづける味方の反撃音が耳をつんざく。「弾もつたいないなあ。だけど、うたななあ」一人言のように、ベランダで防衛する同志がいう。私たちはそういう時には、ムダうちしてはならないというきまりがあるので、弾は発射せずクラシンコーフをかまえたままだ。この味方の弾で、時々、ベランダから見ている人にあたってしまふこともあるので、危険だ。

PLO英語放送、ボイス・オブ・パレスティナの時間だ。パレスチナ軍指令部は、敵の無差別攻撃に断固とした反撃を決定し、南部戦線では、夜中、カチューシャ砲による被占領地に対する攻撃を行ったことを告げた。

みな一瞬間をこわばらせる。挑発にのつたといえは、あまりにも酷だ、そんな言い方は、よそう。しかし、これで、敵は、エスカレートする口実を増大させ、地上軍の出動は時間の問題になった。敵は、どこまでくるか? 組織代表として派遣されているボランテアの人々と私たちは、パレスチナ・レバノン共同軍の徹底抗戦に、最後まで共同することを確認し合った。

ちらつと、日本の革命のことを同時に考えながら、最後の戦闘である限り、日本の闘いを継続する部隊と、このレバノンを防衛

する部隊とに、戦力を調整しなければならない。一握りの私たちの戦力が、レバノンで闘ってどれ程の力になるだろう。又、一握りの私たちの戦力が、日本の革命・進歩の前進にきりむすぶことが、どれ程可能だというのか？ 次々と、国内の同志、友人の顔がうかぶ。あとを、ひきうけて、国内の人々が闘うだろう。闘っているのだと納得しようとする。けれども、現状の国内の闘い方に確信がもてないのだ。だからといって、自分たちも、とるにたりにない。他の国々からの革命組織を代表する人の中にも同様の気持ちの人が居たかもしれない。PLOの放送から戦闘のうたが力づくよく流れてくる。

居あわせた人々で、新しい戦争の段階が、ハビブ特使の調停で、とまるかどうかを話合っているとPFLPの同志がたずねて来た。「敵に昨夜は、一カ月分以上の量のカチューシャを、うちこんでやった。敵の攻撃は、益々エスカレートするだろう。闘うしかない。闘わないで解放がありえない以上は」軍服は泥だらけだ。眼だけが、かがやいている。

戦闘は数日間つづいて、敵が、リタニ川以南を侵略するだろうが、徹底抗戦しながら、敵を消耗させる。イスラエルが、国際勢力の圧力で、ひきさがらるまで、戦闘を続行しなければならぬ。彼は、そういういながら、アラビア語放送をチューニングしはじめる。敵の爆撃が始まった。一区画はなれていても、耳をつんざく音、ビル全体をゆさぶる衝撃にかわりはない。そのたびに、大丈夫、大丈夫といながら、伏せて、ほふく前進で階段までたどりつく。ここは、最上階だから運悪く、おだぶつになるかもしれないのだが、仕事をつづける限り、この辺に居ないと、出来ないでこの

に言う。それ程、人民の人氣、信頼は厚い。

この地域を離れると、各々の連絡がむずかしい。保安上の理由から、「オリオン」に入入りを、多くすることが出来ない。又、南部、ナバティーエ、アイシーエ峠付近にいる同志たちの安全は、確認出来なくなる。C同志他数名が、この地域に、とどまることにして、先発して、「オリオン」に入った人々と、合流する為に私たち数人は、波状攻撃の合間をぬって、外に出た。

上空には、F16が、太陽の反射をうけて、きらきら光りながら、急降下するのが、鮮かだ。憎しみの無数の目が、それを凝視している。爆撃して急上昇する速度と角度が、これまでの戦闘機よりも数段もすぐれているとのこと。こうして米帝の最新兵器の為人々は次々と死を余儀なくされている。F16の後尾から、たえまなく白っぽい熱球がはきだされる。急降下する時と、急上昇する瞬間の時をのぞいて。まるで、お尻から、たれ流す様な風情だ。

これは、シリア・パレスチナ側のSAM7への対抗措置だ。73年の十月戦争で、不敗と、豪語したイスラエル空軍機が、半分以上壊滅してしまったのだが、これは、SAM7が新兵器として登場した為だった。その後、SAM7が、熱利用のミサイルであることから、それに対抗する措置として、熱球装置をつけ、三秒おき位か、後尾から熱球を発射する為に、地上から、SAM7ミサイルをうって、それが確実な射程に入っている、ミサイルが熱球の方に反応してとんでいってしまう為に、命中率は、極端に悪くなってしまった。とくに、76年か、ケニアで、パレスチナ人、ドイツ人遊撃隊による、イスラエルのエルアル機をうちおとす計画が事前に発覚して、SAM7と、戦士たちが、ケニア当

事務所十数人が陣取っている。

ラジオを片手に、伏せの姿勢のまま、私たちは、アラビア語放送をきいた。F15、F16が、南部レバノン十五カ所を爆撃している最中だとラジオは伝えていた。爆撃を、逃れる為の南部、更にサイド、ベイルートに道路につらなる人と車の列を、じゅうたん爆撃した為に、昨日以上の被害が出てると伝えていた。敵はレバノン・パレスチナ共同軍の拠点と補給線をたたくことを、目的にしている様だ。PLOの放送が、イスラエル機二機をうちおとしたと報じた。居あわせたみな、爆撃音も忘れて「ブラボー！」とたちあがって喜んだ。

同じ日、レバノンの要求で、国連安保理が開催され、即時の停戦を、六日午前六時までに、要求することが決議された。しかし、シオニストは、「昨年六月から、PLOによる一五〇回のテロが行われている事実を無視している」と、この停戦決議をうけ入れなかった。反対に、侵略体制を着々と進めた。

*

空爆の拡大で、その地域にも居られなくなった。

PLO指導部も、昨日の教訓から、無縁つき指揮車体制をとり、居住、事務所を、マスラ通りをへだてた地域に移しはじめた。アラファト議長は、滞在先のサウジアラビアから、イスラエルへの非難、安保理決議支持の声明を送り、同時に「自分は、我人民の居るベイルートにもどる」と通告して来たらしい。アラファト議長が来てくれれば、こわくないと、キャンプの婦人たちは、口々

局と、イスラエルの秘密警察モサドにとらえられ、イスラエルにら致されてしまったから、イスラエルは、SAM7の実物を分析して、その性能をつかみ、対抗手段をととのえた様だ。

爆撃地点を離れて、車がラオシエあたりまでくると、人々があちこちになつて、上空の攻防をみている。命中しそうなSAM7が、ほんの瞬間のズレで、熱球の方に反応して、F16機にあたらず、ミサイルが自爆すると、「くそー」と、あちこちで、どよめきがおこる。次々と、うちあげられるミサイルに、みな声援を送りながら、仕事や、商売の手をやすめて、見ている。この街の人々は、信じられない位、あかるい。戦争の中で、この街を本当に愛しているから、どんなに危険でも、この街から出ていかない。逆に愛着がつのり、敵へ憎悪がつのり、いく様に見える。あちこち、走りまわるコマンドのジープに八百屋はオレンジの箱をなげこんだり、パン屋は、パンの山を投げこむ。「ガンパレロー！」と、大声をあげて手をふる。コマンドは、Vサインを送って「シユクラーン」(ありがとう!)と叫ぶ。時々、お礼の合図に、クラシンコーフを空にむけて、おみまいする返答もある。

*

六月六日、シオニストは、全面侵略を開始した。ベギン・シャロン一味は、この侵略を「ガレリーに平和を」と呼び、侵略作戦も、その様に命名した。ガレリー地方(南部レバノンに隣接する被占領地域)に、「テロリスト・PLO」の砲撃が届かない距離まで「テロリスト」を追い払う為の作戦であると、その侵略の意

図を説明した。それは、四十キロから四十五キロラインであり、同時に、シリア軍に対して、手を出さない様警告した。「シリア軍が攻撃しない限り、イスラエルは、シリアに敵意はないのだから」と宣伝しまくった。しかし、この意図説明自身が、シオニスト、ベギン一味の侵略、全面破壊の為の戦術であることが、その後の侵略の進行の中で日々明確になっていった。

この数カ月間、国境に集結し、準備をととのえていたシオニスト軍は、行動を開始した。二百台以上の戦車と、数万の歩兵が国境を越え始めた。シオニスト軍の侵入は、国連軍ゾーンを横切つてなされたが、国連軍は何もしないで、見送った。空・海・陸からの徹底した砲撃によって、パレスチナ・レバノン共同軍の拠点・補給路を破壊しながら地上侵略部隊は、それに援助されながら、北上を開始した。この侵略は猛スピードで行われた。国際世論の介入以前に、既成事実をつくりあげるために、機甲部隊兵員輸送車で、移動しはじめた。午後には、ベカー高原南部で、シリア軍とも交戦し始めた。スールの郊外・ナパティエに向かう街道では、シオニストの戦車歩兵部隊と、共同軍の戦闘が行われた。ビュフォート城には、間断のないもとも激しい空爆がくり返された。海岸線地帯には、海と空から、サイダ、ダムールと攻撃し、上陸作戦を強行しようとした。そして、パレスチナ・レバノン共同軍が、その上陸作戦を阻止した。更にベイルートへの空爆、海からの砲撃がつけられている。

敵の侵略は予想した通り大規模なものだった。しかし、敵の口車にのせられ、それ程危機感はないベイルートにはなかった。むしろ、リタニ川以南の占領にどう対抗するかという風潮が強くなる。

ていく。ハマラ通りで、パレスチナ婦人団体を中心に抗議デモが開始され始めた。鈴なりのビルの両わきから、人々は大声をあげて手をふり合図を送る。デモ隊は二十人位から、どんどんふくれあがり、最初ははずかしそうに上をみあげて手をふっていたけれども、コマンドのジープが通りかかって、先導の役割を果たし始めたので、歌をうたいながらビルの谷間をわりあるく。シオニストの空撃に時々、避難し、ゴートという音に、歌声を、うばわれながらも、くりかえし又、決然とデモをくりかえす。ビルの窓から歌に呼応して、うたいはじめる人、子供たちも、通りがかりの人々も、ちよつと、ためらいがちにデモの隊列にくわわる。

この街は不思議な街だと人々は思うだろう。傍観者は居ない。みな市民であり、みな、いつでも戦士になれる。家々には、あたりまえの様にクラシンコフや、ピストルが保持されている。みなで、戦争に抵抗し、殺された人々の悲しみも又、一つに、わかちあう。これから、何がまちうけているかもしれない明日からの戦線の拡大に、しかし、人々は、この街で生きつづけることを何よりも大事にしている。

さようなら ベイルート

こみあげる様々の想いを抑えながら人々は最後の準備に入っている。好きな国を選べと言ったってベイルートより好きな国がどこに

ついていた。だから非武装地帯の拡大、PLOの孤立化がねらいだと、大方の人々が考えていた。そして、つい最近、一票差で、不信任をまねがれたベギン内閣の人気取りのあがきという考えが強かった。更に、米帝が、中東支配する為には、アラブ側に妥協せざるをえない側面を過大にみていた。そういう意味で、敵の力量を甘くみていたし、又、逆に、味方力量をその分、過大に見ていたと思う。

戦闘は益々拡大していった。数千人のパレスチナ・レバノン人民が、爆撃をさけて、ラオシエ・ハマラ地域に移動し始めた。鉄骨の、たてかけのビルに、にわかづくりの居を構えられる人々は、まだ良い方で、人々は、行くところもなく、街々にあふれている。

市民防衛隊が、救急活動に限らず、掘げられ、社会活動——居住、食糧、いざごの処理——が、強化されねばならなくなった。パレスチナ・レバノン共同軍は、軍事的対峙に精一杯で、レバノン婦人団体、パレスチナ婦人団体、学生や、アラブ諸国の他の解放勢力(エジプト民主戦線や、エリトリア解放戦線、オマン解放戦線、バハリン解放戦線、クルド人革命組織、アルメニア革命組織、数えあげられない程の人々)ヨーロッパ、ラテンアメリカ、アジアの革命諸組織が、共同して侵略にたちむかう体制づくりを問われた。もちろんPLOが最大にして強力な指導部隊である。

いつものみなの集まる本部付近が、爆撃にさらされておき、意志一致が十分出来ない。パレスチナ・レバノン共同軍の指導部が、アラブ諸国、レバノン政府との折衝におさまらされている為に、自然発生的なたちで、自主的な共同が口こみで、行動で広がっ

あるだろう。それはパレスチナ、占領されたパレスチナ以外ではないか、そういいながら、人々は、アルジェリアへ、イエメンへ、シリアへなど、撤退先を選択した。

私たちは、撤退の準備期間を、仲間同士のみならず、もうこれから会えないかもしれない人々、とくにベイルートに残る組織や友人たちと今後の仕事について出来るだけ話合った。すでに、捨てるものは六月段階にすべて捨ててしまつて、かきあつめるものもない。唯、これからの闘いにとつて必要な条件作りをむけて時間を費した。

前線のざんごう上のどこから手折つて来たのか風に舞う風車の様な大輪のダリアを目印とするちよつと粋な会議場とか、海を見下ろす岩場とか、工事現場のビルの二階とか、破壊され失われた事務所にかわつて、あちこちが会議場所になった。どの会場でも友人の死者、行方不明者に対する情報交換がまず先だった。それから、どこから手に入れたのか、ワインや地酒を準備して来て、さようならの乾杯をらつば飲みでまわし飲みする。ここでさようならの乾杯というのは、闘いの印、闘つて又ここで会おう、と、口には出さない誓いが込められている。

ベイルート

なんとか墓地の墓石の数よりも多く
人々の死体が埋もれ

ベイルート

なんとか病院のベッドの数よりも多く
傷ついた人のあふれる

ベイルート
ベトナムよりもはげしい砲撃の雨

ベイルートは
けれども

ベイルートは銃口

ベイルートは解放の砦

ベイルート町は祭

戦士を包むふところ

誰もベイルートにこがれるのは

故がある。

侵略の合間に作ったといううたを戦士たちは各々もっていて、そんな風に勝手に作り勝手に歌う。それは又、実に情感をゆさぶる曲なのだ。

私たちは出来るだけ多くの友人たちに会う一方、地区人民委員会の活動は継続し続けた。これらの組織は、市民防衛隊（市民救援隊）に呼応して、その活動能力の拡大の為に侵略後に設置されたものだ。もともと、市民救援隊は、レバノン、シリア、パレスチナの共同司令部に呼応する社会事業分野の活動を担ってきたのだが、イスラエル侵略以降、必要性からも、より広汎な地区住民活動を円滑にする為に地区人民委員会が更につくられたのだ。市民救援隊や、人民地区委員会の活動はベイルート住民の生命線としての活動を有効に果たした。彼らは住民に信頼され、戦士と並ぶ無名の英雄たちだった。

山の様につまれている。

この仮事務所に、久しぶりに、水差しがおかれ満々と水で満ちている。そばにプラスチックのガロン入りの水も据えつけてある。人々が入れかわりたちかわり来ては、高々と水差しをもちあげて水道の蛇口程の量で流れこむ水を喉をならしながら一気に飲む。ここではコップで飲むより、大きくあけた口に水差しの水を十センチ位上からおとしてのむのが習慣だから。

「あー、水がうまい！」飲みおえると口元をぬぐいながらみなそう言う。水を欲しいだけ飲む。ただそれだけのことに自由な気持がふつふつと湧いてくるのだから不思議だ。それだけのことなのに、これからも生きて闘いつづけるという実感がわきあがってくる。そうなのだ。水を満足に飲みたいと、人々は常々思いつづけて来たのだから、水にまつわるエピソードを思い返しなが、目の前に水滴にぬれた水差しがおかれていることに、ただそれだけに事態の変化を感じる。

いつ空襲が止むかわからない。いつ飲料水が配給されるかもわからない。七月、八月はずっとそんな状態の中をくらしだした。「オリオン」の部屋にも、牛乳びん一本程の水しかなかった。それしかないという水を見るとのどのかわきを余計感じることもある。居あわせた仲間たちは、ある時は仲間をゆずり合い、ある時は、一口ずつなめようと決めるのだが、誰も手を出さない。水はテーブルの上に飾られた装飾品の様に置いたままだった。暑い。体中も汗でネトネトするし、風呂など入った日は侵略の前の話。けれども、次の水が来るまでは飲めない」というみななな気持は、いつも欲望にまさっていたので、水は誰の口にも入らなかつた。

避難民の収容、空室捜しとその交渉、清掃の組織化、水の分配、パンの配給と、包囲下の町の生活能力の保証を計った。手のあいている事務所活動の人々、婦人団体、生産団体、外人たちも人民地区委員会の戦力となって働いたが、大半はベイルート住民の中から参加した人々による自然成長的な人民自主管理が体系として整ったものだった。

たとえば、七、八月に入って、給料をうけとつてもゴミの回収を行おうとしない政府役人への「給料ストップの抗議行動」を組織し、ゴミの回収を果たさせたのもこの人々の力による。（のちにPLOがここから撤退した後、いわゆる武装戦士に属さないこうした人々が、レバノン政府軍によって、多く獄へぶちこまれた。PLOに協力していたという理由で）。

*

撤退準備作業は又、死者、行方不明者の消息確認と並行して進められていた。

私たちの仲間も八月に入ってずっと消息確認作業にかかりきつている。アラビア語が読み書き出来る外人組も、自主的にそれらの作業の一端をささやかに担っている。工事中のコンクリートのほほ出来あがった土台、銃弾の跡だらけのこのビルの一階で、消息を訪ねる人々の為の作業がつつけられている。

この仮の事務所も空襲があけたので、活気づいた人々がいれかわりたちかわり、出たり入ったりしている。消息をたずねる人の写真や、あちこちのビルの死体から集められた身分証が、雑然と

あるところでは、貴重な水を、伝令に来た人が住人の我慢もかえりみずに全部飲んでしまったことで口論になったし、あるところでは、住民が水を飲まない様に我慢して病院へ水を寄付した。比較的安定した条件にあった私たちでも、そんな時を経ってきたのだから、より困難な人々はどうなるに水で苦労したことだろうか。

古びた水さしに満々とみちた水を見ながら、侵略された街の一人一人の言葉、人々の生き様、闘い様を改めて思い返す。感傷的になつてしまふ。

水がここにあることは又、希望の印でもあり、闘いの一つの終りを象徴する様な気がするから。

*

八月二十一日、最初の撤退部隊が出発する朝をむかえた。最初の人々は、負傷した戦士たちで、キプロスへむけて出発する。十台のレバノン軍の軍用トラックに分乗して、港まで行き、そこから、ギリシアの船にのって、キプロスへむかうことになっている。私たちは、九時出発にそなえて、友人たちを見送る為に、出発地点であるアラブ大学の方へ向かった。街はメチャメチャに破壊され、ビルは穴だらけなのだが、住みなれた我家のアパートの階は、砲弾の穴がない。一階や階段がこわされているのほつていくことは出来ないが、ペランダの無線用アンテナも、そのまま空にむかつて立っている。いつのまにか昨日の間に、みんなで清掃したらしく、道がきれいになっている。一メートル半に一つの割でえぐられた砲弾の穴はこだらけの道は掃ききよめられ、出発の儀

でも敗けてもいないという見方もある。勝ったという人もいる。敗けたという人もいる。ただ、これから力を一つにむすんで、必ずパレスチナの全土を解放する為に、ペイルートの教訓を忘れないようにしよう。ペイルートの闘いの総括だけが、PLOを強くもし、又弱くもするのだから「パレスチナの女性が優しい彼女の性格を表すようにそう言ったのが、日差しの中で短い影と共にゆれるオリブの苗に添えられた言葉だった。

PLOの撤退は続いている。レバノン左派武装勢力は瀬戸際にたたされていく。「我々は武器を捨てない。我々はバシール・ジェマイエルとイスラエルのクーデターのな大統領選を拒否する」。撤退する戦士たちの陣地をひきつぎながら、レバノン左派は、敢然と、イスラエルに対決しつづけている。

イスラム教徒リーダーたちも又、八月二十三日の大統領選、ポイコットを呼びかけ、選挙の延期を主張している。イスラエルは、バシール・ジェマイエルが早く大統領に就任し、友好的なレバノンに再生することを望みながら、一方、撤収するPLO部隊が「ジープをはこんだから合意違反だ」とくり返し主張し、PLO戦士をのせた船を停止させようとしたり、ねばっている。米政府は、中東の長期的「和平」を行う為に全力をかたむけると演説している。シリアはイスラエルを非難する以外は沈黙している。バシールとイスラエルによる「友好」にあくまでも反対だ。シリ

アはPLOの撤退をのぞんでいない。けれども、PLO自身が決断した撤退に沈黙で批判している。レバノン左派の勇気をたたえながら、最後まで闘い続けたシリア軍も又、沈黙している。PLOの祭の様な撤退の儀式と反対に、彼らは、黙々と撤退の準備をしている。

八月二十三日、バシール・ジェマイエルがレバノンの新しい大統領に選出されたこと、ラジオが伝えていく。ポイコットした議員が多く、すれすれの表決で選ばれたという。イスラム教徒議員の幾人かは、ポイコットしなかつた為に、即刻これらの裏切り者への抗議行動が始まった。PLO撤退と時を同じくして、ペイルートは新しい緊張が街中に広がり始めている。75年の時の様に、再び内戦は始まるだろう。イスラエルと、カタイエブ右翼の力の政策に、残る人々、どのような闘いを強いられるのだろうか。

私たちが又、撤退する日が来た。六時半、いつもの様に起きて軍服にきがえる、水筒とリュックサック。これが荷物のすべてだ。朝食をとり始めると、昔の友人たちで、残つて闘う人や、ピルの隣人だつたおばさんたちが、早々とドアをノックする。「ありがとうが言いたくて」一様に友だちはそう言った。「いやいや、ありがとうを言うのは、こつちの方じゃないか。無力で、何の力にもなれなくて去っていくのが心苦しい。十年もこの町に世話になつた。美しい街だ。自分の家の様だ。内戦や、戦争侵略と破壊で、町はあれからかわつたけれども、人々の気持はもつとペイルート

を愛している。ペイルートの生活者はみな愛し合っている。そう言おうと思うのだけれども、輝く目で別れの言葉をのべる友だちの前では、言葉にならず、ただ抱き合うだけだ。「明日会おうー」「神のおほしめしのままに」最後になるかもしれない分だけ「明日会おう」という。くり返しほほに接吻しあつて、離れがたい時をあわたくしにくすししながら、もう行かなければならない。八時すぎ、コーニシエ・マズラ通りの建設中のビルに、出発する内輪の仲間たちが集まつた。友だちの荷物までがつげるだけの物をリュックにおしこんで、武器を腹に一丁、肩に一丁、ジープにのりこむ。そこからジープで、出発の為の集合場所についた。撤退する人数の三倍位の人が見送りに来ている。歌い、パレスチナの民族舞踊がくりひろげられ、シユプレヒコールがすでに集合場所を祭にかえている。泣いている人の何と多いことか。

ハッタで顔をかくしている。仲間同士には、すぐわかる。顔をかくしている割にあちこちから仲間が大声でよび飛びついてくる。この際かまうことはない、友人や仲間と大声であいさつをくり返し、抱き合つて一時を惜しむ。

九時半、PLOのリーダーたちが演説を始めた。「我々は撤退するのではない！」

一言発するうちから、シユプレヒコールがまきおこり、クラシンコーフが空にむかつて一斉に発射される。演説する方も聞く方も泣いている。心の一つになつたつばの中、民族の決意は、熱く怒りや、口惜しさを込めて泣いている。人々は別れがたく去りがたく一つになつて無数の心を確かめあつていく。

十一時半にトラックに乗る様に指示が下された。撤退する人々ののはじめるより早く、見送りの友人たちが空にむかつて射ち始める。ずつと射ちつづけている。人々がトラックにのりおわり出発するまでの三十分か四十分の間、ずつとクラシンコーフを射ちつづけて、連帯の志を示している。十二時すぎ、出発の合図がおりた。国連の建物の前からゆつくりとジープを先頭にして、トラックがあとにつづく。ゆつくりとマズラ通りをのほり、海岸に沿つて港への道を走りだした。海がきれいだ。ひかつている。レバノン左派民兵がびしりと沿道に整列し、別れのあいさつの為に、闘いの決意表明の為に、一斉に海にむかつて射ちはじめる。

海岸沿いの砲台、対空砲火の為のそれも、連帯の印としてズドンと海にむかつてゆつくりと進む。緊張と万感こもつて、祭の様な集合場所から、ふつと静かだつたトラックに満員の仲間たちも、レバノン左派の銃声に応じてドドドドと射ちまくる。射つていい、これがこの闘いの最後の戦闘だ。指揮官がおくられて、それを了承する。更にトラック上の戦士たちは、空にむかつて弾を射ちながらゆつくりと進む。レバノン軍の運転手は、人々の別れの時の為に、更にゆつくりとトラックをすすませる。あちこちから数えきれないクラシンコーフの音が包む、砲が火をふく。トラックの上では、あちこちから空襲きょうがビシッビシッと、体にとんでくる。「むこうに居るのがアカデミー賞をとつたイギリスの女優だよ」仲間の指す方を見ると、ベントンのオープンカーに乗つて、Vサインの両手をあげたままだ泣いている。彼女は毎日送りに来ているという。PLO支持の為にずいぶん迫害されながらずつと支援運動をつづけているという。かつてレバノン内戦時に、港

付近の東西最前線になった穴ぼこだらけの海岸沿いのホテルまで、きれめなく沿道色々々な人々が見送っている。泣いている。このかつての最前線が、重武装した人々や女性が見送れる最後の地点だ。ここから、デマケーシヨソラインが始まる。更に沿道からもトラックからも、一段と力を込めて、最後の射撃の合図を送る。

デマケーシヨソラインに入ると、トラックが更にのろのろと進んだ。トラックの音だけはシーンとした地域にひびきわたる。これまでの祭が熱気と喧噪に満ちていた分、静かさは違う世界への突入の様。赤土の山の上をジグザグしながら進むと、空色の腕章をつけた白いヘルメット姿の国連軍兵士が立っている。まわりのビルの窓という窓、屋上には、国連軍兵士が完全武装して監視している。

ここからは、国連軍の管轄になる。港まであと百五十メートル位か。港でトラックをおりて、棧橋の入口になると名簿のチェックが行なわれる。

ふりかえると赤土の山、少し眼をあげると、ビルというビルからの砲がこちらをみている。

こんなところで感傷はない、味方の中では泣けるが、こんなところで泣けるか。みなそんな気分だ。最後の行進の沿道の仲間たち、友人たちと流した涙も、武器の音もどこかにいつてしまった様に、私たちは身構え、心を止めて、事務的に事をすすめる。

昼すぎ、船がすべり出した。甲板には、あふれる仲間たちが、知らず知らずのりあわせた仲間同士の発見を楽しみあい、接吻のあいさつをかわしている。陽気さはあいかかわらずだ。又、闘いの始まり。人々は決して挫折しない。それは生きることやめるとい

ことでしかないのだから。あらゆる人々が闘った。ペイルートに生きてきたすべての人々が闘った。ペイルートに残る人々も又闘いつづけるし、ペイルートを離れた人々も又闘いつづける。さようなら、ペイルート、新しい時代の、新しい質の闘いによって、この代価を結実させる為だ。さようなら、ペイルート。82年夏。

闘いは、世界へひろがっていくだろう。広げなければならぬ。ペイルートの闘いの教訓は次の闘いの勝利の根拠であり、敵も又奪われた味方の武器が、中米の軍事政権に叩きうられ、中米の進歩をもとめる共通の運命におかれた人々を又虐殺する武器にかわったことを、苦汁の教訓としよう。ペイルートでの打撃は、反核平和運動、社会主義諸国、日本の世界の進歩を求める人々への打撃となる。又、日本のアジアの反帝闘争の前進は、必ず、パレスチナの闘いを有利に導く。ローカルな一国的な闘いは、国際的に闘っている人との共感、方向に常に照り返されて問われている。

どこかに前線があるのではなく、世界に目をむけて主体的に力を尽くして自分で闘うところが前線となり、世界中の闘う人々が後方として支えている。この前線は常に又、他の後方として世界の反帝戦線の有機的連携を前進させる。自分の利害に目をうばわれていれば、世界も又、自分をも前進させない。再び隊伍を整えてすすもう。世界を変革しよう。自分(たち)を変革することぬきに世界も変革しえない。これを82年の夏の教訓としよう。レバノンの中で、ペイルートの中で、世界をかえる為だに、自分たちを変革することに潔かった同志たちと共に、新しい戦場から、勝利の土台を又固めよう。さようなら、ペイルート、82年夏。

重信房子アンソロジー

赤軍—PFLP—世界戦争宣言 重信房子

Shigenobu Fusako

映画「赤軍—PFLP—世界戦争宣言」より重信房子が語る部分を採録

私がここに来た目的というのは、私たちの論理構造が、世界革命戦略という形で対峙段階というふうの世界革命戦争を何よりもまずとらえて行く、そしてそのことを世界的にどう表現して行くかという問題が問われていると思うし、またそれは去年のハイジャック闘争によって軍事を通してしか世界革命戦争の波を領導できないんだということを私たちの組織が証明していると思うし、さらに赤軍派の思想というものを現実の闘争のなかで共有しているのはどこなのかということを実践的な形でしか見ることができなかつただけでも、現実には実践的な形でしかそのことを表現して行かなければならなかつたということが第一点です。それから私たちがハイジャック闘争で貫徹した波というものを現実に継承しているのがPFLPであり、私たちが世界党—世界赤軍—世界革命戦線として表現した問題提起を世界的にどう共有できるのかという問題もある。そのことはもちろん、ツパマロスとかブラック・パンサーとかあらゆるところについて言えるんだけれども、ここに来たなかで一番感じたことは、世界性とか国際主

義とかいうふうには私たちが言っているけれども、結局、一国的にしか世界というものを見ていなかつたんじゃないか、ということだ。それは日本の新左翼の認識論の問題だとも思うんだけれども、たとえばこつちに来て日本の階級闘争を見た時に、主体が客体を解明しようとする時に主体が止まっちゃあかぬか客体の流動を見ることができなかつたし、現実には客体を止めたまま主体をどう動かすのかというチグハグなところでしか語つてこなかつたということが、現実には私たちの闘争を困難にしていたのではないかと。それは日本の新左翼がもう一回確認しない限り、いつまでたっても戦略をたてきれないし、現実には国境をどういうふうを超えてどういうふうの世界として結合して行くのかという問題を語れぬと思う。それが国際根拠地の問題にしても、或る党派は観念論だとか逃亡の論理だとか言い、また他の党派は赤軍派の根拠地論というのを非常に批判しているのだけれども、国際根拠地論というものが現実に軍事の問題として登場しているということだけでとらえられていたら、それはやはり逃亡であるとかいう論理と平べったくくつついてしまう。だけれども赤軍派が表現している問題というのは、国際根拠地論というのが党の問題であり、三派と

か八派とかがとらえているところの軍事というところの問題ではないということ、まず確認しなければならぬのではないか。

ロシア革命の時のシエーマのように、蜂起の階段における平和方向性というものが現在の戦いのなかで有効性をもつのかどうかという問題が問われていると思うし、赤軍派が六九年に出した前段階蜂起というのがどういふ形で領導されるかと言え、現実に闘争を媒介するということであり、ゲリラ闘争を通してラセン的にのぼりつめることだと思ふ。いわゆる日本の現実の運動がいくら行つても踏み切れないという問題は、軍事というものが殺人であるというのを忘れていたというよりも観念のなかでしかそのことを確認してこなかったという錯覚が現実の闘争というものを全部「大衆運動主義」に召還してきたというふうな思ふわけだ。たとえば、赤軍派が二月から一貫して銀行ギャンクをやってきた、その銀行ギャンクというものもつ意味つてものを無媒介に批判したところで問題の解決にはならないし、どれだけどういふふうな敵権力に対して戦い切れたのかつてことが重要な問題であると思う。で、そのことを忘れて内ゲバというか、権力との関係を措定しきれないで今のインテリゲンチヤ運動としてしか表現されていない、もちろんその闘争を必死にやるといふこと、それから「悪いこと」をすることとは現実には弾圧を受けるわけで、その弾圧に対してしか批判できないような日本の党派に対しては「大衆」としてしか認めないし、その意味では赤軍派が提出した問題というものをここで一回——自分が越えようとする範疇つてもものを、たとえば日本で確認してきた革命における尺度みないなものがここでどれだけ有効性をもちうるの

兵士たちのメモリアル

奥平剛士 安田安之

サラハ・安田こと安田安之とともにリツタ空港の銃撃戦において戦死したパーシム・奥平剛士には、「天よ、我に仕事を与えよ」という遺稿集がある。ここからの引用を。

「あの日あんなに口べたになつたのは／寝不足のせいではなかつた／……君は故郷へ帰る／さようなら また会おう／そして今度はしみじみと話をしよう／その時は俺も自分の生活をもつて／昔の思い出を／そして君の子供たちのことを／静かに話そう」

「奥平剛士／これが俺の名だ／まだ何もしてない／何もせずに生きるために／多くの代価を支払つた／……天よ 我に仕事を与えよ」

国内では奥平・安田の追悼集会が開かれた。パレ

スチナ解放の烈火の中で、銃を手にしたまま。

奴らが驚愕したのは、奴らの反革命国際主義が想像できる「プロレタリア国際主義」を越えたところから起つた事件だからだ。奴らが恐怖したのは、三島由紀夫の消極的な死を、革命のための死が飛び越えてしまったからだ。(略)

オレたちは、人民のころを知ることができ、奴らは人民に本質を知られないように逃げまわることしかできない。プエルトリコ人が交戦の巻添えで死んだにしても、エダヤ人がかつて迫害されてきたにしても、彼らを抑圧し迫害したのは奴らであり、ウエトナムを焼土と化したニクソンや、パレスチナ人を難民キャンプに追いやったダヤンこそが、おとしまえやつけてもらわねばならぬのだ。オレたちは想像することができ

か、たとえばジェラシの山へ行つたり、イスラエルの国境の方へ行つて現実にコマンドと共有する空間というものが、私たちのなかで今まで確認してきたすべての闘争とやっばり違う。

それは平べったく言えば、これから日本階級闘争がどういふ形で発展することが有効なのかつていうのを、非常に、こう離れたところから見た時に、日本の赤軍派との党内闘争—党派闘争の開始ということであつたし、それは日本の政治状況、または階級闘争の発展段階が、世界革命戦争の地平でどのような形でのぼりつめてるかつていうことが、逆に言つたらパレスチナにおける戦いをどういふふうにかつて共有しているのかという問題で、対象認識が非常に不十分なために、たとえば発展段階のなかで、あの北朝鮮へ行つた九人、またはパレスチナにいる私、それから日本にいる同志たち、それぞれ問題意識が多分にずれるであろうし、そのことは党内闘争—党派闘争をするんだつていうなかでしか戦略を導き出せないであろうし、世界革命戦争へのぼりつめようとする実体というものは、世界の戦争派、世界の革命派が同時に軍事を共有すること、それは共同行動—共同軍事闘争としてなされなければならぬし、その意味でパレスチナの人民、またはツパパロスやブラック・パンサーをも含む世界の戦争派とどういふふうにかつて共同軍事行動を通して帝国主義者を打倒して行くかという戦いが世界革命戦略として登場してくるであろうし、そういう共同軍事行動を通してしか世界党の問題というのは語り切れないであろうし、そういう意味で昔から言つてきた世界党—世界赤軍—世界革命戦争統一戦線の陣型つていうのは、そういう共同軍事行動をどういふふうに通じて行くのかという戦いのなかでつくられて行くということが、まず第一だと思ふ。

〔映画批評〕一九七三年三月号初出

る。オレたちはどこへでも行くことができる。そしてオレたちは、奴らに向けてブツばなすことができる。オリオンの三ツ星よ、八・一六のまつりの空に輝け！ オリオンの三ツ星よ、いつの日か、奴らに向けてブツばなされる銃声が、オマエたちを追悼するのを聞くことがあるだろう。(「集会基調より」)

二人はともに四七年生まれ。京都大学工学部の出身である。以下は奥平剛士が父母にあてにのこした遺書から。

ご無沙汰しております。今ローマから書いています。これが最後の手紙になるでしょう。国を出る時から生きて帰ることはないと思つていましたが、不思議に今まで生きのびて、多くの人に会い、多くの事を知り、そして、最初の考え通りの路を行こうとしていること、何度考えても、ありがたい事だと感じます。思う通り、わがままいっぱいにさせていただきましたこと、お礼の言ひようもありません。ついに孝養のこの字もさせていただきますが、おまが許すまじらば、いつも第一にそれをしたと思ひ

続けていた事は、わかつて下さい。我々兵士にとって死はごく当然の日常事ですが、ただお二人が嘆かれるだろうこと、それだけが今僕の心を悲しませます。ペトナムで今死んでいく数千の若い兵士、こちらで、又世界の至る所で、革命のために死のうとしていた若い兵士たち、僕らもその一人だし、あなたがたも彼らのために泣いている何千万の父や母の一人であること、こうした我々の血と涙だけが何か価値のある物を、作り出すであろう事をいつもおぼえていて下さい。

ローマの空は明るく、風は甘いです。町は光にあふれています。少年時読みふけた、プリユータークの思い出が町の至る所で、僕を熱くさせます。仕事がつまみしいお二人のもとに帰ります。ではお元気で。さようなら。

剛士

お守りはちゃんと持つて行きます。写真といっしょに。

(一九七二年五月二九日)
(日本赤軍20年の軌跡)より)

何も知らないあなたのための赤軍ガイド

Q なぜ重信氏逮捕がこんなに大ニュースになったのか？

A 周りの子にいろいろ先日の逮捕をどう思ったかときいてみたんですよ。そして何か訳わかんない人が、腕をあげて楽しそうにテレビに映っていて何なんだと思つたという反応が多かつた。アメリカ大統領選とダブルヒットでトップニュースになつちゃうくらいすごく大きなニュースに、テロリストといわれているような人がどうしてなつちゃうの？ そんなに大きなニュースなのか？ とも言われた。それに同じくらいの歳の子はどう

見てるだろうねという話をしていたら、多分テレビも見ないし、新聞も読まないから何も知らないんじゃない、とかいう話になつたりしたんですけど。やはり大きいニュースですか？

T 重信さんがまだ日本でやっていた頃、今から30年前ぐらいは、人々が何かおかしなことになれば集会を開いて討論したりデモをしたり、政治主張を自分こう考える、とかぶつけ合つたり、そういう時代があつたんだ。その時代の一番人数が多かつたのが、いわゆる団塊の世代と呼ばれる人たちで、この人たちが学校では学園闘争をやり、職場では反戦

A 一九七八年生まれ
何も知らない女子大生

F 一九五三年生まれ
プリント系労働運動家
現在、フリー・エディター

T 一九五四年生まれ
元・赤軍派シンパ
現在、ジャーナリスト

闘争をやり、ということ、それがいずれも非常にしほんできてしまつていたところで、ニュース的な意味では30年ぶりにそれが戻ってきたような印象、あるいはそこだけにその時のものが残っているように見えたんじゃないか、もちろん今でもやつている人はいるんだけど。でもこれによつて30年前にやつたことがすべて終わつてしまふのかというように思ひとか、そういうのがあるというあつてあれほど大きく扱われたということですね。

彼女とともによく語られる存在に、リッダ空港の銃撃戦の岡本公三がいて、彼は、政治亡命ということになってい



三岡本公三の狂法事軍

ど、日本の歴史の中で見て、日本人の政治犯つていうのが海外で政治亡命を認められたというのは初めてじゃないかと思ふんだ。彼女たちのグループの世界においての実績と共感というか。日本ではアラブの英雄つて一言で終わっちゃうけど、向こうの世界からしてみたら、例えば韓国でいえば伊藤博文を暗殺した安重根みたいな英雄なんですよ。それはアラブ世界がヨーロッパ世界から孤立させられているときに、同じアジアの国から応援に来てくれたということで、各国の政治の首脳部が讃えているというそういうふうな関係があつた。そういう意味で彼女たちがそれなりに大きな存在だった。日本の外交政策の中でもちよつともを動かす存在だったというのはあるんじゃないかな。

それからあと付け加えれば、日本赤軍がやつた獄中にある仲間を奪還するというのが、日本の左翼の中では初めてのことなんだ。大体捕まつたらもう終わり、というのに対して、仲間を絶対に奪い返すんだということを実際にやつてしまつた。それを3回以上やつてい

ういうすごさの衝撃もあった。そういう集団が、そのリーダーと言われる人が逮捕されることによってなくなってしまうんじゃないか、そういうのがあって、大きなニュースになったんですよ。

Q..どんな時代だったのか？——戦後から70年代まで

A..なぜ日本の方がアラブに行っていたのかとか、どうしてそんなみんなが討論したりする雰囲気だったのかとか、いまはわからないんです。その中でもじゃあみんなが支持する雰囲気とかあったんですよ。みんなそういうのが自然だったんですか？

T..わりと自然だったんじゃないかと思うんです。僕らより前の世代だと思っただけで、戦後の学生運動、これは共産党の人たちが中心になって、まあいろいろ学費値上げ反対とか、それから単純な芸術サークルでも芸術論争をやっていた。いろんな人たちが自分たちの位置を社会との関わりの中で問いかけるような時代があったんじゃないかと。

もうひとつ、その頃だとまだ貧しさというものがあつたんです。いつも腹を空かせていたり学校に行くにしても学費がないとか、あと彼女が言っているように給食費で困るような人っているのには、うちでも米をまだ食べられなくて麦を混ぜたりとかして、例えば家庭科をやる時とか米を持ってこいと言われるのね。ところが家に米がない子が麦を持ってきたりすると騒ぐ奴がいて辛い思いをしたとか、給食費を払えないのを担任の先生が隠れて払ってくれる、そういう貧しさに対する痛みをお互いが知っている時代だったんじゃないかなと思うんだ。

A..そういうのがすごく切実にあるんだつたら、みんながちゃんとそういうのを真剣に考えたりするのも私たちにもわかるような気がする。

T..ちょうどそういう時代に入ったときに池田首相が、貧乏人は麦を食え、とかそういうことを平気で言ったりしてね。今もひどい発言を森なんかいくらでもやっているけど、でも、みんな実に穏や

かになっちゃって。むしろ日本の歴史からいうと今の時代の方が異常じゃないかと思うんだけど。

F..すごい大がかりな話になっちゃうけど、一九六〇年というのが一つの分岐点で、もう一つの分岐点として69年から70年代というのはまだ戦争が終わって実際の運動というのはまだ戦争が終わって実際の運動というのはいないわけで、まだ戦争が影をすく落としているし、朝鮮戦争なんかがあったり、水爆実験で、第五福竜丸が被曝した事件とかいろいろなことがあって、その戦争の記憶と戦争に巻き込まれる恐怖というのが、反戦運動という形でいろんな運動に盛り上がっていつて、その頂点が60年安保ということになっていく。

もう一つは貧困が圧倒的にあるわけですよ。やはり戦後はとにかく自由になった。労働組合とか学生の自治会とか何でも作れて、表現の自由もあるんだと。貧困からの解放ということで、貧しき労働者が団結せよということで労働運動も学生運動も高まってくる。貧困、勝ち取った自由、それから二度と戦争はごめん

だという反戦、これで50年代までは行っただ。

ところが日本の資本主義社会というのはそこで勝ち取った労働者の力によって自分たちの生活水準が上がったんじゃないかと、高度経済成長の時代が来た。60年代安保でいったん運動が挫折した後に、池田内閣が所得倍増とか、これからは経済の時代だとか、もう戦争は関係ないで

すよ、これからみなさんの所得は働けば働くほど豊かになりますよ、みんなの家もマイカーも電気冷蔵庫も掃除機も持てるようになるんだ、とアピールする。政治運動は関係ない。そういう形でしばらく植木等の無責任社員シリーズに象徴されるような太平楽な時代が続いていくわけですよ。で反戦運動も過去のものなんだと、日本もこれであとはひたすら

一等国になつていくんだと思つていたら、次の第二の反乱が起きるといふことになつたんです。

やはり70年代の全共闘運動から赤軍から一切合切を含めたものの社会的背景として一番大きいのはベトナム戦争です。ベトナム戦争は日本が巻き込まれる戦争じゃなくて、間接的にアメリカ側に荷担する可能性のある戦争なわけで、他国の民がこういう形で戦つていて、あるいは無体に殺されていくのに黙って見過ごせないというので、ヨーロッパでもアメリカでも日本でも反戦運動が高まってくるのと、それからある程度自由とか豊かな生活というのがあつたんだけど、一体これは何なんだ、という形で大学という存在は結局新たなエリート層、ブルジョワ層を作っていくだけじゃないかと皆、考えはじめた。あるいは水俣病とかいろんな公害が出てきて、企業や国家に奉仕するだけのものじゃない内面的なものを告発していく学生という存在は何なのか、支配に荷担していくものなのか、ということまで大学解体とかいいはじめた。あるいはそこらいろいろマイノリティの

赤軍

前段階蜂起——世界革命動
争に向け、共産同赤軍派
に結集せよ！

共産同の現在点と我々——

1969年

043-311-7496

赤軍派機関紙創刊準備号

面を向いていくわけ。60年安保の時はお戦争に巻き込まれることだけに反対だったけれども、例えば障害者とか在日朝鮮人とか被差別部落とかあるいは女性解放とか、あるいはそれは豊かになったことによつて目を向けるだけの想像力が出てきたということもある。そういう中に新左翼の運動があった。というのが大雑把だけれど流れだね。

Q…新左翼って何？—「ブントと革共」

A…新しくなったというので「新左翼」だと思っただけで、どうして新なんだとか。

F…それは要するに60年安保までは、左翼というのは日本共産党によつてすべてが体现されていく、ある意味では共産党にあらざるば左翼にあらざるな、共産党が圧倒的なシエラを独占していたわけでしょう？ おかしいんじゃないか、これはちがうんじゃないかと、総括、方針、やり方をめぐっておかしいという人間は片っ端から除名されたりとか、査

問されたりとか、切り捨てられていったんです。

A…共産党は60年代以前は大衆運動も全部カバーしてたんですか？

F…60年以前はほぼ共産党がすべての運動を仕切っていたと思つてた共産党の中での若いグループから、共産党のやり方はおかしいんじゃないか、これで一体革命ができるのか、とか、当時、それまで絶対とされていたスターリンをフルシチョフというソ連の首相が批判しはじめていて、共産党もスターリン主義と同じじゃないか、とかいう形で、ある意味反乱分子が新しい運動体を60年安保の2年くらい前に作った。本当に共産党全体から見れば一〇〇分の一くらいはグループだつたんだけど、それが全学連という学生の自治会の連合のなかでは、それまで主に共産党系が主導権を握っていたんだけど、その少数派のグループが、むしろ半分以上に支持を集めちゃつて、自分たちが新しい党を作つて、60年安保も国会の周りをぐるぐる回つていただけじゃダメだ、はつきりと安保反対の意志を伝えるな

市民運動の芽も出てきた。

Q…なぜ暴力的な行動をおこしたのか？

A…その「武装」というのが、いまいちばんわかりにくいと思います。

T…共産党は55年に議会でも多数派になつて段階的に社会主義へ移行しようという



後に連合赤軍で赤軍派と共闘する日本共産党（革命左派）の機関紙

くちやいけないということでも国会の中に突入するわけです。それが非常に衝撃を与えたんだけど、ただそれは突入しただけで、権美智子さんという一人の女子学生が死んだだけで、それ以上のことはできなかったわけ。それが共産主義者同盟なんです。

A…共産主義者同盟がブント？

T…そう。

A…ブントって何語ですか？

T…ドイツ語。「同盟」って意味ね。

F…他にも革命的共産主義者同盟というものもあるんです。ブントは60年安保のあと、分解していった、その一部は革共同へ入つてしまふ。その後、革共同は革マル派と中核派に分かれるんだけど、中核派の中心になったのはブントから流れてきた人たちです。ブントの方は66年くらいに、離合集散していたのが固まつて再建する。これが第二次ブント。運動全体からすると革共同に対抗するくらい大きなものになつて、67年になつて革共同と、もう一つ社会党から生まれた鬼っ子といわれる社青同解放派と一緒にゲバ棒持つてヘルメットかぶつて実力闘争の時代に

平和革命の方向をうちだして、これに対して、ブントは直接行動をよびかけた。

ところがその作ったブントも国会議事堂前で何十万という大衆がいたらしいんだけど、突入しただけで、それ以上何もできなかった。そういうなかで総括をめぐつてどんどん分裂したり、再編成したりしていく中で、議論が始まるんだけど、その柱になつたのは、関西ブントから出された暴力、それから国際主義をどうとらえるかという問題だった。

暴力というのは人をぶんどるとかそういう悪いニュアンスが入つて来るんだけど、この場合は革命の暴力というか、何十万の大衆がいて目の前の壁を越えたらすぐ国会議事堂なのに、じゃあどうして自分たちは政権を取れなかったんだ、権力を奪取できなかったんだということが問われる……。その時やはり暴力ということ、大衆の暴力とは何か、革命の暴力とは何か、それから実際に世界では民族解放闘争があったりして、特にさつきもでたようにベトナム戦争もかなり激化した時期で、その時の解放戦線の闘いを見たときに、やはり革命には、相手が自

衛隊とか警察とか軍事力をもっている場合には自分たちも革命のために暴力が必要ではないか、ということになってきた。

もう一つ、国際主義についているのは、共産党は自主独立といっているけど、それ以前はどちらかというソ連の指示に従って動く、あるいは中国の指示に従うというようにどこかの国の党に支配される傾向があった。それに対して自分たちの民衆の国際主義、プロレタリア国際主義についてうんだけれど、それはその場合の対象は世界各地、例えばキューバで革命をやっている大衆、アメリカで解放運動をやっている人たち、ヨーロッパで反戦闘争をやっている人たち、アジアで革命闘争をやっている人たち、そういう人たちとともっと連帯しようではないかということです。

F..共産党の場合はやはり60年の段階でアメリカの従属国家から独立しなくてはならないということで、民族独立というウエイトが非常に強かった。だから安保反対というのは、従属から脱出して独立するんだということだった。新左翼が違うのは、60年でもう日本はアメリカに

かというところ、革共同は反スターリン主義ということ強調するわけ。プントが世界を未完の革命の過渡期と捉えて、特にベトナムやキューバの闘争を支持するということに、革共同はベトナムだろうとキューバだろうと労働者国家はスターリン主義だから初めから×なの。革共同の場合どちらかというところ、ベトナム戦争も帝国主義とスターリン主義の代理戦争ということになる。同じベトナム反戦でもニュアンスが違ってくるわけね。確かにベトナム共産党というのはソ連の後盾というのがあったけど、南ベトナムの解放戦線には、自分たちの国土にアメリカが来るといって、民族解放をかけて戦っているという評価に力点を置くのかどうかというのがある。日本のベトナム反戦運動の中でも、あれはソ連とアメリカの代理戦争だということよりは、やはり民族解放をかけて戦っているベトナムの民衆に対する共感で戦っているのがあったよ。未完の革命でいったほうが、何かどこかに可能性を見いだしていくかんじがあるよ。ベトナム戦争とか、もつといえればアメリカとかいるところ

従属しているのではない、日本帝国主義として自立したんだ。だから日米両帝国主義、自国帝国主義を打倒することを通して他国の民族解放闘争なんかと連帯できる。第二次プントの理論の中心には、後で赤軍派の議長になった塩見孝也がつくった過渡期世界論というほとんど死語と化した路線があって、その中身というのは早い話が未完の革命ということです。世界は一九一七年のロシア革命にはじまって革命の発展途上状態であるところから、攻撃的にうってでようと訴えた。世界には帝国主義国家と労働者国家とあって、労働者国家は一応革命したけど、労働者国家であくまでもカッコ付きでありますよ。で、第三世界では、民族解放闘争、帝国主義国家ではその政府を打倒し、労働者国家は官僚制をうち倒して、世界で同時に革命しましょう、と。

A..ソ連は社会主義じゃない？

T..社会主義とは認めていなかったわけですよ。社会主義的な制度は作っているけど、本当の意味での社会主義を体現していない。そういう意味で労働者国家。一

民族独立解放運動とかでてくるわけでしょう？ そこがプントの場合一番依拠するところだった。

A..それが国際主義？

F..プロレタリア国際主義ってよんでいた。スペイン市民戦争の時に、ファシズム、フランコを打倒するために、ヘミングウェイとかまで含めて義勇軍として参加したりというのがあったわけ、あれも考えなくちゃいけない国際主義の実践の姿だね。ものすごい大雑把な言い方をすれば赤軍がバレスチナに馳せ参じたというのがそれに近いものがあるのかも知れない。ただ位置づけが国際根拠地論とか、いろいろあったわけね。

Q..赤軍派はどうしてでてきたのか？

A..それで赤軍派が出てきたのか？

F..その前のことをもう少し加えると、60年の時は安保条約ができたから、また戦争に巻き込まれるということ、自分たちの意志を表示したんだけど、別に60年代後半というのは日本が明日にでも戦争に巻き込まれるということでもない。し

応労働者が主役のような形になっているけれど、社会主義ではないということ、労働者国家という表現をしているわけ。F..その大親分がソビエトで、のちのソビエトの規定をめぐっては、これは労働者国家ですらない、これは官僚制搾取国家だということとか、あるいはこれは社会帝国主義なんだとかいろいろ論議があった。

まあ、古くは一九五六年にハンガリー動乱というのがあって、ハンガリーの民衆が反乱をおこしたらソビエトの戦車が出て来て、そこからソ連はいいという幻想が崩れはじめた。それからもう少し後になるとチエコでも68年に同じことをやったわけ。その次に中国というのがあったけど、これをめぐってはまたいろいろ新左翼の中でも中国がいいというのと、中国は駄目というのと、初期の段階ではいいけど後は駄目というのと、いろいろ分かれてきて、ややこしい。

日本の新左翼の運動を担っている人たちは別に党派の人間でなくても、ソ連万歳なんて人はいなかったのね。

プントは、例えば革共同とどうちがう

かも高度成長でみんな豊かになっているわけ。何でもかんでもゲバ棒持つて行くんだというところ、ベトナム反戦とか各地の民族解放運動が起こっていて、これは座視できないというのと同時に、それに荷担して搾取する側にあるのは帝国主義なんだ。日本は直接自衛隊とか行っているわけじゃないんだけど、結局みんな手を結んでいるわけじゃないか、安保、NATOを含めて帝国主義の恐怖の同盟だ。一方では労働者国家と冷戦状態であるながら、下の方では民族解放運動がどんどん巻き起こってくる。帝国主義はこれは大変だ。支えている帝国主義の経済構造が、根本的に危機に瀕していった。その時に帝国主義は牙をむきだして人民に力をかけてくるんだ。だから自分たちはそういう帝国主義を打倒するために一歩先駆けてしかもそういう民族解放運動と連帯の意志を表明するために自分たちの権力を武装して立ち向かっていこう、そういう激しい情熱の表れだったと

(笑)

T..そんなとき、ゲバラは「第二、第三のベトナムを」と呼びかけるんです。そ

れば、ベトナムという戦場にただ支援物資を送るというのではなく、自分の国もその前線にしようという、そういう呼びかけだったんです。しかもその時ゲバラは戦死しているんで、やはりその意志を継ぎたいという人もいたんですよ。

F..当時の日本国家はファシズム国家ではないわけです。一応言論における自由もあるし、豊かな生活もあるし、情報もあるし。ところが先行したファシズムが来ているんだという危機感があつて、例えば学生運動に対して凶器準備集合罪とか、いろんな騒乱罪とか破防法とか、破防法はまだ個人適用だったんだけど、そういつた突出した運動に対して権力は牙をむいて予防弾圧というか、先行して、まだファシズムではないけどファシズムのさがげのなやり方を自分たちのところに振り落としてきてるんだと。これはぶち破らなくはいかん、それは武力でぶち破りましようという話だったんだけど、どうもゲバ棒だけだと機動隊にやられちゃう。

A..ゲバ棒ってただの角材？

F..ただの角材。武器は火炎瓶くらいま

でエスカレートしていった。街路を包丁でガリガリついたりして投石の石をつくったり。だけど、機動隊にやられる。

東大の安田講堂とかみんな立てこもるんだけど、みんな陥落しちゃってこのままではヤバイと。どうやってこの局面を開るかというときに、もつと武装しなくちゃいけないというのと、でも多数派はもう一度ちゃんと労働運動とか学生運動とか基盤をきちんと建て直さなくちゃ負けちゃうよと考えた。これに対して、でも武装さえすれば負けないうと考えたのが、赤軍派。

A..武装というのはもつと重装備ということ？

F..そう、爆弾と重火器。赤軍派は革命の前段階蜂起ということをいった。いきなり革命はできないからまず少数でいいから警視庁とか国会とか銃と爆弾で占拠すれば大衆が必ず立ち上がると。

T..首相官邸を占拠するという計画を立てるんだけど、占拠したあとはどうするののをあまり考えてなかったみたいなんだ(笑)。食糧を何日分持つていくとか。それは一次プリントがやった国会突

入とあまり変わらなかつたという……。

60年代後半で運動を展開していく上で何か克服しなくちゃというところで、かなり戦略的にプリントを割っちゃった。ところが前段階蜂起という発想があるから、割っちゃっていきなり自分たちの方から積極的に戦争しよう。で、69年に東京戦争、大阪戦争というようなものを始めるのね。

A..戦争！

F..戦争といっても警察署にちよつと火炎瓶を仕掛けたりとかそのくらいなんだけど。

T..前段階蜂起をしようということ、首相官邸を占拠しよう、それで訓練をするんだけど、それで一網打尽になっちゃうわけ。

A..大菩薩峠事件？

F..そうそう、ただ尾行されていてバレたつたという大ドジなだけで、これで大量にメンバーが逮捕されちゃう。

T..で、その後に国際根拠地論というのが出てくる。それに対する評価というのはいろいろあるけど、うまく整理できないけどすでに革命に成功した国家とか、

革命やつてる紛争地なんかについて自分で自分たちが訓練して、日本に戻つてこよう。現地ですごい人々と連携関係を作つて、それで強行した世界で革命をするための統一戦線を作ろうということ。アメリカに渡つてブラックパンサーと交流して初めは日米同時蜂起しようとしたらしいんだけど、それで連携とか連絡をしようこともなくて、結局一部の人たちは北朝鮮に飛ぶんだよね。これがよど号ハイジャック事件。

A..北朝鮮はその時は？

T..金日成の体制。

F..どうも行き先を間違つたというのがおおむねの見方だけ。

T..キューバは遠いし、中国だと毛沢東はオルグできないだろうと(笑)。

A..それで北朝鮮。でも秘密裡にじゃなく、ハイジャックして大々的にやつたのはどうして？

T..パレスチナの解放闘争の中でハイジャックという戦術が採られ始めていた。だからラテンアメリカとか、相手の国の飛行機を乗っ取つて要求をしたりすると

というのが戦術としてあつて、それを真似たというか取り入れたみたいなものね。で多分まずぐ行かしてくれないだろうし、それでこういう戦術をとつた。それで北に行ったグループの他にレバノンに行ったグループがいて。それが後の日本赤軍。それから国内に残つたグループが連合赤軍になつて、それで壊滅しちゃう。

F..わざわざ北朝鮮まで行つたというのは大いに疑問に思うところでしょう。ほとんどミイラ取りがミイラになるみたいな。

A..見込みがあつたということですか？

F..今から考えれば北朝鮮なんてとてつもない独裁国家で、極限的スターリニズムみたいな、自分たちが最も否定していたような変質した社会主義国家にしか過ぎなかつたんだけど、あいにくあの時は、後進国というか、ソ連のようなあるいは完成された社会主義国家とは違うし日本と韓国、アメリカという三角形の安保という構造の中で北朝鮮というのはある意味敵視されていたんだね、今でもそうだけど、国交がなくて敵対体制だったということ、そういう意味で可能性が

いろいろあるだろうと。何となく表向きはソ連的なものとは違つて後進国だけど自主独立の国家を建設している途上にあるという意味で可能性があると見解だつたんじゃないのかな。

A..国際根拠地論というのはその土地でその人たちと一緒にその国を革命するんですか？

T..いや、ある程度革命ができている場所とか紛争しているところに寄せてもらうというか。

F..客として学ばせてもらつて、こちら側も向こうをオルグつて、一緒に共闘関係をつくりましよう。北朝鮮の場合は完全に失敗したんだけど。

A..パレスチナへ行つたのはなぜ？

T..ユダヤ人問題というか、ナチスのホロコーストとか知ってるよね。

A..はい。

T..ヨーロッパで離散させられ、抑圧され、虐殺までされたユダヤ人にとつて国家の建設は悲願だった。だけど彼らが建国の地として選んだエルサレムには、アラブの人たちがすでに住んでいた。

A..追い出しちゃう？



連合赤軍による浅間山荘の攻防

T..そう。だから、アラブとイスラエルには、何度も戦争があった。でもヨーロッパには、左翼もふくめて、ユダヤ人に対しては負い目があるからね。すつきり反イスラエル、パレスチナ支持とは、いかな。つまりパレスチナ問題は、大きくいうと世界史の矛盾が凝縮されたような問題なんだ。だからこそその難民たちと共闘しようと、重信たちは考えた。

F..パレスチナ問題は暫定合意でおさまるかと思っただけ、今、毎日のように新聞に出ているとおり、パレスチナの少年たちが投石して殺されたりしている。

T..北朝鮮とちがってパレスチナの場合にはそういう完成された社会主義国家じゃないわけよ。非常にアナキーな状態で、とりわけPFLPとか、それもふくめたPLOは、ゲリラ共同体みたいなもんだよね。難民キャンプを拠点として。そういう意味でこちらの国際根拠地軍というのはある程度理にかなった選択肢ではあった。だから同じ海外に飛ぶにしても北朝鮮に行くのとパレスチナに飛ぶのと全然違う。その後の運命にね。

それぞれ行った先で理論が解体されち

やうわけですね。北朝鮮に行ったグループは金日成のオルグで解体されちゃうし、パレスチナに行った連中はパレスチナで解体されちゃう。自分たちの理論が通じなくなってくる。それは渾然一体とした地域でいるんな国からここに来ているし、パレスチナ自身が自分たちの家をイスラエル人に追われて来ているわけです。そうするとクルド人もいればトルコ共産党の人たちもいるわけ。ヨーロッパからも連帯軍がいくらでもやってきたし。それからパレスチナを追われた人たちがラテンアメリカに移住で行ったり、そこでもいるんな革命グループの人たちが今度はまた連帯してきたり。

Q..連合赤軍って？

T..パレスチナや北朝鮮でそうやっていけるうちに国内の残った赤軍派が日本共産党の革命左派という別のグループ（これは毛沢東派のグループです）とお互いはげしい武装闘争をやっているという一点で合流する。

A..毛沢東派とのちがいつて？

T..単純に言っちゃって、スターリンの評価というのがあって、ブント系というのはスターリンには反対している、これは社会主義ではないと言っている。それに対して毛沢東派はそうではない。スターリンを絶賛はしないけど、あまり批判は言わないグループです。毛沢東とスターリンは関係は悪いけれど、やっている発想とかがスターリンと似ている発想なので。だからどちらも同じ共産党から割れて出ているんだけど思想的には絶対一緒にならないといわれている二つのグループが一緒になったら、これは悲劇になるしかない。

A..この前、赤軍派はM作戦っていうのをやるって本に出ましたけど、M作戦って？

F..銀行強盗とか郵便局の強盗とか、要するにギャングだよ。MはマネーのM。

A..資金源？

T..それはちゃんと本があった「都市ゲリラ教程」という、マリゲラという人がそういうのを書いて実際にやっているんだね。ラテンアメリカの中では銀行を襲撃してそのお金で武器を買った。一応

ほかの国の経験というのが一方ではあって、で、実体はよど号のときに一回失敗したらしくて、もう一回やって、割るときにもつた予算が全部なくなっちゃったっていう（笑）。終わって出るときにいくつかの委員会が予算を持ってるんだけど、それを大菩薩で使って、飛行機も一回乗り間違えちゃったりしてほとんど無駄遣いするからお金なくなっちゃって。F..もつとも後進国では銀行強盗みたいなのも一種の義賊みたいなところもあるけど、どうも日本では評判が悪いというか、義賊的なことになっていないし、左翼というのはもともと大学の自治会をとっていけば自治会費ってあってそれが収入になっているわけ。あと労働組合もそこでカンパとか組織を支えているんだよね。でも赤軍はほとんど一匹狼集団みたいなになっちゃったから大学の拠点も殆どなくなっちゃうし、労働組合の拠点もなくなっちゃうわけだから、金の集めどころがないわけですよ。合法的に市民集会をやっているけど、何とかなるんだらうけど、もう指名手配されているのばかりだからなかなかそういうのができない。

さてどうするということ、これだこれだという感じで、評判が落ちたわけ。たわけ。その頃、日本共産党(革命左派)がめだつてきた。日本には毛沢東派のグループだっていっぱいあった。穏健なグループも含めて。その中の最過激派のグループが革命左派で、毛沢東派の中の赤軍派みたいなもんだけど、交番を襲撃して逆に射殺されたり、結構過激なゲリラをやったりしていたのが、それで両方が同じ武装蜂起をやるうとしたときにすり寄ったわけ。赤軍派もジリ貧だったから、ふたつ集まれば何とかなと思つてすり寄つたら相手ももつとジリ貧だった(笑)。それが連合赤軍。それじゃあ、と軍事訓練をはじめた。

A..一緒にやって軍事練習しようってなつて、それで?

F..それで山の中、転々として、その過程で総括で『同志』が殺されるというのが最大の悲劇だった。

Q..日本赤軍って?

F..重信たちは連合赤軍なんかの悲劇よ

ので、それに対して彼女たちのグループというのはそれを止めようと言った。これは聞いた話だけど、すごい場合はパレスチナの解放勢力が内ゲバはじめて——向こうは内ゲバといつても銃撃戦なんだから——間に入って白旗出して、両方に行つて手打ちとか負けさせる。例えば他のグループでお金に困っている人がいれば助けてあげるとか、現地でも定期的に前線に入っているとかな。

A..かっこいいですねえ。大英雄って感じ。
T..これを絶対潰さなくちゃと言つたのは日本よりもアメリカだというのね。アメリカが世界中で革命運動を押し込んでくるのに対して、世界中が彼らなりの考えを持ち込んで共闘したりしてのを、集中的に取り締まってる。

A..東アジア反日武装戦線は関係ないの? F..奪還されて日本赤軍メンバーになった人たちもいるから関係ないとはいえない。彼らのどこが今までとちがうかという早い話が赤軍派までは反政府闘争なのね。反日武装戦線は政府に対する爆弾闘争ってやらないのね。最初にやつた

り一歩前に、あるいは北朝鮮に行くような選択もないパレスチナというところでは、ある意味では、他の何やつてんだあいつらというのに比べれば、なかなかやるじゃんという話になるわけ。というのはパレスチナで要するに民衆に支持されるわけ。岡本公三なんかもテルアビブ空港銃撃戦リリッダ闘争なんかで向こうじゃ英雄だからね。同時に同志だった仲間はいざヤックして日本政府に超法規措置で獄中からどんん奪還させて、しかも何百万という金まで貰っちゃうんだから大響盛もんなんだけど、日本の左翼運動が沈んでいるときに、おおいつらでかいことやるといって、ある種のシンパシーをもった迎えられ方というのがあった。それが今の重信の帰還が大ニュースになることにつながる。

T..もし彼女が日本にいて、赤軍派に参加していたら真つ先に肅清されたらどうと言われている。アラブという非常にルーズで自由闊達な文化と、彼女のキャラクターが自由な雰囲気を持つていこと、それが非常にうまく合つていこと。それで日本に対する信頼というの

のはアジアの侵略を讀める石碑とかを爆破したり、74年に天皇の乗った列車を爆破しようとしたり、それが失敗して一連の企業に爆弾をしかけるわけ。これは今の企業の新左翼の活動というのと違うわけ。彼らはまず日本の労働者階級が日本革命の主体であつて、そこから始めるとは考えないで、自分たち自体の武装闘争が第三世界の革命にとって支援にならなくてはならないと考えるわけ。だから反日武装戦線というのは自分たちの名前じゃなくてベトナムや、韓国で、民衆の闘いがあつて、それに自分たちが合流していく、その闘い総体の名前なんだよ。革命は抑圧されたものから解放されていくから、第二ブントみたいに世界同時革命にはならない。日本帝国主義自体が韓国とかの新植民地支配によつて成り立っていて、

韓国への間接的な搾取が日本の経済を支える生命線というなら、その線を切っちゃえば日本は壊れていくだろうということになる。韓国とかマレーシアとか企業の支援というのを内側から切っていく。それが極端になつてくると反日亡国論というところでもないアナーキーなことをい

がものすごく強くなつていたと思う。
A..仲間を奪還したというのは誰を奪還したんですか?

F..連合赤軍で捕まっていたメンバーや企業爆破事件を起こした東アジア反日武装戦線のメンバー、かつての赤軍派ですね。

T..あとは一般の刑事犯と言われている人でも獄中での待遇がおかしいということに対して起ちあがった人、あとは向こうの現地で他の国の警察に捕まった仲間を奪還したり。

F..だから世界を震撼させたというか、国家を手玉に取つたというかそこまで行つたんだよね。

T..革命グループがあつた場所に来ていて、一緒に訓練して、中には革命に成功して一國の大臣になつたりとか、そこで連携して逆に、国際連帯が生まれたりとか、それでヨーロッパやアジアでも動けるようになった。そこに行けばその人たちがいろいろ協力してくれるというふうな関係もあつたらしい。どの国でもお互いに内ゲバというのはよくやるんですけど、それが意図的にやられることが多い

う人もいるんだけど。国際的な視点での合流とか、共闘とウエイトがかかっている点では、日本赤軍に似てることもないことはない。

でも反日武装戦線って全共闘の影響も大きいと思うんだ。それまでのブントでも赤軍でもターゲットは政府なんだよね。国会であつたり首相官邸であつたり霞ヶ関であつたり、自衛隊であつたり。国家機関をどうにかしようとして、そこに何かをぶつけていくというのがあつたけど、あまり本気で大学解体とか本気で思つてなくて、大学って出撃基地として有効で資金源でもあるし人もブルでできるけど、全共闘運動で先鋭化した話はやはり大学解体、特権者たる学生や研究者を内側から告発していく、それは反日武装戦線の発想でしょう?

A..だいたい赤軍ガイドとしてはこんなところですけど、わかりました?

A..はあ、なんとなくわかりました。

F..で、Aさんなら、その当時、赤軍派に入つたと思う?

A..反日武装戦線……かな。

T..えーっ(笑)。(二〇〇〇年一月二七日)

60年安保

70年安保

72年沖縄返還

91年湾岸戦争

赤軍
map

「警鐘」→ 日本共産党(革命左派)
連続基地爆破
交番襲撃

毛沢東
主義

京大
パルチザン

黒ヘル
グループ

ML
派

連合赤軍
71.7.15 結成

赤軍派(プロ革)
赤軍派日本委員会
赤軍派(ML)
なびに分解

アラブ赤軍
日本赤軍



東アジア反武装戦線

74.8 天皇列車爆破未遂
三菱重工爆破

75.5 一斉逮捕
着藤和自殺

同志志殺し



72.2

浅間山荘

73.1.1

森恒夫自殺

93.2.19

永田洋子
坂口弘
死刑確定

坂東国男 出国

72.5.30

リツダ空港銃撃戦

75.8.4

クアラルンプール闘争

77.9.28

ダッカハイジャック

87.12

丸岡修ら逮捕

2000年春

足立正生ら日本へ送還

オオンの
三ツ星になる

佐々木規夫 出国

大道寺あや子
浴田由紀子 出国

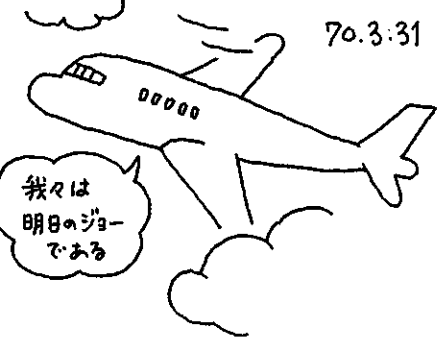
87.3.24
大道寺得司
益永利明
死刑確定

大菩薩峠

赤軍派
69.8.8 結成

よど号ハイジャック

70.3.31



我々は
明日のジョー
である

マル戦派

戦旗派

叛旗派

情況派

蜂起派

RG

神奈川
左派

中核派

革マル派

第一次ブント

第二次ブント

革共同

声明文で読む赤軍

——一九六九→一九七九

一九六九年、第二ブントは東大闘争、沖縄闘争等の総括と秋の方針をめぐって論争が激化、そのさなか七月六日、最左派である赤軍派フラクは、ブントの会議を粉砕し、当時の議長仏徳二を拉致、その後、同志社大で赤軍派を結成。八・八結成総会をひらく。そして九月、戦争宣言を発表した。

共産主義者同盟赤軍派結成総会報告 (一九六九年八月)

序

全世界に日本の全てのプロレタリア人民、兄弟、同志諸君！ 共産主義者同盟の旗の下、過去、共に闘い抜き全ゆる苦闘と辛酸を共に分かちあつて来た同盟シン

パサイザー、並びにキム、同盟同志諸君！ 我々は諸君の一切の革命的過去を代表すべくその革命的な遺産を受け継ぎ、全てのその革命的な未来を代表すべく決意し、今ここに共産主義者同盟赤軍派を結成することを宣言する。

過渡期世界に在つて歴史の客体から主体へと成熟、到達しつつある世界武装プロレタリアートの過去、現在、未来の全ての総体が、今秋の世界階級闘争の大転換と一大攻防に煮つまり、その運命を託せんとしている。この時、同盟がこの世界武装プロレタリアートの最高統帥司令部として自らを任務し、鍛えあげること、を絶対的任務として要請されている。こ

の世界武装プロレタリアートの世界史的根底的矛盾の累積——爆発はかつてこの国際共産主義運動もが挫折し、創造的実践的に切り拓けなかつた地平として、①過渡期世界の世界的認識を基礎に、②(イ) 世界同時革命、(ロ) 世界革命戦争、(ハ) 世界党——世界赤軍——世界革命戦線(世界革命戦線、世界(二国)協議会)として世界革命の在り方、形態、世界武装プロレタリアートの団結様式をもつて、③世界に日本、前段階峰起——世界革命戦争として闘い、同時にその一国内性と世界性の矛盾を、軍事と政治の矛盾を後者において止揚する世界革命党へと自らを止揚することと一体に闘われての

み唯一展開されるのである。(以下略)

戦争宣言——共産主義者同盟赤軍派 軍事革命委員会(一九六九年九月三日)

*戦争宣言

ブルジョア諸君！

我々は君達を世界中で革命戦争の場に叩き込んで一掃するため、ここに公然と宣戦を布告するものである。

ブルジョア諸君！

君達がたとえ米軍、NATO軍、安保軍、ベトナム連合軍等々全世界の警察を総動員しようとも、君達が骨抜きにし変質させたソ連——ワルシャワ軍までも動員したとしても、我々は全世界のプロレタリア人民の力を世界党——世界赤軍——世界革命戦線の下に結集し必ずや叩きのめしてしまふことを通告する。

君達の歴史的罪状は、もうわかりすぎているのだ。君達の歴史は血塗られた歴史である。第一次大戦、第二次大戦、君達同士の間での世界的強盗戦争のために、我々の仲間をだまして動員し、互いに殺し合わせ、あげくの果ては、がっぽりともうけているのだ。

君達は植民地を略奪するために我々の仲間を殺した。仲間をそのかし、植民地を略奪したらそのわけまえをやると言つて、後進国の仲間を、君達がそのかした仲間をつかつて殺させたのだ。それだけではない。そうやって略奪した植民地を君達同士で奪い合う強盗戦争にも、同じように仲間をそのかし殺し合わせたのだ。

我が日本ブルジョア諸君！ 君達にも嘘とは言わせない。「富国強兵」のスローガンのもと、日清、日露、第一次、第二次の強盗戦争をやつて来たではないか。

我々はもう、そのかさされ、だまされはしない。否、そのかさされ、だまされないだけではない。我々は過去のうらみを持つて君達をのろつと共に、またまた君達のやろうとするのろつに対して、今度は我々の側には用意がある。

君達にベトナムの仲間を好き勝手に殺す権利があるのなら、我々にも君達を好き勝手に殺す権利がある。

君達にブラック・パンサーの同志を殺害しゲッターを戦車で押しつぶす権利が

あるのなら、我々にも、ニクソン、佐藤、キーシンガー、ドゴールを殺し、ペンタゴン、防衛庁、警視庁、君達の家々を爆弾で爆破する権利がある。

君達に、沖縄の同志を銃剣で突き刺す権利があるのなら、我々にも君達を銃剣で突き刺す権利がある。

君達が朝鮮で再び戦争をやるために、自衛隊を増し、フォーカス・レチナや、三矢作戦をやり、朴独裁三選のため、それに反対する任君を逮捕し、死刑にする権利があるのなら、我々にも赤軍を建軍し、革命戦線を作り、君達を逮捕し、死刑にする権利がある。

アメリカのブルジョア諸君！

君達は第二次大戦後、朝鮮で、コンゴで、ベトナムで、不断に仲間を殺し続けられて来た。

日本のブルジョア諸君！

君達は、自衛隊、機動隊を増やし、今ベトナムに協力し、朝鮮に将来派兵しようとしている。

西独のブルジョア諸君！

国防軍を強化しフランスを牽制し、チエコや東欧や中近東に目を光らせて何を

しようというのだ。

ブルジョア諸君！

いつまでも君達の思い通りになると思っていたら大まちがいだ。我々は過去、封建領主のもとでは家畜のように領土のおりの中に縛りつけられた農奴だった。君達は、この身分の枠を破り、我々を君達の自由にするために、「自由、平等、博愛」のスローガンの下、領主たちと闘った。だが今や、我々は君達の好き勝手にされることを公然ときっぱりと拒否することを宣言する。君達の時代は終わりのだ。我々は地球上から階級戦争をなくすための最後の戦争のために、即ち世界革命戦争の勝利のために、君達をこの世から抹殺するために、最後まで闘い抜く。

我々は、自衛隊、機動隊、米軍諸君に、公然と銃をむける。君達は殺されるのがいやなら、その銃を後ろに向けたまえ！君達をそそのかし、後ろであやつっているブルジョアジーに向けて。

我々、世界プロレタリアートの解放の事業を邪魔するやつは、だれでも、ようしやなく革命戦争の真ただ中で抹殺するだろう。

万国のプロレタリア団結せよ！
世界革命戦争宣言をここに発する。(略)

一九六九年、九月の大坂戦争・京都戦争の後、大菩薩峠での軍事訓練へ向かった赤軍派の部隊五三名は、十一月五日、逮捕される。この打撃から回復すべく、田宮高麗らは、国際根拠地路線のもと、日航機よど号をハイジャック。北朝鮮へむかった。

出発宣言 (一九七〇年三月三〇日)

田宮高麗

(5) 我々の、今度のハイジャックが、その党の武装―世界党建設の一環であり、第一歩である。

だが、党の武装―党建設は指導者なくしてはありえない。我々の偉大な同志でもあり、指導者である塩見議長は、三月中旬に敵権力によって捕われた。我々は、彼の奪還を党のための闘争の中心に据えねばならない。

六〇年安保から六〇年代の日本階級闘争の歴史は、ブンドの歴史であつたと言つても過言ではない。そして、ブンド統

一六回大会から、ブンド七回大会―八回大会の実質的牽引者は、我々の議長である塩見同志であつたことは他言をはさまない。塩見同志がブンド七回大会を前に、唯物史観の領域の中で過渡期世界論を明らかにし、客観主義、主観主義を克服した主客の弁証法をもって、現代世界を把握し直した。そして、その戦略―戦術を、六八年八月三日国際集會を前に、世界革命戦争―世界党―世界赤軍として全人民の前に提起した。ブンドの党内闘争から、我々赤軍派の生成におけるその揺ぎない指導的地位と、果たした役割は既に諸同志が深く確信していることである。彼こそ、日本階級闘争が生み出した最大の指導者であろう。

我々は、この偉大な人材を失つてはならない。

我々は、あらゆる犠牲を払つても、この偉大な同志を、敵権力から奪い返さねばならない。

彼だけではない。彼の他、四名の政治局員も、我々の偉大な指導者であり、党の支柱であつたことは誰も疑いを入れない。

又、「大菩薩」を頂点として、逮捕―拘留されている全ての諸同志についてもそうである。

彼らのその献身性、革命性、英雄性は、かつて史上比類のないものである。

彼ら、全て、一騎当千の強者である。

彼ら全てが我々の戦線に復帰したとき、どれだけ巨大な力が発揮されるであろうか。

我々は、断乎として彼らの奪還闘争を貫徹しなければならない。

我々は、あくまでこのことを、日本の諸同志に要請する。

(6)

我々の、世界党建設は、何も伝道教師的に世界を歩きまわつて「過渡期世界論」を説教していこうとするものではない。各国における諸同志が、とりわけ日本の諸同志が、秋、前段階武装蜂起を貫徹することをもち、世界革命戦争の防禦から対峙関係を主体的に切り拓くことを、その任務としなければならない。我々は、そのことに結合することによつてのみ、生きた世界党建設をなし得るのである。

今、日本における諸党派は、秋、安保

決戦の限界を理解しえないままに、戦略的後退―七二年危機待望へとその路線を右傾化させている。だが、行き詰つている壁は、世界党―世界赤軍(蜂起の軍)建設をもつて攻撃的に展開、突破されねばならない。

世界的闘いの波を今見る時、ヴェトナム、ラオス、カンボジアにおいて、中近東において、全て拡大、前進への道を歩んでいる。その永続性が保証されているのは、正規軍が維持され、組織されているからに他ならない。中南米の都市ゲリラも、これまでとは全く違った地点から開始されている。指導部の奪還、ハイジャックへと、世界革命戦争を闘える主体の建設からである……。

七〇年安保以降を想定し、又、量的拡大から次への危機へとというのは待機主義であり誤りである。

世界革命戦争への時期は、増々成熟しているのであり、後退しているかのようには思えるのは、世界党―世界赤軍(蜂起の軍隊)建設こそが過渡期世界における世界革命戦争の眼であることが理解しえない古ぼけた頭にはそう思えるのであり、

プロレタリア人民の闘いに、レーニン主義の教条にとどまることによつて、遅れをとつている人々にはそう思えるのである。後退しているのは、主観的にはプロレタリア、人民を領導しようと思つている諸党派であり、世界武装プロレタリアートよりも大きく後退しているのである。(略)

(9)

我々は明日、羽田を発たんとして。我々は、かつて如何なる闘争の前にも、これほどまでに自信と勇氣と確信が、内から湧き上つてきたことを知らない。

我々は、この歴史的任務を遂行しうることを誇りに思う。

我々は、日本の諸同志に、心から感謝する。この歴史的任務を我々に与えてくれたことを。

我々は、我々に与えられたこの歴史的任務を、最後まで貫徹するだろう。

日本の同志諸君！ プロレタリア人民諸君！

全ての政治犯を奪還せよ！ 前段階武装蜂起を貫徹せよ！ 世界革命戦争万歳！

共産主義者同盟赤軍派万歳！

そして、最後に確認しよう。

我々は「明日のジョー」である。

一九七〇年三月三〇日午後十時三〇分

大菩薩峠での大量弾圧、指導部の逮捕などによる組織力の低下から脱すべく、獄外の赤軍派は峰起路線から遊撃戦線へ転換、銀行襲撃戦などを実行。一方、「反米愛国」をかかげ、「人民遊撃戦」をつたって一連の過激な闘いで注目されていた日本共産党（革命左派）は、栃木・真岡で銃を奪取、急接近した両者は、七一年七月、双方の軍事組織を統合、連合赤軍を結成する。

統一された「赤軍」(共産主義者同盟「赤軍派」中央軍、日本共産党(革命左派)人民革命軍)の下に結集し、徹底的に遊撃戦を闘い、日本革命戦争の大飛躍を！

(一九七一年七月一日)

「赤軍」総司令部

全国のプロレタリア兄弟諸君！
先進的學生、知識人諸君！

一九七一年七月一日、共産主義者同盟赤軍派中央委員会、並に日本共産党(革命左派) 神奈川県常任委員会、各々の中央軍、人民革命軍の組織合同を決定した。

この決定は、六〇年代日本階級闘争の革命的伝統を継承、飛躍させた画期的地平にかちとられた。この画期的地平とは、六〇年代後半の、日本プロレタリア人民の偉大な国際主義的暴力闘争の昂揚と、それを担った大衆的軍団、行動隊を、「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」プロレタリア人民の軍隊に発展させた、「プロレタリア革命の魂」の復活ともいべき地平であった。共産同赤軍派、日本共産党(革命左派)の「党の軍隊」として建設された中央軍、人民革命軍は、この画期的地平を自ら切り開き、歴史的な「武装」と「遊撃戦」を確立した。

大阪・東京戦争——大菩薩闘争——
米軍基地連続爆破闘争——H・J闘争、

こそ、日本階級闘争に於ける「プロレタリアートの武装した国際主義」の歴史的復権、革命戦争の大胆な登場をもたらしたのである。

十二・一八下赤塚交番襲撃闘争——日本プロレタリア人民と、世界プロレタリア人民を固く結びつけた「浣号」H・J闘争後の、敵権力の気狂じみた弾圧をはねのけて貫徹された、この英雄的闘争は、中央軍——人民革命軍を「革命戦争——遊撃戦」の一本の赤い糸で固く結びつけた。ここにはじめて、「プロレタリア革命の利益」革命戦争の利益の為に、日本プロレタリア人民の利益の為に闘う「盟友」、新しい「革命的団結」がかちとられた。

産声を上げた「遊撃戦——革命戦争」の赤い炎を守り発展させる勇氣と確信をもって、二・一七銃奪取、二〇三月連続資金奪取闘争への前進が続けられた。それは、アジア武装人民の米帝国主義侵略軍、カイライ政府軍に対する大勝利と共に前進したのであり、アメリカ帝国主義の後退——戦略転換——日本帝国主義の進出、という新たな攻防関係の煮つまり

統一された「赤軍」(日本共産党(革命左派)人民革命軍)の下に結集し、徹底的に遊撃戦を闘い、日本革命戦争の大飛躍を！

「赤軍」総司令部

全国のプロレタリア兄弟諸君！

先進的學生、知識人諸君！

一九七一年七月一日、共産主義者同盟赤軍派中央委員会、並に日本共産党(革命左派) 神奈川県常任委員会、各々の中央軍、人民革命軍の組織合同を決定した。この決定は、六〇年代後半の、日本プロレタリア人民の偉大な国際主義的暴力闘争の昂揚と、それを担った大衆的軍団、行動隊を、「人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない」プロレタリア人民の軍隊に発展させた、「プロレタリア革命の魂」の復活ともいべき地平であった。共産同赤軍派、日本共産党(革命左派)の「党の軍隊」として建設された中央軍、人民革命軍は、この画期的地平を自ら切り開き、歴史的な「武装」と「遊撃戦」を確立した。

十二・一八下赤塚交番襲撃闘争——日本プロレタリア人民と、世界プロレタリア人民を固く結びつけた「浣号」H・J闘争後の、敵権力の気狂じみた弾圧をはねのけて貫徹された、この英雄的闘争は、中央軍——人民革命軍を「革命戦争——遊撃戦」の一本の赤い糸で固く結びつけた。ここにはじめて、「プロレタリア革命の利益」革命戦争の利益の為に、日本プロレタリア人民の利益の為に闘う「盟友」、新しい「革命的団結」がかちとられた。

連合赤軍の結成を伝えるピラ

の中で、帝国主義ブルジョアジーに対する「台風の目」であった。日本帝国主義権力は、この赤い炎を全力で絶滅せんとし、プロレタリア大衆はさまざま形態でこの火を押し包み、その下に結集していった。六・一七機動隊殲滅戦、七・一〇三里塚マイト闘争といまや革命戦争は日本プロレタリア人民の中にはつきり定着しようとしている。中央軍——人民革命軍の統一、この壮挙は、これら血と勇気によって色どられた闘いの歴史的総括であり、新しい出発である。

統一された革命軍は、プロレタリア世界革命の革命的伝統を打ち樹てたロシア赤軍、中国赤軍にならい、その名称を「赤軍」とする事に決定された。「赤軍」は、世界各地で闘うプロレタリア兄弟の革命戦争とその利益を全く同じくし、プロレタリア世界革命戦争の一翼を担う。米帝国主義をはじめとし、日本帝国主義、西独帝国主義を支柱とする世界帝国主義ブルジョアジーの国際反革命戦争を絶滅し、全世界プロレタリア人民の眞の解放——世界プロレタリア独裁、世界共産主義建設——をかちとる事、これが「赤軍」

ずがないではありませんか。

われわれは隊伍を整えた。全軍は九一人と七二丁の銃を余すのみとなった。

「多くの者が失われたが、残ったものは精鋭中の精鋭であり、自覚を持ち、立場をわきままえ、どのような困苦と欠乏にも耐えうる戦士、すなわち、もはやわがちがたき「革命の志」に結ばれた一心同体の仲間のみであった」

——中国革命に関するこの文章を、無念の思いで何度思い出したことでしょうか。

「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間であり、仲間でない隊伍がうまくゆくはずがないではありませんか」

私たちの革命に向かう軍建設——軍の共産主義化が、敵権力との直接的な緊張関係を通してではなく、味方内部のルール、軍規という形で、しか創造しえないとしたら、明らかにそれは、プロレタリアートの自由を抑制する道具になりさがつてしまいうに違いないのです。

一握りの悪しき独裁、革命の私物化に断固としたたたかいを開始したのは、あの日本共産党との歴史的決別で証してき

た私たち自身だったことを、いま、もう一度検証することを始めなければなりません。

赤軍派の六九年のあの苦闘の誕生の戦略論を発展させることを、もう一度始めなければなりません。軽井沢の銃撃戦争によって開始された高度な実践が、共産主義軍隊の普遍性を提出していない限り、銃撃戦争の日常性をつくりあげられないばかりか、切りひらかれたたかひを摘み取ってしまう側に、敵権力はかりでなく、たたかひの友人たちであるべき人々をも追いやってしまいうに違いないのです。

たとえば、牟田さんの最初の言葉が、警察の手によって塗り替えられたばかりでなく、「人質救出」直後の毎日新聞によれば、長野県警「家族対策班」の警部は「お願いだから、憎めない」とか「悪い人ではない」とかいう言葉は慎んでください。あなたがそう思っている、私らが何のために血を流したのかからならい」

という恫喝に似た説得を繰り返してきことは、歴然とした事実です。仲間を十数人も殺した人が自分をよく殺さなか

つたものだという逆の恐怖が、牟田さんまたは無数の牟田さんをごんごん追いつめていくこともまた、事実なのです。

もつとも革命的で、もつともわれわれの友人であった人々ほど、失望と憎悪が強いことを知っていますか。連合赤軍の同志諸君、パレスチナのたたかう友人たちが、悲しみと抗議をこめて「敵はだれか！ 友だちはだれか！」と問うていることを告げなければなりません。（略）

七一年、レバノンへ渡っていた赤軍派アラブ支部は、連合赤軍事件を機に、国内赤軍派と訣別、アラブ赤軍（後に日本赤軍と名を）として歩みはじめる。その存在を世界に知らしめたのが、リッダ闘争だった。

一九七二年五月、テルアビブ・リッダ空港で三人の赤軍兵士が銃撃戦を戦い、うち奥平剛士、安田安之が戦死。一人残った岡本公三はイスラエル当局に逮捕、イスラエル国防軍の捕虜となる。後に、イスラエルとの捕虜交換でパレスチナ・ゲリラにまじって釈放される。一九七七年、レバノン当局に他の赤軍メンバーとともに逮捕されるが、二〇〇〇年、岡本公三だけがレバノンへの政治亡命を許さ

通信

倉中進備号

〒102-8112 東京都千代田区千代田1-2-78-1
電話先 (802)0648 向新社

日本共産党中央書記局 赤軍派同盟者

連合赤軍事件後の赤軍派機関誌のひとつ

れる。

赤軍からの宣言（リッダ闘争の声明
一九七二年五月三〇日）

赤軍

一、われわれ赤軍は、PFLP（パレス

チナ解放人民戦線）の同志とともに、共通の敵に対して成功裏に行われた攻撃的闘争のニュースを享受できて幸福である。われわれはこの作戦を誇りとする完全な権利を持つ。

一、敵は、全世界にいつわりの情報をまき散らし、わが革命的攻撃の衝撃をけんめいに低めようと努めている。彼らがいかに、（ヒューマニズム）の名に於いて自己を正当化しようとしても、われわれは彼らが一九五六年一〇月二〇日、パレスチナのカフル・カシム村で何をしたかを思い出すだけである。彼らが（ヒューマニズム）について叫べば叫ぶほどわれわれ戦う人民は自らの長い虐げられた歴史を、ますます鮮明に思い出す。

一、虐げられた者の語ることは、銃以外になく、虐げられた者が心に抱くヒューマニズムは、武装闘争以外にない。ベトナム、パレスチナの同志たちが、帝国主義者の世界分割によって作られた国境を突き破って日夜任務を果たしているのと同じ方法でわれわれも戦い続け、闘争を強化する。

一、真の団結は、先進国ならびに第三世

界の人民の共同武装闘争を通じて、また共通の敵を打倒する過程を通じてのみ達成される。

一、三人のゲリラ戦士は、具体的かつ効果的な実行と、犠牲の上に立つ、われわれの革命に永遠の火をともしすために、喜々として攻撃におもむいた。われわれもやる。全世界にわたる彼らと同質の闘争を拡大しよう。

一、パレスチナの虐げられた友よ、この闘争は、日本帝国主義者の黒い血にまみれた手で育った日本人民が武器を置くことなくあなた方に手をさしのべ、抱擁し、歩き続けていることを証明した。それをわれわれは誇りに思う。

一、われわれは宣言する。「われわれはパレスチナの友人ならびにPFLPの同志と手を取り、世界の全ての敵を打倒するまで前進する用意がある」ことを。

一、勝利の日まで、日本に住む朝鮮、中国人民に、さらに日本の中の第三世界を強制された沖縄人民と共通の敵の打倒において、われわれと共にある全世界の友よ、われわれは互いに会ふことはないけれども灯をともしプロレタリア国際主義

があらゆる戦線ならびに戦場を統一し、ひとつの敵をたたきつぶすことを、確信をもって告げる。世界革命までともに歩もう。

一、日本の同志よ、友よ。愛する三人の同志の闘争を前進させ、既成の国境を打ち砕き虐げられた者の心はひとつであることを胸にしつつ、より大胆に進もう。一、三人の同志の最後の言葉は次のようであった。「われわれは絶対に失敗しない。歴史の中の無名戦士としてどこでも死ぬ用意がある。いざ友よ、家族よ、葬式をせすにお祝いをせよ！」

一九七三年七月二〇日、日本赤軍と被占領地域の息子達「SOLO」、日航404便をハイジャック。二四日リビア・ベンガル空港で機体爆破。

パリ共同声明（一九七三年八月二〇日） 日本・SOLO

6 ハイジャック作戦は日本帝国主義の虚偽と我々の闘争を歪曲しようとして来

た彼らの策略をあばくものであった。この作戦はパレスチナ革命と帝国主義の胎内に於ける日本人民の闘争との団結を強調したものである。

日本帝国主義は、世界の人民に対し様々な馬鹿げた嘘を並べる事によってこの真実を蔽い隠そうとしている。これは、シオニストや世界帝国主義によって支配されているアラブ人民やアジア人民を彼らも又抑圧していることを示しているのである。

彼らはシオニストにこの作戦に敵対する手助けを頼み、東京—イスラエル間に電話のホットラインを開設し、ハイジャックに関する情報が入り次第イスラエルからアドバイスを送ってもらうようにした。日本に於ては、イスラエル軍将校と日航の会長であり佐藤前首相の知的指導者の一人であった小林の指揮の下にハイジャックに対峙する本部を設置し、更にはこの本部は乗客の生命を救うためのものであるかの如く人々に信じ込ませようとした。

次の事実は、帝国主義者が乗客の生命を無視し、我々の要求を受け入れずに長

時間に渡って乗客とハイジャッカーを苦しめ続けた事を明白に示している。それは、帝国主義者が乗客が殺されるといふ事すら意に介さなかつた事を示すものである。

我々の日航に対する要求書は、日本時間、七月二一日土曜日午前九時三〇分に東京の日航事務所手渡された。その後我々は日航事務所へ電話をし、要求書を開封して指示通り行動するように申し入れた。約五分後に五台のバトカーが事務所へ急行した。これが事実である。

帝国主義者とシオニストの計画は、時間切れになるところまで要求を拒否する意向を明らかにせずに要求を看過することにあつた。彼らはそのことを、乗客の安全を守る為にと称してドバイに人を派遣する事によって隠蔽しようとした。そして彼らは、七月二三日正午に脅迫状を郵便で受け取つた嘘を発表したのである。

彼らはこのようにして乗客とハイジャッカーを故意に危険にさらし、同時に自らの真実の立場を隠蔽しようとしたのである。(略)

7 誰が本当のヒューマニストなのか。

我々のコマンドは何をし、乗客の生命を守る為にどれだけの努力を払つたか。

a 我々の戦士の一人は飛行中、手榴弾の暴発という事故の際、完全に革命的な自己犠牲の精神の下自らの体で手榴弾を蔽い、生命をかけて乗客の生命を救つた。

b 残りの戦士達も、乗客の生命を守り、強固な意志と革命的モラルの下で闘争を貫徹した。

c 戦士達は乗客と乗務員の安全を確認した上で飛行機を爆破し、任務を堅実に履行した。彼らは飛行機が爆発する直前、最後迄機内に残っていたのである。

全てのこれらの事実により、誰が乗客の生命を救い、誰がドバイにいる間乗客を苦しめ安全を顧みなかつたかは明白である。

我々はこの軍事作戦が成功裏に終わったことと、日本帝国主義とその協力者であるファシスト・シオニズム、世界帝国主義に対する報復としてジャンボジェット機を粉砕する正当な権利を高く宣言する事が出来る。(略)



安田安之と奥平剛士（「序章」9号より）

9 結論として全世界の革命派と連合した連続的な闘争を通し、我々は日本帝國主義とそのデマゴギー又、彼らと世界帝國主義・世界シオニズムとの結合、アジア・アフリカ・中近東に於ける共同の経済侵略を暴露して行く。我々は我々自身の力と資質に依つて闘う。

我々は、帝國主義者とシオニストとの平和共存の構図の下に人民の闘争を解決する事を拒否するものである。我々は我々自身の闘争によつて革命を完遂する為に精根を傾け、世界の抑圧された人民の権利を奪い返し、全ての反動勢力と帝國主義やシオニストを黙許し革命を制禦しようとする者達に立ち向かつているパレスチナ革命の成功を勝ち取る迄闘い続けるだろう。

全世界の革命的友人諸君！ ハイジャック作戦の本質に対する様々な懸念や質問に対して明確な解答を行う事は我々の任務である。もちろんシオニストや帝國主義者の権勢の下にある敵の報道機関が作戦中に配布した我々の最初のコミニケと機上からのコミニケを無視した事は我々も知っている。

闘うアラブ——パレスチナ人民！
我々はあなた方の闘争とその決意が後退しないように呼びかけた。そしてリビアの兄弟たちにも、我々の同志である戦士たちを共通の敵に対して闘っていく共通の目的をもつた革命派として遇してもらう事を願うものである。

日本——アメリカ——イスラエルの革命的関係を打倒せよ！
全世界の抑圧された人民の連帯万歳！
パレスチナ革命万歳！
ヨーロッパ革命万歳！
日本革命万歳！
世界革命万歳！

被占領地の息子たち
日本赤軍

一九七四年一月三十一日、日本赤軍はシンガポールのシェル石油製油所爆破。二月六日、その支援のためにアラブ・ゲリラがクウェート日本大使館を占拠し、日本大使ら十六人を人質にして、製油所襲撃の赤軍メンバー四人を日航特別機でクウェート空港まで輸送させた。

る。四人はアラブ・ゲリラに合流し、南イエメンに着陸。

赤軍宣言（一・三一）シンガポール・クウェート連続闘争宣言 一九七四年一月三十一日
アラブ赤軍

（略）この情況下における一・三一シ
ンガポール石油基地襲撃闘争、更には、
この闘争を契機として連続されたクウェ
ート日本大使館制圧闘争の意義は、次の
様に確認される。

まず第一に、シンガポール石油基地襲
撃闘争はヴェトナム革命戦争との実質的
な連帯であり、有機的に結合したヴェト
ナム人民との共同作業として存在してい
た。

我々によつて選ばれた標的シンガポ
ール・シェル石油基地こそ、ヴェトナム反
革命軍に対する最大の軍事エネルギー供
給源であり、ヴェトナム解放戦線の石油
攻撃によつて撃滅した反革命運動にとつ
て、シンガポール・シェル石油基地こそ、

その供給ストップの最大死活の位置を示
していたのである。同時に、イギリス、
オランダ合資によるシェル石油はパレス
チナ革命における明確な敵対者としてシ
オニズムとの結合を公然と示して来た。
このパレスチナ・ヴェトナムの眼前の敵
を打倒し、パレスチナ・ヴェトナム革命
戦争の共通の利益をめざした我々の闘い
は正義である。

第二に、シンガポールが帝國主義利益
の地理的戦略地点として存在し続けてい
ることは明確である。アラビア湾、イン
ド洋、マラッカ海峡に至るアジア向け石
油の政治的中継地点であると同時に、国
際共産主義運動の革命的武装対峙戦を闘
い抜く、アジアの革命的人民に対する庄
殺拠点として存在しているのである。

タイ労働者学生の英雄的反帝闘争、カ
ンボジア、ヴェトナム人民の武装攻勢、
フィリピン人民、インドネシア人民の反
帝反反動闘争が、インドシナ全域に燃え
つづけている現在シンガポールこそ、帝
國主義者にとって唯一の強固な反革命陣
地であるのだ。イスラエルシオニズムと
結合したシンガポール政府軍はイスラエ

ル国産武器ガブリエルを購入しているば
かりか、シオニズム反革命から軍事訓練
を受けることによつてインドシナ革命の
中で、米帝シオニズムの手先として、地
理的戦略的な反革命の役割を演じてきた。
このシンガポールに、我々抑圧された人
民の戦場を創出することこそ問われてい
るのだ。

第三、非妥協に闘い抜かれた十日間に
およぶ闘争表現は、我々抑圧された人民
の政治の表現としてあつた。すなわち、
妥協主義者、帝國主義と復縁するための
手段としてのみ仕組まれたアラブ民族ブ
ルジョアジーの石油供給ストップのドー
カツに対し、我々革命勢力の手段が非妥
協な敵の破壊にあることを指し示す闘い
としてあつた。彼ら民族ブルジョアジー
は妥協のために、そして我々抑圧された
失うべき何も持たない人民は非妥協
の戦闘としてのみ、石油について語った
のだ。民族主義ブルジョアジーは、英・
米帝・シオニズムに打撃を与えるアラブ
資産外貨の銀行引き上げには手をつけず、
石油ドーカツのみに終始した事実をもつ
てしても、民族主義政権が彼らの利益の

貫徹として石油を道具に使っていること
を示していたに過ぎない。

彼らにとつてパレスチナ問題はひとつ
の商札に過ぎないのだ。その商札になる
ことを認めることが権利の回復だと吹聴
するのはアラブブルジョアジーと、パレ
スチナの右翼反革命のみである。我々、
十月戦争の不滅の続行を叫ぶアラブ・パ
レスチナ人民と共にその意志を表現する
石油基地の完ぶなきまでの経済的・軍事
的破壊をめざしたのである。

第四に、歴史的に資源を独占してきた
帝國主義企業に対する我々の挑戦である。
植民地侵略によつて収奪搾取をもつて人
民抑圧の上に築かれた石油メジャーを解
体する我々の闘いは、正当な人民の権利
としてあることを我々は確認する。

第五に、この一連の闘いは、日本帝國
主義のアジア・アラブ侵略反革命政策に
対する、我々世界の闘う人民からの容赦
ない戦争宣言である。親アラブという口
先の言い訳を通じて石油を人民にはな
く日本独占企業のために確保し、日本独
占企業によつて商品化された物資をもつ
て、侵略を更に深める日本帝國主義に対

する我々の返礼である。田中訪アジアによつていみじくも表現された日本帝国主義の経済侵略の本質は、關うタイ、インドネシア、フィリピン等のアジア人民の抗日戦線を拡大し続けている。

この状況下における一連の闘いは、日本帝国主義本国の革命主体としての我々と、日帝の搾取を日夜受けているアラブ人民、アジア人民によつて共通に闘われたが故にアジアにおける反日米帝闘争を軸に、拡大発展する国境を超えた共同行動の方向を示している。

そして第六に、主体の側からいえば、世界革命をめざす世界中の革命勢力に対する世界革命統一戦線構築の呼びかけの闘いであると同時に、アジアにおいてアラブ・日本戦士によつて闘われ、アジア人民の強い絆と支持の元にもたらされたこの一連の闘争は、世界のプロレタリア革命運動の自力更生の闘いの方向性、すなわち現代人民戦争のプログラムを急速に描きはじめている革命的潮流の現実認識を示すものとしてあった。これらの点をシンガポール石油基地襲撃闘争の前提的意義として確認すると同時に、クウェ

ート日本大使館闘争を経た総括的意義としても同時に我々は確認する。

我々の目的は、シヨビジネスではなく敵の石油基地を全面的に破壊することにあつた。この非妥協な軍事的制圧、経済的ダメージを与えることこそまさに現代の革命戦争を表現し、不屈の抑圧された人民の意志の証しとして存在しているからである。

しかし、我々の闘いはこの目的を貫徹しえず、敵の石油基地全破壊に至らなかつた。にもかかわらず今回のシンガポール石油基地襲撃闘争は、勝利として決着した。確実な政治的勝利として決着したのは何故か？

それは、四戦士の不屈のプロレタリア精神によつて非妥協に表現された戦闘陣型によつて証明されたのである。日本帝国主義を始めとする密集した反革命によるだましうち、トリック等の試みをはねのけ、不屈に不退転にスタンバイしえた戦士のモラルにある。

同七四年七月、八月、パリ警察が日本赤

軍・山田義昭を逮捕。「日本赤軍ヨーロッパ蜂起計画」が報道される。山本萬里子ら国外追放。

九月三日、ハーグ仏大使館を占拠。大使ら十一人の人質と交換に仏当局に逮捕されていた山田義昭を奪還し、オランダ当局より三十万ドルを奪う。いわゆるハーグ事件である。

ハーグ仏大使館占拠闘争勝利万歳 (一九七四年) 日本赤軍

三名の戦士によるハーグ仏大使館占拠同志奪還闘争は、日本赤軍の同志「フルヤ」を捕虜にすることによつて戦う人民の熱い連帯と、地下から地下へと巡る人民の交通網を断ち切ろうとした日帝・仏帝どものたくらみが、わずか一カ月半余りの甘い夢でしかなかったことを彼らに思い知らせた。

同志「フルヤ」の逮捕によつて、仏帝は国内の闘う人民の組織を破壊しようとして、卑劣にも極秘の裡に捜査を展開し、またそれを受けて日帝も、国内の地下兵



クアラルンプールのスウェーデン大使館占拠

戦線を破壊しようとしてヤツキになっていたのである。そして同時に、パレスチナ革命と共闘してきた日本赤軍の歴史的真実を歪曲し、パレスチナの革命的人民の闘いの歴史的真実をも歪曲し、「パレスチナ問題が解決しつつある現在、日本赤軍は孤立し、ヨーロッパでの無展望な闘争を計画していたのだ」などとデマ・キャンペーンに狂奔していたのである。

しかし、世界の闘いの現実、帝国主義者共が考えるほど、国境によつて分断され、甘言によつて分断されてはいない。今回の闘争によつて日本赤軍は、断固として、世界の革命的戦線に次の諸点を明らかにしたのである。

一、帝国主義者に対する闘う人民の陣型は、日々着実に整えられ、日本赤軍をはじめとする世界革命戦争派は、いつ、いかなるところでも、帝国主義者に対し闘いの火蓋を切ることができるのだという事。

二、しかもそれは、今回のように奪還を予想した敵の警戒網を更に深く越えているのだという事。

三、多くのすぐれた闘争形態がそうで

あるように、今回の闘争によって日本赤軍は、これまでの幾多の闘いの歴史を継承し、更に一步、大使館占拠という闘争形態を進めた事。この様に、実践の積み重ねによって定着した闘争形態は、不可視の戦線の闘争にイメージを呼び起こさせ、そうした中から戦線相互の連帯と共通の世界観と歴史観を持つに至る。偉大な武装闘争としての言語である。

四、同様に、同志奪還という闘争も世界中の革命の戦線に語りかけ、勇気づける偉大な闘争である。

このように、日本赤軍は、その闘争の歴史の上に、今回の闘争を勝利し、更に、その思想とその闘いの現実と、そしてその方向性を全世界の革命の戦線に対し明らかにしたのである。

今回の闘いによって、帝国主義者どもは、ますます共同した攻撃を組んでくるだろう。しかし、彼らが共同した闘いを組めば組むほど、彼ら自身の姿、帝国主義者としての世界性を明らかにするのである。それは、ますます味方の陣型を広げ、世界の革命戦線が一つの戦線として

世界帝国主義と対決する、世界史の必然的進歩を、敵が一步一步はまり込んで行くということを意味している。そして味方の側の陣型は、今回の闘争に対する敵の反撃などはるかに越えて、着実に勝利している。

日本の同志諸君！

日本赤軍の闘いは、戦場こそいかに離れているように思えても、日本の革命の戦列の中で、となりに腕を組んで闘っているのだ。パレスチナは遠く離れた戦場ではない。世界革命は遠い未来のお題目ではない。今、世界の戦線は、抑圧された人民の言葉・武装闘争によって結ばれている。この現実を目をつぶつたいかなる革命運動もはやありえない。

日本赤軍は去って行った軍隊ではない。日本赤軍はパレスチナを進軍し、ヨーロッパを進軍し、アジアを進軍し、そしていつも、日本を進軍しているのである。

ハーク仏大使館占拠闘争勝利万才！
日本赤軍万才
世界革命万才

一九七五年三月スウェーデン政府は、日本赤軍・戸平和夫、西川純を逮捕、日本へ送還。同年八月、クアラルンプールの米領事館、スウェーデン大使館を占拠。日本政府はいわゆる超法規的措置で戸平、西川および連合赤軍、同年五月に逮捕されたばかりの東アジア反日武装戦線のメンバー等五人を釈放。坂東国男、西川純、戸平和夫、松田久、佐々木規夫は出国、日本赤軍より指名されつつも坂口弘は出国を拒否する。

翌七六年、ヨルダン政府は日本赤軍・日高敏彦を虐殺、遺体を奥平純三とともに日本へ強制送還。

その翌七七年九月、パリ発東京行き日航機をハイジャック、ダッカ空港に強制着陸させる。日本政府は、日本赤軍、東アジア反日武装戦線のメンバー六人を釈放。大連寺あや子、浴田由紀子、城崎勉、奥平純三、一般刑事犯の泉水博、仁平映が出国。連合赤軍の植垣康博、沖縄で皇太子に火炎瓶を投げつけた知念功らは、出国拒否。日本政府は身の代金六〇〇万ドルを支払う。ハイジャックの実行部隊は、日高敏彦の名をとって日高隊と命名された。

日高隊声明（一九七七年九月二八日）

日本の同志、人民のみなさん。

私たちは団結をもとめて作戦を遂行します。そして同志虐殺にたいする階級的報復と獄中同志奪還・革命基盤獲得のために作戦を遂行します。

1 日本帝国主義のブタどもと、その追隨者どもよ。

お前たちは自らの欲望と野望の実現のために人民に寄生し、その血と汗の上にふんぞりかえつてきた。人民にあびせられたありとあらゆる汚名はお前たちにこそふさわしい。

日高同志を虐殺し、奥平同志たちを強制送還し、英雄的な闘いに起きあがった同志たちを獄に閉じこめ、苦しめ、虐殺しようとしている天皇制日本帝国主義と反動どもにたいする憎しみは、けっして消えるものではない。それは人民の日々の生活と生命を奪い続けていることにた

いする憎しみである。

お前たちは私たちの要求にこたえる義務がある。虐殺と送還の責任をとらねばならない。もし、応じないなら、私たちはお前たちの一人一人を確実に処断する。お前たちがいかに権力をもち、弾圧を強化しようとも、お前たちが個々人の欲望と野望の実現を基盤にしている限り、支配の道具であった差別と分断を自らにもちこみ破滅していく。お前たちは敗北し、死滅する。労働者階級、人民は勝利し、新しい社会をつくる。

2 日高同志、やつと階級的報復ができません。

私たちは同志の一つ一つの闘いを思いおこします。つねに本音で生き、闘い続けた同志の限らない愛と明るさをけっして忘れません。「一番大切なのは同志愛だ」と最期の闘いにおもむいた同志の政治生命と使命を、私たちはしっかりと受けつぎます。

奥平同志たち。

3 この闘いは私たちの自己批判です。私たちはどんな敗北や屈辱や欠陥をも共有しあい、共に学び克服しあい、不滅の同志的団結を築きたいと思えます。私たちは必ず出会えます。そして、日本革命の勝利完成の確信と階級の中核の団結をうちかためるでしょう。天皇制日本帝国主義と最前線で闘っている戦士は、「政治犯」「刑事犯」を問わず、全て同志です。今、日本共産主義者に、国際権威主義から自立し、皆が自分の頭で考え、率直に自己をかせ、団結を武器として闘うことをよびかけます。

私たちは、私たち自身の敗北、連合赤軍や東アジア反日武装戦線、そして日本共産党の戦前戦後の敗北等、日本共産主義運動の敗北を自分たちの日常実践の中で総括してきました。それは私たち個人各々の思想欠陥の日々の総括です。

その思想闘争の結論と成果をもって、私たちは作戦を遂行します。

その結論とは「人間が変わる」という

確信です。

人間は必ず変わります。短気な人は粘り強くなりません。自分のことしか考えなかった人が、他人のことを考えるようになります。失敗しては嘆いていた人も、失敗を大胆に教訓化して楽天的になります。しかし、変わるといふことは、自分の好きなように変わるといふことでも、表面的な作風や能力だけが変わるということでもありません。自分の立場やメンツにこだわっていたら、自分のなりたいうように作風や能力を変えようとするだけです。そうではなく、自分の立場、観点そのもの、つまり、感性として日常不断にあらわれる思想を変えていくことです。そのためには、日常的に、同志、人民の立場に立つて実践し、思想闘争をする以外にありません。思想闘争、組織生活はあらゆる場でできます。家庭や職場や学校で、団結を求めて実践し、団結して実践すれば必ず変わります。

4

日本共産主義運動も国際共産主義運動

彼らの転換期の声明のひとつ。とはいえ、以降の彼らの動きが決して停滞したものではなかったことは、八〇年代以降の彼らが逮捕された場所の多様さからうかがいしれる。八七年、丸岡修、東京で逮捕以降八八年、マニラで泉木博、九五年ルーマニアで浴田由紀子、翌年吉村和江がペルーで浴田の息子と一緒だった、城崎勉はネパールで、さらに九七年西川純がボリビアで逮捕される。また、本拠地と目されていたレバノンでは九七年、足立正生、戸平和夫、岡本公三、和光晴生、山本萬里子が拘束され、二〇〇〇年三月、岡本が国外亡命を認められた以外は、日本へ強制送還されたのは、先述のとおり。そして一月、重信房子が高槻で逮捕。日本赤軍の名が久しぶりに各紙の一面で躍った。(以上敬称略、コメント執筆・紅野啓)

主体的な情勢認識を(一九七九年一月一八日)

日本赤軍

*

私たちは、現在の国際、国内の情勢をとらえ、革命の道を見極めようとするとき、何ものにも左右されない人民の利益

も、人間が変わるといふ観点から、必ず統一できると確信します。そして、人間憎悪のブルジョア思想と非妥協で闘う階級性こそが、それを保証します。

日本の内ゲバや、中国とソ連の分裂にたいして、「仕方がない、現状だ」と現状肯定せず、人間が変わるといふ確信から、非妥協に思想闘争を続けねばなりません。私たちは武装闘争を非妥協に持久的に闘い続けたい。

5

私たちは、労働者階級人民の生活を守ることは、一回の軍事作戦やばなしの宣伝戦ではできないことを知っています。父さんや母さんたちが生活を闘いとして私たちを育て、支えてくれたことも知っています。生活の場を闘いの場として持久的に闘い続けることによってのみ生活はかちとれるのです。そういう闘いと心を一つにして結びつきあって、初めて武装闘争が人民の闘いとなるのだと確信します。

私たちは天皇制日本帝国主義を打倒し、

アメリカ帝国主義を追い出し、社会主義を建設するために闘います。だれもが革命し、飢えることも、生活のために屈辱を味わうこともなく、革命の主人公として、共に幸せに生きられる人民共和国建設を私たちは今からあらゆる分野で行います

私たちは必ず勝利します。

これからも敗北することはあるでしょう。私たちは、まだまだ主観主義や個人主義の誤りを根強くもっているからです。しかし、私たちは、人間は変わるといふ確信と、必ず一つの真理の前に私たちの隊、さらに全軍が統一できるという確信のもとに作戦を遂行します。だから、どんな困難や危機に陥っても、必ず団結して克服します。不滅の同志愛と敵愾心をもって。

私たちは必勝を誓います。団結を！
更なる階級的団結を！

一九七七年のダッカ・ハイジャックを最後に、日本赤軍は「共同武装闘争」の時代を終えたかみえる。「主体的な情勢認識を」は、

に立脚した主体的立場から、世界の動きの本質的矛盾をみいだしていくことが大切だと考えています。

また、現在の情勢をとらえる上で、両者のうち、どちらか一方がすべて正しく、他方が間違っているという白か黒かの二者択一で、違いを考える形式論理的な観点は、誤った情勢認識と実践を生み出します。ここからは、矛盾の本質をとらえられず、違いを克服できません。

あらゆるものは、否定と肯定の両側面を内部にはらんでおり、否定と肯定は、また相互に転化しあう関係にあります。あらゆるものは、対立物の統一であり、その一面だけのみたり、または、絶対化するものでは、ものごとの客観的法則性をとらえることはできません。さらに、それを、主体的に駆使していくこともできません。

今のイラン情勢をみても、一面としては、人民の解放の闘いの勝利であり、他面としては、いまだモスレムの指導者によって指導されているという側面があります。それを、モスレムが指導しているから反対だとか、逆に、否定面をみよう

としない認識は、イラン人民の闘いに連帯し、共に闘ってゆくことを不可能にさせるでしょう。

その意味で、弁証法的観点を武器とすることこそ、主体的な立場をきずいてゆく大きな柱だったといえます。

*

昨年情勢をひとつとってみても、今世界が大きく変わりつつあることは、だれの目にもあきらかなことです。しかし、その本質を問う、大転換を人民の勝利へとむすびつける主体的実践ぬきには、勝利を実現することはできません。

とりわけ、社会主義諸国間の矛盾の激化は、世界をとらえにくくしています。中国の国内路線の転換と、反ソを第一とし、反米を第二とする外交路線の強化は、矛盾をひきおこすとともに、これまで、中国から多くを学んだ人々の間にも疑問がおこっています。また、ベトナムとカンボジアの国境紛争の拡大と、カンボジアの新政権の誕生と内乱は、これまで、ベトナム民族解放闘争を支持し、インドシナ各国の革命の大勝利を歓迎した人々

にとつて、心の痛むことであり、多くの何故という疑問がわいてきます。

この社会主義国の矛盾は、これまでの反帝勢力の反帝というひとつの価値がくずれないように見えてきます。

一方には、こうした味方内部の矛盾は、社会主義から国家独占資本主義にかわり、社会帝国主義となったソ連を打ち倒す闘いの前進であると、とらえ、中国の政策を支持する人々の見方があります。

これらの問題は、戦略戦術を規定するが故に、見すごすことのできない問題です。原典から現実に対して、白黒をつけるやり方は、社会主義の理想がうらぎられたという考えにおちいってしまいます。また、部分的な視座と主観に、世界をあてはめれば、ゆがんでみていることに気づきません。私たちは、現実から出発し、世界人民の闘いの側から、とらえ、克服の方向を不断に実践する主体として、自己の使命を問わなければ、世界はいつても自分の主観を変革する教材とならず、自己肯定の従属物に転化してしまいます。

私たちは、まず、世界の矛盾の本質を正しくとらえる必要があると考えます。

ある人々は、現象した四つの矛盾を平面的に世界の矛盾として並存させてとらえ、また、ある人々は、現象的なソ連と米帝の矛盾、体制間の矛盾が、すべてを規定するとしてとらえようとしています。しかし、どちらの立場においても、その内部にふくまれる本質的矛盾を、みようとせず、あれかこれかという現象的な矛盾のなかに、その動因をもとめ、本質的な矛盾の克服へと向かわせることができているではありません。このような平面的な矛盾のとらえ方、現象に目をさうばわれる見方は、矛盾の止揚に力を組織できず、いたずらに、矛盾を拡大する結果を生む実践となります。

それぞれの現実のなかには、基本矛盾とは、社会主義のすべての要素と資本主義の闘争であり、それが、帝国主義内部においても、第三世界人民の闘いにおいても、社会主義国においても、貫かれています。その闘争が、発展の原動力となり、その基本矛盾の外化が、五つの矛盾として、たちあらわれているのです。そうした内部矛盾の発展を、いかに、社会主義の勝利と資本主義の生産関

理想で現実を切り替えることも、一方が一方的に正しく、一方がまちがいだとする白黒決着も非弁証法の産物です。これらの見方は、矛盾の本質を有機的にとらえ、個々の結果ではなく、根拠と闘うという観点に、欠けていると思います。

それでは、矛盾の本質とは、一体何でしょうか。一口でいえば、現在は、勝利しつつある社会主義と敗北しつつある資本主義の闘争の時代です。つまり、あらゆる現象、イデオロギー、社会の矛盾は、社会主義的要素と資本主義的要素の闘いに規定されています。

一人の人間のなかでも、一つの組織のなかでも、一つの国家のなかでも、一地域においても、人類社会総体においても、二つの価値の闘争は、資本主義を打ち倒し社会主義を実現しようとする力と、資本主義を守ろうとする力が、基本矛盾をなしています。

それは、ちょうど、一つの磁石を、いくら切つても、形や長さがかわつても、どのなかにもプラスとマイナスの極が存在するように、歴史的現段階においては、どのような状況と条件においても、敵と

係の解体に、むすびつけるのかこそが、私たちの闘いとならなければなりません。

*

昨年情勢の特徴は、ベトナム、カンボジアにみられる社会主義の内部矛盾が、ますます、大きくたちあらわれてきたことです。

ある人々は、そのことで社会主義への不確信をいだき、ある人々は、敵との矛盾として、規定しえない分、沈黙しています。

私たちは、分析すべき観点として、やはり、社会主義と資本主義の闘争に規定され、両社会主義国内に不断にはらまれた社会主義的要素と資本主義的要素の矛盾の反映を正しく解決し得ない問題としてとらえます。それ故、歴史性のなかから、社会主義勢力として両権力の性格を規定し、一定の条件、ひとつひとつの政策において、是非が、明らかにされる必要があると思います。ある国は、社会主義で、ある国は、社会帝国主義というところでは、各国内に不断にはらまれ、また外化していく矛盾を、その根拠との闘

味方、階級対立そのものの矛盾は、資本主義的要素と、社会主義的要素の闘争として、みることができません。

この基本矛盾に貫かれて、現象的には五つの矛盾が、大きく絡み合つて現代世界を、かたちづくっています。

それは、まず第一に、帝国主義諸国と社会主義諸国の矛盾、第二に、帝国主義と第三世界人民との矛盾、第三に、帝国主義本国内における独占支配階級と人民の矛盾、第四に、帝国主義間の矛盾、そして、第五に社会主義諸国の矛盾として存在しています。それが相互に、規定しあつた構造的な世界として、全体をとらえる必要があります。第一がすべてを規定しているだけなのではなく、ある時には、第一が、第二が、第三が、というように、条件、場所によつて相互規定しあつていきます。

私たちは、本質が大事で、現象を軽視、無視していいと、いうものではありません。本質的な基本矛盾をしっかりと、ふまえて、是非をみないと、現象の断片に左右され、闘う方向が主観主義におちこむことを警戒しているのです。

いではなく、結果に、身をよせることに終らせてしまいます。これでは、人民の側から闘いを分析し是非を問うことができません。

アンゴラであれ、イランであれ、まずアンゴラ人民、イラン人民の闘いの側面をとらえなければ、やれ、ソ連の支配下に入ったという論議で、人民の主体性と方向を見失うあやまりをおかしてしまいます。

そのことが、世界的な人民の反帝の闘いを無視して、自称正しい党の立場からすべてをきりすて、味方の矛盾を対立へ拡大し、帝国主義よりも、にくい敵として味方を規定してしまい敵を見失うことになってしまいます。社会主義をめざし、建設し闘っている人民の力が世界を動かす、大きな力となっている現在、この害毒は、はかりしれないといえます。

私たちの敵は、帝国主義であり、また、味方の主体内に反映される資本主義的要素です。いかに、味方内部の矛盾を克服し、反帝と社会主義建設の力としていくのが、この本質から、とらえ返さなければなりません。

とくに、建設途上の革命勝利の道において、資本主義的要素との闘いは、国際主義というマルクス・レーニン主義の原則から、とらえ返さなければ、一国の社会主義の建設をおしすすめようとするところが、逆に、民族利害の矛盾として、不断にたちあらわれてきます。

その意味において、中国か、ソ連かという考え方を克服しなければなりません。また、理想主義からの悲観も無用であり、また、自分たちのみが、という考えも同じ、おとし穴に陥ってゆきます。

私たちは、不断に人民の利益の立場に立ち、反帝闘争を実現し、自らの資本主義的要素との闘いを、継続しながら、あらゆる反帝勢力と団結し、そして、団結のなかで、相互のあやまりを克服しあう、国際的な反帝勢力の団結を作り出すことをめざさなくてはなりません。すでに、その闘いは、始まっています。私たちが中国やソ連をととして、自分たちの姿をみつげだすことができないなら、人民の闘いの勝利と世界革命の勝利を各国人民と共同して、かちとることはできないでしょう。

また同じように、国内の闘いにおいて、問われている問題があります。それは、中国の外交路線を支持している人々が、かかっている「反覇権主義」の問題です。「反覇権主義」が、すべての「覇権」に反対するということを、かかげながら、実際には、ソ連を第一の敵として担われようとしています。

とりわけ、昨年の鄧小平副首相の「自衛隊の軍備強化、日米安保支持」の発言は、そうした人々の間にも、波紋をよびました。中国の民族的利害からすれば、当然、反ソを第一とするため、日本の自衛隊、安保と闘う事ではなく、それを強化することが、中国の反覇権の路線に、とって必要なのであり、その意味からいえば、日本の人民の闘いを無視しているといえます。

日本人民が「反覇権主義」の闘いを、すすめることは、現在の基本矛盾である、社会主義と資本主義の闘争から目をそらし、カウツキーが犯した、あやまりのよきに、支配階級と同列の「民族」的利害

*

のための闘争へと、階級闘争をゆがめ、日帝、米帝の利益に、結果的に奉仕することになります。ここでも、国際主義が、中国をおして、または、ソ連に対するものとしてしかなく、国際主義の名のもとに、民族排外主義を実践することになります。また、すべての反帝勢力と、階級的に団結し、共に闘うという国際主義は見失われてしまっています。ことに、帝国主義本国の労働者階級の闘いは、反帝を階級的基準として闘い抜かなければ、真に国際主義の地帯で闘いぬくことにはなりません。

人民に立脚した各国の革命主体は、ソ連に対してと同様に、中国に対しても、是非を問い、団結しようとしています。中国と団結することは、ソ連と敵対することでもないし、中国の外交路線に左右されることでもありません。こうした態度こそが、各国人民の闘いを勝利に導いています。

私たちは、不断に現在の資本主義的生産関係を打ち倒す闘いを第一とし、国際主義と自力更生に貫かれた社会主義の勝利へとすすまなければならないと考えています。

います。

*

日本の人民、同志、友人のみなさん、情勢と主体の観点について、私たちが学び、考え、教訓としてきたことを、提起してきました。世界の人民の闘いは、前進し、社会主義と資本主義の闘争は、ますます、強化されています。国際主義と自力更生の主体的立場の確立は、さらに、私たちに問われていると思います。あくまでも、世界各国人民の側から情勢と闘いの方向を把握するという原則をしっかりと守らなければなりません。つねに、帝国主義を打ち倒すために、人民の利益を実現するために主体的に情勢をみきわめ、また、自らの内の資本主義的要素と闘い、社会主義の勝利に向かって共に前進しましょう。

限られた枠内での問題提起でしたが、さらに人民、同志、友人のみなさんとの討議をおして共に、主体的立場をうちかためてゆきたいと思えます。

団結を！



レバノンより送還された足立正生らに乗せた警備車輛

日本赤軍とは何か

—これだけは知ってほしいこと—

リッダ鬭争の意味

重信さんが逮捕された後のアラブ世界の反応は「戦士・重信」と新聞やマスコミ全てが流しているという事です。その意味をもう少し日本側が考える必要があるのではないかと、イスラエルの侵略戦争に対するアラブの抵抗戦争に従軍していたのですよ。例えば悪いですが、真珠湾攻撃で捕虜になった日本海軍の潜水艇長や、神風特攻隊員を、米国が「テロリスト」として逮捕したら、どう感じますか。

PFLPが指揮したといわれるリッダ

ルに爆殺されたんですよ。この人は戦中から反ナチレジスタンスのヨーロッパのリーダーでした。ヨーロッパは当時、中東戦争の第二戦線だったのです。でも各国はモサドの「テロ」は批難しませんね。パレスチナ問題に対する報道も、非常にでたらめ、単に土地を巡る民族争い宗教対立という図式で、新聞にしても本にしても書かれています。パレスチナ問題は、ユダヤ人の問題といってもいいんです。ヨーロッパ世界が生み出した矛盾、それを旧植民地に丸投げしてきたのです。それはアメリカ建国の歴史を見れば一目瞭然です。ヨーロッパで迫害された人が別大陸に流れて行き、先住民を殺して土地を奪っていく、という構造の延長であると思います。ですから単純に宗教対立という事ではなくて、宗教対立がおおられたのはその後ではないかと。しかも本来の土地だといってヨーロッパからイスラエルに来ていた人たちは、ハザール人という、コーカサスか中央アジアの方

にいた、パレスチナの土地とは全く無関係の人たちの子孫です。その反侵略抵抗戦争に私達は従軍したのです。レバノン南部の激戦地では両軍の夜襲がひんぱん

鬭争ですが、獄中にいる丸岡修さんが「公安警察なんぼのもんじやい」で、また「日本赤軍20年の記録」の中でも、岡本公三さんがはつきり言っているのが、彼らのやった闘いは、空港の警備兵に向けて攻撃を開始したことです。それに対して泡を食った警備兵が反撃をして、それによって多数の空港内にいた人たちが殺されたのです。そのとき死んだ日本赤軍の二人のうち一人、安田安之さんは、誰かが投げた手榴弾が壁に当たって遠くに行かずに、撥ね返ってしまった。それで周辺にいた人たちに傷を負わせないために、自ら手榴弾の上に自分の体をおぶせて、そして亡くなったわけです。それ

にありました。私達の仲間が襲撃隊に参加した時、戻ってきたら居残り組が全員殺害されている事がありました。「革命支援」でやってきたある国の大学生が見張りをしていたのですが、敵に怯えて発砲しなかつたために、寝ているところを襲われたのです。

ベイルート近郊の前線では、フアランジスト民兵(カタエブ)の狙撃兵が、ベイルート街道から市内に入る車輛を無差別に銃撃し、何人も市民が殺されました。そこで私達の仲間が、深夜に狙撃地点に侵入して、仕掛け爆弾を設置しました。翌朝、爆音と悲鳴が聞こえたようです。それ以来、カタエブは怖がって狙撃地点に来なくなりました。この作戦を一緒に担ったアラブの兵士は日本赤軍と共に闘えたことを大変誇りに感じたようでした。

日本人ジャーナリストのために、サイダ南郊の防空部隊のガイドをした仲間もいました。彼が撮った写真がPLOの機関誌の表紙に採用されましたが、その後、部隊の位置をわり出したイスラエル軍は猛烈な空襲をして、その防空部隊は全滅してしまいました。このような事が

吉村和江

Yoshinua Kazue

から奥平剛士さんも人がいない所で自爆しています。彼らが空港にいた人に無差別射撃をしたような報道をされていますが、それは全く違う。ただし、彼らは、自分たちが行った戦闘によって、無関係な人たちが巻き添えになったことに関しては謝罪しているんです。その辺の彼女の気持ちを伝えて欲しいと思います。

いわゆる「ハーグ事件」ですが、これもこの時に奪還された元メンバーのYさんが「PFLPの指示」を檢察当局に明言しています。

Yさんがパリで逮捕された時にメモを押収されたんですが、そこに書かれてあった連絡先の人が、数カ月後にイスラエ

あるので私達はどこで何をしているのかを曖昧にせざるを得なかつたのです。

私達の仲間の中には、一発目の銃弾の穴に残り全弾を命中させる銃の名手や、対戦車ロケット砲の名手がいまして。パレスチナ軍の軍事教官もしていたのですよ。訓練生が今、パレスチナ政府の中堅になつているんですよ。PLOを「テロリスト」呼ばわりしたイスラエルは、そのPLOと交渉の席についているではありませんか。そしてPLOは独立政府として各国から承認されだしています。日本赤軍を裁くという事は、PLO、つまりパレスチナ政府を裁くという事なんです。それともテロ、ゲリラで英国から独立した米国の初代大統領を「テロリストの最高幹部」と教科書に記しますか。

よく言われていることなんです。日本赤軍と連合赤軍をこっちゃんにして、リッダの場面と肅清の絵というのがダブらされること。出身母体は同じですが、その一部は北朝鮮に渡り、一部がパレスチナに渡り、残った軍の本体が革命左派と合流し、そこで同志の肅清という事態に至るんです。ですから日本赤軍が連合赤軍と同じ団体であると言われるのは間違

いです。ただし、日本の新左翼から産まれた人々です。すなわち、「強力なる個人を準備せよ」というスローガンに見られるような自分を鍛える事が「革命的」という考え方が染み込んでいました。その意味では同じような問題は持っていたと思います。どうして克服できたかといえます。共産同赤軍派が持っていた世界同時革命とか、そういう理論が、現地で解体されてしまったのです。北に行った人たちは、北の地で解体される、パレスチナに行った人たちはパレスチナの戦場でアラブの文化、そこに集まってきているヨーロッパや世界中の革命組織の人たちと交流する中で解体されていく。それもさわめて早く解体されました。

その中で学んだことが、私たちが書いたものの中に現れているんですが、それがわかりづらいといえますか、理解されない部分が大分あると思うんです。その一つは、使っていた言葉が、日本とちよつと意味合いが違っているのではないかといいこと。

例えば「人民」という言葉一つとっても、日本で人民といった場合には、没階級的だという批判を受けたります。

これは革命の本体論というものがありまして、労働者階級、しかも基幹産業のブルジョア以外には小ブルと組むからどうだとか、ブルジョワジーは敵だとか、図式的な階級闘争論があるのです。それに対して私たちは、味方を選別するのではなくて、味方をいかに増やすかというところで、問題を立てていたのです。私たちが言う人民という言葉は、日本語に訳せば、「民衆」という意味ではないかと思ひます。

自己批判からはじめる

自己批判と総括という言葉も連合赤軍と同じで新左翼も使っている言葉ですが、欧米に行かれた方ならよくご存知だと思います。自分が間違ってもまず人のせいにする、失敗を認めて対策を立てないために繰り返す、そういう土壌の中で、まず自分の側の原因を認めようではないかと。そういうところの自己批判なんです。

総括も同じです。イスラエルとの戦闘に負ける場面を見ている、そこで、失敗の原因がどこを探ろうではないか、そし

てやり方を攻防の中で変えようではないかと。そのためにはあいつらが悪いんだとか、自分は一生懸命やったとかいう主観ではなくて、客観的に、自分たちが戦闘に負けた事実から見ようではないかと。そういう問題の立て方がされたと思ひます。それは痛烈なショックを受けた連合赤軍の敗北の原因となった「総括」とは対極にあったと思ひます。連合赤軍とは違う総括の方法を作ってきたと思ひます。しかも、連赤後の再建赤軍派も「自己批判―団結」という言葉を使いながら「総括」をめぐって分裂してしまっているから、これでは何のための総括か、という根本的な疑問がありました。その痛恨の思いから自分たちの総括の仕方を日本へ伝えたいんです。それが「大地に耳をつければ日本の音がする」という本の中で総括の五つの定式として紹介されています。これは「何故、物事がうまくいかないのか」と皆で議論して必要な項目を五つにしほつたものです。私達自身が現場から考えつくって来たものです。

本場一からつくっていったという面が強いんです。例えば綱領は、従来左翼、少なくとも日本の新左翼は、ロシア

共産党（ポリシエビキ）の綱領なり規約なりを下敷きにして、ちよつと手を加えてつくる。それに対して、自分たちが実際にやってきたこと、実際に間違つた事の対策など具体的なことでそれを作ってきたんです。ですから世界認識にしても、いくらでも論争はしますが、ちよつと認識が違つたからといって、じゃあ分裂するといった発想は持っていません。現実の世界としてアメリカの一国支配が拡大している、グローバルイズムによって各国の民衆の生活がだんだん逼迫してきている、その民衆の側の反撃も今始まっているのではないか、今はそういう時代認識をしているのであって、細かい位置付けとか、日本の旧新左翼がやっているような路線論争とかとはかなり違います。

私達は世界の各国を回っているんですが、そのときに、同じようにマルクスの本を勉強し学び、なぜこんなに変質してしまうのか。という実感からの疑問や、頭デッカチの批判とは別の印象を持ったと思ひます。既成の「社会主義国」の歪みは制度・政策の問題だけではなくて根にある文化が逆にイデオロギーを色づけているのではないか、そういう認識に立つて

います。足立正生さんに象徴される、映画芸術のグループも日本赤軍に合流してありますが、その傾向は「ダダイズム」なんです。「創造のための破壊」といいますか、社会主義リアリズムとは全く違う文化を私達は持っていました。それプラス現地のラテン的な明るく楽しくアバウトな文化。さらに現実の戦場は、普通の生活者がPLOなどの組織に入ってくるわけですね。そこで給料をもらい家族を支えている。戦場の兵士たちも生活者である、そういう文化、その辺がミックスされているのではないのでしょうか。歓送会や誕生会、それにリッダ闘争の祝い会など色々楽しんできました。休暇時には配給された軍用缶詰をサカナにガス灯の明かりで朝まで飲み会をやったり。節約はしますが、禁欲主義とは縁が切れませんでした。その意味で、「根なし草」が世界各地をめぐり、新種として独自に「開花」したと、自画自賛しておきましょう（笑）。

私達が望んでいる社会主義は、何か先に類型を作って当てるということではないか、それがまだ実現されていない。それを追及していく過程こそ社会主義に近づいていく過程ではないか、と考えています。社会主義革命と改良主義闘争を単純に分けてはいません。

戦場では銃を、国内では政治を

重信さんには現地の戦場で勝つても日本の社会変革につながる、自分たちがやっている闘いを日本に返したいという思いが非常にあったと思うんです。

麻薬にからんだマネロン、大学の教授と学生数十人、殺害の指示者、疑惑の追及から海外逃亡し、日本へ亡命を希望しているペルーの独裁者フジモリを匿った曾野綾子は堂々としているのに、アラブの英雄を助けた人が逃亡助罪で逮捕される日本って変ですよ。これで日本はアラブとペルーの民衆を敵にまわしてしまつたんです。こんな日本を変えるために重信さんはやって来たんでしょね。

私達は戦場では銃を取りましたが、日本では政治主張を通じて闘っていきたく思ひます。

（談 二〇〇〇年二月三日）

【日本赤軍】

本当の革命家とウソコ

中山千夏
Nakayama Chiharu

気負いのない、自然な人

まず、最初に知り合われたきっかけのようなことをおきかせください。

中山 私は「話の特集」に原稿を書いていまして、ご存知だと思いますが、話の特集から重信さんが何冊か本を出していらした。その関係で編集長の矢崎泰久さんが重信さんに会いに行くということで、「行ってみる？」と言われ、ぜひ会ってみたいと答えて行っただのが最初です。最初で最後ですけど、私が見たいと思ったのは、革命家で、同世代の女の人で、書いていらつしやることも読んでいたけれど硬いものばかりだから、私なんかにはよくわからないけど、でもその活動に対しては、すごいことする人がいるなあと思ってたので、それで会ってみたいと。もう十年以上前のことになりましたね。

こちゃこちゃと、私もよく覚えていないんですけど、何とか無事辿り着いて、で、彼女と一晩お話しして。一番びっくりしたというか、すごく印象に残ったのは、とにかく人の上から喋ったり下から喋ったりしない人で、本当に対等に話す人だったんですね。それまでも、大分いろんな運動家の方に目にかかっていたけども、一番似てたのは市川房枝さんだった。態度が似てたのは。市川さんの方がもっと男っぽかったんですけどね。重信さんの方が、もっと普通の女の人というか。市川房枝さんという人も、全然気負いがなくて、人間として肌合いが非常に自然なんです。どうしても活動家タイプの方は、活動家でなくても政治家の女の人とお会いしても、ツンとしたところがあったり、気負ってるところがあったりしますよね。普通の人でも、喋ったときに肌合いが柔らかくて、しかも人におもねってなくて、という人はなかなかいないでしょう。やっぱり人間ってどこか、気負ってたり、

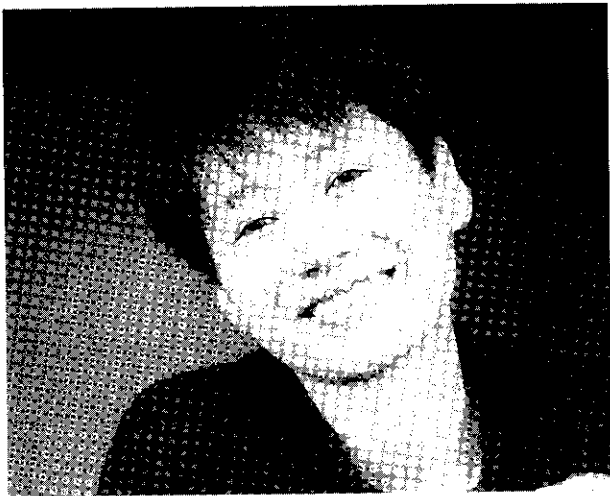
人に対して用心深かったり、そうじゃなきゃすごく最初からガツンとかましてやろうとか、そういう人が大半だと思うんです。人間、皆弱いからね。やっぱり強い人だと思ってるから、本当に自分がしつかりしてるから、あんなふうに見栄も衒いも何もなくて自然でいられるんだなって。もちろん甘えもないし、かといって人をはね返すようなキツさもな

いし。で、非常に気持ちよく話をして帰ってきたわけです。それが一つ。

それで、いろいろ話をして、いろいろ仲間と勉強をしたという話が出て。私は難しいことよくわからないんですけど、勉強したと聞いた話の中で「なるほどな」と思ったのは、人付き合いというのをすごく勉強したのね。それは革命家にとつて必修科目だと思うんです。人と信頼関係をつくってやっていかなきゃいけないから。でも大抵それは勉強なんかしないから、なかなか。それを彼らは徹底的に勉強した。人と平等に信頼関係を保って、人、あるいは同志、仲間とどうやってつきあっていくのか、ということを勉強したのね。勉強した結果として、そういう自分の性格を彼女は練磨してきたのね。それが私すごいなと思ったの。だから彼女にとって革命家というのは、一つの人間道場みたいな側面もすごくあったと思うんです。本当の革命家というのは、そうなんじゃないんですか。

それをやろうとしたのが、ちよつと間違っただけで、連合赤軍事件みたいになっちゃうわけでしょう。いろんなこととお互いに批判し合ってたのが、間違っただけで。

でも彼女たちのグループでは、それがすごくうまくいったんだと思う。足立さんも話したんですけど、やはり同じような、仲間思いで人間思いで、人間のことを愛してるんだなあという感じが、喋っててするんですよ。それはもともとの性



中山氏

格ももちろん素敵な人だったんだろうけれども、それをさらにさらに、現場で勉強していく中で高めたんだな、という気がすごくしたのね。それに私は感動した。

もう一つは、革命家としてさすがすごいものだと思っただけですけど、私たちはすごく仲良くなった。心を通じて、本当に姉妹みたいな気分になれたんです。今でも私はそう思ってますけどね。ところがけじめのしつかりしてさ加減というのがすごくて、それは感心してるんですけど。私何も知らないんですよ、それだけ仲良く。今度帰ってたのも全然知らないし。

かわいそうとは思わない

——噂もですか。

中山 噂も聞いてない。それまで全然連絡がなかったわけじゃないですよ。何か知らないけど、どこから情報は来るんです。それで、消息を知らないではなかったんです。ざっとした消息はね。けれども、いつ帰ってくるかと、今どこにいるかと、それからもちろんですがどういいう闘いをしていくかと、一切わからないわけ。もう一つは、情報が流れてくるルートについて、私は一切知らない。お蔭様で（笑）。やはり彼女の側はきちんと、一緒に活動する意味での同志、それから方向としては一緒にやっていける人たち、その中の

一般人、とかというのが、ものすごく仕分けされている。自分たちの活動で人に迷惑をかけるというのを彼女たちは嫌がるから、いけないことだという考え方があるから、捕まったときなんか、一番に謝るのね。足立さんもそうだし。「ごめんさい、迷惑かけて」って。普通一番に来るのは、私なんかでも結構有名人と知り合いだから、「何とか助ける」と。自分たちはいいことやってるんだから支援しろ、と。そういうタイプの活動家って結構いるんですよ。全然そんなんじゃない。

私も、一緒に行った矢崎さんも、革自連というのを始めて政治も国会まで入ってやってたわけでしょう。それについてアドヴァイスめいたことは一回もない。一切ないの、そういう具体的なことは何も無いの。一番、私が話して帰ってきたことは、仲間を大切に、仲間と仲良くやっていこう、ということですよ。本当の革命家って大したものですよ。その二点で私は、この間「週刊金曜日」の原稿にも書きましたけど、やっぱりすごい人だなあと思いました。

だから、最終的には勝てなかったといっても、この時期にあの状況にいた革命家としては、仕事としてもすごい仕事をしたんじゃないですか。おそらく見えないうところで、ま、見えてることの中では、とてもとても私なんか一緒にできるものではないし、方向も「ええっ」と思うことはあるけれども、見えないうところで、彼女たちの性格とかやり方とか見て

て、アラブの人民のためになることをいっばいしたと思うんです。

新聞とか、今度の報道を見ると、なるべくかわいそうに仕立てたいわけでしょう。あんなにつっぱってた女がつかい捕まって、しかも、私はすごいセクハラだなど思うんですけど、男の人だったら、老いたる、なんて言わないところを、三十年も経ったら誰だって当たり前じゃないですか、老いるのが。それを、老いたってところばかり強調して、なるべくかわいそうにしたいわけじゃない。

でも私は全然かわいそうだと思わない。あんなに自分の思いを貫いて生きていますか？ この時代に。いませんよ。だからかわいそうがるやり方……、まあそれは一つの辱め方なんでしょうけれど、でも、あんな幸せな人はいませんよ。だって革命家やりたかったんですから。革命をやりたくて、やりたいことの全部が全部うまくいってないでしょう、誰だって。芸能人だってそうですよね。だけど、この日本から出てアラブに行った革命家としては、やりましたよ、いろんなことを。自分のやろうと思ったことの大半はやりましたよ、きつと。だからあんなに幸せな人はいないと、私は思ってます。

——重信さんが捕まったというニュースを聞いたときの印象はいかがでしたか。

中山 何で日本にいるの？ っ。て。てつきりアラブだと思

ってましたから。しかしよくよく考えてみると、世界中敵ですからね。選択肢も限られてきて、パレスチナも今ああいいう状況だし、イスラエルに捕まらなくてよかったなど。CIAからイスラエル経由というのが一番彼女にとって不幸な最後。発信もできないし。少なくとも日本の牢屋からだったら、本当にどうやって自分たちが何をしたいかということが、今から訂正もきくでしょう。日本のマスコミはアメリカ側だから、どうしても出てこないこともあっただろうし。それこそ私が聞いたような話は、全然彼女はできないわけでしょう。一生懸命発信しようと思っ、話の特集から本を出したりしていたわけだけど、やっぱり伝わってくるのは、新聞にパーツと出て、テロリスト、とかしか伝わらないから。

中山 会いたいですよ、そりゃあ。

——会ったら何を話しますか？

中山 いやあ、言葉も出ないんじゃないでしょうか。なにしろ心は親しいけど、たった一回会っただけの人だし。私、政治の話はクライイだしね、何を話しますかね。元気にしてね、という……、身体だけ丈夫にしてね、とか……。だけど私が思うのも僥倖な話で、アラブで生き残ってきた人ですから、私なんかの何十倍も丈夫、心身ともに強いんだから、私が言うこともないみたいですけど。

ただ世の中が、さっき言ったみたいに、確かにある一方か

らの見方でしよう、テロリズムというのは。したかもしれない、これもまだわかりませんよ。したかもしれない、そういうことを言ったり、方針に掲げていったことも事実なんだろうと思うけれども、それだけで片付けてしまう人たちには、違ふということはいいたいですね。

市民運動家の感覚

中山 それこそ七十年ごろは、今から思い返してみると革命家風の人をごろごろいて、私は大学行ってませんけど、大学生なんて皆革命家に見えたんですよ。当時、私はアイドルでして、ロックアウトした学園の中にもファンはいたらしいけれど、それとは別にファンになり方にしても、革命家という目線……こっちは革命家、君は芸能人だよ、なんていう見下げられる感じを受けていた。あの頃は革命家じゃなきゃ若者じゃない、みたいな時代だったじゃないですか。それをちゃんと総括してから彼女をどう言うならいいけれど。そういう時代を生きてたんだから。そういう顔してたのに、何の総括もしないままに革命家じゃなくなっちゃった人が、ずっと革命家やってる人をとやかく言っちゃいかんですよ。右翼は言つていいですけどね(笑)。せからの右翼やCIAなら、そりゃもう「テロリスト、テロリスト」と言やあいいけど。だけど、革命家面を今までしてたじゃない、と、七十年代の

人に言いたいです。自分を総括しなさいよと。私は何言ってもいいんですよ、全然革命つてやったことないから(笑)。私が思うには、七十年代にゴリゴリに革命をぶち上げてた人よりは、感覚的に私に近いと思います。それは本当に市民運動家という感覚になっちゃった。向うに行つてね。だつて向うに行つたら、革命家とつきあうわけじゃないだもん。これは会つた時に彼女自身から聞いたことで、本当になるほどと思つたんだけど、一般市民が戦つてるわけでしょう。一般市民の感覚とか論理を身につけなかったら、一段上に立つた革命家で行つたら、つきあえないわけ。それは彼女たちのものすごく大きな収穫で。市民運動というのは革命家はバカにしてたじゃないですか、当時は。

——ベ平連とかです。

中山 そうそう、ベ平連なんかうんとバカにしてたじゃない。でも、そうじゃなくて、日本だからあれなんで、アラブ行つたらベ平連がこれなんだわ、ということが、彼女たちが見たことだった。だからそれからすごく感覚も変わった。いや、前を私は知らないから、そう思うだけなんですけどね。だから今帰つてきて、古い人たちとはずれてるんじゃないかしら。そう思います。

二〇〇〇年二月四日

兵士たちのメモワール

大槻節子

連合赤軍の共同軍事訓練に、日本共産党(革命左派)側からのメンバーとして参加した大槻節子は、72年1月30日、迦葉山で「総括」によって生命を奪われた。48年、横須賀に生まれ、66年、横国大に入学。革命左派では、70年以降、非合法活動に従事していた。その日記「優しさをください」は、連合赤軍の当事者の書の中で、異彩を放っている。初めて三里塚の空港反対闘争へ行って婦人行動隊の闘う姿に胸おどらせる前半と、後半の答えなき問いの淵に自ら沈んでいくようなタークなトーンの対照が胸をうつ。銃奪取闘争の中で交番を襲撃して殺される柴野春彦のアジトの維持も彼女の活動のひとつであった。

と、弱さの泉に私は眼りを求めたい。鉄格子の中の戦士と、遠い戦士。私にあなたの自由を下ささい。私はより広い空間に居て、なおあなたより縛られている。愚鈍さの中に……。

元氣ですか、身体の具合は？ 指の具合は？ 情報は入りますか。あなたに直接触られぬことは、やはり奇麗なことです。私が教歩も遅れているから。あなたの中の普通さを、私自身の内に持ちたい。固有さとは別に……。

全て、全て、私達自身が切開き創設する以外に何も生れはしないこと、各々、非常な困難の中に居るのだから、私のいる位置よりも数倍も何十倍も……。

三月二日

あなたの強靱さと、その優しさ

母さん、元氣ですか？ 彼序を

また遠くについて過します。八月もはや痛むことは不可能です。私の確かさを信じて下さい。元氣であつてくれることのみ希つています。

四月四日

もうこれ以上、傷を深めるのも、荒々しくなるのも、すさんでいくことも、避けようではないか。演技は終ろう。素直な拒否と、真摯な寛容のみを現わして欲しい。自然のままに。

荒れた心は嫌い、傷にいたむ心も嫌い、無縁であるならそのままに。もうこれ以上……。

三日、事態は又変つて逼迫して来た。

バクられること、ほぼ確実、奴等は何が何でもバクつてつぶしかかるだろうから。すさんだ心で居たくない。己のみ傷つて耐えられもしようが対象にまでその傷口を赤く無残に刻んでいくことは堪えがたい、そ

のことが一層己を切り刻むから。素直な気持ちでいたい、せめて。新しい情況を迎えているのだから。

例え自爆することがありえようとも、権力によって潰されることだけは激しく激しく拒否する。

既に奪われた生命と流された血を、せめて汚すまい、汚してはならない。

否が応でも、去る日は来る。それが幸いとなるか、悲しみを呼ぶか、一層の切実さを与えるか、全てを流す清水となるか、それは今、私は知らない。

ただ、素直でありたい、自然でありたい。ケ、セ、ラ、セラ、

ただ一人で傷つるのは止めてください、一人で傷ついているのではなく、無縁ではあつても、どういふ訳か同じように苦しみの血を滴らせているピエロがいるということ……。

(「優しさをください」より)

なぜ彼女たちはこんなにも柔軟なのか

大谷恭子
Ogami Kyoko

——まず今回の重信さんの逮捕について。

九六年に逮捕された吉村和江さんもハーグ事件で、国際指名手配されてたんですけど、結局、不起訴でした。今回もどれだけ証拠があるのか、疑わしい。

二六年間、指名手配になっていたのですが、逮捕してから、一生懸命証拠を集めています。現在共犯者として裁判が始まっている人や、確定して刑務所にいる人、既に市民生活を送っている人にまで取り調べが強要されています。これからいつても、根拠のうすい逮捕起訴だといえる、と思います。

——家宅捜索が連続して続いています。

八七年に丸岡さんが逮捕されたときもそうだったんですが、家宅捜索での彼らの狙いは刑事事件の立件というよりは、全容の解明、それに日本赤軍の組

織としての壊滅でしょう。特に最高指導者ということとで、その規模もおおきいと言うことだと思います。弁護士との接見内容についても検事側はいつになく神経をつかっています。

——今回、思うことは。

私は、この間、吉村さんのあと、レバノンから足立さんたちといっしょの送還された山本萬里子さんの事件も担当して、それから重信さんと三人の赤軍関係の女性をつづけて弁護することになったんですけど、共通する印象として、非常に柔軟ですね。この柔軟さはなんだろうと思うんです。

私は永田洋子さんの弁護もしましたが、これは死刑も予想された重い事件でしたし、問われているものの重さの違いがあつて、比較することはできません

んが、それにしても三人に共通するこの柔らかさは何だろうと思いました。私ははじめ、それは彼女たちが、国際社会で生きていて、そこで身につけたグローバルな視点でものを見るところからくる柔らかさだと思っていたんです。でも、そのことも大きい要素だと思いますが山本さんの意見陳述を読んだり、重信さんと話し込んだりしてきて、わかったのは、彼女たち自身の政治性として、柔軟性があるということなんです。前衛はこうあるべきだとか、革命党はこうでなければ、という発想の対局にいて、組織や人間を考えていることとしていられるのですね。

これは、私は永田さんの弁護の時に知ったのですが、連合赤軍の「総括」によって一二名の同志が死ぬ、そのことがリッダ闘争のひとつのきっかけだった、あの事件がなければ、リッダ闘争はなかったと、重信さんたちは言っています。それはどういうことかなといまいまいわからなかったのですが、今回、彼女たちと話してわかったのは、自分たちをうみだし、送りだした母体があやまちを犯したことを痛苦的な思

いでとらえて、あやまちをただすために生命をかけて闘ったということなのです。だからはじめから党や人間は誤りのあるもので、これを素直に認めこれに対し、どうするかということからスタートしている。リッダ闘争は自分たちがあやまちを犯したということ、自己犠牲的な行動でこたえたわけなんです。

それによってアラブでは多大な信頼をえたわけですが、重信さんのひきうけようとしているものは重いですよ。一二名の死がありテルアビブの二名の死があり、それに岡本さんの精神的な後遺症があるわけですから。そういう重さも重信さんはよく知っていて、だからこそ柔らかいというか、やさしい彼女は言われているようなテロリストだとか、革命のためには、人の死もいとわれないという非情な女闘士では決してありません。そのことを皆に知ってもらいたいし、裁判の中で、そのような彼女の実像を明らかにしていきたいと思っています。

〔弁護士〕

(二〇〇〇年二月八日)

足立正生の妻とつて

オマイヤ・アブード・アダチ
Omaya Aboud Adachi

彼らはテロリストではない

——結婚されたんですが、足立さんのどういふところを好きになつたんでしょうか。

オマイヤ みんながそのことを訊くのよね。人としての感情、人を愛する感情、そういうものを信じる人が少なくなくて、「なぜあれと結婚したんだ？」とよく訊かれるんですよ。

彼と結婚した時には、いろいろな壁がありました。年もかなり違う。相手は日本人だ。しかも現在獄中にいる。なんで

そんなおっさんと結婚するのか。私も一緒につかまつた関係もあって、ずっとレバノン警察にしつこくつけ回されていた。

——そういう状況の中で、なぜ結婚に踏み切つたんでしょうか。

オマイヤ 最初に彼に惚れたのは、彼がすごく人間的であるところだったんです。非常に威厳があるし、ひとが何か差別されたり抑圧されたりすることに關してはすごい憤りをもって立ち向かう。すごく人に優しいし、そういうたものを全部ひっくるめて、彼の全体、一人の人間としてのいろいろな味、そういうもの、

ともかく全部まるごと惚れちゃつたんです。

その点だけだったら、ほかの人にもあるかもしれないけれども、それをひっきりめて彼に惚れていった。そこは言葉では、ちよつと言えないところもあります。

——顔もOKですか？

オマイヤ 顔はゴリラみたいじゃないかと言われたりもするみたいだけれども、人はしみ出てくる中身が大切だと考えるから、私から見たら彼はとても素敵に見えるのよ。

——東拘に毎日面会に行つていてということなんですが、彼とはどんな話をして

いますか。

オマイヤ 八カ月前に突然彼がレバノンから拉致されて日本に送還されてから、とにかくいちばん気にかかつていたのは彼の健康なんです。彼に会つてから、ともかく健康状態を、「体はどうなの？」というところとか、「レバノンからの送還はどういふふうにやられちゃつたの？」という話とか。日本から応援に来てくれたいろいろな人が教えてくれてわかつた



足立正生氏との結婚式

こともあるんだけど、彼の口からどうだったかという話を聞きたかつた。それからレバノンはこうなつていふのよとか、東拘の中の状態はどうなのとか、そういうことを毎回話しています。

——足立さんが日本やアラブ、ヨーロッパの人たちに伝えたいというようなことを何か言われていましたか。

オマイヤ いまのところまだ、こういうふう以外の人たちに訴えてくれというのではないんだけど、あの人はどうなつていふのと、こういう問題はどうなつていふんだという形で、毎回それは私に言つてくれるんです。

——足立さんは日本ではテロリスト——犯罪者と言われているんですが、それはどう思われますか。

オマイヤ そんなふうには彼のことをテロリスト呼ばわりしているのは、日本とかアメリカとかヨーロッパとか、そういうところだけです。アラブの側にしたら、イスラエルがどんなひどいことをしてきたか、アメリカがそのイスラエルをどう助けてきたか、ヨーロッパもどういふふうにイスラエルに加担してきたかという

現実を、戦火や占領によって体験させられてきました。私たちはその長い経験があるから、「テロリスト」と呼ばれている足立以下、そういう人たちのことを戦士だと考えています。私たちアラブはイスラエルがアラブにどんなことをしたかというのを嫌というほど身に沁みてわかつていますが、日本ではそれが理解されていないんだと思います。だから「テロリスト」という形で見えないんだと思います。

——それでは、アラブ世界では日本赤軍の評価は、日本とは全く逆で、非常に高いということなんでしょうか。

オマイヤ イスラエルがパレスチナに戦争をしかけています。イスラエルという国をつくつたのは四八年だけれども、それからずっと一貫してイスラエルはパレスチナの人々を殺したり、土地を奪つたりしてきています。自分の国のレバノンを考えてみても、七八年からずっと侵略をされてきました。八二年にはベイルート侵攻と民衆虐殺という大規模な侵略がありました。そういうイスラエルの侵略とか虐殺とか略奪とかに対して私た

ちは立ち向かっているかざるを得なかったんです。けれども、イスラエルの側には最新兵器がたっぷりあって。私たちはそれに對して黙っていられないから、素手ででもとにかくレジスタンスというのをずっとやってきました。もし、イスラエルや、イスラエルを助ける勢力に對して闘うことがテロリズムだと言ったから、レバノン政府もテロリズムです。なぜならば、レバノン政府はイスラエルに對するレジスタンスは合法であると認めているからです。

——そんな中で日本赤軍の重信房子さんが日本政府によって逮捕されたのですが、レバノンでの報道と人々の反応はどうだったんでしょうか。

オマイヤ 二点目の問いから先にお答えしたいんですけど、私の周りの人たちは、なぜ彼女を逮捕するんだと非常に怒っているということが一点。二点目は、「わあ、彼女ってすごい勇敢だな」と、みんなが感心している。というのは、こっそり日本に戻っていて、日本の中で何かやってみたいというので、彼女は勇敢だな、すごいなというふうに私の周りの

人々は言っています。

私個人がどう考えているかということでは、私はともかく日本赤軍というものをまず尊敬しているから、重信さんも尊敬しています。リッジ闘争が起こった時、私は一歳でした。その時に、何かわからないけれども、日本から赤軍というのが来てアラブの人たちのために一緒に闘ってくれたというのを聞いた時に、日本の人々全体がアラブの大義に對する連帯を支持してくれているんだというふうにすぐに理解しました。

——どんな報道がされていたかわかりますか。

オマイヤ レバノンのほとんどのジャーナリズムでは、彼女のことを「重信戦士」と敬称をつけたうえで、逮捕されたとかどうなっているとかを報道しています。日本のジャーナリストの人なんかは、岡本支援委員会というのが向こうにあるんですけど、そのスポークスマンみたいな方にインタビューに行つて、いろいろ話を聞こうとしたりはしているみたいですが、ともかくレバノンでは重信さん逮捕ということ、日本で言われてい

るみたいな「テロリストの重信が逮捕された」という論調では一切ないです。その逆です。

——これからの裁判の成り行き次第なんですが、非常に重い刑をかけることを日本の当局は考えているわけですか。そうなった場合に、アラブの人たちの日本に對する見方というのは、どのように変わってくるのでしょうか。

オマイヤ アラブにとつては日本赤軍というのは友人だし、戦いに来てくれたというので仲間みたいに考えているから、重信さんが長期刑だとか重刑とか、そう言った場合、非常に怒るでしょう。というのは、現在のガザや西岸のようにイスラエルがアラブ民衆を弾圧したり素手のパレスチナ人を二百人近くも殺したりという緊張と對立の真つ只中で、アラブの大義と一緒に連帯してくれた人がテロリストとして長期刑とか重刑なんかを受けるようになったら、それは怒るでしょうね。

レバノンの現在

——ちよつと時間が戻りますが、四人

の日本赤軍メンバーが日本に送還されたあとのレバノンの様子は、どうだったのですか。

オマイヤ 単に強制送還だけではなくて不法な強制送還であると私は考えるんですけども、強制送還が実行される直前まで、青年たちを中心に、彼らに政治亡命を認めさせるためにずっとストライキをやったりしていたところだったんです。それで、送還されてしまったというのを知ったのは、彼らがアンマン空港に着いた時点です。それが明らかにになって、四人がこっそり送還されてしまったというニュースが流れた時には、若い人を中心に、「なんでそんなことをしたんだ。日本に売り渡したな」という抗議の声をあげて、たくさんの方が首相官邸に押しかけました。

——首相がホスから、ハリリーにかわつて、レバノンの政治や生活がいまどのようになつていますか。

オマイヤ 第二次ハリリー政権が成立したので、これから自分たちの生活がますますめまろしくなるなという将来に對する不安感が、すごく社会に蔓延して

います。第一次ハリリー政権の時に、ものすごく対外負債を増やしました。その負債を返済するというので、わけのわからない税金がいつぱいできました。ハリリー政権のあとホス政権になったんですけども、ホス政権のほうはハリリーがつくった莫大な対外負債をともかく返済していかないといけないのでそれにすぐ力を注ぎました。たとえば携帯電話を買つたり使つたりするのに税金がかかっているんですけども、ホスの時代になってまたその税金がちよつと上がったんです。人々はホスの時代になって携帯の税金が上がったということで腹を立てていますけれども、もともとの原因をつくつたのはハリリーなんです。いま税金が高くなったからいまの政権はだめだということではなくて、種をまいたやつをいつも見えないかなければいけないと思います。

一言で言えば、経済も社会も政治も第一次ハリリー政権みたいなことになつてしまつたらうということ、非常に不安感があります。

——日本では、内戦からベイルートが復興しつつかあるという報道のされ方をされ

ていますが、現地の人の中では、ヨーロッパ型のかいしょッピングセンターをつくつたりということに對して、それが果たして再建なのかという疑問の音が響かっているという感じがします。

オマイヤ そういうショッピングセンターはたしかにできてはいるんだけど、私がいちばん重要だと思うのは、ショッピングセンターに行つて楽しく買物できる人が非常に少なくなっていることです。一般の人のほうは、どうやって飢えを満たすかというレベルなのに、一部の人がだけ楽しめるようなショッピングセンターができた。私の国がそういうショッピングセンターをガンガンつくつて復興したということはたいしたことじゃないと思う。いま食べられない人たちの生活がもうちよつと安定できるような、そういうところ、復興に對する力を注いでほしい。

——それはアラブ世界にも米国のグローバリズムがどんどん広がっているということなんですか。

オマイヤ たしかにそう言えると思うんですが、ただ、グローバリズムが押し寄せ

てきて世界的なグローバリズムの中にレバノンを組み込んでやうということに対して、その流れを見て、流れにはのまれないかというふうに考えているだけの人々じゃなくて、それにどうやって抵抗していくか、その流れの中でどうやってレバノンをつくっていくかということを考えている人もいます。

——いまは、イスラエル国内でインティファダが闘われているんですが、その影響はレバノンにもあるんですか。
オマイヤ レバノンの人々はインティファダアクサ（民衆蜂起）を支持しています。なぜならば彼らは自分の土地で自分たちの作物をつくる権利を奪われているからです。特にレバノンはパレスチナとは国境を接していてリアルな映像がリアルタイムで来るから、実際にどんなことが起こっているのかというのも日本人々が茶の間でテレビで見ながら、「お、こんなことが起こっているのか」ということは全く違う受け取り方をしています。非常に怒っているし、悲しんでいるし、何とか支援したいという皆の気持ちを感じています。

レバノンのマスコミはともかくインティファダの報道一色で、いてもたってもいられなくなった人々がレバノン南部国境——イスラエルの北部国境——へ行って抗議の声をあげて衝突が起こっています。イスラエルはその素手の民衆に発砲しているんです。

——日本のマスコミ報道にも責任があります。たとえば新聞記事できょう何人死んだという時に、素手のパレスチナ人が多く殺されたというのは弱められて、イスラエル人が死んだという事が強調された見出しになる。

オマイヤ 日本のプレスに要望したいのは、ともかく真実を自分の目で見て、それを書いてほしい。よく研究して、どこが発表したからとか、どこかの写真がこうだからとか、それをそのまま流すのではなくて、自分で吟味して確かめて、それを人々に伝えてほしい。それだけです。

彼らはアラブのゲバラだ

——岡本公三さんの近況は。
オマイヤ 彼は、いまは普通の市民とし

判は前よりは悪いわね。アラブの威厳や誇りをたっぷり傷つけてしまった。

——アラブの文化を知り、民衆と交流するには、どうやっていいかという糸口がないんです。

オマイヤ 最初に言いたいのは、ともかく「来てほしい」です。自分でアラブの人と対面で話してみたり見たり、まずそれをやってみてください。自分で来て、現実を自分でまず見てほしい。日本とは違ったいろいろな文化もあるし、経済の発展段階も違うけれども、同じ人間なんです。異性を愛し、家族と暮し、休日には友人たちと遊んだり。同じ人間として話してほしい。

アラブは日本みたいに産業は発達していないでしょう。近代化もされていないかもしれない。だけれども、人として前向きに生きています。そしていまやられているイスラエルの占領や横暴に対してはぜつたいに抵抗していく。そういう生き方をずっとやってきました。そういうものを実際に来て見てほしい。話してほしい。街の人に訊いてみて下さい。たとえば岡本のことをどう呼んでいるか。

——足立さんの映画はごらんになったことはあるんですか？

オマイヤ 一本か二本、見たことはあります。

——どんな印象ですか？
オマイヤ 『赤軍—PFLP—世界戦争宣言』と、それからもう一つは朝鮮の人が出るやつで彼自身が出演している『絞死刑』。あの『絞死刑』は非常に良かったと思うわ。あれをレバノンの人みんなが見たいわ。朝鮮の人に、すごくみんながシンパシーを持っているから。自分が付き合っている友人の中には映画業界で働いていた映画関係の人がいます。『絞死刑』みたいな映画の上映会をやりたいとか、そういう話も出てたりするんです。

——日本とアラブの民衆同士の交流というのが非常に大事だと思うんです。オマイヤさんから日本人々に対して何か訴えたいことがあれば、言っていた方がいいのですが。

オマイヤ まず第一に、私たちアラブは平和を求めています。けれども、その平和というのは、「さあ、これが平和だ

て暮しています。出掛けて行ったり、お客さんに来てもらったりしながら、アラブの人の中で生活しています。

——政治犯として亡命が認められた彼に対して、日本は殺人犯だということ逮捕を求めているんですが、それに対してアラブ世界の人たちはどういうふうに見ているでしょうか。

オマイヤ 岡本さん以下五名が逮捕された時に、日本政府がすぐ引き渡し要求を出してきたことは、アラブの尊厳を傷つける行為だったわけです。アラブの民衆の中には、チェ・ゲバラが南米の人たちにとつて愛される英雄であるように、アラブのチェ・ゲバラは岡本さんという思いがあります。イコンのような形で、アラブの戦いのシンボルが岡本だということ。アラブは孤立しているのではなくて、世界の人々が連帯している、その代表が岡本だぞと。岡本バッジをつけたりしている人もいます。

四名の強制送還があるまでは、アラブでは日本の評判はよかったです。だけれども強制送還のあとは、非常に誇りを傷つけられたという受け取られ方で、日本の評

ぞ、これをやれ」というものではない。私たちが望む、私たちが考える平和を実現したい。だけれども、もし敵が来て子供を殺したり、土地を奪ったり、家を壊したり、そういうことをしたら自衛のために戦います。抵抗します。アラブがおこなってきたのは、それなんです。

日本の人々にぜひ伝えたいメッセージというのは一つで、いろいろニュースを読むでしょうけれども、それを「ああ、そうなんだ」というふうに嚙呑みにしないで、ともかく自分の目でしっかりと、なぜそうなっているのかというところをよく考えてほしいし、見てほしい。それだけはやってください。

——どうもありがとうございます。

(以下略) 桐野 謙 二〇〇〇年二月三〇日

私が日本赤軍メンバーであり続ける理由

山本萬里子
Yamanote Mariko

一、日本赤軍に出会うまで、私は個人主義者でした。

1、私の育った環境

私の育った家庭は、貧しくもなく、豊かでもなく、ともかく私立大学に行かせてくれる程度の生活水準で、私は、当時の政治的背景の中で、安保反対の闘争に参加したり、反ベトナム戦争のデモや成田の空港建設反対集会に参加したり、学園闘争や労働争議にカンパすることはありましたが、政治的組織活動に加わるまでに、私の問題意識を煮つめることはありませんでした。

私が小学校四年生の時に、父母が離婚し、高校三年生の時に再び縁をもどすという家庭環境の中で、子どもの頃は、母の悲痛を身近に見ながら育ちましたので、当時一般的であった結婚という形で、男に依拠して生きる女の生き方を否定し、父や母の世代の価値観に反抗し、私は私ですと、自己の生き

方を確立させてゆくことに、どちらかと言うと、問題意識の重点がありました。

誰かに言われて、それに従うとか、社会的通念に沿うというやり方ではなく、自ら選びとり、それがひき起こす結果について、他人のせいにする事なく、自ら引受けて責任を取ってゆくという生き方でした。同時に、ひとそれぞれに生き方があり、あなたはあなた、私は私、個々の自由に重きを置いていました。自分の希みを貫く時に、特に一番身近な、家族に対して、暖かみのない、突きはなした身勝手さがあったのではないかと思います。

2、その延長で、フランスで暮らすようになって、交友関係に、国際的な広がりがありました。基本的信条に変わりありませんでした。

当時の私にとっての、革命家のイメージというのは、夢の

ような理想に向かって、自己犠牲的に闘う純粋で、特異な人々で、素晴らしいと思うが、自分自身が担うことはとても無理で、自分と離れたどこか別世界の人たちであるかのように考えていました。それで、そういう人々を支援することに躊躇しませんでした。自分にできることを担うことによって、困難な立場にあるそうした人々を援助できるということに喜々としていました。

それを裏返して見ると、自分が支援している人達がどういう考え方をしているか、どういう目的で何をしようとしているのか、ということについて、自分の問題として突きつめて問わず、あいまいに放置していたということでもありました。

二、日本赤軍との出会い

フランスで逮捕されて、いくつかの国から国外追放を繰り返されて、初めてレバノンへ向かう時、私の胸をかすめていたのは、何の前触れもなく、私が彼らの所へ行くことが、彼らにとつて迷惑ではないだろうかということでした。

しかし、案に相違して、比較的簡単に日本赤軍の同志たちに会うことができて、私は暖かく迎えられました。

前述のように、私は、日本赤軍について、よく知り、自分の考え方と突き合わせた上で、支援していたというわけではありませんでしたから、赤軍とは何なのかを知るところから出発しなくてはなりません。とまどうことが無か

ったわけではありません。様々の紆余曲折がありました。

日本赤軍という組織が優れているのは、自分たちが、一貫して正しかったとか、常に先頭で前衛としての闘いを担ったといった自己賛美と無縁で、自分たちは、間違いを犯すこともあると認識し、敗北を誰そのせいにし、組織は正しかったと自己肯定するのではなく、組織全体の敗北ととらえ、その総括から、正しい闘い方を導き出し、自己を否定する力で自らを変革してゆく組織であるということです。

四半世紀におよぶ日本赤軍の同志たちとの共同活動や共同生活の中で、様々の敗北を共に総括し、日本赤軍という組織は変革し続け、メンバーそれぞれも変わってきました。いいかえれば、日本赤軍との出会いを何度となく繰り返し続けてきたということです。

私に関して言えば、それまでと明らかに違ったのは基本的に以下の二点です。

(1) 革命や革命家に対する幻想を比較的早い時期に取り除くことができたこと。

ひとつには、同志たちとの共同生活の中で、それぞれ、いろんな失敗や敗北を率直にとらえ返し合う中で、相互の弱さや欠陥も含めて、知り合えたからです。矛盾に満ちた今の世の中を変えたいという志がある限り、そしてそれを実現するために自分を変革してゆく意志がある限り、誰でも革命を担えるということなのです。

ふたつめには、パレスチナ・アラブ人民の闘いの現実がありました。イスラエルが攻めてきた時に、それに対して銃を取るのには、特殊な人たちはありません。野菜を売っているお兄さんだったり、パン屋のおじさんだったり、パレスチナのインティファダの中では、今や子どもたちが、その先頭になつて、投石で闘っています。

(2) 個人主義ではあり得ないこと。

(略)

三、日本に戻って、日本の現状を見る

取り調べの折、刑事は、東京湾の橋や新宿の高層ビルなどの絵はがきを私に見せて、日本は良くなったし、発展した、もう革命は必要ないというような話をしました。刑事が本当にそう考えているのかどうかはわかりませんが、もし本当にそう考えているとしたら、情けないことだと思いまし

た。

確かに物質的には、多くのものが人々にゆきわたったり、生活が便利になったということはあるかも知れません。

しかし、いじめや不登校の問題、ひきこもりやストーカーの問題、親殺しや子殺しなど、私が日本に居た頃には考えられなかったような犯罪や病的社会現象が増えています。これが豊かな社会と言えるのでしょうか？

何よりも金を優先する社会の中で、人間らしい人と人との関係が破壊され、失われてしまったのではないのでしょうか？

四、私は、日本赤軍の同志と共に、人間が人間として、生きてゆける社会を創り出すという事業に携われることに誇りこそすれ、悔やんだり、恥じたりすることは全くありません。

「山本氏は、七四年、「ヨーロッパ蜂起計画」に関連していたとして、パリから国外追放となり、九七年、足立正生氏らとともにレバノン当局に拘束され、二〇〇〇年三月、日本へ送還された」

兵士たちのメモリアル

ガッサン・カナファニー

アラブ文学を語る時、いまだにまず第一に語られる「ハイファに戻って」、「太陽の男たち」の小説家ガッサン・カナファニー。

重信らがレバノンについていた71年当時、カナファニーは、PFLPのスポーツスマンでもあった。重信房子の最初の著書「わが愛わが革命」には、その姿が生き生きと描かれている。カナファニーは72年7月、自動車ごと爆破されて殺される、享年36歳。赤軍によるリッダ空港銃撃戦に対するイスラエルによる報復の一貫であった。62年の作品「太陽の男たち」は、クウェートに密入国のため給水トラックのタンクに固境を移動する間だけ、身をひそめるパレスチナ労働者を描く。運転手が保官たちのおしやべりにつきあわされて

いる間に、炎暑のさ中、彼らはタンクの中で死ぬ。

それは、当時のパレスチナ人の象徴そのものであった。

アッフルルハイズラインはしばらく車のかげに立ちどまり、目撃者のいないことを確認した。それからタンクの上に昇っていったが、タンクはすでに湿り気をおび冷たくなっていた……ぎざぎざの錠を外し、鉄の蓋を引きあげると、とぎれとぎれのがあんと響く音がした……彼は両腕を支えに、素早くタンクの中に身を沈めた……最初の死体は冷たく硬直していたが、彼はそれをかきあげ、頭から先に給水孔の外に出し、死体の両脚を持ちあげてから上に投げだした。タンクの縁をこる鈍い音のあ

とで、死体が砂の上に落ちるとさつという音が聞えた。二番目の死体が握りしめている手を鉄の柱から引き離すのは容易な業ではなかったが、これが終ると両脚をもつて孔のところまで引きずっていき、肩にかついで外に抛り出した……真直ぐに硬直した死体は、地面でまたどさつと音を立てた……三番目の死体は、前の二つよりはるかに仕事が簡単だった……(略)

運転台の扉のところで彼が片足をもちあげたとたん、突然ある考えが脳裏を襲った……彼はその場に立ちつくしたまま、何かを試み、何かを口しようとした……叫び声をあげようとしたが、すぐにそれが愚かなことであると気づいた。車に乗りこもうとも試みたが、その気力もなかった……頭もぎれそうに痛み、それまで身に覚えていた疲労が一気にそこに集中した。かのように、ひどい耳鳴りがした。彼は思わず両手を頭をかかえ、この想念を追い払おうと髪の毛をむしり始めた……だがそれは不可能であった……騒がしく巨大な想念は微動だにせず、彼の脳裏に座を占めたままだった。後を振りかえ

って死体を棄てたあたりを眺めたが、そこには何も見当らなかった。振りかえってみたところ何の益もなく、この想念はかえって燃えさかり、彼の脳裏を焼きつくし始めた……突然彼はもはやこれにさからうことはできぬと悟り、両手を垂らしたまま暗闇の奥を凝視した。

「しだいに想念は消えていったが、その去りぎわに彼の口について出たのはつぎの言葉だった。

「なぜおまえたちはタンクの壁を叩かなかったんだ……」

彼はくるとと身体を一回転させたが、地面に倒れそうになった。それから車のステップに足をかけて運転台に戻り、ハンドルに頭をもたせかけた。

「なぜおまえたちはタンクの壁を叩かなかったんだ。なぜ叫び声をあげなかったんだ。なぜだ……」砂漠が突然いつせいに俯した。

「なぜおまえたちはタンクの壁を叩かなかったんだ。なぜだ。なぜだ。なぜだ。」

「太陽の男たち」より/黒田寿郎訳

2000年・ベイルート・春

「国際誘拐団事件」についての経過報告

足立正生

Arachi Masao

1 プロローグ

「1」2月下旬…日本警察庁が、刑期終了にともなう日本赤軍5名の身柄引き取り―日本送還の実行のため、準備、実行体制を取っている、と発表。(日本の新聞記事の内容を、差入れに来てくれた救援関係者から伝えきいた。)

その内容の主な点は、1)警備を含む護送部隊を、東京の警察機動隊員など200名で編成し、2)レバノンの隣接国の空港に、JALなどのチャーター機を待機させておき、3)そこで身柄引き渡しを受けるといふもの。

「ベイルート5」は、このニュースは、日本政府による、レバノン政府に対する執拗な身柄引き渡し要求のための示威キヤンペーンの一つ、と判断した。日本政府ならやりかねない仕方だが、レバノン政府には、とても賛成しかねるものだろうとした。但し、隣接した空港としては、国際情勢から考えると、アテネ(ギリシア)、ニコシア(キプロス)、そしてアンマン(ヨルダン)になるだろう、とした。

「2」3月1日…レバノン政府が、「日本政府への身柄の引き渡し拒否」を確定した、と記者会見で発表。その内容は、日本政府が示した、日本赤軍5名の身柄引き渡し理由を司法省で検討し、閣議で討議、結論したもので「要求の根拠理由としては不十分」と情報相が説明発表した。同時に、亡命承認問題は、亡命問題特別評議会が、現在検討中で未定、と付け加えた。

「ベイルート5」が拘留されている刑務所内では、この決定を支持する大多数の囚人たちが、祝賀の合図に壁をたたいてくれた。「ベイルート5」も、すぐ、現地の支援運動「岡本公三と彼の同志たちの友人の会」と日本の「帰国者の裁判を考える会」「ウナデイコム(レバノン・日本市民衆連帯)」へ喜びと感謝のメッセージを送った。

同時に、「ベイルート5」としては、これで、日本への強制送還の可能性が公式レベルでは無くなり、第三国への渡航(レバノン領からの追放)ないしは、亡命の承認の可能性が生まれた、と判断していた。

「3」3月3～5日…在ベイルート日本大使館の館員が、「ベイルート5」への面会を申し込んで、刑務所に来た。

ルミエ中央刑務所の4人は、保安係長・既決囚区長を通じて拒否の回答をし、彼らの面会目的と理由を、後で聞いて貰うように頼んだ。後日の保安係長の話では、大使館が質問したがった内容は、1)各人の健康状態、2)衣食は十分かどうか、3)領置金はあるか、幾らか? とい

う、一般的なものだった、という。

バーブダの女子刑務所では、看守婦長の悪意で、山本萬里子は突如館員に面会させられ、写真もとられたという。しかし、質問には回答しなかったし、撮影したフィルムは違法行為のため他の看守たちに捕獲され、処分されたという。

但し、両刑務所は、「ベイルート5」に代って、大使館側の質問には、全て回答した、という。

「4」3月6～14日…「ベイルート5」は、レバノン政府に申請していた亡命の承認へのOK回答を早く出すように要望する、獄中ハンガーストライキを申し合わせて、6日に開始した。刑務所規律の違反行為であり、すぐ、処罰房に放り込まれた。

刑務所側及び政府に対しては、「要望スト」であり、それ以上ではない、と説明した。岡本公三を長期間一人で房におけないので、3日目から私はハンストを中止した。

獄外では、「友人の会」のメンバーたちが呼応して、シット・インとハンストを共に開始した。

獄中では、刑務所側が検事総長のメッセージとして、毎日、ハンスト中止を指示してきたが、ていねいに断わり、戸平和夫と和光晴生は、14日まで、処罰房でのハンストを続行した。他の囚人たちの参加も断わり続けた。

「5」3月8日…検事総長の仲介で、「ベイルート5」を代表した私が、西独政府側代表と会見討議した。これは、検事総長の要請でもあり、「第三国への亡命の可能性」打診活動の一環であると言われて行った。会見には、ラビーア・カッドラー判事が立ち合い、「レバノン側は、両者の会見を仲介するのみ、一切の強要も干渉もしない」とし、会見をうながした。

西独側は、30年のキャリアがあるとい自己紹介する保安警察反テロ責任者若き女性外交官の2人。彼らの提案は、日本赤軍の協働者たちの「テロリスト活動の内容」について情報提供するなら、亡命と以降の安楽な西独での生活を保障する、というものだった。反テロ責任者は、紳士的だが強引に、一つでも何か聞き出さないと、パレスチナ闘争の友人名やその著

書を語りはじめ、「知っているか？」と早速論議をふっかけて来た。私は、「情報提供との交換条件なら、西独への亡命には、興味がない」と拒否回答した。西独側はねばろうとしたが、とり合わなかった。

検事総長、ラビニア判事と、「拒否回答」の確認をし、仲介努力を感謝して辞した。

【6】3月15日…シリアのトラース国防相が、イスラエルの会議成立のための前提無視で中断されていた「シリアーイスラエルの和平交渉再開は間近い」と発表。突然の発表に、交渉にむけた水面下の動きが激しいことが、窺われた。

「政府と対立感情を生まないためには、これ以上は無理」と総括し、ハンストを中止（ドクターストップ）した。戸平、和光が処罰房からもとにもどり、体力回復を目ざし始めた。

【7】3月16日…シリアー米国の首脳会談が開催合意された、とシリア側が発表。

これは、インド訪問中のクリントンが、帰路ジュネーブに立ち寄り、アサド大統領

領とそこで、和平交渉再開のための条件固めを行う、という。クリントンは、イスラエル政府の立場をしばしば代行して来たし、この会談が成功すれば、中東和平交渉は、シリアーイスラエルだけでなく、レバノンーイスラエル交渉も進行することになり、アラブ全体に、大変化をもたらすことになる。

「ベイルート5」としては、シリアの主張する包括和平案の実現を断固支持し続ける立場にありながらも、同時に、シリア、レバノン内の親米日勢力が、首脳会談の成功への条件づくりに「ベイルート5」の存在を追いつめる仕方もあることを、可能性として考えたりした。しかし、全体情勢としては、当分の間は、私たちの問題にそれほど影響しないだろうとも考えた。

2

「アドハ」の日に、襲撃Ⅱ

誘拐団の第一班 登場！

【1】3月17日…回教徒にとつては、メッカへの巡礼スケジュールが前日に終わり、最も聖なる祝祭「アドハ」の日だっ

た。全ての公式事業は、アドハのお祈りを中心にするだけに制限され、首相をはじめ主だった閣僚、省庁の高官は、回教寺院で宗教行事に参加していた。TV放送は、その様子を早朝から、えんえんと流し続けていた。公的な祝祭日スケジュールで、刑務所の面会も、禁止されていた。

のんびりとした休日なので、私たち4人も、近隣の房から、差入れのお裾分けとして届けられるお祝いまんじゅうを食べ、昼食は、恒例の「ツケうどん」をやるうと、ツユづくりと熱湯わかし（スパゲッティ）をゆでて「うどん」にする）をはじめた。

【2】同、1時半…突然、私たちの房の扉が引き開けられ、数人の看守と一緒に既決囚区の区長と保安係長が入って来て、保安係長が「今から他へ移動する。数日のことなので、最低限の必要物品を荷造りして扉外へ出す。荷物は、自分で持てる小バッグ1個分。用意時間は10分！」とオーダーした。区長と保安係長が直々現われた点、二人の表情がいつもと違って極度に緊張しているので、もっ

と様子を知らするために、「どこへ行くのか?」「何日くらいか?」と訊くが答えない。そのかわりに「岡本公三の荷物はどうだ?」と訊き返し、荷造りを急がせてた。この、刑務所側の態度に極めて不

自然なものを感じたが、オーダーに従った。

4人が全員シヨルダールバッグをかつぐと、既決囚棟出口へ急がせた。ビルの外で待つ保安係が横の領置き場に案内、

区長の立ち合いで一人ずつ貴重品と領置残金を封筒で手渡され、順番に護送トラック（鉄箱）に窓がついているだけのものに乗せられた。既決囚の多数の房から私たちが乗り込む姿をみた囚人たちが、「どこに行くんだ?」「がんばれ!」「気をつけろ!」と声援を送ってきた。4人が乗り込み終ると、外から鉄箱が施錠され、正門から護送車は、刑務所の外へゆるゆると走り出た。——ここまでは病院行きや裁判などで司法省へ行く仕方と変わらず、いつも通りである。従って、4人は、「移民局への移管か?」しかし、「何故こんな祭日にやるんだ、誰も働いていないだろう。」「とにかく、これから私たちは、1・4に、公三と分離される可能性がある。公三を守って身をなさないようにしよう。」と話し合っていた。

ゆるゆる走っていた護送車が止った。いくらか走っていないので、まだ刑務所横の塀にかこまれた坂道である。

小窓から外をスカシ見ると、装甲車が、そして完全防備のレンジャー部隊と特別車輛が見えた。

「特別保安隊だ。移民局行きじゃないぞ



ッ。やっぱり、やられる可能性が大だッ！」「じゃ、閉じ籠もり戦術しかないぞ！」と言いつ合っている間に、鉄箱の錠が開けられた。ドアの外には、一たん姿を消していた区長と保安係長が立ち、その横には、刑務所長まで登場していた。そして、何やら、特別部隊と激しく口論談判しているようだ。やがて、所長が鉄箱内に入って来て、「全てはOKか？」と訊くので、「私たちは、どこへ送られるのか？」「特別部隊はこの者か？」と問いつ返した。「まあ、待て」と所長は、私たちが外へ出ようとするのを制し、新しい部隊に私たちを中へ押しもどさせた。その部隊は、「開始せよ！」というオーダーの声で、「あらためて、一人一人の身体検査をする。」と宣言して、シャツ、ズボン、靴までぬがせてチェックし、バッグ四つの中も一つ一ついいねいにチェックした。鉄箱の中は、私たち4人と、一人につき3人はチェックする部隊員が入り込み、満員の状態になった。

「よし、終った者から乗り換えさせろ！」のオーダーで、和光、戸平、岡本、私の順で鉄箱から出された。その途端、「よ

し、かれ！」と一人一人がはがいて締められ、後ろ手錠をかけられた。

特別護送車が横づけにされており、戸平、和光が多少の抵抗をしたが、それに積み込まれた。岡本が2台目の特別車に乗せられようとした。私が「岡本を一人にするな！一緒でないとダメだ」と隊員をふりほどいて、「公三、行くな！」と叫んだ。特別部隊の指揮官らしい平服の男が、「この車は一杯だ。彼は荷物と一緒に2台目にする！」といい、「ではオレも公三と2台目に乗る！」と私が押し問答していると、公三が「葉だッ、葉をくれ！アナテンソール！」と叫びだした。「見てみる！お前のせいだ。お前は何も分かってないッ！公三をいじめな！」と私は公三と一緒に2台目に乗ろうとした。一瞬、反撃されて呆然とした隊長は、「俺が全て知っている！こいつを1台目に乗せろ！」と叫び、隊員たちが寄つてたかり、かねて指揮されていたのか、公三を除く3人に、後ろ手錠足かせ、目かくしを手早くはめ、特別車の暗箱風のドアをガチャリと閉めさせた。この間、約15分。私、和光、戸平は、そ

れまでの前手錠を後ろ手錠の数珠つなぎにされたまま身動きできなくなった。特別車がやがてスタートし、公三とは、以降会えなくなる。……2時半頃だったと思う。

「3」——伴走する装甲車輛の音、車の走り方を耳で探りながら、3人は、落ち着いて来て、怒りの叫び声から、情況把握を一致するための会話を活発化させた。「隊員たちの一部が、飛行機、1台は別」と言っていた。我々は空港行で、公三は別だろ。」「この扱いは、強制送還を決めたやり方だ。メチャクチャしてもいい、という方針だろう。手錠が食い込んで痛い……」「まあ、もう暴れても仕方ないかも知れない。残念だが、レバノンの決定だ。」車のスピードが遅すぎる。登り坂なら、女子刑務所経由、飛行場か？……他は考えられない。

やがて、ジェットエンジンをふかしている音が近づいて消えた。もう間違いない、ペイルート国際空港に近づいたことが感知できた。厳肅な「送還」が実行されている事実がひしひしと感じられた。「もうこうなったら、覚悟を固めて、最

悪時の送還に備えよう。」「一緒に、最後まで頑張りよう！」「公三も、別扱いで送り返される可能性がある……レバノンに亡命を認められるとしても。」「公三は、亡命を承認されるだろう。バランスとして、4人が送還だ。山本も連れて来られるにちがいない。」「とにかく頑張りよう！」

「4」——暗箱車がとまり、兵士たちが乗り込んで来て、足かせをはずし、二人がかりで両脇に腕を入れて、私たちを運び出した。わざわざ、一たん目かくしをはずし、連行して来たのが、空港であること、空港のはずれにあるVIPルームの裏部屋であることを私たちに示した。隊長と兵士たちが、私たちが驚くのを期待してのぞき込んでニヤニヤしていた。「やはり空港だ。このまま日本行きだな……」と、私たちがうなずき合っているのに、ニヤケた隊長たちは再び目かくしをし、3人を裏部屋の床へ放り投げ、後ろ向きの数珠つなぎを更に固く締め上げた。金具が肉に食い込み、ウツ血で掌、手首が痛み続けた。

「強制送還は、これで間違いない。しかし、以前にも送還されたが、こんなひど

い扱いは無かった！」と主張せざるを得ないものだった。

私たちは、「責任者は誰だ！」と見えないので声だけで質問し、「何の用だ！」と近づいて来た英語の出来る相手に、手錠の輪を少しゆるめると、3人数珠つなぎで床にも座れない姿勢を床に座れるように要求した。「必要ない！」と取り合わないで、私たちは繰り返し要求した。相手は、「よし、ちゃんと調べておけ！」と最後は妥協した素振りだ。「俺は出かけて来る」と足音高く去った。兵隊たちがやって来て、私たちを無理な姿勢で床に押えつけた。その分、更に手錠が手首に食い込んだ。

「無理だ！手錠をゆるめろ！」と叫ぶと、手錠を調べるフリをして更にきつく締めた。——つまり、隊長は言葉での回答とは逆に、合図で、更に締め上げると命じたのだ。

私たちは騒ぎ続けた。30分もしただろうが、数人が再び手錠に手をかけて、ほんの少しゆるめ、隊長「これで十分だ！」と私たちを床上に押さえつけた。突然連れて来られたばかりらしい山本が、「足

立は病人だ。何のための拷問だ！止めて！」と叫んだ。隊長は「お前もやられたいらしいな！」とうそぶいて、取り合わない。そして、兵隊たちと強がるためか、大声で笑ったり、談笑したりし始めた。話の内容は、昨日、誰と会ったとか飲んだとか、全くガキ話のようだ。

とにかく、私たちは、山本を合流させられた、とそれで分つたので小声で情報交流を始めた。

「公三は、別扱いで分離された。彼だけでも、亡命許可が出ることを期待しよう。目かくしされていらないのなら、出来るだけ周りの人の動きをみて、教えてくれ。」と私はたのんだが、「私も目かくしされている。前手錠が救いだけ……」との状態だった。しかし和光が「汗で目かくしが少しずれてる。一角から周囲が少し見える。全て報告する！」と、小声で伝えた。私たちの声がモレ聞こえたのか、「黙れ！会話も禁止だ！続けるなら、テープを口に貼るぞ！」と叫んで、おどかして来た。私たちは、「うるさく騒いでいるのは、お前たちだ！静かにしろ！」ときりかえすと、直反応して突き

ころがされた。

そうこうしている間に、ガキ話ピタツと止んだ。和光が小声で、見えるものの説明を開始した……。「6人くらい入って来た。将校も居るようだ、全員が敬礼している。空港係官らしいのも、また入って来た。……こちらを見て打合わせている。書類を見て、オーダーしてる。レバノン側の渡航証をつくるんじゃないか……」「つまり、この部隊は、移民局の者だ。」「他に居ないか？ 日本大使館員はいないのか？」

「大勢いるから、陰になってるかも……、また大勢入って来た。平服が多い。しかし、あの小男は日本人かも知れないが……分らない。」

和光の実況中継で、見物に来たと思われる者、空港関係者、書類手続きの進行その他を把握できた。また、私たちを捕捉警備している者も平服の4人だけで、残りの兵隊は、特別車（暗箱）とともにビル外に待機していることなど……が分った。

後ろ手錠の苦しさ痛さが激しいので、上官らしい制服が来た時にもう一度騒ぐ

「後ろ手錠のまま座れるわけがない！」と抗議すると、「じゃあ、これでどうだ！」と頭を前座席に押しつけ、後ろ手錠をぐいと力一杯引きねじり、斜め角度で押さえつける。「やめろ！ 痛い！」と暴れると、「テープで口をふさげ！」と前の座席が叫ぶ。周りの人々の話し声が静まりかえった。

「いいか、今度騒いだら、口にテープを貼るぞ！」と、ガキ平服が、私にというより、周りの人々を意識して強がって言う。

「二人を数珠つなぎにしたまま座れる訳ない！ 一人一人にしろ！」と、戸平の声が叫び、和光もアラビア語で抗議している。私も「おーい、大丈夫かッ！ 無理させるなら、暴れても抗議しようッ！ いいかッ！」と叫ぶと、私を一人がかり

ことにした。制服は「何だ？ トイレか？」と訊いて来たので、「ちがう。この子供たちがうるさ過ぎる。静かにさせる。そして、この手錠を少しゆるめろ。決して暴れない。手が傷つき始めている。……こんな状態でお世話になったレバノンにさよならをしなくはない。こんな下品な子供たちが、最後に会うレバノン人だとしたら、悲しすぎるじゃないか。」

上官らしい制服は、警備側に、何か伝えようで、ガキたちは静かになった……が、逆に陰湿に、「クチャクチャ」とガムを噛む音を二人がかりで耳に吹き込んだり、靴をばたつかせて、鼻先にホコリを舞い上げらせ咳き込ませたり、嫌がらせを続けた。これらを受け流しながら、「私たちを『強制送還』以上の仕方、日本政府へ身柄を渡すことで、何らかの野心を満足させようとしている部隊の兵隊のすることだ。これは、上から下まで買取された結果を、示しているだけだ。もう、取り合わないことにしよう。」と私たちは決めた。

そして、彼らの一人が、和光の目かくしがズレているのをみつけ、もともにもど

で押さえていた男たちも、戸平たちの側に何か助言し、「ちゃんとするから、静かにしろ！」ととりなしておいて、ごそごそしてる。和光が「みてみる、これでいいじゃないか！」と悪態をついて、こちらも静まった。

【2】——やがて、機内アナウンスが「6時半発MEA、〇〇〇便、アンマン行間もなくスタートします……」と告げた。静まっていた機内の人々が、がごそとフライトする準備を始めた。「そうか……やっぱりアンマンか……アンマンには、もう日本政府側が待ってるんだろ？」と、押さえつけてる男にわざと大声で訊いた。男は「私は何も知らない。」という。「いや、そのために、お前たちはこのアドハの祭日をねらって、誘拐してるんだ。日本政府に私たちを渡すんだろ！」と更に言うと、男は「ノーッ！ ノーッ！ ノーッ！ これ以上声を出さずなら、テープだッ！」と慌てて両掌で、私の口をふさいでしまった。私も、再び静かにすることにした。飛行機が動き出したから、やがて、エンジンが最大にふかされ、身震いしながらエネルギーをためて、走

りだした。

した。

その「VIP裏部屋」には、約2時間半、閉じ込められていた。1度だけ、順番にトイレに連れて行かれ、便器の前で小便をする間だけ、片手錠にし、目かくしをはずされた。連行していた二人の私服隊員は、相かわらず、カウボーイキッドをきどり、ガムを大口で噛み、ニヤニヤと照れ笑いを続けていた。私は、彼らの人相を決して忘れることが出来ないだろう。

3 ベイルート出発

【1】——6時頃。どどッという感じで、大勢の部隊が入って来たらしいことが分った。VIP部屋のドアというドアが開けはなれたのか、ジェット機のエンジン音が急に部屋中を満たした。部隊の掛け声も、ほとんど聞きとれない。

突然、両側から抱え上げられ、和光、戸平、私とはじめてバラバラに、だが後ろ手錠にされ連れ出された。途中、何度か抱え上げられながら進んでいくのは、エンジン音に向ってである。号令と「ナ

機が上昇していくのを感じながら、気分は落ち着き始めていた。感情が、怒りを通り越して、空虚感に満たされ始めたのである。レバノンに生きて来た30年の想いが、1枚1枚の画像シーンのように次々と浮び出て来はじめた。私は感傷的になつてる場合ではない、と自分に言いよかせ、どうも公三は居ないようだが、どうしたろうか？ と心配してもどうしようもないのだが、そちらに想像力をむけ、そう言えば、刑務所を出る時から、一滴の水も飲んでいないことに気づき、男に「水をくれ」と言った。もちろん、答えは「ノー」だった。

【3】——何故、レバノン移民局の特別部隊は、ここまで乱暴に、目かくし、後ろ手錠などの過剰警備をする必要があるのか？ 私たちが、空手の達人だとも思っただろうか、いや、秘かに同行している日本大使館員たちの姿を見せないためか？ 公三を葉ツケにして一緒に連れて来ているのを見せないためか？ とにかく、レバノン移民局は、刑務所

から私たちの身柄をもぎとるように引き取り、はつきりと、「囚人」としてではなく、「捕虜」として取り扱っている。これは「モノ」として取り扱っている。これは、移民局全体の一部が、自分で、我々に敵対する立場に立ったことを宣言している、と受けとめざるを得ない。再び、レバノン保安警察が、不自然な姿を見せている。丁度3年前に、国家保安局部隊が私たちを逮捕し、その不純な動機と、買収された保安長官の独走行動が軍法会議で「有罪」と裁かれ軍籍を剥奪された時と、「同じケースなのではないか？ 今度はゼネラル・セキユリテイ（総合保安局）の誰が尻尾キリにされるんだ？……」などと、どうでもいい事の方に想像力を働かせることにした。

ペイルトーンマン間は、飛行距離は、約1時間半。対イスラエルの戦争体制の、レバノン・シリア国境地帯を迂回して北上し、シリアに入ってから真っ直ぐにヨルダンまで南下するので、最短距離を飛ぶコースははたして、約2倍の時間がかかる。

4 アンマン着 II 『誘拐団』の 第二班・日本政府登場！

【1】再び、機内アナウンスで、アンマン着が告げられ、機は、イスラエル機が追跡してないのを確認するために飛行場上空でぐるぐる旋回した上で、下降し始めた。滑走を終った機内では、早々と人々が立ち騒いで、出口に急いでいたが……それらの騒音が止んでしばらくすると、またもや、ドヤドヤと大勢が近づいて来て、何やら確認を耳打ちしていたが、私は、ぐいーつと、再び宙ツリに運ばれはじめた。

「自分で歩くから、地に下ろせッ！」と言つと、しばらくは、そうするが、段差のあるらしき所や、ステップを降りるらしい所は、やはり宙ツリをくり返す。そこで、しばらく待たされていたが、「よしッ」と合図があつて、両脇が抱えられ、小走り機内を出て、ステップもまた急いで運び降ろされ、立ちどまった所で、いきなり目かくしが、むしり取られた。

5時間以上の暗闇から解放された、視

界にとびこんで来た光景は、夕暮のアンマン空港のエプロンで、眼前には、一団の人々が、こちら向きに並んで立っている。全員、緊張で引きつった顔つきだ。その人々の中心付近で、一きわガチガチに固い姿をした紺色制服に制帽の男が、突然、カン高い声の英語で、「お前は、渡航証もなく、不法にヨルダン領に入ろうとしたので、追放する！」と叫んだ。私は「私が望んでやった事ではない！ レバノンに送り返せ！ この後の飛行機に連れもどせ！」と反論した。制服男は、「以上、本人に通告した、終り！」と取り合わない。こちらと眼を合わせないため、そつぽを向く。すると、そのすぐ右隣りにいた眼鏡とオールバックの日本人が「はい。ここに、日本政府が、あなた方の渡航証を今発行しました。通告します。終り」と、これはまた、蚊の鳴くような高音で小さく叫び、さーと人垣の後ろへ逃げて行つた。「なんだ、これらは？」と思つ間もなく、私は、機内から運び出されたと同じように、両脇から抱えられて、エプロンを小走りに運ばれ始めた。それにつれて、人込みの列が左右に

割れて、男たちが走ると並行して走つて来る。その男たちも一様に、空港労働者が着る紺色の上つぱりをはおっている。そして、皆、腰には銃をぶらさげているものもいた。全て、空港警備員だ。

私を抱えて走る集団が一直線に進む前方には、ダエロフロート「機が、搭乗口を開けて待つていた。私は、周りが全てアラブの人々だと思ひ、思ひきり大声のアラビア語で叫びつづけた。「私は日本赤軍だ！ こんなことをしてお前たちは恥かしくないのかッ。ダエロフ（アラビア語で「恥ずかしい事だぞッ！」）行列して走る警備員たちが、ニヤニヤうなずいてみせる。両脇を抱える男にも言うので、左右の男たちは、「そうだとさうだッ」とうなずいて見せながら、その分、気合を込めて足を速め、一息に「ダエロフロート」のステップも昇り上り、扉口に待ち構えていた「ダエロフロート」のロシア人スタッフ、通路わきにたむろして、こちらを身構えて窺っている日本人たちを尻目に、そのままドローツと機内の後尾へ走りつづけた。その後尾座席の列の中に、既に和光、戸平、

山本が両側を日本人に囲まれて座席に座っている姿が見えた。

私の後ろ手錠がはずされ、ペイルトーンから来た、その二人の平服の男は、挨拶もせず外へ小走りに逃げ出して行つた。ついて来ていたアンマン空港の作業衣の男に目かくしを投げつけて、「お前たちのモノだッ」と言つと、その男も「サンキュー」と走り去つた。これが、誘拐団の第一班、レバノン部隊の任務終了で、第二班の日本人部隊とロシア人スタッフへの引きつぎの合図だった。

【2】第一班とすれちがいに、サツと私の両脇に、日本人が立ちふさがり「どろぞ」と座席に押し込む。見わたした機内の通路という通路、非常ドアのある四隅、それらに二人ずつの日本人が立ち、戸平、和光、山本の両脇をそれぞれ固めている。「なんだ、これは！ お前たちは何者だッ！ 何の権利でこんな事してるッ！」と訊くが、答えはない。ヘッドホーンをつけて、小さく機内のどこか連絡しながら指揮をとっている猿のような小男がいた。「おいッ、お前が指揮をとってるなッ、どこのモノ

だ！」と訊くが、手で私を制してはなれながら、小型マイクに何かしゃべり続けて、元の位置にもどり、男たちにサインを出す。男たちが、ていねいに力づくで私を着席させた。

ジェットエンジンが強力なタービン音を上げ始めた。男たちが、多少身構えて、所定のポジションに立つという具合に並んだ。この男たちのうち、私たち4人の側で密着体制をとっている班の12人くらいはポロシャツ、ジャンパーなどの平服で、山本についている婦警らしい一人と、他の20人くらいは、例の紺の制服——刑事への官給スーツだ。「やはり警視庁の刑事が中心の編成じゃないか」などと私は考え、両隣の二人（左側が柔道でもやっている感じの青年、右側は、剣道でもやるのか、ダテ眼鏡風の中年）にも、「あんたたち、どこの人、機動隊員でしょ？」と訊くが、手を振って答えはない。「私と話しちゃいけないんだ。命令なんだね？」ときくと、大きくうなずく。「じゃあ、仕様がなし。あんたたちの親分にさくしかないね。」と、それまでも意味もなく通路を往復していたロシア

人スチュワーデスに、先ず、英語で「水をくれ」と要求した。スチュワーデスが「OK」と返事しながら、先の小猿男の方をながめる。小猿男がとんで来て、左側青年に「なんだ？」と顔をつき出して訊く。青年が「水がいるそうです」と耳元につぶやく。小猿男が「ダメッ、ダメダメダメッ」とキヤキヤと鳴くように叫びながら、元の位置にもどる。それは、動物園の猿が、群の中で決められた岩場の一隅の自分の位置にまわりを警戒しつつもどる仕草とそっくりで、私は噴き出してしまった。中年の右側も苦笑していた。それを、きっかけにしたように、両側の男たちの緊張も、ほぐれたようだ。

「3」——「グエロフロート」機は、すぐに飛び立った。上昇し終って平行に飛んでいても、「ベルト着用」のサインだけは消えない。日本人の群は、制服と平服を合わせて、40〜50人が姿を見せ、前方つまり機首の近くのシートには、警察庁や外務省の高官がいるのか、カーテンで隠している。

スチュワーデスが飲みものを配った。

刑務所を出て、もう7時間くらい経って、初めての水を飲んだ。もう、ノドが渴いたというのを通り越していたが、以後の長期戦を考えて、出された小サンドのパンの部分も食べた。

トイレに行くのも、小猿男が全陣型の配置をたしかめ、小マイクで答申して回答を得るらしく、なかなか行かせない。また、腰痛をうったえると、シート3人の腕かけを背もたせにまではずし、私を横に寝かせる結論を出して、「OK」という。私は、あらためて右側の中年男にきいた。「どの所属？」、男は「外務省です」と方言ナマリで答えた。やがて、「どうぞ」と、前後をはさまれながら、トイレにも行った。

「機長と話しがしたい。いや、話しする必要がある。」と、私は、通りがかりのロシア人スチュワーデスに要求した。

「さいて来ます。」と彼女は去った。もちろん、小猿男は、それを見て一足飛びに機首方向に走った。もどつて来て、左右の男に一人ずつ耳打ち話をしてまわる。……というように、長い左右のだんまり

男につきまといわれ、計50人くらいの外務省「役人が警備する、私たち4人を乗せたグエロフロート」の東京までの長旅が始まった。……そして、ナリタにつくまでの24時間くらいの間、警備員たちは、元々持参していたらしい弁当のようなものを輪番制で食ひ、私たちには、2回の小サンド軽食を出し、4回だけ水を配った以外は、トイレ随伴（トイレのドアを開けながら見張る）などで動く以外何もしなかった。いや、例外が三つあった。

一つは、途中、給油のためか、モスクワ空港に2時間くらいとどまった。その時、「モスクワだろ？」という質問に、「……知らない。」と、あたかも肯定するような回答の仕方をしたこと。2時間も停機する……これは、パイロットを交代しているのだからと考えた。

二つは、紺色制服の一人が、まるで医者のような立場にあるらしく、私の腰痛を気づかかって、「横になつていて方がいいでしょう」と、診断、風にオーダーしてきたこと。彼らも、私たちが、むやみやたらに暴れないと分り、機内監視のルーティンが順調に行つて自信を持ったと

いうことか。

三つは、在ペイルト日本大使館の館員の一人が、通路を通り抜けているのを見たので、声をかけたが、ふりきるように逃げた。そこで、私は、右側中年男に「あの、大使館スタッフと話をしたいので、呼んでくれ。」と要請した。長く待たされたが、やがて現われて、右隣のシートに座り、「なんででしょう？」という。

私は、私たちを乗せている「グエロフロート」機は、誰がチャーターし、誰の権利で私たちを誘拐しているのか？ それは極めて重大な犯罪行為ではないのか？ と訊くつもりだった。だから、彼と話してみようと思つて来てもらったのだが、「なんででしょう？」と私に対して発言した彼は、すでに100%身構えてしまっている。殴られるのじやないかと警戒もしている。

そんな彼を見た瞬間、私は考えを変えた。誘拐団の団員に向つて、「君は誘拐団の一員か？」誰が親分をやつてるんだ？ と質問するのと同様だし、それに答える間抜けな団員もいる訳はない

ので、真面目に話すことを止めた。だから、間の抜けた会談をすることにした。それは……

私「久しぶりでですね（この館員は、レバノンで逮捕され、裁判が行われていた時、毎回、当時警察庁から出張して領事をやつていた男と一緒に、傍聴に来ていて、顔見知りだった。）館員「はあ、どうも……」私「この飛行機に乗っている、この大勢の日本人は、皆外務省の人だそうで、皆出向しているの？」

館員「はあ？」私「外務省ですってね。」とたたみかけると、館員はむんずと口を結んでしまつて、答えない。私は「あ、しまった。間抜け話をするのだつた。」と気をとり直して、さき始めた。私「この間、結婚届けを、日本大使館に出してもらつたんですよ、……さいてますか？」館員「いやあ……知りません。」私「あ、じゃあ、もう大使館からは引き揚げたの？」館員「……！」

私「あのう。普通にやっていると思ふんです。手続きがスムーズに進むように、口添えして下さいよ、お願いします。」館員「結婚手続きですね、分りました。」私「は、次に何を話すか、考えていた。」館員「あのう……話はそれだけですか？でしたら、私、失礼します！」と言つて、再び右側中年男と、さらりと身を入れ換えて、後ろに素早く歩み去つた。

私も、もう間の抜けた行為は、このくらいで止めよう、と、後ろを振り返ると、和光、戸平がニコニコ笑いながら、「だめだめ」という風に手を振っている。私はうなずき返して、もう眠ることにした。[4]——しばらく眠つた後で眼をさますと、目の前の背もたれテーブルに飲料水のボトルとコップがおいてあった。右側の中年男が、「どんどん飲んで下さい」という。私は、「後、何時間くらいですか？ 東京までは？」と訊いてみた。中年男は嬉しそうに「あと4時間くらいかなあ……」と、腕時計をながめる。後ろを振り返ると、和光と戸平が、何か言ひながら、手で水を飲めと合図して来た。私は、彼らが私のために要求したんだな、

と納得し、ガブガブ飲んだ。

トイレに行っていたらしい山本が、元氣いっぱい空気を吸い込んで「フッフッフー！」はき出しながら、力強い大股で走るようにもどつて来て、

「元氣だからネッ」という合図を送りながら、席にもどつて行つた。私も、立ち上つて、「よし、頑張ろうな！」と後ろへ声をかけて、「トイレッ！」と出かけようとした。小猿男たちが、心なしかウキウキと、陣型をとつて、私をうながした。

彼らとつてみれば、日本赤軍メンバ14人を連行して帰国するという「大任」の終りが近づいて、勝利感に満ちて気が合入りが入り直しているようである。腹が立つけど、どうしようもないことであつた。全体の雰囲気から、公三が同行させられていないことが分つたし、それを唯一の肯定的な要素として、今後予測される、留置―取調べ―裁判―下獄につながる一連の闘争のことを考え、覚悟を決めた。それは、簡単な問題だ。

しかし、後に残された公三の今後のこと……レバノン政府がとつた今回のやり

方、そして、レバノンと日本の両方で、

私たちへの救援を続けてくれた人々のことを考え続けていると、問題の整理をしている間に、4時間はすぐに流れ去つた。

【5】「ナリタへの到着は、呆気なかつた。もちろん、「ナリタ到着」などのアナウンスはないし、ただ、機がぐんぐんと下降しはじめ、外務省の男たちが合図し合いながら、全員ボジションにつき、ロシア人スタッフが、機首方向にままとまつて姿を消した。私は座席に就いたまま、後ろをふりむいて、「頑張ろうッ！」と声をかけた。が、和光たちまでは遠いので届かない。もう一度「ガ・ン・バ・ロ・ーツ」と言うと、3人がうなずき、拳をふり上げて応えた。

機が着地し、えんえんと滑走路・エプロンを走り続ける。外務省の男たちが、それまで閉ざしていた窓のブラインドを次々と開けたが、外には闇があるだけだ。管制塔も何も見えない、エプロンのはずれに来て、止つた。外務省の男たちが、4人の荷物を機首から持ち出して来て、各人にわたした始めた。私が、バッグと煙草をとり出すと、右側中年が、

「これに入れて下さい」と航空券などを

入れるナイロン袋を出した。また、探しものをしている風に荷物をさぐつてみると、やはり、すでに中身をすっかりチェックし終っていることが感知できた。私は紙片の何枚かをやぶり捨てた。

外務省が、それも一つ一つ拾つて、ナイロン袋につめた。次いで、英文手紙2通（一つは、「公三の治療をする人へ」という治療心得、もう一つは、「引き渡し拒否」のレバノン政府決定に関連した「友人の会」への感謝メッセージ）を粉々にして封筒に詰めて、外務省に、「トイレに流して下さい」と渡してみようとしたが、「ダメ。身につけておいて下さい」と拒否。私はズボンのポケットにねじ込んだ。

そこへ、先ず、「税関の者です。通関チェックします。」と、制服制帽が登場した。外務省の男たちが、口々に「通常の手続きだから、心配なく。」と、4人に通告した。

この手続きは、長時間にわたつたし、通常でも何でもなかつた。紙1枚、投棄カプセルの一つ一つまで、衣類も1枚1

班、警視庁の捜査班であり、本隊が登場したのである。

5

正式な逮捕劇

誘拐団の第三班・本隊の警視庁捜査班登場！

【1】私は、第二班と第三班の引きつぎ方をながめていた。彼らは「同僚」なのか、「別班」なのか？

結論として、「知り合い」だなど分つた。何故なら、外務省の班の一人一人が、捜査班側に眼顔でうなずく顔つき、雰囲気は、見知らぬ相手に挨拶する仕方ではないし、ましてや、班長同士だけで手堅く引きつぎ、班員各人は事務的に軽く頭礼して去る外交的なやり方では全くなかつたからである。二つの部局員が同じ仕事を一緒にやりながら引きつぐというよりは、手慣れた仕事を一緒にやっていると仲間うちが交わす、あの呼吸というか、外側よりも内側にすでに大量に貯まっている「慣れ合い」「みたいな個人感情を、各人があふれさせながら、すれ違つて引きついでいるのである。

【2】先ず山本から始まつて、戸平、和光と続き、私の「逮捕」の番が来た。

紺色スーツの中年、青年が揃い踏みするように、座席の間の通路を埋め、先頭の初老が「ちゃんと指定の座席にわざわざ押しもどした。つまり、警視庁は、私が、

「アエロフロート」のチャーター機で送還されて来るという「事実」だけでなく、捕捉されて着席して来た「シート」まで正確に知つていた。いや、単に、何かしら報告が先に着いていただけだろうか。ちがう、と思う。チャーター機を決め、その機内のどこに、私たち4人を分離して座らせるかという段取りは、チャーター機を契約した時から決まつており、その段取りも訓練をやつた後なので、シナリオ通り、「座席」を確かめ、その定位置で、逮捕劇を演じたいだけなのだろう。

座席に押しもどされた私に、初老が数枚の紙片束を突き出し、「逮捕状だ。その内容の容疑で逮捕する。」と宣言し、「まあ、読んでみなさい……」と手渡す。私は読んでみる。1枚目は逮捕状そのもの

枚隔々まで広げたり、すかしたりしてみた。それもそのはず、外務省の一部が、それらをノートしておくための仕方だつた。ちよつとしたハプニングもあつた。それは……私の葉袋をひろげている時、いろんな葉包みの中に、緑色の木の葉のかけらがあつた。係は「どこに入っていたのか？」と一瞬緊張し、やがて、それを掌でもんで嗅いでみたりした。まわりも「!!」と緊張して近寄つて来た。しかし、訳が分らないようで、もう一人の上司の方へ手渡そうとした。その時、本人の帽子のひさしから、同様の大きめの葉っぱが、ぱらりと落ちて来た。「あつ、あつこのチェックの時の……」と係官同士で納得し、まわりにも、うなずき返して安心させた。私も、「大麻所持」か何かで引つかけられるのか、と一時は心配したので、安心した。

結局、何もなく、チェックは全員済んだ。と、それを待っていたのか、紺色の集団がわーつと周りが一杯になるまで入つて来た。これが、第二班の外務省たちと、やけに親しげに挨拶し合いながら、引きつぎをうける「誘拐団」の第三

の、2枚目は嫌疑の内容が詳しく書いてある。そして……私は、ふと疑問に思い、「これは拒否しますよ。」と言う。初老は、「拒否してもしなくても、これは、あなたを逮捕している、という書類です。はいッ！ 逮捕します。3月18日、7 p.m.、アエロフロント××便、座席番号〇〇〇〇。ハイ、では撮って！」と、後ろの紺色スーツ青年に命じる。パシヤットとフラッシュ。初老「では、こちらの荷物の押収に入ります。ハイッ、撮って！」。初老が、荷物に手をかけて、また、パシヤット。そういう仕方で、所要場所の、「現場シーン」を撮影しながら、最後にナイロンテープを長々とつけた手錠を私にはめて、パシヤットと、記念撮影風に全景を撮って、初老「では、行きましょう……。」と私を引きつけて、機首の乗降ドアまで行き、そこでナイロンテープを自分のベルトにしっかりと結びつけて、私と並んで立ち、「では連行します。ゆっくりと歩いて下さい。」とステップを踏み出した。あらためて周りを見ると、ロシア人スタッフが遠くから隠れるようにこちらを窺っている姿がいくつもあり、尾翼の方には、

数人の荷物を整理している。外務省がいたが、もう本隊はいなかった。
【3】ナリタの地上に降りていくステップや、ビル階段にも、誰一人いない。そしてエプロンには、数台の車、小型バス、そして、制服警官の列があるだけであつた。

つまり夕闇がすでに包んだナリタの飛行場脇は、夜の闇にとざされて何も見えなかった。私が最後に日本を出発した27年前には、空港建設反対闘争のために開港できずにいたナリタへ、しかも、暗闇だけの空間に連行されて、私はもどつて来た。どこへもどつて来たか、全く分らない仕方で……着いた。これが私の帰国だった。側の初老の刑事や制服の列に対してというより、この闇の中にひそんで私たちを送還させた、「誘拐団」の頭目——警察庁に対する怒りが、路面を歩く一歩毎に、いやましにつのつていった。

6 エピローグ—— 先ず「誘拐団」との闘争開始！

【1】——3月18日、私は、警視庁、総務

部留置課の管轄する留置場に入れられた。そして、早速19日の午前、午後、ある日は夜も加えて、取調べ室における尋問が開始された。もちろん、弁護士以外の面接は禁止の「接見禁止」処分の身分で、それは、10日間、更に延長されて、20日間、一杯で、計23日。

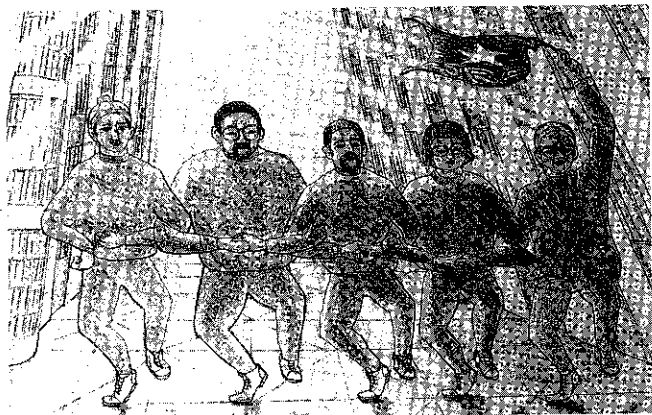
捜査刑事の取調べは、極めて紳士的で、「黙秘します。」「調書は拒否します。」という私の主張をくり返し聞いて、私がすすんで応じた人定調書(名前を認める調書)以外は、一切無理強いしようとはしなかった。極めて「民主的」な姿勢なのだ。

しかし、そんなことで、「誘拐団」による、強制送還風の犯罪行為が帳消しに出来る訳ではない。いや、彼らが、日々の現場警察活動で「民主警察」を演じれば演じるほど、その後方から、国家権力をカサに着て、あたかも正義の宝刀でも振りまわしているようなツモリで、制度的な腐敗というシステム犯罪を日々行っている奴等に対する怒りは心頭に達しつづける。

私は、この犯罪者たちに対する闘いを、

静かに、だが、直接的に、誠実に勝ち抜いていこう、と覚悟を固めることが出来た。

そこで、私が自己主張できる、最初の唯一の機会、4月3日午後の拘留理由開



示の法廷で、それを次のように、宣言した。

「私は今、この法廷に、否応なく立たされている。そのことをめぐる私の意見を4点にわたって提案したい。

第一点は、私をこの場に立たせるために、犯罪行為を行った国際的な誘拐団を糾弾し、裁き、処罰すべきだ、と主張したい。

この誘拐団は、日本の警察庁、外務省を主犯にした、三つの班から構成されている。第一班はレバノン移民局を名乗るレバノン特殊部隊だ。彼らは、2度にわたるレバノン政府への日本赤軍5名の身柄引渡し要求を拒否された日本政府(外務省、警察庁)が、合法的な手段では意図達成が不可能と察知し、遂に非法手段——犯罪的な手段にうったえて買収によって犯罪集団をつくり、レバノン刑務所側から私たちの身柄を掠奪誘拐して、ベイルートからアンマン空港へ拉致させたものだ。

第二班は、そのアンマン空港に、チャーターした「アエロフロント」機内でレバノン部隊から私たちの身柄を受けとり

拘束した『日本外務省』を名乗る50人弱の日本人とロシア人「アエロフロント」機スタッフ数人である。彼らは、アンマン→モスクワ→ナリタと飛行しながら20時間以上にわたって、私たちを暴力監禁し続け、ナリタで第三班、これはいよいよ本隊の一部である、警視庁公安第一課の捜査班に手渡した。

この三班の実行班は、いずれも、国際法だけでなく、所定の国々の国内法をも犯した者たちであり、かつ、三班が各々独立した行為を行ったのではなく、一つの指揮によって一つの意図を実現しようとしたものだ。

そして、それらの指揮をとったのは誰か？ 最初にいったように日本の外務省と警察庁だ。私は、彼らの犯罪行為をあげ、裁き、処罰する必要性が、他の何よりもあることを主張します。

第二点は、同志岡本公三に対して、レバノン政府が、彼の亡命を承認したという厳粛な事柄についてです。私たちは先ず、亡命を認めたレバノン政府に感謝し、その実現のために、多くの支援を行ってくれたレバノンとアラブの人々、そして

日本人々に感謝します。

また、このレバノン政府の決定は、アラブの民族的大義を共に闘ってきた岡本および日本赤軍の闘いに対する意志表示として受けとめ、日本赤軍は、同じように、今後とも闘いを続けていくことを、ここに確認します。

第三点は、私自身についてです。私は、この27年間、ほとんどヌレギヌとしか言えないようなシャクシャイン像の損壊事件で国際手配され、身動きが取れませんでした。

しかも、今回帰国し、問い合わせたところ、検察庁も警視庁も、いや事件の起った北海道警察も、私を国際手配した覚えはない、という。そんな微罪では国際手配は出来ないという。では、誰が理

由・根拠もなく国際手配していたのか？

インターポール（国際刑事警察機構）は、勝手に手配は出来ない。各国の警察の要請があつてはじめて出来る。だから、日本の警察、つまり、警察庁が、理由・根拠もなく、私を勝手に犯罪者として決めつけ、国際手配していた、という犯罪行為が浮び上つて来たのです。

私はこの犯罪行為を許せない。必ず、第一点と共に、事実実体を究明して裁きの場に引きずり出して行くべきことを、主張します。

第四点は、本件についてです（＝偽造有印私文書行使）。

私は、全く身に覚えのないことで、裁かれようとしています。この問題についても、誠実に素直にとり組んで行きます。

さて、最後になりましたが、私は日本の

現実から見れば、いわゆる30年前のミイラでしかありません。しかし外にいた間に種々、ためこんだ考えもあります。日本の皆さんから、いろいろ学びながら、それをクロスさせ、今後の私の闘いをすすめていきたいと考えます。よろしく。」

この内容が、私の今の、基本的な立場であり、闘争主題である。これまで多くの人々の支援・救援のおかげで、ここまですべてこられた。今後は、それらの人々に応えていくためにも、徐々にではあつても、この地点からオンパにダッコを脱して、恩返ししていきたいと決意している。

（絵も筆者、「文藝」二〇〇〇年秋号初出）

兵士たちのメモリアル

梅内恒夫

1969年以降、地下に潜行していた共産同赤軍派メンバー・梅内恒夫は1972年4月、「共産同赤軍派より日帝打倒を志すすべての人々へ」という長文のアピールを「映画批評」「査証」などへ送付する。この中で梅内は、森恒夫らによって党内路線をはばまれたこと、さらに71年3月に森ら赤軍派指導部と分岐したことを明らかにした上で、前衛主義、非合法活動の原則の逸脱、破産した路線への固執が連合赤軍事件をおこしたことを指摘、さらに太田竜、竹中芳、平岡正明らが当時うちだしていた汎アジア窮民革命論、とりわけ太田竜の戦略への支持を表明して、注目を集めた。その後、梅内の行方は香として知れないが、梅内論文は赤軍派とその後の東アジア反日武装戦線の爆弾闘争をつ

なくものとして不吉な光を放っている。

第三世界の窮民を、そしていまなお原始的の生活を送っている人々を、一切の支配から解放するため、党以外の、「党」の都合による、党のための闘いを我々は拒否する。

前衛の役割は、ひとつには我々の味方が闘う時、武装の問題を解決し、手に入れた武器が使い方によつて最大限の効果をあげること、実践によつて示すことである。

前衛の役割はもうひとつある。日帝の出兵を完全に見通して、打倒日帝のための長期的かつ世界的な布石を打つこと、超陰謀をはかりめぐらすことである。（略）

我々は、ハイジャックを次のように総括しなおす。

世界革命戦争の布石のために、世界に飛び散ること、このことはまったく正しい。しかし次の三点において間違っていた。

第一に、太田竜の指摘したように、朝鮮民主主義人民共和国ではなく、大韓民国に行くべきであつたこと。

第二に、「党」の代表ではなく、世界革命浪人として行くべきであつたこと。日本の労働者を代表しない「党」なんか、「労働者国家」の「党」も、アジアの窮民の党も相手にするはずがない。そして日本労働者階級を代表する革命の「党」はありえないのだ。韓国に行く時は、共産主義者として行くことも避けるべきだ。韓国人民を日帝から解放する「志士」として行くべきだ。

第三に、ハイジャックではなく、密航によつて行くべきであつたということである。獄中同志の奪還のためではなかったら、世界革命戦争のための布石は、秘密裡に行なわれるべきである。金日成がいくら革命的であつたとしても、ひとり握りの日本の極左学生に対する支

援を明らかにして、これまで築いてきた世界的、国内的信頼を失うことは避けるだろう。だいふ前に朝鮮民主主義人民共和国で訓練を受けたメヒコの極左翼が、ゲリラを開始しないうちに一網打尽に逮捕されて自供してしまつたことがあつた。あんなことがあれば、いやになるのは当然である。

この批判がきびしすぎるとか、あの時はしやうがなかつたという人がいるかもしれない。しかし世界に散らばるだけで満足してはいけない。「いかに飛び散るか」が重要なのだ。我々は創設当時の赤軍派が、正しい戦略・戦術に従えば、確実に日帝に打撃を与えることができ、長期的な日帝を消耗させる布石を打つことができたことを考えると、非常に残念でならないのだ。

またこの批判に対し、それならおまえはハイジャックができたかあさま山荘の銃撃戦ができたかという不逞の輩はこういおう。人を見てものをいえ。（前記論文より）

人民革命党綱領草案

一九九一年八月一三日

第一章 我々はいかなる時代に生きていくか

現代は、社会主義と資本主義の熾烈な闘争の時代である。

ロシア革命に始まる現代は、ソビエト権力樹立によって、階級支配の中で苦しめられてきた全世界の人民が、社会の決定者として、自己の運命を切り開くことができる時代であることを証明している。

この新しい革命は、同時に搾取と抑圧、侵略と戦争を本質とする帝国主義を驚愕させた。これまでのようなあり方では、帝国主義が革命と社会主義にとって代わられ

ることは明白であった。帝国主義は、あくまでも独占資本の利潤を追求しつつ、人民の要求に対して、社会主義的政策を取り入れながら、必死の延命を図ってきた。

現代は、民主主義・社会主義を求める闘争、民族解放闘争によって、人民権力が帝国主義支配によって代わる歴史的過渡期にある。いいかえれば、世界は資本を中心とする資本主義から、人民を中心とする真の民主主義としての社会主義・共産主義への過渡期にある。

この熾烈な過渡期の時代においては、あらゆる現象・イデオロギイ・社会の矛盾は、資本主義的要素と社会主義的要素の闘争という根本矛盾に貫かれており、相互浸透し合っている。それ故、主体的

で目的意識的な闘い抜きには、真の人類史へと発展させることはできない。

ソ連・東欧の社会主義建設の敗北は、人民自身が自己の運命の決定者として人民権力をしっかりと握らない限り、帝国主義の巧妙な攻撃の前で、社会主義の建設を行えないことを示した。人民自身の方に依拠し、人民権力を打ち立てる党の位置と役割が、この過渡期においては決定的に重大である。

帝国主義は、この過渡期において、人民の闘いに規定され、反共戦略を要し、内に高度に国家独占資本主義化し、外に向かつては新植民地主義を推し進め、反共軍事同盟を結び、かつ帝国主義間の競

合の調整を余儀なくされ、それらによって延命の道を求めた。

そして、現在、一方で科学技術革命による生産力の飛躍的拡大と、他方で社会主義諸国内の党指導の誤りは反共帝国主義同盟の支配強化を利した。この力を背景に帝国主義は人民の自治と民主を求める社会主義諸国内の矛盾を介入し、帝国主義の一元の支配のもとに、再び歴史を反転・後退させようとしてきている。

アメリカ帝国主義の核独占と軍事的優位の下で、帝国主義間の競合を統制調整しつつ、各国の主権を制限し、国際独占資本の自由にあふわしい地球規模の制度的均一化を図っている。帝国主義は、アメリカ帝国主義を頂点とする軍

事経済政治の包括的な同盟をもって、真の民主主義としての社会主義と進歩を求める世界の人民の闘いの前に、強権的に立ちはだかっている。

資本は、ますます世界的規模で生産を社会化し、世界各国を単一市場に組み込んでいる。生産力は国境を越え、資本主義体制の国際的性格は、飛躍的に進んだ。この過程で、一切の利益を独占する資本は、寄生性と腐朽性を深め、不安定をつくりだしている。同時に人民の生活の不確かさ、人民相互の分断と競争、搾取と抑圧は強くなっている。

それは、世界革命の条件を拡大している。また、自己の運命の決定者として人民が自らの生存の闘争において、自らへの支配と他の民族・人民に対する支配とが共通していることを自覚し、共に立ち上がる条件を形成している。社会主義に対する解体策動や帝国主義国間の矛盾の転嫁や第三世界などに対する帝国主義の直接支配の強化は、人民に教訓を与え、結びつけ、人民自身の選択と力によって

人民権力樹立へと向かわせるであろう。

過渡期における革命と建設の経験と教訓によって、党が人民の力と意志を唯一の依りどころとして、正しき力を発揮する変革の党としてその役割を果たすとき、人民は、高次に止揚された社会主義を勝利させることができる。

人民革命を主体的に成熟させ、勝利へ導くか否かは、党の役割にかかっている。

第二章 国際共産主義運動の到達地平

労働者階級・人民の支配階級による搾取と抑圧に抗する徹底的に非和解的な階級闘争の蓄積を通して、国際共産主義運動は誕生した。

第一インターナショナルが社会主義を目指す国際労働者階級の闘争の思想の基礎を与え、国際連絡協議体の役割を果たし、第二インターナショナルは労働運動を広く大衆的に普及させる基盤を形成し、国際連合体の役割を果たした。しかし、第二インターナショナルは、

第一次大戦への態度をめぐって分裂し、革命的祖国敗北主義の立場に立った勢力は第三インターナショナルの結成に向かった。右派擁護の立場をとった中央派、右派は社会主義インターナショナルを結成し、社会民主主義党の国際連合組織をつくった。そして、人民運動の一潮流として現在に至っている。

ロシア社会主義革命の勝利は、全世界の被抑圧階級・被抑圧民族に社会的悲慘・貧困・隷属からの解放の道が社会主義にあるという確信を現実の姿として示し、勝利の物質的根拠を与えた。そして、この前進は、世界の人民の闘争を結ぶ中央集権的世界党としてのコミンテルン（第三インターナショナル）を創設せしめた。

コミンテルンは、帝国主義の包囲下にあるソビエト連邦を、逆に、全世界人民の根拠地として形成し、世界中の革命勢力を統合することによって、全世界人民の解放のための権力樹立の闘いを決定的に前進させた。

導の限界と、同時に、各国革命主体の未成熟、コミンテルンへの依存関係は、歴史の限界を拡大し、誤りを結果させ、後の共産主義運動の分裂の根拠となった。

コミンテルンの教訓は、第一には、コミンテルンの加盟条件に見られるように、第二インターナショナルと対決するあり方になり、社会民主主義的な勢力との共同の道をとざしたことである。これが社会民主主義主要打撃論などの誤りを生み、共産主義者が人民の広範な統一の要になることを困難にした。

第二に、社会主義に向かう革命の方法が各国各民族の特性と具体的実情をふまえ、その国の人民の創造的主体的な力に依存した戦略戦術を持たなければならぬことを教えている。

第三に、党は、その国の民族・人民のそうした社会的実践にもとづいて総括し、同時に、世界単一の階級の結合に向けて国際的に同質化し、い、不断に党の革命を指導性として現実の変革をめざすことが問われる。こうした国際共産主義運動の教

訓と経験は、各国革命勢力が人民に依拠し、国際国内反帝闘争を徹底して押し進めれば、一国でも勝利する時代にあることを証明した。しかし、帝國主義との熾烈な闘争の時代である過渡期において、人民が権力をもたなければ一国的勝利も後退する時代であることを示した。

過渡期における社会主義建設の敗北の教訓は、第一に、党が国家行政権力をにぎり党独裁をするのではなく、党は、あくまでもソビエト人民権力の樹立を助ける役割を果たすことである。

第二に、中央集権的国家計画経済というよりも、地域ソビエト経済の実体を人民の創造性、自主性に基づいて形成していかねばならない。

第三に、民族問題をまず、民族の自主性、歴史性を認めて、相互支援しあい、民族間の統一を実現していくことである。

従って、今、世界帝國主義支配とたたかい、各国人民に依拠して、自国の敵を打倒し、社会主義建設を共同する、反帝と自力更生の主体的立場にたつて、党を革命しあ

う同質化の闘いを軸に、国際共産主義運動の統一をかちとることこそが問われている。

第三章 日本革命運動の到達地平

日本の人民革命の歴史は、人民を援助する党の役割を果たし得なかった指導の敗北の歴史であった。

日本資本主義の形成過程における都市貧民や農民の一揆・反乱・自由民権運動・大正デモクラシーから第二次大戦後の革命期を経て、現在の広範な人民の闘いに至るまで、日本人は、共に生きること

を求め、自由と解放のために幾多の激しい闘いを行ってきた。

支配者は、こうした人民の志向と要求を先取りし、支配階級の成熟に応じて、戦前は天皇制を中心とする封建的形態で、戦後は、アメリカ民主主義形態を取入れ、人民の要求を管理、統制してきた。

こうした日本革命運動の歴史を指導勢力の指導のあり方が生み出しているものとしてみると、代行主義におちいつたり、時の権力に取り込まれてしまふあり方によって人民の闘いの敗北をつくりだ

してきたことを知る。

人民の解放を一時的なものでなく永続的に可能とする労働者階級の階級闘争が、党の位置と役割を正しくつかみ、実践し得なかったが故に、現在に至る弱点をはらんでいる。

一九二二年に日本共産党は、コミンテルン日本支部として形成された。日本共産党は、コミンテルンという外的な力に依拠し成立している思想的、経験的弱さ故に、天皇を中心とした封建的要素を持つ共同体内部から、下からの人民の主体的力をつくりだせなかった。反天皇、反軍国主義の猥褻的な人々の勇敢な闘いにも拘らず、広範な人民に立脚した方向をつくりえず、一部の先進的労働者とインテリ運動としてしか組織しえなかった。

市民社会の中に、陣地をつくれず、人民から排除され、非合法地下組織がねざさず、決定的な時に党とその中央が解体されてしまった。

この戦前の党の敗北を総括せず、逆に「自分たちは、日本軍国主義

と闘ってきた」という積極面のみに依拠して、戦後の共産主義運動の再出発をはかった。党が教訓をつかみ、その弱点を克服し、人民革命の明確な展望と戦略をもちえていけば、戦後から朝鮮戦争に至る過程は、人民の自主的な闘いが高揚しており、勝利をかち取る有利な時期であった。

しかし、同じ誤りと弱点をうけついで出たが故に、コミンフォルム批判を契機に解体状況に陥り、あわせて、敵の戦後世界再編としての反共戦略による日本帝國主義の復活、50年代のスターリン批判と国際共産主義運動の分裂のなかで、主体的な立場をもたないが故に解体していった。

戦前・戦後の二度の党の解党状況は、古くは、山川イズム、福本イズムに示されるように、党と人民の関係の正しい位置規定とそこにおける党の果たすべき役割を党がうちたてきれなかったことを示している。

ことに「党は普遍性を体現し、人民を指導する」という観念からの現実への関わりは、党を労働者階級・人民を主体とする革命運動

から遠ざけた。

50年代の痛苦の敗北から各々教訓をつかみつつ、60年代の全人民的安撫闘争などで人民に支えられ、党をより人民の中に根をはったものとして建設していく可能性があった。それはどのように統一戦線を形成するかにかかっていた。しかし、徹底して人民を革命主体とし、それにもとづく党の役割を明らかにせず、党の統一・人民の統一に向けて結集しきれずにきた。

今、日本革命運動の中核たる日本共産主義運動の総括として問われていることは何か？

第一に、無謬の党観の未克服の問題である。

無謬の党観は、スターリニズムの根本問題である。スターリニズムをスターリンの問題として外在的に打倒対象としたり、被害者の立場に自らをおいているため、無謬の党観を主体的に克服し得ていない。それ故、党の革命を指導性としえないあり方は、党、すなわち、普遍性という立場、つまり、党中心主義を結果させている。党は階級の一部であり、場所的にも、歴史的にも規定され、自然成長性、

認識の限界をもっているが故に、人民の社会的実践から不断に学び、自らを革命しなければ指導を果たし得ないという現実に無自覚であった問題である。

「こうあるべき」という理念や、主観的願望や、感情によってではなく、客観的にとらえて現実をいかに変革するかで結集してこなかった問題である。日本革命運動のみならず、ソ連、東欧の共産党をも含め、現実、実体が自分たちの主観と剣がれていることについて無自覚で、人民を主体とするあり方を党の革命によって、再構築していき闘いを担い得ていない。

第三に、党が、自らの問題として全的に階級闘争に責任を負う立場から、敗北を勝利の土台とすることができなかった問題である。階級闘争は、すべて連関しており、責任を転嫁しあつたり、避けたとしても、その負債はすべて人民に負われることになる。人民を革命の主体として考えるとき、どのような誤り、敗北の害毒をもひきこ

けて総括し、勝利の土台を築いていくことがとわれている。

以上の総括の立場から、まずもって革命主体の規定、そこにおける人民と党の関係から党の役割を正しくつかむことである。そのことによつて、党は、人民のたたかいの統一をつくりだすことができる。これが人民革命の勝利の保証である。

第四章 われわれはどのような立場で闘うか

人類社会の発展の原動力は、なによりも主体である人間、現実の生活を営む人間の目的意識的な社会的実践によつてつくられてきた。生産力の担い手たる人民の歴史は、人間生活の前にたたはだかるあらゆる障害、困難をとりぞき、集団的に、目的意識的に現実を変革することを通して、社会を発展させてきた歴史である。

この歴史観にもとづけば、共産主義は、これまで人類の知らない空想的、理念的なものではなく、歴史的遺産をうけつぎ、現実の社会的実践を総括し、目的志向性を

統一しながら、生きようとする人類社会の最高形態として目的意識的な現実変革を通して形成される。この中で人々は、ひとつの原理のもとに画一化されるのではなく、自分を変えて、その力で、人と人との関係を変え、自然と人間の関係を再構成することによつて、自分たちで共同の原理と共同社会をつくりあげていくのである。

この人民の「共に」「変革して生きる」という動因こそ革命を推進する力の源泉を見だし、それをより目的意識的なものとして闘うという立場こそ、われわれの立場である。

現代世界において、労働者階級が人民革命の指導階級としてあるのは、資本主義社会においてもともに搾取・抑圧されているということのみにあるのではなく、資本主義を共産主義へと止揚しぬく能力をその場所的・歴史的地位と役割にもつているからである。労働者階級は、「プロレタリア自己解放が例外なく社会構成員を解放する」という階級の本質（階級性）をもつ。なぜなら、もつとも、強い集団の本性と徹底した階級の非

和解性をもち、自己と対象世界を
変革しつづけることによって、資
本主義社会を廃絶する能力をもつ
唯一の階級だからである。

現代過渡期世界における革命と
建設の担い手は、全世界の人民で
あり、労働者階級と、その階級性
に導かれて、革命の勝利を導く。
それ故、われわれは、労働者階
級の立場にたち、人民を革命主体
としてとらえる。労働者階級の階
級性に自己を組織することを通じ
て、党の役割を果たしぬく。すな
わち、われわれは、労働者階級性
を現実のたたかひの中で、不断に
深め、人民と共に、人民の統一を
援助することを通じて、自己の党
の任務をこなす。

人民を援助するには、階級の一
部である党が、人民に全的に責任
を負う立場から、不断に、人民が
日々生活し、闘っている社会的実
践を統合（学習・総括）しながら、
党自らを革命しなければならぬ。
そうした総括こそ、党の立脚点を
きたえ、目的意識性をきたえる。
党は、常に人民の中で、自分の位
置と役割を自覚して、自分の任務
を決定し、自己犠牲性を発揮する

ことが要求される。

日本共産主義運動の総括から、
人民を援助する党の役割は以下で
ある。

第一に、国際権威に外在的に依
存したり、民族主義的偏向に陥る
ことなく、日本の人民の自主的創
造性に依拠し、世界的な人民の同
質性をめざし、世界帝国主義と闘
う国際主義の立場にたつこと。

第二に、敵の実体と戦略方向を
つかみ、人民自身が革命の主体と
して、人民権力を樹立することに
むけ、統一戦線形成に心血を注ぎ、
権力問題を解決すること。

第三に、蜂起の陣型形成に向け、
独自の政治・軍事力量を形成する
こと。
これらの党の役割は、労働者階
級・人民の社会的実践を統合する
党の革命を指導性として初めて果
たしうる。

そして、世界社会主義・共産主
義の実現にむけて、日本―世界の
共産主義運動の統一、つまり、党
の革命をもつて、相互に革命の同
質化を追求しつづけることを軸に、
日本・世界人民の統一（同質化）

を果たすことを任務としている。

第五章 現段階における日本革命 の性格と任務

一、世界革命における日本革命

日本革命は、世界革命の有機的
一部として存在している。

世界革命は、一方においては、
帝国主義諸国の国境をも越えた未
曽有の生産力の発展によって準備
され、他方においては、人民革命
の世界的な成熟過程として準備さ
れている。

日本帝国主義は、政治軍事的に
は、ドイツ帝国主義とともにアメ
リカ帝国主義の一元的な世界支配
体制を、副官としてささえ、経済
的には、アメリカ帝国主義の制度
的な均一化の要求に対立しつつも、
共同して、アジア・太平洋人民だ
けでなく、世界人民を支配してい
る。日本帝国主義の打倒と日米安
保体制の打破は、帝国主義の世界
支配体制への決定的な打撃であり、
アジア・太平洋における帝国主義
支配を解体し、アメリカ帝国主義
の世界支配を著しく弱める。それ
は、世界革命を促進する。
日本革命の勝利は、帝国主義・

資本主義諸国内の人民の闘争・民
族解放闘争・社会主義建設を支え
る国際革命根拠地任務と、国際共
産主義運動の再建・統一のための
環となる。党は、党の対等・同質
化を通して、抑圧民族としての日
本人と世界・アジアの被抑圧民族
との対等を準備し、全世界人民融
合のためにたたかう。それに向け
て、今、国際反帝統一戦線の一翼
として日本革命を担っていくこと
が問われる。

二、日本社会の特徴
①日米安保体制と日本帝国主義
帝国主義は、アメリカ帝国主義
の政治軍事的な一元支配のもとで、
NATO、日米安保体制を要し世界
支配を行っている。日本は、高
度に発達した資本主義国であり、
帝国主義として日米安保体制の下
でアメリカ帝国主義の世界支配を
補完しつつ、アジア・太平洋諸国
人民をはじめとする世界人民に敵
対している。

アジア・太平洋における帝国主
義支配の要は、日米安保体制であ
る。日米安保体制は、帝国主義の
反共反革命政治軍事同盟であるだ

けでなく、アジア・太平洋諸国に
対する新植民地主義支配を貫徹す
るためのものである。

日米安保体制は、帝国主義の総
合安保体制として、相互依存関係
の網の目をはりめぐらし、経済、
社会の面においても、資本主義制
度による均一化を行っている。そ
れは、日本独占資本にとって、資
本の多国間的な展開を保証するも
のであると同時に、その相互依存
的な関係の代償として、アメリカ
帝国主義による主権の制限を受け
入れざるを得ない立場におかれて
いる。

この日米安保体制のもとの日
本独占資本の支配は、二重の矛盾
と抑圧を日本人に与えている。
第一には、日本独占資本が安保体
制を維持するために日本の主権の
一部を放棄することによって、も
たらされる矛盾であり、第二には、
日本独占資本の支配によってもた
らされる抑圧と搾取である。

②日本独占資本

日本独占資本は、資本の巨大な
集中・集積を基礎にして近代的な
銀行資本を中核にし、産業独占資

本及び総合商社などをひとまとめ
にした大企業集団を形成し、農林
水産業、中小企業をも含めた日本
経済を全一的に支配している。ま
た、国家に癒着し、寄生し、国家
財政支出、財政投融資・租税特別
措置などの蓄積促進政策や、貿易
・為替管理による助成やナショ
ナルプロジェクトなどの強大な資
金援助など、高度に組織された金
融寡頭制を形成し、「日本株式会
社」と呼ばれる実体をつくつてき
た。

この「日本株式会社」の実体を
国家の側からつくりだしているの
は、日本国家の官僚層である。戦
前における内務官僚による官僚支
配を受け継いだ日本の官僚体制は、
独占資本と癒着し、日本独占資本
の利益の防衛と日本独占資本の固
執的な展開を国家の側から支えて
おり、実質的な日本の政策の立案
者である。自民党政府は、独占資
本と官僚の政治的代理人である。
帝国主義諸国関係の発展は、
「日本株式会社」というこれまでに
の日本の独占資本と国家のあり方
の変更を強制している。それは、
一方において、日本独占資本の多

国籍化を促進し、国民経済を基盤
にした国家独占資本主義政策の徹
棄を要求している。他方では、日
本の国内市場を米国などの多国籍
資本に明け渡すことを要求してい
る。

日本独占資本は、この要求に対
して、一方において資本の多国籍
化を積極的にを行い、他方では、国
内体制の再編と管理ファシズムに
よって日本人に対する支配を強
化している。

③管理ファシズム

国内体制の再編は、資本に対す
る政府の規制をとりぞき、資本
の自由を拡大すると同時に、それ
によって、打撃をうける労働者階
級を中心とした人民に対しては、
管理ファシズムによって支配を維
持しようとしている。

この管理ファシズムは、戦後の
な五年体制の清算と日本資本主
義の転換点となった八五年の体制
の確立をもって、行政、司法の反
動化を行い、社会・経済的には、
国際化、グローバル化に対応した
国内の構造的な再編過程を通して
完成している。そのなかでつくり

だされる矛盾の回避のために、労
働運動、政党の体制内とりこみと、
民主主義的な勢力、革命的な勢力
の社会的な排除と警察権力による
暴力的な解体を進行させ、社会経
済の情報化を通して、便利さと一
体となった管理を国民生活のすみ
ずみにはりめぐらした。そして、
その頂点に、天皇制を日本の民族
的な「アイデンティティ」として
復活させ、また、国家体制的には
「国家安全保障会議」の設置と有
事の際にそれに全権を与える体制
をつくつた。

この特徴は、その管理支配に従
うものには、ソフトに、従わない
ものに対しては、暴力的な形をと
って現れることである。

④日本資本主義の構造的な特徴

また、日本の資本主義の構造的
な特徴としてとらえなければなら
ないのは、独占資本の発展を支え
ている膨大な中小零細企業の存在
である。これは日本独占資本に高
利潤、高蓄積を保証する低賃金、
長時間労働といつても切り捨てる
ことができる緩衝体の役割を行っ
ている。さらには、アメリカ帝国

主義の国内市場の自由化の要求と
独占資本の多国籍化のなかで、機
性を強いられる。

もう一つの特徴は、独占資本の
農業切捨て政策による農業破壊と
食糧輸入国になつてきていることである。
自立・自主的な経済の基礎で
ある食糧の自給が完全に破壊され
ている。

高利潤をもとめる独占資本は、
過剰に蓄積した資本をもつて、投
機に投入し、日本経済をカジノ資
本主義化させた。これはあらゆる
ものを投機の対象とし、その結果
人民の生活を一層不安定化させて
いる。とりわけ、土地住宅問題に
見られる独占資本の土地投機によ
る土地の買占め、土地価格の高騰
また、独占資本による乱開発によ
る地域環境の破壊は、人民の生活
に深刻な影響を与えている。

また、教育をはじめとして全生
活の分野で、独占資本の支配は、
日本の人民の主体性、創造性を奪
い、かつ、連帯して生きるといふ
人民の生活のあり方を破壊してい
る。差別分断構造の固定化、生存
のための人民内部での激烈な競争
は、独占資本の支配の結果である。

このような状態のなかで、労働
者階級を中心とする人民の生活は、
困難で不安定なものにされている。

⑤人民の状況

就業人口の7割以上をしめる労働者階級は、資本の国際競争力を高めるための不断の労働強化、合理化、低賃金に押しとどめられ、資本による全人格的支配にさらされ、また、労働者階級内部での分断支配、不安定雇用の拡大のなかで、労働者の階級的な連帯が破壊され、人間的な生活を奪われていく。農業は、独占資本の農業破壊政策によって、農業による生活維持が困難になり、労働者化、半労働者化を余儀なくされ、残った農家の多くも、農業経営の継続と生活の困難に置かれている。

都市自営業者、漁民等の小生産者も、独占資本による支配によって経営と生活の困難に置かれて、労働者化、半労働者化を強制されている。

中小企業は、独占資本の多国籍化と国内市場の自由化によって、経営の困難に置かれ、また、独占資本の下請けとして過酷な条件を

要求されている。
人民階級は、相互に分断され、個々に抑圧・管理されている。
こうした人民の解放は、日本独占資本打倒と日米安保体制の打破によってしかかちとることはできない。

三、日本革命の性格

日本独占資本の国境を越えた生産力の発展と生産の社会化は、人口の圧倒的多数の労働者化と合わせて、社会主義の物質基盤と世界革命への発展の条件を成熟させている。日本社会の主要な矛盾は、独占資本を中心とする反動勢力と労働者階級を中心とする人民との矛盾である。現段階における日本革命の任務は、日本独占資本の支配を打ち破り、日米安保体制を打破し、社会主義への発展を切り開くことである。

したがって、その性格は、独占資本の支配とアメリカ帝国主義との同盟に対して、人民が結束して、民主主義の徹底を水路として、社会主義革命に継続させる革命としてあり、世界革命の一環として担

われる反独占反米人民革命である。
反独占反米人民革命は、労働者階級を主力とし、資本主義の要たる独占資本の支配を打ち破ることによって、民主主義的革命的な性格を社会主義的革命的な質へと継続する根拠をもつ。そして、社会主義の実現をめざす党の役割が果たされることによって、それは急速に社会主義革命に転化していくものになる。反独占反米人民革命は、世界・アジアの社会主義国・民族解放闘争と結びつき、革命の根拠地としての役割を果たす。

日本人の自治と共生をもとめた社会主義的な発展をおしとどめているのは、国家権力を牛耳っている独占資本家階級、民族の統合の要として、独占資本支配の利用手段となつて天皇・皇族、独占資本と癒着した国家高級官僚層、大土地所有者であり、また、それを代表する自衛隊政府、その利益を守る自衛隊・警察・刑務所・検察庁・裁判所など、反動国家機構の解体が不可欠である。

加えて、帝国主義の世界支配秩序の要としてある日米安保体制によって独占資本を支え、アジア・

世界人民に対して、侵略・抑圧しているアメリカ帝国主義は、闘争対象である。

この革命を推進し、社会主義的な発展をつくりだす担い手は、労働者階級を中心とする人民である。それは、独占資本の支配に反対する農民、漁民、都市自営業者、知識人、女性、青年、被差別大衆などの反独占人民勢力であり、反独占の立場にたつすべての人々と共に闘う。

四、日本革命の任務

日本を独占資本の支配から解放し、社会主義を実現するための当面する任務は、独占資本に導かれる支配階級の国家権力、すなわち、官僚・警察・軍隊の国家権力機構を解体し、労働者階級の指導性のもとに人民が権力を奪取し、人民権力・人民の武装力をうちたてることである。それは、反独占反米人民革命として、社会主義革命の第一歩を準備し抜くものでなければならぬ。

人民革命は、その力関係によつて、過渡的な政策をとる場合もあるが、労働者階級独裁の質そのもの

が準備されることなしに、人民権力を樹立し、発展させることはできない。

それ故に、人民権力実現のための戦略的要素は、労働者階級の階級性によって、人民の統一と党の統一をたかいかいとしていくところにある。なぜなら、革命は人民による人民のための事業であり、その主人公である人民自らが担い、闘争の中で、階級的統一をつくりあげてはじめて、真に人民権力をうちたてることのできるからである。

だから、人民諸勢力を統一発展させ、独占に反対するあらゆる力を結果する反独占人民連合を人民の政治参加の直接的な姿として、つくりださなければならぬ。その統一戦線の質的量的拡大過程こそ、人民権力の樹立過程として展望される。

人民のすべての力を反独占人民連合に結集し、その統一過程を通じて人民権力の萌芽を形成していくことに最大の努力を尽くす。しかし、この人民権力をつくっていく過程で、独占資本支配を打倒していくのにふさわしい過渡的な形態の政權も考慮される。すなわち、

人民権力樹立の前進を促す展望において、反独占人民勢力が当面一致できる政治目的をもつて統一戦線政府をつくることもある。

党は、この戦略的な目標の実現を以下の五つの戦略的観点にたつて自らの役割を果たしていく。

党は、第一に主導性の観点にたつてたかかう。戦争や恐慌などの支配階級の危機を待つて革命を実現するのではなく、いま、現在からの建設のたかいかいとし、能動的に革命を実現することである。

党は、第二に思想的結束の観点にたつてたかかう。思想的結束の観点とは、人民の統一とその思想的な同質化のために、党の役割を果たすことであり、人民の統一とその質的な発展を促すことである。それは統一戦線を形成する意味でもある。

党は、第三に陣地戦の観点にたつてたかかう。陣地戦の観点とは、革命の現実形態をいま現在から人民の陣地として形成し、それによって敵の権力を包囲していくことである。この陣地は、人民権力の分権的な性格をつくりだしていく基盤としてもある。

党は、第四に遊撃戦の観点にたつてたかかう。敵の支配の弱いところから敵を打ち破り、敵を包囲していくたかいかいとして、点から面へと発展させていくことである。また、人民の独自の力を形成するために、党の相対的独自の準備を行う観点である。

党は、第五に国際主義の観点にたつてたかかう。つねに、日本革命を国際的に孤立させず、国際反帝勢力の一翼としての位置を与え、日本革命に国際主義的な質を形成していくことである。

党が以上の五つの戦略的な観点をもつて、党の役割を果たすとき、革命の主導性、継続性、国際性を保証し、人民の勝利を実現することができるといえる。

五、人民権力の性格・形態

人民権力のなかで、人民自身が果たすべき役割はどのようなものか？

うちたてるべき人民権力は、人民が社会の主人公となつて権力を直接、実際に行使する自主的、民主的権力である。人民は、国家権力のすべての分野・段階にわたつ

て、実際に、かつ、有効に参加し、自主管理する。労働者・農民・漁民・都市自営業者・女性・青年・被差別部落大衆・知識人・中小企業家・その他の勤労大衆層の労働組合組織・協同組合・社会団体が、それぞれの関係分野での権力諸機構の決定の主体である。

人民権力は、労働者階級の指導性による連合権力の性格をもつ。それは、徹底した民主主義の実現を行い、旧国家機構を根本的に変革して地域人民評議会を軸にその連合体としての共和国をつくり、人民参加を実現し抜く民主主義社会制度を実現する。

人民権力のもとで、反独占人民政府の果たすべき役割はどのようなものか？

反独占人民政府は、人民が部分参加なし、協力する政府ではなく、人民が自治するものであり、直接に人民の要求と利益を実現する。それ故、生産点・地域における下からの要求を基礎とした人民評議会によって成り立つ地域人民権力を主体にする。そして、反独占人民政府は、その連合としての人民評議会連合のもとに、国家行

政を担当する全国調整機関である。人民権力に対して、指導勢力の果たすべき役割はどのようなものか？

各指導勢力は、一致団結し、また、すべての人民や人民の社会諸組織と共同して、建国事業と反帝国際主義のたたかいを、人民自身が自主的に担うことを援助する。人民権力の樹立と過渡的運営を助け、人民自身が階級的統一をもちとるよう地域人民権力の強化を通して自己の党的役割を担う。国際的には、日本革命を契機に、アジア・太平洋地域及び世界の反帝統一戦線と国際共産主義運動の統一を切り開いていく役割は増大する。

六、反独占人民綱領

反独占人民政府は、人民の総意に基づいて独占体を解体しぬき、人民が実際に権力を行使する新国家を建設するために、現存の国家権力と諸制度を変革し、政治における人民の民主主義を徹底する。また、人民が、労働と生活を豊かに、自主的に築きあげていくために、独占資本支配がなくなりだし

てきた社会・経済諸関係を清算し、人民の民主主義を徹底する。更に、人民が、内外の帝国主義とたたかい、諸人民の統一をかちとるために、人民権力を強化し、国家主権を確立すると同時にアジア・太平洋諸国との共生のために国の進路における人民の民主主義を徹底する。

1、政治の分野で

(1) 人民が統治機構の主体となり、権力を行使し得るよう、反独占人民連合を母体として、地域人民の自治と共生を実現する分権的権力として人民評議会をつくりあげる。人民評議会を軸に、労働組合、農民組合などの人民階級の組合・社会団体をもって人民評議会連合を構成する。外交、防衛は、人民評議会連合に属し、各人民評議会は、それぞれの地域の最高決議機関としての自治権をもっている。

(2) 新憲法の制定。人民を主体とする民主主義の原則に貫かれた社会制度と政策、新国家の目的、原則を新憲法として明文化する。そして、法のもとでの平等の原則をつらぬく。

2、社会・経済の分野で
(1) 独占企業を解体し、大土地所有者の土地を収用し、人民の自治と共生にみあつた再編を行う。
(2) 人民の生活向上、地域経済の発展と国の自主・自立・自給のための調和的経済運営。

3、軍事・外交の分野で

(1) 日米安保条約など、一切の軍事条約と軍事同盟の廃止。
(2) 自衛隊の解体。防衛のための人民の軍事力量の育成。
(3) 非同盟・自主、平和と共生のために国際的な役割を果たす。

七、革命の前途

反独占反米人民革命は、それ自身、社会主義革命の第一期をきりひらき、資本主義的生産様式の総体的な廃止をめざす社会主義的変革へと、連続的に発展させなくてはならない。当面する人民革命で、労働者階級の指導性が確立するかどうかは、社会主義革命の第二期に勝利するための保証であるだけでなく、社会主義革命を継続的にすすめる思想的・物質的準備を強固にする。人民評議会連合と、そのもとに

ある政府は、反独占人民綱領を徹底的に実現し、その成果の発展として、人民の民主主義を社会主義・共産主義へ高めていく。この発展をもたらす土台は、労働者階級・人民の知恵と力であり、それを援助する党の役割である。

日本人民が、世界の人民と共に同価値をむすばれて生きる道は、社会主義の建設を通じてのみ実現される。

社会主義革命の第二期は、人民権力のもとで準備された労働者階級独裁の内実を一層深化させ、資本主義的生産関係を一掃しぬくことにより社会主義制度を樹立する。つまり、人民の民主主義を完全に表現しぬく。生産及び流通の手段の私的・資本主義的所有を全人民的所有に代えて、社会の全成員の生活向上と、共に生きること保証するために、社会生産過程の計画化・社会化を行うことによりて搾取のあらゆる形態を廃止し、階級支配と階級そのものの廃絶をめざす。こうして民族的抑圧と不均等発展をなくし、全民族の対等のもとに、民族の融合をつくりだしていく。

社会主義制度において、労働者階級の階級性のもとに、思想的・物質的に社会の全成員の統一をむけて、全社会構成員が労働者階級を支持することによって、社会主義は完全な勝利を勝ち取ることができる。

社会主義のもとで、人が共に、目的意識的に生きることを束縛する一切のものを廃止し、人が人として価値を獲得し、共に、自由であるが故に幸福で平等に生きる共同社会を実現していく。

「万人が一人のため、一人は万人のため」に生活し、「各人は、能力に応じて働き、労働に応じてうけとる」原則が実現される。

社会の構成員は、労働と生活・経済・文化のすべての分野で、集団として目的志向性の一つにして、自主的に統治する。

社会主義制度を通じた共産主義への成熟過程は、世界的な労働者階級独裁・社会主義体系の確立過程であり、それは世界的な党的質的統一過程をとうして実現される。共産主義の高い段階では、生産力の著しい発展と新しい共同社会を築くとともに、知的労働と肉体

労働、都市と農村、労働者と農民の差異や民族間の矛盾は消滅する。「各人は、能力に応じて働き、必要に応じてうけとる」ことができる。人々のよりよく生きたいという生活要求は、自己を革命しつづつ、社会を変革し、あらゆる生きることの束縛・否定物として、階級と階級的差異そのものを消滅させ、それとともに国家そのものが死滅する共産主義社会を導く。こうして、真に人間解放を達成し、人々は、共に、目的意識性をもつて、人として同じ価値に結ばれる人間関係の共同社会が実現される。ここに、人類本史がはじまる。

第六章 当面のたたかいと任務

人民権力は、人民の直接の力によって担われるという展望のもとに、現在のたたかいにおいて人民参加の民主主義を徹底するものとして、当面のたたかいを担う。そして、その力を人民権力の母体である反独占人民連合へ統合し、いくために、現時点から人民参加を思想的・物質的に準備していく。

一、日本の国際的役割における民主主義の徹底

諸国、諸民族が平和に、かつ平等に共生する世界を実現するために、帝国主義による軍事支配、日米安保、日本独占資本による他国の収奪と闘い、地球環境を守り、南北問題の解決をめざす。1、世界平和をめざし、核廃絶と全面軍縮のために闘う。

2、帝国主義支配の要を担う日米安全保障条約等、すべての軍事的協定を破棄し、平和五原則の下にすべての国と非同盟自主外交を確立するために闘う。

3、自衛隊の解体をめざし、自衛隊の強化・核武装化・海外派兵と国内治安化・有事立法策動に反対してたたかう。

4、自民党政府・独占資本のアジア諸国への干渉・侵略・収奪に反対し、南北問題の解決の第一歩として、新しい国際経済秩序の確立をめざす。

5、全世界の社会主義・民主主義・民族自決のための人民の闘争を支援し、これと連帯して、アメリカ帝国主義とその同盟者の全世界人民に対する侵略・抑圧・戦争に反対して闘う。

6、人類的な危機をもたらす独占資本の利益優先による地球環境破壊とたたかう。

二、政治の分野での民主主義の徹底
人民の政治への参加と民主主義

救済のよびかけ

重信房子さんが日本で逮捕されました。誰もが驚きました。マスコミの大半はあいも変わらぬ警察タレ流し情報に基づいた報道を繰り返しています。重信さんを知る人に質問したいです。「彼女はそんな人物でしたか」。勾留理由開示公判での肉声はこうでした。「日本人と共に闘う為、日本とパレスチナの国際連帯を強める為に帰国した。皆さんと直に話し合いたい」。

重信さんの直接の逮捕容疑は「ハーグ事件」を支持したとされる事です。実行グループにいない事が明らかで、現場と連絡がとれない状況にもかかわらず「殺人未遂容疑」を当局は追加してきました。しかも「物証」なるものは「ハーグ」で釈放されたメンパーが逮捕時に所持していた手紙です。因果関係が逆です。やみくもに重刑化を図っている、としか言いようがありません。

「これで60年代が終わった」。当局者の発言です。「重信裁判」は

の徹底のために、日米安保体制を要とした日本帝国主義の管理ファシズムと闘う。

1、日米安保体制の下で、自民党政府の独占資本中心、米軍追従の政治と闘う。

2、憲法改悪、政治反動・軍拡を阻止し、人民の政治的権利の確立と民主主義の徹底をめざす。

3、民主主義の徹底を妨げる天皇制の廃絶をめざし、天皇制の強化と闘う。

4、先住民民族・在日被抑圧民族への差別・抑圧を始めとする一切の差別排外主義とたたかい、民族自決権を含む基本的人権を確立し、人民の共生と統一のため、民主主義の徹底をめざす。

5、中央偏重を止め、人民の参加と自己決定に向けて地域自治の強化をめざす。

三、社会・経済の分野における民主主義の徹底
人民の自治と共生をめざし、独占資本による管理支配、労働者・農民、その他の勤労大衆への搾

重信さんの行為よりも、60年代末に盛り上がった反戦運動を裁く、締めくくりとしての「政治裁判」の意味あいが強い事を、当局者自身が認めたのです。被告席には、かつて体制に意義申し立てをした数十万人の「私」の不在席もあるようです。

近年、「イスラムテロ」の活字が、恐ろしげに紙面に登場しています。次の言葉を思い出してください。「ベトナムテロ」。30年前、やはり紙面に躍った活字です。この言葉を当時の「私」はどのような受け止めていたのでしょうか。ベトナム戦争では米軍の戦争犯罪が次々と明かにされ、米軍の下級兵士にも深刻な後遺症を残しています。ところが、ベトナム後も世界で戦火が絶えぬ事はありません。パレスチナもその一つです。

重信さんが連帯していたパレスチナ・レバノンではイスラエルによる占領と空爆が、国連非難決議を無視して続いています。米國主導の中東和平交渉はイスラエル右派による挑発以来、流血の事態が続いています。二〇〇人を越える死者の大半は、投石するパレスチナ人がイスラエル軍によって射殺されたものです。これが他の国の出来事ならば「先進」各国やマス

取・収奪・地域生活の破壊に反対し、人民の労働と生活における民主主義の徹底のために闘う。

1、労働者に対する全人格的支配と闘い、労働者の生命を守り、生活を豊かにしていくために、生産点・生活点で労働者主権の確立をめざす。

2、食料の自給をめざし、農林漁業の発展をはかる。そして、農村漁村を活性化し、農民、漁民の利益を守り、生活を豊かにするために闘い、農民・漁民の主権の確立をめざす。

3、中小零細企業家、都市自営業者に対する独占資本による一切の圧迫と収奪に反対し、労働と生活を改善するために闘う。

4、人民が地域生活における生産と消費の自主的な協同化を促進し、自治の拡大、発展をめざす。

5、土地投機、債務地獄など独占資本中心の政策に反対し、人民が豊かな暮らしを営むことができる土地、住宅問題の解決をはかる。

6、管理教育に反対し、地域住民の参加とイニシアチブによって、

子供と教師による自主性、創造性、共同性をのばしていくような教育のあり方を作り上げていく。

7、大規模開発、基地、公害、原発などによる生活環境破壊に反対し、地域住民の決定に基づいて解決する。

8、障害者、病者、老人に対する社会保障、福祉、医療の拡充をめざし、地域の中で共に生きることができるようになる。

9、女性に対する労働と生活における一切の圧迫と不平等に反対し、女性の社会と生活における役割を高めるために闘う。

10、差別され、抑圧されているすべての人々の完全な社会参加、平等、自決と自治をめざす。

11、自民党政府の独占資本優先の税制に反対して闘う。

12、日本経済の自主的・自給的発展のために、日本企業による経済侵略に反対し、全ての国との平等互恵に基づく通商をめざす。

コミは「軍による民衆虐殺」に激しく抗議したでしょう。日本政府は国連の非難決議にさえ、米國追従の態度をとっています。ところが、当の米國は冷戦構造崩壊後、イスラム世界、ドイツ、そして日本を「主敵」にシフトを移しているではありませんか。日本とパレスチナ・アラブの民衆連帯は今こそ強く求められているのではないのでしょうか。パレスチナ問題は単に土地を巡る地域紛争ではありません。欧米社会が抱えた民族問題、植民地問題、宗教対立などの不完全な処理がこの地に投げ込まれ、さらに資源問題が加わっているのです。そこでは産業型文明が抱えた矛盾が先鋭に火花を散らしています。圧倒的な米國の経済力とイスラエルの軍勢力に対し、パレスチナ民衆は石を武器に闘っています。最新兵器も近代的拷問システムも民衆の希望をその手から奪う事ができないでいます。その「戦場」から重信さんは日本にやってきました。

「アラブの英雄」と讃えられ、レバノン政府に政治亡命を認められた岡本公三さんを日本は依然「テロ」として扱っています。これはヨーロッパからの独立のために犠牲を払ってきたアラブ諸国を「テ

口諸国」と決めつけているも同然で、アラブ人の誇りを痛く傷つけるものです。このような反アラブ思考で日本の当局は重信さんを追いかけ、逮捕し、裁こうとしているのです。

私達はレバノンの「岡本裁判」でアラブ世界の対日本赤軍観が日本や米國のそれと一八〇度逆である事を知りました。今度はその逆です。日本での「重信裁判」の成りゆきは、日本政府の対アラブ観の本音をアラブ民衆に知らしめる事になるでしょう。

30年前の息吹を保つ重信さんは、日本をどう見、どう変えようとしているのでしょうか。監獄の壁を越え、重信さんと語り合いませんか。そして当局による重刑・長期拘留を許さず、「再会」の日を日でも早めるために、1人でも多くのかつての「私たち」の協力を呼びかけます。

二〇〇〇年二月一八日

連絡先

救援連絡センター 気付
重信房子さんを支える会(準)
東京都港区新橋二・八・一六
石田ビル4F
03・3591・11301

連合赤軍事件の核心とは何か

植垣康博

Uegaki Yasuhito

植垣氏は赤軍派の一員として連合赤軍結成に参加。浅間山狂事件直前の七二年二月一九日に軽井沢駅で逮捕され、九三年三月に刑が確定。九八年一〇月六日、刑期満了して甲府刑務所から出獄した。著書に「兵士たちの連合赤軍」がある。

記録をたどり直す

——植垣さんは現在、連合赤軍の記録をたどりなおす作業を他の当事者たちとすすめておられるとのことですが？

植垣 正式名称は「連合赤軍の全体像を残す会」といいます。趣旨はこの名前

どおり当事者たちが集まって連合赤軍の記録を残そうということですね。始まったのは僕がまだ獄中にいたときだったんですけど、できてからは僕が当時のことを話すことを通じてみんなでああでもないこうでもない議論して、それに応じて僕もまた語っていくということをしていきます。もうひとつはみんなが事実関係を掘り起こしあっておたがいの当時の認識の違いをあきらかにしているところですね。

——お互い違いがありますか？

植垣 当然、当時はお互い話し合うような時間も雰囲気もなかったですからね。

て、それが「共産主義化」として論理化されて、それが一二人の殺害にいたるんですけど、遠山さん批判をめぐって革命左派内でどこまで認識が一致していたのか。また革命左派のサイドでは遠山さん批判としておこなわれたことがいつの段階ではじまっていたのか。あるいは革命左派のほうで向山さんたち二人の殺害をしたことの問題ですね。それについて革命左派内部でどこまで話しあったのか。赤軍派の反応を革命左派ではどううけていたのか。そういうようなことをお互いにつきあわせていく。そういうようなことをやっています。

——ここで植垣さんの裁判についてお話をいただけますか。裁判の過程では主に永田さんをサポーターするという立場をとっておられたとのことですが？

植垣 永田さんをサポーターするということではなく、連合赤軍の真実を解明しようとしたことが結果として永田さんのサポーターになったということなんです。それはどういうことかという、永田さんへの様々な批判、それが連合赤軍の本質的な部分をゆがめているということなんです。

そういうかたちでの連合赤軍をあつかうことは少しもプラスにはならないね。坂口さんも彼なりに問題の真相を解明しようとしたのは確かでしょう。それが問題の解明には必ずしもつながっていないという面が大きかったですね。たとえば、裁判の初期の頃、彼は革命左派の立場を守るというところから問題にかかわってきたからはじめから問題の解明には役に立たない。だからどうしても対立しあう。対立しあうことによつて僕のほうで問題を新しく出して、僕なりの総括がすすんでいくということでしたね。坂口さんだけではなく、他の人や検察側の論告、裁判所の判決への反論の問題もあるしね。そういういろいろなことが重なって僕の裁判はすすんできたんです。坂口さんは、その後情状のほうで裁判をすすめていて、それについてはどうこういうことではないんですが、真相をゆがめることに対しては、間接的な形ですが、僕なりに反論してきました。僕らの事件は情状でいくとただの刑事事件になってしまうんですよ。しかし連赤というのは違うんですよ。そこをみないと死刑攻撃にもよわいんじ

だからみんなそれぞれの捉え方をしている。そういう作業は裁判でもできなかつたんで、ここでやっておこうということなんです。連赤にいたる前に逮捕された人もいるわけで、そういう人たちの話からわかってくることもある。

——具体的には？

植垣 たとえば赤軍派と革命左派が共同軍事訓練をするんだけど、お互いどう考えてそれに関わっていったのか、ということでも初めてわかることがあるんですけど。赤軍派が瀬木さんのことを問題にした時、それをどう受け止めていたのか。あるいは遠山さん批判のあと、総括がで

やないかな。僕は連赤の問題は革命の問題だということを全面に出すことで裁判闘争をなんとかたもてたんじゃあないかなと思っています。

日本の左翼の経験として

——革命の問題としてあつかうということの核心というのは？

植垣 一四名の殺害の問題にしても、これは革命の問題として考えてはじめて意味があるんじゃないか。個人の責任にしてしまうと問題の本質がみえてこないと思っんです。連赤問題はスターリン問題であり、プロ文革とも共通性もっているんですよ。僕らを通して日本の左翼もっている問題もみえてくるんじゃないか。またスターリン問題やプロ文革の総括を通して連赤の問題もふかめられるんじゃないか、ということなんです。

——当時の状況をふりかえられてどう思われますか？

植垣 ブンドに象徴される当時の組織を、党の組織とするのか、運動の組織とするのかの違いじゃないのか。当時のブンド

の実体は運動の組織で、とりあえずその課題をめぐって結集する、おわつたら解散するという状況だったんです。赤軍派についてもまったく同様で、武装闘争を行なうということをもぐって結成されたようなものです。ところが、そうした運動の組織ということに自分たちは自信がないわけですよ。党といわれたら、やっぱり党組織は必要だろうなという気持ちで働いて、運動の組織でいいという自覚がない。党がないと運動の成長がないとか運動全体への指導もてないとか闘争の継承性を失うとか、いわれるとたしかにそのとおりで、自分のやっている事を肯定的に評価できなくなるわけですね。連赤問題のあとで組織というものを改めて考えられるようになった。連赤問題がなかったらそういう問題をもっと大きい日本の運動全体のレベルからとらえなおすという方向はでてこなかったんじゃないか、と思います。ソ連がなくなつたことによつて、左翼が崩壊するというように国外の動きで運動が変化すると、国内の運動自身もっている問題で運動が変化するのは意味が全然違うことだと

思う。そこに僕らの経験の重要性があるんじゃないか。経験があるから考えていく基盤ができる。国外の運動をとらえてあれこれ議論してもそこから結局、外国の物まねが生まれてくるだけです。日本の左翼運動はコミンテルンの指導を受けて日本共産党が結成されて以来、それだったんですが、その歴史を考えた時、日本人自身の経験からうまれる革命運動というのはいろんな失敗や過ちをおかしながらはじめてみえてくるんじゃないのかな。それが連赤問題の本質であり僕の立ち直りの基盤なんです。

——連合赤軍結成はどうみていたんですか？

植垣 新党の結成にはびっくりしました。赤軍派からみると革命左派というのは援助する必要はあるけれど、一緒にやっていく相手とは思っていませんでした。軍事技術の面でも作戦計画をたてていくという面でも能力としては劣っていました。ところが、森さんとしては革命左派をオランダするつもりだったのでしよう。というの、革命左派は赤軍派に依存する傾向にあつたからです。彼等も赤軍派と共

植垣 それは、七五年に坂東国男さんが出ていったことで、国内で誰が連赤問題を総括していくのか、あるいは公判を維持していくのかを考えると、僕が出ていくともう誰もいないわけですよ。森さんは自殺してましたからね。ひとりでも残っていないと論争も裁判もなりたない。だから、出国するしないのという問題ではなく、出国出来なくなつてしまった。端的にいえばそういうことです(笑)。それともうひとつ考えたのがハイジャック闘争も限界にきているんじゃないかという事です。

——よど号のグループについてはいかがでしたよ？

植垣 よど号グループはピョンヤンにいかざり、国家体制に組み込まれているのはしかたがないこととおもうんですが、最低限、日朝関係の取引材料にされないようにすることも彼等の仕事ではないかな、と思います。もちろん彼等が帰つてくることで国交が回復するんなら積極的に帰つてくればいいんですが、とにかく彼等がいることで日朝関係がきくしくくするというような意味で利用されて

死刑と再審

——坂口さんの再審請求に尽力されておられるとのことですが？

植垣 再審請求の趣旨ですが、ひとつは田中さんの死は医療ミスによるものではないのか、ということですね。傷害が原因ではなく、医療ミスが死の直接の原因だとしたら、殺人ではない。

もうひとつは爆弾の問題です。坂口さんは爆弾の知識をもっていなかった。爆弾がどういふ殺傷能力をもっているのか、そういうことがわかってないで爆弾をつかつたとしても、これは殺意があつたとはいえないんじゃないか。

今回はこの二点をやってみますが、あと僕が思っているのは、向山さんのことなんです。これは公判でも深くやっていないことなんです。向山さんに公安が接触しているんです。このあいだの栃木での少年の事件で、警察の電話が被害者本人にかかつて、警察の手がのびているのを知つて殺したということ警察の手落ち

闘関係にあるということと安心していたように思います。でも革命左派としてもブライドがあつて、そこに両者の齟齬もあつた。それが遠山さん批判をきっかけにして、両者の関係が一挙に新党結成へと至つたんです。

——日本赤軍についてはどうお考えですか？

植垣 いろいろあるんだけど、とりあえず彼らは義勇軍に徹するのがなによりじゃないのかな。テルアビブの闘いが、連赤の過ちをのりこえるために闘われたという、その気持ちはよくわかるんだけど、それは必ずしも国内の運動に役にたつたとはいえないんじゃないかな。気持ちはよくわかるんですけど、僕らが仲間殺しをして日本の革命運動に大打撃を与えたというのは確かですから。しかし国外の運動でそれを克服するというには必ずしもならない。それはやはり、大打撃を与えてしまつた自分達自身で克服の方向をみつめるしかない。

植垣さんは七七年のハイジャックのさい、日本赤軍の奪還の指名を断られましたか？

ではないかといわれていますね。向山さんの件も同じで、永田さんたちが向山さんに公安が接触したのを知つて、殺したということがある。ここで警察の責任もとわれるんじゃないか、ということなんです。再審はとにかく新しい証拠をだしていかななくてはなりません。当面なんとかしていけば死刑の執行もできなくなるんじゃないか。さらに坂東さんのことをおいて執行していいの、ということがあります。仮に坂東さんがいつか帰つてきたとしても、坂口さん、永田さんぬきには裁判はできませんからね。それに、なによりも重要なことは、連赤という歴史的な問題に対して死刑で答えるということ、これが持つ意味をよく考えてみるべきではないか、ということを権力に対してでも大いに強調したい点です。私は、この連赤問題は刑罰で処理するということになじまないというか、まったく反することだと思つています。だから、永田さんや坂口さんの死刑の執行ということは、日本の国家権力の歴史的な敗北だと思つています。(二〇〇〇年六月八日、「文藝」二〇〇〇年秋号初出)

「党」という悪霊を超えて

重信房子 出会いと別れ、そして再びの出会い

古めかしさに戸惑う

——重信房子との出会いと別れについて、まず思い出しやすいところから話して下さい。

松田 順不同に始めると、後で触れますように一九七一年の二月末に日本を離れた重信とは、半歳後の七一年十月にペイルートで再会しました。そのとき気が付いたのは、重信房子はどういうわけかほくより一回り下の酉年で一九四五年生まれ、ほくが一九三三年で、そのときちょうどペイルートにいた北沢正雄さんが一

回り上の一九二二年生まれだから酉年が三人そろったわけね。もう亡くなられなかったけど北沢さんは職業的な国際運動家で、アジア・アフリカ連帯会議の書記局長として北京やらカイロやらに、いつも日本代表としていた人です。で、その三人で定期的にPFLP（パレスチナ解放人民戦線）の事務所に行きながら、『赤軍PFLP・世界戦争宣言』略称『赤P』という映画のフィルムをほくが持っていていたんで、その英語版を作る翻訳作業をやっていた。その間隙を縫って、北沢さんが泊っていた一番いいホテルで三人で研究会を始めた、重信と北沢さん

松田政男

Masaaki Masuda
ききつて・橋本克彦
Hashimoto Katsuhiko

とほくとで。初めは主に北沢さんの国際的な経験をいろいろ聴き出してただけで、北沢さんの一方的なレクチュアを拝聴するだけじゃつまらないというんで、それぞれが考えてることを回り持ちで、一人が一時間くらいレポートして、午後から始めて夕方まで討論する、そして夕方にPFLPの事務所に顔を出し、打ち合わせして、終わったら夜のペイルートに酒を飲みに行く。ほくのわがままのアルジェリア革命論とかキューバ革命論とか、重信が一生懸命勉強してきたパレスチナ革命論とかについてはいくらかわかつてるつもりだったんだけど、南部

アフリカとか黒色アフリカについてはほくたち二人は全く無知に等しかった。

だからそのとき受けた北沢さんのレクチュアは非常にためになって、すでにその当時からたとえば獄中にいたマンデラをはじめ国際会議で隣人として会った黒人革命家たちについて話してくれたんですね。北沢さんはさらにカリブ海出身の革命家たちについてもよく知っていて、みんな亡命してるわけだから、そういう人たちと直接に生身で会っている。まあ、北沢さんのようなタイプの国際運動家という方はその後いないんで、今でもありありと覚えてる……とまずマクラを振って、ここから先が重信房子の話なんだけど、重信は一回りも年下なのにこんど帰ってきたときは恐ろしく古めかしいという印象が第一だった。何よりもまず発想そのものが、年下の若い世代の革命家の発想じゃない。というのも、帰ってきた日がちょうど山本萬里子さんの公判の日で、レバノンの弁護士のアブ・サードさんが証人台に立って、例の「足立正生獄中手記」が暴露した国際誘拐団による強制送還について、ペイルート側からの証

言をしてくれた。まさにその日の夕方に重信が東京駅に護送されてきて、それと一緒に大阪の新聞記者や救済関係者らも同じ新幹線に乗ってきて、彼らを通して渡された押収品目録の第一行に、「人民革命党綱領草案」と題されたのを一ページ目とする文書何枚」とか書いてあるのね。この「人民革命党綱領草案」という九文字が、重信について例のTV映像以外に出た情報の最初だった。「人民革命党」とは、何とまた恐ろしく古めかしい党名を名乗ってるのか、何だこれと思わざるをえない。しかも「綱領草案」とつづくんだからね。

ほくも重信房子の同世代だけれども、重信の考えでは、たとえばそれは三人とか五人とか綱領を決めるグループがあつて、その回りに第二、第三の参画者がいて、さらにさらに何重にも組織されていて、さらにさらに組織論をふとイメージしたわけですよ。となると、それはいかにもロシア革命的なといいますか、非常に強い弾圧の下での革命というものを考えたときの組織論の原型のような印象です。だから、ほくも一応は同世代として印象を

いえば、まだそういうことを考えてるのかという驚きがありましたよ。

さて、ここで振り出しに戻すとして、松田さんにとつての戸惑いというのは、北沢さんであり松田さんであり重信房子であるということは、同じ酉年といっても言い換えれば世代間の継承といえますか、そういう世代間の流れがありますね。松田さん自身は次の時代へのランナーの一人として重信を見ていたにもかかわらず、つまり松田さんが個的に影響を受けた戦後革命運動の何人かの思想家たちの最終章に登場する後継者としての重信房子というイメージだったのに、それが衆知として現在の時制で目の前に登場してきたんで、今の戸惑いのようなものがあるのかなと思つたんですが、そのあたりはどうなんでしょうか。

松田 「後継者」という言い方はオーバーだから、これは壇谷雄高流に、精神のリレー、思想のリレー、運動のリレーとも言い換えて、ほく流にアレンジすると、「やる」ことと「考える」ことという二つの動詞の原型を原理的に追求していくことのリレーだね。

リレーだからといって、「はい」って
 バトンを渡すわけじゃない。まあ、こっ
 ちがボールを投げたら向こうのバットが
 大ホームランか大ファウルを打った。こ
 の大ファウルというのは、むかし花田清
 輝が北一輝についてホームランと見紛う
 ような大ファウルを打ったという評価の
 仕方をして、それは非常に面白かった
 んだけど、重信房子があまりにもまとも
 な「人民革命党綱領草案」とともに日本
 に帰ってきたということは、これはもう
 大空振りの大三振なんですね。どうしてそ
 うなったのかということが、逆に不思議
 でしょうがない。

「党」なんていわないで日本に帰ってき
 て、ともかく日本の——人民という言葉
 を使いたくないなら人民でいいんだけど、日
 本人の運動の最前線に、「運動」その
 もののなかに飛び込みたかっただ、一
 緒にやりたかっただといえは、まだし
 も共感できるんだよね。

——ほくもその気持ちにはわかる。一緒に
 温泉に行ったり銭湯に行ったり、ほくは
 はつきり申し上げますが、日本にいて、
 その空気を吸わなかつたら今の日本人を

わかるもんじゃないですよっていうこと
 だ。もつとも何回も来て、この日本の空
 気は吸ってたのかもしれないですが。
 松田「党」を作るといふ発想は、必然
 的にピラミッド型の組織を作ることなん
 だから。つまり、まず司令部から作るこ
 うなことなんで、この司令部を作るとこ
 ろからまず発想する、その発想そのもの
 がヤバイ。党に入るんじゃないかって、お湯
 に入る、一緒に入湯するんなら許せるん
 だけども(笑)。

——そこはもう一度、どこが頂点だか底
 辺なんだかわからないよってことは、当
 然出てくる疑問じゃないかなと思う。

松田 そこで仕方なく、日本赤軍に関す
 るドキュメントの類を見ていくと、なぜ
 「党」という発想に至ったのかを、重信
 房子の誠実さまで、きちっと総括しよ
 うとはしませんでした。でもそのときも一番
 気になるのは、「党は人民を援助する」
 というフレーズが多用されていることで、
 本当に人民は援助されたがっているのか、
 援助なんか必要ないんじゃないの？

それは知らないうちに、「党はエー
 ジェントである」という、レーニンの有

また最後に「役に立つ」とかかっていって
 るんですね。人々に役に立つ変革の旗を
 これからあげて——役に立つとか援助
 するとか、このあたりで一種の革命のエ
 ンジェントという匂いを嗅いだりしますが、
 そのへんはどりなんですか。つまり、ど
 こか特殊的存在というか、上にいるとい
 うか、指導するということか、お世話をしま
 すというふうな。今の日本で、わたしは
 あなたがたのお役に立ちますっていうの
 はうさんくさい。

松田 それは自民党の議員たちと同じだ。
 ——それはこつちにしてみれば大きなお
 世話という台詞なんで、この台詞を聞い
 て、じゃおれも役に立つ側になろうと思
 うのか、そういうのいらないよと思うの
 かはその人の自由ですけど。

松田 なぜ「党」という考えに取り憑か
 れたのか？「党」という悪霊みたいなも
 のが憑依したとしか思えない。

——党という悪霊！
 松田 だけど、なぜそういうふうに取り
 憑かれたかという人民革命党に至る重信
 房子らの思想形成は、何冊もの分厚い日
 本赤軍のドキュメントを分析していけば

有名なフレーズがあるじゃないですか。そ
 れはプロレタリアートがないから、あ
 るいは闘争主体、革命主体が乏しいから、
 差し当たって党はゴリゴリの組織でもつ
 て未熟なプロレタリアートを代行してい
 くという発想で語られていたと思うけど。
 松田 重信房子たちはロシア革命以来の
 全革命運動を総括するといいつつ、だけ
 ど戻っていくのは、一番最初に重信たち
 が左翼になったときに初めて遭遇した
 「党」についての考え方なんで、それが
 しぶとく生き残っているとしか思えないん
 だね。「党」なんかいらなんだと発想
 を逆転させて、どうして自由になれない
 のかが、非常に不思議なんだ。

たとえば植谷雄高は「幻視のなかの政
 治」の一番最後のページで、もし革命の
 段階でかりに党が必要だったとしても、
 革命後に党が必要じゃなくなつたときに
 革命家たちはどうするのかと自問して、
 最後の章の最後の行に、みんな小学校の
 教師になつて、田舎へ行けばいいだろう。
 教師になつて、子供たちに前の世代の経
 験を伝達すればいいんだと自答している。
 権力の中核につくなんて決して考えては

解明できるんだらうけど、それはものす
 ごくしんどくて、虚しい作業だという気
 がするんだね。「党」というのは、そん
 なんも駄目だよ、そんなもんナンセンス
 だよ、もうはやらないよの三言で済まし
 てもいいような問題だろうという気がほ
 くはする。ここでまた思い返しますと、
 その重信房子とも「党」とは何だろうか
 ということについて、シビアで具体的な
 討論をしたことが一回だけあった。一九
 七三年十一月にペイルトで、そのとき
 すでにリッダ銃撃戦のあとだったから、
 重信たちはまだ日本赤軍と名乗ってなか
 った。アラブ赤軍と日本赤軍の間で、黽
 分たちの名称も定かでない。人民革命党
 なんて確信ありげな固有名もなく、アラ
 ブ赤軍と日本赤軍の間を漂流している
 という時代だった。そのときほくは北沢正
 雄さんや若松孝二や佐々木守なんかと一
 緒に向こうに行つて——そう、佐々木守
 が「ゴーストライター」として三日間で「わ
 が愛、わが革命」を書いたときね。その
 印税の確か二百万円だったかを講談社か
 ら先払いさせて、ほくが腹巻に巻いてペ
 イルトに持っていったことを覚えてる。

ならなくて暗示的にいつている。ほく
 はその通りだと思ふし、そのことの対極
 で再び植谷雄高風にいえば、「党」に援
 助されようがされまいが、三日間だけす
 べての民衆は革命家になりうるというこ
 とがあらゆる革命に共通する特徴なん
 ですね。三日間だけどこから湧き出るよ
 うに決起して、暴動にせよ蜂起にせよ、
 非常に勇敢に行動した連中が三日後には
 潮が引くようにいなくなつてしまふ。そ
 してその間に自称革命家たちが権力を簞
 奪するんだ。だけど問題は三日間も熱に
 浮かされた人びとのほうで、彼ら彼女ら
 が三日間だけ街頭で暴れまくって、あと
 は知らないよというのは無責任なこと
 も何でもない。その三日間の熱狂を組織
 しえるとしたら、それが革命家なんだと
 いう逆説を提起しているけど。この三日
 間だけ熱に浮かされて、街頭反乱に決起
 した人民もしくは民衆は別に「援助」さ
 れたから決起するわけじゃない。
 ——非常にしばしば自分で前衛などとい
 つてる人々を越えますよ。それは越えた
 意識さえもないように動くわけですから
 だから彼らが「人民を援助する」とか、

それ以外にも託されたカンパやら何やらいろいろ持っていたりして、十一月の終わりごろはパリに向かつて出発した。その別れのとくに重信と一晩だけ二人で話をする機会があったので、君たちの組織は早くも官僚化しているのではないか。たった一年か二年で、何でこんなことになるんだと批判した。

具体的というと、そのときは佐々木守が重信にインタビューして聞き書きを作った。それを本にまとめるということが主要な目的で、ほくはパリに行く準備をするために一緒に行つたのね。ところが第四次中東戦争が始まって、ホテルに閉じ込められて空港は閉鎖されるしどうにもならない。国外へ出るビザも下りない。こういうときは正直に書いたほうがいいだろうというんで、守さんは著作家、ほくは評論家と書いたら、それがアラブ世界では決定的にまずかった。そういう連中はなかなか入国させないのね。それで困り果てて某国大使館に日参しながら、いつも時計ばかり見てるもんだから、アラビア数字をだんだん覚えたりして、しまいにタクシーでメーターを誤魔化す

のもわかるようになったという副産物があったりする(笑)。

——いま誤魔化したらどうして?
松田 日参するうちにやつと明日こそビザが下りるといふときに、仲介に立ってた前からの知り合いの赤軍メンバーが、車二台でどうしても行かなきゃならない戦争だから途中で何ががあるかわからないけど向こうで落ち合う先は決めておく、でもその行き先は一台に乗ってる自分と、もう一台に乗ってる松田さんと二人にしか知らせない。ほかの人たちには教えないでくれっていうんだ。だけど戦争などで途中で万一どんなことが起こるかかわらないのに、ナビゲーターのほくとしてはその無責任なことできない。だからほくはただちに全員に、落ち合う先はここだからと教えた。ただこれは向こうは神経質に秘密にしているみたいだから、知らないふりしてとぼけてるといったのに、若松孝二が、われわれの落ち合うホテルではめしは食えるかなみたいなことを聞いたんで、赤軍メンバーが怒っちゃった。松田さんは秘密を守れないっていうんだ。こつちもアタマに来て秘密って何だ、戦

場に乗り込むのに秘密なんかないんだ、冗談じゃないよと大喧嘩したんだ。だから重信と最後に話したときに、非常に有能でナイーブな若い活動家にさえ、いつの間にか付きまわってしまふそういう官僚主義を批判したのね。むろんそのときはまだ「党」でも何でもないんだけど、党的なるものの根源には秘密を有するということがあるんで、ピラミッドの一番上の一番偉い人が一番秘密を知っている、下部のメンバーにその秘密を分け与える。これまた先ほどの「幻視のなかの政治」が、五〇年代にすでに喝破していることなだけだ。

——それが必ず積み上がる。
松田 ピラミッドの体形に、ついにならざるをえない。

——それが始まってたわけですね。

松田 で、そんな組織は駄目だと重信にいったわけだ。ところが重信がそのとき答えた比喩は非常に面白くて、自分たちはそういう硬直した考え方で組織をこれまで維持してきたわけじゃない。たとえばヨーロッパのどこにでもいろんな人たちがたくさんいる、その人たちに別に

上意下達方式でこういうことをやれとかああいうことをやれとかいうつもりはない。むろん日本との交通も当然あるんだけど、たとえばデンマークのどこかにいるやつが、こういう本を持ってらしいよというのを聞いて、読みたいなど思っている、それが何となく回ってくるっていうんだね。こういうことを一緒にやりたいという、それが何となく伝わっていく。重信はそれを「ステーション方式」といった。つまり党はセンターではなく、ステーションなんだ。荷物が受け渡されていく方式なんだ。重信のそのときの考え方は組織は古いピラミッドのツリー型ではなく、あくまでもリゾーム状に横に広がっていく。

この「ステーションとしての党」という考え方は非常に新鮮だとほくは評価して、ピラミッド型の党なんかとは全く違うわれわれが考えたことがないような新しい組織の結合の仕方をめぐって、何回かパリとベルリンの間で手紙の往復をしたりした記憶がある。どこかを調べれば当時の手紙のやりとりが残っているはずだから、重信の「ステーションとして

の党」という考え方は、少なくとも七三年には確かにあったはずなのに、それとは全く対極的な人民革命的発想に移行してしまつた。この七三年秋が生身の重信と会つた最後で、歳月は流れて二十七年ぶりに拘留理由開示公判で重信本人とお話をしたわけ。歳月はあ的美貌を普通のおばさんに変えてしまつたけど、それと同じように「ステーションとしての党」という自由な発想が、逆に「地下組織としての人民革命党」というところまで矮小化されてしまつてるといふのも、やはり歳月の恐ろしさなのかな。

明治大学での出会い

——それが最初にいわれた戸惑いの中心ですね……。重信房子ははくとたまたま同じ年で、六〇年代のあの時代から赤軍派、関西のプリントです。それが赤軍派になって、その後よど号ハイジャックや腰を抜かすような大事件を巻き起こしていく。連合赤軍やこのパレスチナ組もそうなんですけど、そもそも最初の出会ひのときに、松田さんはどういうポジシ

ョンにいたんですか? ほくの承知して限りでは松田さんはアナキストだったはずですよ。

松田 重信房子と最初に会つたのは、一九六六年の暮れだった、明治大学で。

——当時は赤軍派は……
松田 まだない。明治はちょうど学費学館闘争の渦中だった。

——早稲田が終わつて次が明治……
松田 六六年二月に早稲田が終わつて、それが明治、中央というふうに関が継がれるかたちで。その明治の駿河台校舎でまず出会つた。重信は二部だったから、駿河台だったわけ。もつとも全学ストから、和泉校舎も生田校舎も、あちこち

にある明治が全部バリケード封鎖した。——ほくは当時、明大前に住んでましたから遊びに行きましたよ、和泉校舎のほうに。当時のバリケードなんていうのは、机を二列くらい並べてるだけで、しめ縄でも張つてみるみたいなバリケードでした(笑)。松田 で、その駿河台校舎に山口健二とか太田竜とか斎藤龍鳳とか年長者どもと一緒に、自称軍事顧問として、そういう弱いバリケードをこれじゃ駄目だと

かいつて補強するとかやりに行つた。ちようどその年の十月十九日に日特金屬に突入した黒ヘル部隊がそのころ保釈で次々に出てきたんで、その一団を引き連れて明治の学館にほとんど連日のように泊り込んでたときに、特に目立つというわけじゃないんだけど重信と出会つた。

——いま富士銀行になつて明治の学館でしょ。

松田 ええ。その感じのいい女性活動家として重信がいた。当時からプントの活動家で、明治の二部自治会(学苑会)の財政部長だった。よど号ハイジャックのときに、塩見なんかと同じように共同謀議で起訴されたU君が二部のプントの行動隊長で、その男と重信が仲がいいっていう話だったころね。

われわれ黒ヘル部隊はいつも学館の片隅にたむろして、八路軍みたいな規律を保つてたからけつこう目立つてたわけだ。するとU君が夜申プントの若いやつに黒ヘルは迷惑なんだけどものごくよくやつてくれるんで、松田政男とか追いつくわけにいかないんだよななんていつてるのが聞こえてくる。立ち上がつて行つて、

なあに、文句あるならちゃんと言つていって、いや、そういうわけじゃないって恐縮したりしてた。われわれは夜中の張り番とか率先してやつて、その間にいろんな党派の非常にたくさんの方動家たちと、焚き火をしながら話したりしたのが、後年すごく役に立っただけだね。そのときに構内を闊歩しているのがプントとM.L.派で、二部の委員長がM.L.派だったから、プントとの連合政権だったわけだ。最大の敵対党派が民青で、中核派も社青同解放派もまだ登場してないころだった。

その闘争の真つ最中だったかに学生大会があつて、民青の側が会計監査で財政部長の重信を責め立てるには、会計監査に出した書類のなかに伊勢丹の婦人服売り場の領収書があるとか何だかんだいい出して、つまらないことでもいちゃもんつけたのね。重信が弱り果てて、われわれ自称軍事顧問の年長者どもがいるところに来て、困っちゃつた、どうしようみたいなことをいうんで、山口健二が毅然として、パリケードのなかの女性活動家たちが男だつたら多少は我慢できる身だ

しなみに気をつけることは当たり前前で、洗濯する間がなくて下着を買つたりして着替えるのは当然だと堂々と学生大会で主張して、民青の女の子たちは戦わないうからいつもきれいな下着をつけてるんだというふうな、逆に反撃の材料にすればいいんだつていつたのね。重信がその通りに学生大会でいつたかどうか知らないけど、そのとき非常に喜んだはずだと思つて。革命運動の年長者とか自分先輩たちに対するある信頼感を、たぶん持ったんじゃないのかな。それが最初の出会いで、そのあと六七年二月の例の二・二協定の裏切りがあつてプント系のS委員長が失脚する。

——明大闘争の終息ですね。

松田 そんな経過があつたために、重信とはその後ほとんど会うこともなくなる。

——彼女はプントの側にいた。

松田 ええ。まあ、プントが落ち目になつて、六八年の段階でしようがなくて統一プントを作つていく方向になるんだ。そのころのわれわれは、六七年二月からレポルト社を始めたわけ。さつきいつた太田竜、山口健二、ぼくと佐々木規夫の

お兄さんの佐々木祥氏、いま現代企画室

にいる太田昌国がまだ外語の学生で三月に卒業して入つてきて、われわれ四人がいつてみれば同人で太田昌国が事務局専従になつて、「世界革命運動情報」を出したわけだ。このあたりは「文藝」のこの前の赤軍特集で話したから、省略するとして、六〇年代の新左翼の国際部を一手に代行するみたいなことをやつて、当時の新左翼はプロレタリア国際主義と組織された暴力というのが二本立てだったから、その国際主義の側を担う役割をとりあえずやつていく。そのときのシンボルがチェ・ゲバラだった。

それで何年かたつて、いつしかぼくは映画評論家に変身しつ七〇年代に入る。そして七〇年の六月に「映画批評」の事務所を開いた。「映画批評」の創刊号を九月の初めくらいに出すために、その準備をすつとやつたら、ある日まさに突然といった感じで、そこに重信が訪ねてきた。「世界革命運動情報」のバックナンバーを読み返してみたいというんで、毎日それから来るようになる。

赤軍派登場の画期性

——ウニタとか文献室にでも行かないと、ああいう雑誌はそろつていない。

松田 毎日のように来るからいつたいたいどうしたんだつて聞いたら、偶然とは恐ろしいもんで、開拓社という赤軍派の公然の事務所が「映画批評」と同じ本郷三丁目にあつたんだね。ところが開拓社は公安が完全に張りついて電話も盗聴されているし、どうにも身動きが取れないんで駆け込み寺的に「映画批評」に来て、編集室で一日じゅう勉強してるみたいなことがあつて、それが七〇年の六月から七月くらいまでつづいてたのかな。赤軍派そのものは六九年九月の全国全共闘結成大会に突然登場してたから、その過渡期世界論が奇妙なことに、レポルト社風にいえばゲバラの国際主義と、それからファノンの暴力論とに問題意識としてちよつとフィットしてたんで、重信が勉強しにきてたんだらうけど、そのときはまだ何を考へてるかよくわからなかつた。

——それまでに日大と東大の全共闘運動があつて、やがて全国全共闘になるんだ

けど、それは実は現実的には東大と、日大の闘争の終息過程なんです。ところが日大や東大の闘争を見ていた全国の大学、八割くらいの大学が何らかの形で二日か三日かもしれない三日くらいストライキをやつたりしてるような、そういう流れになつてたんですね。水ぶくれしながらも実際に昔から活動してきた活動家たちは、ある行き詰まりを感じてたんでしよう。日比谷での全国全共闘大会なんというの、辛うじてそのへんまではぼくは脇のほうにいるんだけど、各党派も持て余してはいたはずですよ。

松田 安田講堂攻防戦で一月に東大が終わり、六月から七月にかけて日大も終息する。——本当に終わった。終つてない、というのがありますけど。

松田 九月の全国全共闘結成大会というのは、名目では全国全共闘だけど、全共闘運動の党派的収奪だった。赤軍派の登場がそれを象徴する。

——ところが一方で七〇年というのを前提にした発想がありますから、運動論的には明らかに時間稼ぎ的に六九年の夏で

すから、そのなかで非常にけつこうな数の人間が、このやり方じゃ駄目じゃないのかという疑問は当然も出てたんじゃないですか。

松田 赤軍派の画期性というのは、「軍」と明からさまに名乗ったことなんだね。一種のネーミングの勝利なんで、しかも赤軍という「軍」として成立するはずなのに、その下に「派」が付くという非常に奇妙な感じがそのときからした。

赤軍派という名前を見たときから、もう止めたほうがいいとぼくははつきりリタイアしましたけどね。

松田 いよいよ「軍」を名乗るやつらが出てきたかということ、その軍がセクト抗争の一分派で「派」とも名乗るっていう奇妙なギャップね。

関西派、情況派、戦旗派だのいろいろあった。戦旗派だって早稲田でしくじったり、わが日大芸術学部なんかにも一生懸命ちよっかい出すんだけど、あの中からは情況派が象徴するように、深く深くただただ考えていくという人々と、それからもう直接的なゲバルト、直接的な行動しかないんだというように分化し

ていくのを最も先鋭的に反映しちゃったのが関西プリントなんですよ。

松田 そのなかで重信房子は、そのときもU君とペアだったのかどうか、ともかく連合赤軍の粛清で殺された遠山美枝子なんかも明治だったけど、明治のなかのある部分が後年の叛旗派とか情況派とかみたいな自立主義に行く方向じゃないところを選ぶとしたら、関西プリントに付くほかはなかったんで、東京では圧倒的な少数派だったと思う。それから大菩薩峠事件があり、よじ号ハイジャックがある。でもぼくはよじ号ハイジャックのときは北朝鮮なんかに行ったりして、いったい何を考えているんだと呆れ返るしかなかったけど。

本人たちは本気で北朝鮮を国際根拠地だと思ってたのか？ 未だに疑問ですね。

松田 いや、本人たちは金日成を説得するって豪語してたわけだから。

そのへんがロマンチックなのか、リアリズムじゃないかっていうのか、さっぱりわからない。

松田 ともかく重信とは「映画批評」の編集室で国際主義をめぐって何となく話

装甲車を突破して国会正門へ行くこうっていうんで、味岡が装甲車に上って向こうを見たら、全部機動隊だった。

——まんまと入っちゃったんだ。

松田 しまったと思ったんだけど、唐牛が敢然と機動隊のなかにダイビングしていったんで、味岡もつづいて飛び下りて、最初に行ったデモですぐ捕まったという偉い男なんだ。その後も六二年夏の日銀デモとかいろんなことで付き合いがあって、思想家としての三上治はどうかなと思うんだけど、活動家としての味岡修と

——そのころから六五く六六年くらいまでは、明治の手打ちしようがないかもしれないけど、プリントというのは面白かったんですよ、おちよこちよい。

松田 その味岡や神津たちのいたところに、なぜか重信房子が酔っぱらって入ってきた。「味さんや」とか、いつの間にか妙な関西弁になってね。

——わかるなあ。突然関西弁、というの、

松田 夏の間に関西にずっといたのかな。「何なんや、味さん出てきたんか」とかかって、実に不思議なイントネーション



1975年8月15日、スペインの新聞「Arriba」に掲載された公開手配写真。上段左から奥平純三、松田政男、カルロス、ひとりおいて丸岡修、下段右が山本萬里子（敬称略）

をしてるうちに、また二カ月ぐらいたって七〇年九月二十五日という日付をなぜかちゃんと覚えてるんだけど、叛旗派の神津陽から突然電話がかかってきて、きょう味岡修こと三上治が保釈で出るんだけど、どうしても保釈金が二十万くらい足りない、それを何とか夕方までに持つていけばきょう出てくれるんで、何とかならないかといってきた。味岡は大学一年のころからの付き合いだったんで、しようがないから、こういうときすぐにお金があるのは映画人なんで、あちこちに電話して、確か「映画批評」に五万円くらい金があったから残りを何人かにカンパしてもらって、それで保釈で出てきた。その夜お礼がしたいっていうんで、当時の「ユニコン」で待つたら味岡や

神津たちが来たんだ。神津が下駄はいてきたのを今でも覚えているのは、下駄をはいてる書記長っていうのはわりとカッコいいと思ったからかな。味岡は中大一年生のときが六〇年安保なんで、中大と明治が一番先頭についてる間に出た四・二六のときに、装甲車の上で当時の唐牛健太郎委員長が演説して、学生諸君

なんだ。初めは黙って聞いてたのは、コミッサールなのか何なのか変な眼鏡かけた女の子が付いてて、重信が外でいい加減なことをいって回らないようにチェックする役目なんだろうね。その女の子が「ふーちゃん、それいっちゃ駄目よ」とか何とか隣でついたりしてらううちに、だんだん「何いってるのよ」と反撃して、結局「味さんたちのいうてることもわかるけど、世界性の問題なんや」というのね。「三多摩から世界革命でできるのか」みたいなことになると、新選組と坂本龍馬の論争みたいになって大笑いしてらううちに、二言目には何をいつても「世界性の問題なんや」と反撃するんで、その日の論争は公平に反旗派の完敗だった。裏面目な顔して「映画批評」の編集室で「世界革命運動情報」を読んだ重信が、いつの間にかそんなふうになってた。余計なことだけ重信が誰にもいやがられなかったのは天性のキヤラクターなんで、「映画批評」でも編集部

の筒井和美という「煉獄エロイカ」に出ていた若い女優さんをはじめ、もう二人いたのが「日本読書新聞」出身の高阪進や

日芸の行動隊長だった岩淵進だったんだけど、みんな重信大歓迎で花札を教えたりしてた。革命家はコイコイが好きなんだ(笑)。——それとも一つ、影の声として付けて加えておけば、年長の兄貴分たちは年下にやさしかったよ、べらぼうに。その雰囲気も加えておかないと。

松田 その重信房子が今や味岡たちと堂々と渡り合って、おかしな関西弁で「それは世界性の問題なんや」って、一度「世界性」と発語するとみんなが黙っちゃうという雰囲気に包まれてるのね。

その晩「ユニコン」にいた大島渚が面白がって、この夜の出来事を「わが日本精神改造計画」という書き下ろしの本で描いている。やがて歌合戦になって、大島渚が「鴨の河原で全学連が騒ぐ」というような五〇年代の替え歌を歌うと、重信が「ガリ切ってピラ撒いて一年生」って返す。これがよかったんだ。歌合戦でも叛旗派は完敗して、出獄歓迎の主役のはずが重信登場でガツクリする。

——当時の「ユニコン」の空間と変な暗い店のイメージが彷彿としてきますよ。

松田 そのうちに重信は酔っぱらってし

まって、付いてきた女の子が「ふーちゃん、帰ろうか」っていても「あたしは帰らない」って頑張りもんだから、十二時過ぎにはその女の子もいなくなる。で、仕方なくそのときいた某俳優に「クルマで来てらんなら送ってやってよ」っていったら、車の中でゲロ吐かれるからいやだって、帰っちゃった。「ブルジョア的」とかいつてばくまで喚いたりしてるうちに、結局みんな帰っちゃって、店の客は誰もいなくなり、マスターたちもキイを置いて帰っちゃった。

——そのあたり煙のごときアトモスフィアで、空気とか雰囲気とか、「世界性」ということばはあの行き詰まってるよさの、これをいつちゃ、ぼくは袋叩きになっちゃうかもしれないけど、国内の運動の逼塞状態の先に見える夢のような解放感なわけですよ。

松田 ゲロの始末までさせられたマボロシの一夜が過ぎて、その翌朝の五時ごろ喫茶店に行つて、モーニングサービスで夜明けのコーヒを飲んだときに(笑)、「映画批評」で勉強してたのは結局どうなったのって聞いたら、国外に出よう

けなんだけど、アジテーションは滝田が圧倒的にうまいんだ。あの関西弁にはかなわない(笑)。その滝田のおかげで、くもあいう集会での演説がかなりうまくなったけど……。本来なら滝田と重信が二枚看板で話さなきゃいけないのに、重信は大衆的なアジテーターじゃないんだね。これは重信房子の特徴の一つだと思うけど、ニコニコ笑いながらいろんな人と話をするという能力は長けてるけど、集会でアジッたりはしない。だから重信の代わりにぼくが出ていかされた面もある。

パレスチナへ旅立つ

——「映画批評」には若松さんは直接的にコンタクトしてたんですか？

松田 直接には関係ない。

——足立さんは？

松田 足立正生は「批評戦線」の同人だから、登場回数が多いよね。そのうちに重信は独自の回路をたどって、まずパレスチナへ行くというふうな方向が定まってくる。そのとき気づいたのは、パレスチナ革命についてレポルト社を名乗り、

「世界革命運動情報」を出して、新左翼の国際部を代行するなんて偉そうなことをいつてたわれわれが、パレスチナ問題自体について何も知らなかったということだった。それは「世界革命運動情報」のバックナンバーを調べれば一目瞭然なんだけど、確かパレスチナ問題は一度も取り扱ってないはずだ。逆にパレスチナ問題から出発しても太田竜みたいに非常に歪曲された反ユダヤ主義のほうに行っちゃったやつはいるんだけど、ぼく自身は全く無知だったんで、重信にいわれてあわてて初めてパレスチナ問題について勉強しはじめた。ここそが世界史の矛盾の焦点だということに初めて気づいた。それこそ負うた子に教えられるという感じで、パレスチナ革命への問題意識がぼく自身も一気に高まった。そこからあとはもう一気呵成で、パレスチナ問題についているんな話をしながらお金を集めようっていうんで、当時のいろいろ有名な作家たちの間を回ったりする。

——あのころ小田実の文章で記憶があるのは、たとえば百年単位ならイスラエルという国については了解できるが、五十

思ってるっていうから、それはいいね、どこだってまた聞いたら、九月の段階ではまだはつきり決まっていなかった。どこか中近東のほうに行きたいっていうんで、とりあえずアルジェに行つてみたらと勧めたりした。アルジェのカスバと反対側の小高い丘にブラックパンサーのエルドリッジ・クリーパーはじめブラックパワーや中南米の革命家たちが亡命してて、そこで世界革命評議会を夜な夜な開いてるといふ伝説があつて、そのころ行方不明になってた山口健二も日本代表でいるという風の便りもあるなんていつたりしたんだ。それは全くの嘘だったんだけど、まずアルジェに行つて世界革命評議会に日本の赤軍派の代表として出席してみたらとか、主題歌はやっぱり「ここは地の果てアルジェリア」かなんていつてるうちは、まだマボロシのつづきだったのね。

でもそうやって一度方向を定めたら、やっぱり重信というのはオルガナイザーとしてはすごいんで、三日にあげずほくを呼び出して、主として関西のいろんな集会で滝田修といっしょに演説させるわ

年単位ならパレスチナに正義があるんだという。あそこにはイスラエルが建国する前のイギリスの委任統治時代からの流れがあるわけで、戦後ユダヤ人にイスラエル国家を割り込んで作らせた。それは日本人の一般的な常識になつてなかったんです。**松田** 日本人の間でパレスチナ問題に関心が行くのは、結果としては七二年五月三十日のリッダ闘争以降なんだ。その後NGOみたいな連中が、盛んにパレスチナの子供たちを救えなんていいだすのもリッダ闘争の影響なんで、なのにNGOの側は日本赤軍がパレスチナにいるのは迷惑だ、ああいう闘争だけが国際連帯だと思われたら迷惑だみたいなことを書いてるんだな。積極的な活動家の一人である田浪亜央江さんも、確かそういう意見だったと思う。曲解も甚だしい。

——松田さん自身はアナキストというよりも、当時は太田竜たちの第四インター系で……

松田 でもないんだ。

——あのころは革命家という自己規定が明快だったんですか。

松田 ぼく自身は失業革命家と当時いっ

てた。

——あるいは、いくつかの雑誌では松田さんの最後の肩書にカッコ、革命評論家。松田 それはないな。六七年以降は映画評論家に当然なってるんだけどね。

——もう一つお訊ねしたい点は、当時の方向性というが路線としては松田さん自身が、世界性をめざすところにはいたんですか。松田 ええ。だけど世界性の只中において、たとえば太田竜のように第四インターの同盟員で、世界大会なんかにも当然出席したりしても、キャラクターそのものが世界性を体現しているというふうには必ずしも思えない場合もある。ほくが初めて自らのキャラクターとして世界性を体現しているように思えた最初の活動家は、やっぱり山口健二なんて太田竜なんかとは異質だった。ほくよりも若い世代のなかでは重信が最初のキャラクターだったんで、しかも思いがけないことに、パレスチナ革命という一点を突破して世界性のほうに出ていこうとしたという方向性自体が七〇年代では抜きん出てたんじゃないかな。そのセンスのよさでね。しかも向こうに行つて、まずPFLPと最初

程度あつて、パネというか反応を鈍らせるというか、あるいは見ぬ振りをするか。

松田 その障壁を日本から出した重信房子が、文字通り野蛮に突破してパレスチナに行つた。ひよつとするとパレスチナ問題というのは、重信房子と日本赤軍の一連の行動がなければ、これほど世界史の焦点になるのも、もうちよつとあつたかもしれないという気がする。

——それはいえませぬ。それはポイントなんだろうな。

松田 そのあたりの重信のセンスはいいんだね。そして年が明け準備万端とどいて一九七一年二月の末に重信はパレスチナに旅立つわけだ。それ以前に重信が奥平剛士と偽装結婚をして名前を変えてたとか、そういう問題についてはほくは一切関知しない。また赤軍派よりも京都の各大学のバルチザン軍団の側をオルグして、パレスチナに送り出してたということも知らない。そのあたりの非合法の世界を生きる活動の仕方、ほくを合法面でのパートナーとして遇しつつけたことを含めて非常に立派だと思つて。で、羽田を発つときに送りに行つたのは重信

に接触する。PFLPは早くからマルクス・レーニン主義を指向していたから。

——ですから圧倒的にベトナム戦争の向こうに隠れていたポイントなんですよ。地理的に。ベトナム戦争やチェ・ゲバラの冒険活劇物語のようにキューバ革命の様々な記録を読んだりしても、それは全部ベトナムに収斂していたのでは、せいぜい東シナ海までしか視線は届いていない。その向こうにパレスチナがあつた。

松田 足立正生送還劇のときの「文藝」赤軍特集で話したように、チェ・ゲバラの「二つ三つのベトナムを」といった衝撃があまりにも大きかつたんで、その「二つ三つ」のなかにパレスチナがあることを、極端にいえば六〇年代は誰も考えてなかつたんだ。

——考えてなかつたんですね。あるいはゲバラ自身にもなかつたかもしれない。松田 ゲバラはコンゴに行くわけで、あのときもシゲバラがパレスチナに行つたとしたら、全く違う展開があつたかもしれない。ゲバラはアルジェリア革命に親和感をもつていたし、そのアルジェリアでは第四インターのパプロ派の領袖だつ

のお姉さんと遠山美枝子とほくとの三人で、もうひとり知り合いの女性に万が一にも空港で何かが起きたときは救援センターに連絡してくれということまで百メートルぐらい離れたところにいるもつて、チェツクインするまで待機してもらい、すべて終わったあともしばらく様子を見てて大丈夫だろうと、当時の羽田空港の地下の喫茶室で何となく四人で乾杯をしたんだけど、そのあとどうなるか全くわからないから、非常に不安な乾杯で送り出したわけね。

何故かという、今や当の本人たちまで否定するんだけど、若松孝二や足立正生は、松田政男は「赤軍ねえちゃん」と付き合つてから頭がいかれておかしなつて、日本映画に関心がなくなつて夢みたいなことはかりいつて馬鹿にしていたんだからね。映画人で重信を応援するのはほく以外には、特に名を秘すただ二人だけだつたんだよ。あととみんな「赤軍ねえちゃん、赤軍ねえちゃん」といつて馬鹿にした。重信は美人だから松田政男が騙されるの無理ないよなんてみんな無責任なことはかりいつてた。

たミシエル・パプロがベンベラの政治顧問だつたこともあつて、世界革命という視点に立つとまずアルジェリアが焦点になる。しかもコンゴがルムンバ暗殺をめぐる大動乱の時代だつたから、ゲバラがコンゴを選んだというのも理解できなくはないんだけど、もしもあのときパレスチナに先駆的にゲバラが行つていたら、全く違う世界情勢に流動したかもしれない。ゲバラも戦死しないで済んだかなという気がする。

——それもありませんね。パレスチナの状況に対する国際派の——別に第四インターというわけじゃないけど、国際派の状況認識のなかに民族問題一般みたいな一定程度の規定があつて、それよりアルジェリアだつたら絵に書いたように……松田 おそらくパレスチナ問題はユダヤ人問題とワンセットだから、やっぱりユダヤ人問題がタブーになる。逆に世界革命を志向するイデオログや活動家たちのなかにユダヤ系がすく多くて、パレスチナ問題もタブーになるんだね。

——タブーだつたのかもしれない。ユダヤ人に対するシンパシイみたいなものが一定

ところが一九七一年五月のキャンヌ映画祭で、ちよつと大島渚が『儀式』を出品したときに、フィルムマーケット部門で若松孝二の映画をやるというんで、『性賊』とか『犯された白衣』とかを持つていった。若松孝二はついでにパレスチナ・ゲリラのドキュメントを撮つてきたら、どこかテレビ局に売れるかとかいいだして、「赤軍ねえちゃん」に連絡してくれというんで、しようがなくてベイルートにこういう二人組が行くからつて国際電話した。で、またまた羽田へ見送りに行くと、アイモの三分間しか写せない手回しのカメラと、でかいザックいっぱい、フィルムを詰め込んだのを足立正生が抱えてキャンヌに出発する。こうしてキャンヌからベイルートへ行つて、重信とドッキングして「赤P」ができたんだ。

でもここで足立正生と若松孝二が偉いのは、彼らが前線に行つてパレスチナのゲリラたちと一週間か二週間くらい生活をともにしながら一つの体験を共有した過程で、自分自身を変えたことなのね。それは当然その前に着いていた重信も観念としてのパレスチナを具体性としての

パレスチナに昇華させたという確信があるから、若松孝二や足立正生に前線のドキュメントを撮らせて、必ず彼らも何かが変わるんだと絶対そう思っていたんだろ。奥平剛士や安田安之や、山田修や檜森孝雄らが、日に日に前線のキャンプのなかで変わっていくのが見えたからこそその確信だろうね。こうして『赤P』を彼らは撮る。ただ残念なことに『赤P』はPFLP側の映像がすごいんだけど、赤軍派の映像が統一赤軍結成大会とかいう四谷公会堂の非常に矮小な集会しかないんで、PFLPと対応すべき運動が日本には全くないんだということに逆さまに浮き彫りした非常に貧しい映画だとぼくは当時から批判してただけで、それでもしょうがないんでできあがったフィルムを持って、ぼくは七一年の秋にペイルートへ行く。

締めくくりの話をすれば、最初にいったようにペイルートで北沢正雄さんと偶然にも出会って、北沢さんを中心に英語版の翻訳チームを作る。向こうにいた日本人ジャーナリストたちを中心に強行軍で完成させて、ペイルート郊外のパレスチナ人キャンプで上映したときに、会場

がどよめいて、みんな泣いた。『赤P』のなかに写ってる前線のゲリラ兵士たちは、九月のイスラエルとの戦闘で皆殺しにされていたからで、その遺族たち、父母たち、兄弟姉妹たち、幼い息子や娘たちが『赤P』を見て、一カ月前に死んだはずの自分の肉親が生きて動いているので号泣したというんだ。そのときぼくは今まで観念として、あるいは運動の課題としてのパレスチナ革命みたいなことをいってただけだと非常に恥じて、この生身のパレスチナの人びとと生涯つきあわなきゃならないんだと、初めて自覚できた。たぶんそれと同じような自覚を、前線のキャンプで若松孝二も足立正生ももったんだろうし、さらにリッダ空港で死んだ戦士たちやその仲間たち、それにもちろん重信房子も含めてみんなどこかで決定的な回心の過程があったんだらうね。神山茂夫が一番好きだった言葉に、「実践こそが鉄火の試練だ」というフレーズがあって、理論的にどんなに正しかろうと間違っていようと、すべては鉄火の試練のなかでこそ鍛えられる。比喩的では

なく、そこでこそ理論は生き残らなければならぬと昭和初年から繰り返してきてきた。それはぼく自身のささやかなパレスチナ体験に照らしても、本当にその通りだと思う。

だから何度もいうけど、その重信房子が果たして何を学んだのか、「人民革命党綱領草案」みたいなものといっしょに帰ってきて、「党」から始めることを活動の第一としたことが、ぼくには非常に不思議でしよがな。本来ならその「綱領草案」なるものに即してより精密な批判を展開しなきゃいけないんだけど、残念ながら「草案」の現物は今のところ公安のほうにしかないらしいんでそれも叶わない(笑)。ぼくの手許にある九一年八月制定とかいう党規約で自らを「非公然組織」と規定していることも含めて、「党」の悪霊を超えるべき方途を何とかまさぐり出して、二十七年ぶりに再び出会った重信房子に捧げる花束に代える作業はさらに続行されなければならぬと決意表明したところで、きょうのゴシップばかり多い昔語りを打ち切るとしましよう。

(二〇〇〇年十一月二十日)

兵士たちのメモワール

アンドレアス・バーダー ウルリケ・マインホフ

ドイツにおいても学生運動の急進化から武装闘争を志向する部分が登場、ウルリケ・マインホフとアンドレアス・バーダーを中心とするグループは71年以降、西独赤軍を名のる。これは日本の赤軍派の影響でもあったといわれるが、のみならず重信たちの赤軍とはパレスチナ現地での共闘関係にあった。ダツカ・ハイジャックで日本赤軍が勝利した一カ月後、西独赤軍はレフトハンザ機をハイジャック、参加メンバーはモカジシオで特殊部隊によって射殺された。メンバーたちは、獄中にあったバーダー、マインホフらの釈放を要求していたが、2人を含む4名の獄中メンバーが射殺のその日、「自殺」する。バーダーらはピストルで、マインホフはナイフで……しかし彼らは二十四時間監視

下にあった。反テロキャンペーンと、それへの少数の抵抗の中で起こったこの事件は、西ドイツ社会に暗い衝撃を与え、フラスピンダーらニュージャーマンシネマの監督たちはオムニバス映画『秋のドイツ』でこれにこたえ、歌手ニコはバーダーたちの弔歌にドイツ国歌を歌った。

われわれとは何なのか。帝国主義本国の社会による抹殺と破壊の過程から、全員が全員と戦う競争から、一人一人が争いあう競争から、恐怖という旋が支配する体制から、生産性の追求から、他者の犠牲の上に成り立つ利益から、人民を男性と女性、若者と老人、病人と健常者、外国人とドイツ人に分ける分割から、そして威信のための闘争から生まれた種属である。

われわれはどこから生まれたのか。大量生産のマイホーム、郊外のコンクリート・シテイ、監獄の独房、収容所、特別区からである。メディアや消費や体罰や非暴力イデオロギーによる洗脳からである。人間の、帝国主義の中で搾取されたあらゆる人間の、神経衰弱、病気の結果われわれは、われわれ一人一人の悲惨を、帝国主義からわれわれ自身を解放する必然性として、反帝闘争の必然性として把握するまでに至っている。われわれは、体制の破壊によって失うものは何もなく、逆にすべては武装闘争の中で得られると理解するまでに至っている。集団的自由、生、人間の尊厳、われわれの自己同一性は武装闘争の中で得られるのだ。またわれわれは、人民、大衆、鎮につながられた労働者、「ルンペン・プロレタリアート」、囚人、非熟練工——ドイツにおける最下層大衆——と第三世界における解放運動の大義こそわが大義であると理解している。われわれの大義——反帝武装闘争——は大衆の大義であり、逆もまた真である。——たと

えそれが今現実のものになりえず、将来、長期にわたる過程の中で政治・軍事攻勢が展開され人民戦争が炸裂して初めて現実のものになりえるとしても。

その点にこそ、真に革命的な政策と自称革命的であるにすぎない政策——実際のところ日和見主義の政策——の違いがある。われわれは、客観情勢、客観的諸条件、帝国主義本国内におけるプロレタリアートおよび大衆の事情から出発しなければならぬ。——あらゆる階層、あらゆる陣営の人民が体制の爪の下、統制のもとにあるという事実から出発しなければならぬ。日和見主義者たちはプロレタリアートの疎外された意識から出発する。それに対してわれわれは、プロレタリアートが疎外されているという事実から出発する。そこからプロレタリアートの解放の必然性が導き出される。

(ベルリン・モアビッド裁判所において裁かれているアンドレアス・バーダーの解放を求めるウルリケの声明 一九七四年九月一三日)より/市田良彦訳「GS 特集・戦争機械」より

難民の時代と革命の問い

鵜飼哲×平井玄

Ukai Satoshi + Hirai Gen

出来事のいろいろな名前

鵜飼 まず最初に一般的な話をする、一つの物でもそうだけれども、出来事でも、いろいろな名前があるということにこだわりたい。メディアや新聞の用語では「テロリズム」というふうに使われている出来事が、他の土地、他の人々の間ではまったく別の名前を持っている。それは非常に勇気づけられる呼称である場合もある、その話から始めましょう。

今年、足立正生氏を含む、アラブにいた、いわゆる日本赤軍のグループが、岡本公三氏一人を除いて送還されてくるという出来事があったのですが、彼らのアラブ世界での知名度は、七二年の五月三〇日の、いわゆる「テルアビブ空港乱射事件」に由来します。この出来事には「リッター闘争」という名前もあり、現地ではほかにも幾つか名前があると言われている。日本赤軍の現地での存在は、三〇年近くにわたってこの出来事に依拠し

てきた。だから、実際にそれにかかわった岡本氏だけが現地に残るといって決着になったわけですね。

しかし、アラブ人の友人とこの出来事について話をする、この出来事のことを彼はまた、「カミカゼ」とも呼ぶわけですね(笑)。「カミカゼ」という言葉は、実は、多くの日本人は知らないけれども、「カラオケ」などと並んで、日本語で現在普通名詞として用いられている数少ない世界語の一つです。コマンド自身が自分たちの死を覚悟して行うような武装闘争のことを「カミカゼ攻撃」と言っています。八〇年代以降、とりわけイスラム復興運動系の武装組織が、たとえばレバノンでもトラックにダイナマイトをたくさん積んでアメリカ軍の基地に突っ込むというようなことがありましたが、これは全部フランスなんかでは「カミカゼ攻撃」と言われている。こういう時、ほくほくという顔をしていたかわからない。日本赤軍のメンバーたちも、現地ですういうふうに使われて、どういう顔をしていたんだらうとか、他方でほくほくといういろいろなことを考えさせられるんですね。

二〇〇〇年は、足立さんたちが送還されてきたと同時に「神の国」の年にもなったわけですが(笑)、一つの出来事あるいは時期について、たとえば「全共闘世代」という場合と「団塊の世代」という場合と、いったい同じものを指しているのかということも気になります。このあたりのことを入口にして話をしてみたいと思います。

「過激派」なんていう言葉が定着してきたのは、いつ頃からだろうね。
平井 六九年一月の東大安田講堂の闘いの後くらいじゃないですか。六八年の日大闘争、あるいは「一〇・二二新宿騒乱」に示されるような、猛烈に大衆的なというか、一般の人たちが野次馬として参加するようになった流動状況の名前を名付け返すことによって一定水路を変えていくみたいな意図が、たぶん国家の側にもジャーナリズムの側にもあったんじゃないかと思いますが。そういう危機感が、あって「反代々木系全連」みたいな言い方を「過激派」と呼び替えていく。これは大正時代にボルシェビキを呼んだ非常に古い名前ですね。

鵜飼 「過激主義」という言い方が、ボルシェビズムとか、ロシアのナロードニキの……。

平井 それを復活させたというところがありますね。彼らにも、「過激派」という言葉に対する古い記憶の古層みたいなものがあって、それを活用したというか、再利用しているというのを感じていました。七〇年ぐらいには、つまり、公安権力の中枢部にレトリシャンめいた人物がいるんじゃないかと。鵜飼 ほくほくは学生時代に一度、七四〜七五年だと思っけれども、赤瀬川原平に会ったことがあって、その時にまだ彼は元気だった。いまも彼なりに「老人力」で元気なんだろうけれども(笑)、「過激派」って変な言葉だねえ」としみじみと言っていたのを思い出します。

しかし、これは完全に他称だよ。自分たちで「過激派だ」と言っていた人たちは、冗談では別として、実際にはいなかったと思うんです。
平井 いなかったでしょう。

鵜飼 平井さんはほくほくより三つぐらい年長で、六九年の街頭闘争を当事者として

経験しているわけだけれども、当時、たとえば新宿高校の高校生は自分たちのことを何と呼んでいたんですか。

平井 運動を始めた連中は、「全共闘」というのがものすごく新しいブランドで、そのブランドに飛びついたという感じですね。後に藤田省三さんが言った「新生事物」。だから、当然「全共闘」と自称していましたね。「過激派」と呼ばれ出した時に、自分たちが極端に古い古物に成り下がったような、実に嫌な気分になりました(笑)。

ただ、そういう名称が、捏造されたにせよ、流布してしまう基盤が運動する側にもあったわけですね。五月革命とプラック・パワーにインパクトを感じたばかりのような立場からしても、古色蒼然たる論理で世界を見ているなというのが、新左翼の党派の中にもものすごく多かったのはたしかですね。ピラなんかに見ても驚くべき古色蒼然さだと、当時すでに思っていました。

鵜飼 考えてみると、いわゆる党派運動というのは、基本的には共産党が投げ捨てたマルクス・レーニン主義の旗を我々が拾い上げて掲げるんだという、そういうノリだったわけだね、日本の場合は、初期の解放派とか、前衛党否定的な新しいイメージもあったけれど。六〇年代にはトロツキーやローザなど、初めてみんなが読めるようになった文献が膨大に出てきたということは、それ自体プラスであつたにもかかわらず、そこから新しい集団性がまったく出てこなかったのはどうしてでしょう。

平井 末端というか、裾野から出かかったんだけれども、運動の中からも、外から潰す側からも、芽を摘むように作用したということはありますね。

鵜飼 そうですね。

基本的な事実をおさえておくと、最終的にアラブ世界に居を定めた当時の活動家たちは、単一の潮流の出身ではない。いろいろの所から出てきた人たちです。最初のアイデアは共産同赤軍派が「国際

ニ主義的な党建設路線を前提とした建軍論だっと思えます。いずれにせよ発想の材料そのものはレーニン主義的な政治思想体系の中にあつたわけです。

それから、この人たちはみずから共産主義者同盟の一フラクションとして赤軍派を名乗ったわけですが、それは要するに、革共同中核派とか革マル派とか、自分たちの集団を自称して名乗ることと名指しのポリテイクスにおいては変わりません。また、革命路線についても、自分たちが最後に権力を握ることを自己目的的に追求したかどうか、あるいは政治権力の奪取を世界同時革命として追求するか一國主義的に追求するかは別にして、やはり革命権力の樹立に闘いの究極目標を置いていた集団だつたと思います。

それに対して合流したグループの一つである東アジア反日武装戦線は別の発想に立っていた。ぼくの理解では、「東アジア反日武装戦線」というのは普通名詞なんです。日本帝国主義の再侵略に対して実力による抵抗闘争を行っている、韓民主義運動からフィリピン新人民軍、マラヤ共産党まで含めた東アジアのすべ

根拠地」という構想を方針として打ち出して、キューバ、北朝鮮、パレスチナという三つの具体的な行き先を定めた。北朝鮮は直接には行けない。そこでハイジヤック闘争を行う。キューバは行けるけれども、そこに根拠地をつくるということにはならない。なんといつても国家の論理が働いている。当時解放闘争の渦中にある解放区は、この三つのなかではパレスチナだけだったわけです。それがちょうど六九年から七〇年、ロジャース提案から「黒い九月」に至る、そういう局面に前後して彼らが、パレスチナ解放機構の掌握する解放区の中に拠点を求めていくという動きになっていった。そして、パレスチナ解放人民戦線 (PFLP) を具体的な共同闘争のパートナーとして見いだしていく。

それはもともと共産主義者同盟赤軍派のイニシアチヴで実現したという風に、オフィシャルには思われている。実はそうではないという話も、いろいろあちこちで耳にはするけれども、基本的に我々はそういうふうな受け止めていたわけですね。

ての解放組織を「東アジア反日武装戦線」と名付けて、日本本国人としての自己を否定してそこに合流していくという構えをとっているわけです。

平井 世界観や路線における党的結合ではなくて、一人一人の实际行动における一致ですね。

鵜飼 そうそう。そして、自称としては「狼部隊」とか「大地の牙」とか、いわばニックネーム的な固有有名で自分たちを名指した。また、この人々の武装闘争は、赤軍派とはちがいで、日本帝国主義の侵略阻止を自己目的化したもので、政治的というより倫理的モチベーションが強かったといっているでしょう。これは「東アジア反日武装戦線」が全共闘以後的な政治文化に属していることと無関係ではない。この意味で、赤軍と反日の間には時代的な断絶があると思います。そういう意味で、アラブで合流していた人たちは実はハイブリッドな思想をもっていたはずだと、ぼくからは見えていた。でも、このあたりが実際はどうなのか。これから明らかになる部分もあるんだらうけれども、ぼくは個人的には興味を持ってい

平井 そうですね。

鵜飼 後年、重信房子という非常に存在感のある女性のメッセージという形で、繰り返し日本の活動家に対して呼びかけがあつた。そういう中から、ぼくの世代の人はあまり実感はないんだけど、少し上の世代のプリント系のノンセクトに属していた人々が少しずつ合流していく。七五年のクアラルンプール闘争、七七年にダッカ闘争によって、獄中にとらわれていた東アジア反日武装戦線のメンバーの一部と連合赤軍事件のメンバーの一部がいわば奪還されて、当時の言葉で言う「超法規的措置」で海外に出るという局面があり、最終的にはこういう人たちが合流してアラブの日本人のコミュニティができてきたわけです。

共産主義者同盟赤軍派は、公然と武装闘争を唱えて実行したり、新左翼がおおむね反帝・反スタ主義的であつた時代に国際的な攻勢的階級闘争を主張して根拠地路線を打ち出したり、そういう方針の出し方は、六九年秋に身を置いて考えれば非常に斬新だつたのだらうとは思いますが、基本的な問題のたて方は、レー

る点です。

平井 たしかに普通名詞としての反日武装戦線は、殺し合いと化した党派闘争、「内ゲバ」文化に対するカウンター・カルチャーの要素を持っていたと思います。ただ、もともとプリント主義の中にあつた連合戦線の発想が、やっぱりアラブに行つた赤軍派でも残っているなという気がして。後に、たとえば一般刑事犯の人たちを奪還闘争でアラブに呼ぶとかそういうことが幾つかありますね。それに、もつと個人的に合流していった人たちが、いわゆる全共闘世代の末端や後続の、ぼくらの世代に近いほうでけっこういる。そういうことを考えると、実質上、日本赤軍というのは連合戦線化していたんだらうなとは思っています。それを、どこまで行動原理みたいなものとして意識していたかは別として。

鵜飼 ある種の第二プリント的な連合戦線の政治が、赤軍で向こうに行つた人たちには……。

平井 追求されたと思うんです。

鵜飼 あの人たちの政治文化がすでにあつて、ハイブリッド性が可能になつたと

いう見方。それはある意味で、そうだと
思います。

死刑廃止との出会い

平井 その点で、つまり政治文化という
点で、アラブに行ったというこの意味
みたいなことを、ちよつと考えたほうが
いいと思うんです。ほくらは、「よし巨号」
で北朝鮮に行くという発想には、非常に
違和感があったんですね。アジアに焦点
を定めるといのはこれから必要だろう
などという意識は、たぶん七〇年頃に全共
闘運動がなし崩し的に崩壊していく中で
連合赤軍で終わりにしたくない連中にと
っては、すこく強かつたと思うんです。
ところがアジアというのはわかるだけ
れども、北朝鮮でいいのかという違和感
があった。それに対して、アラブ・パレ
スチナが果たして大きな意味での、日本
を変え、世界を変え、策源地のようなト
ポロジカルな力を持ち得るのか。あそこ
はむしろ、つまりアラブに植民地を持た
なかつた日本の支配層にとつても、ヨー
ロッパにとつてのアラブとはちよつと違

闘争をやるわけですが、それでいて、最
初から武装闘争のメルクマールを物の破
壊に限定していました。これは彼自身、
逮捕された後のリボニア裁判の冒頭陳述
で言っていることです。

「武装闘争」にせよ、「テロリズム」にせ
よ、人によって呼び方は違ふけれども、
どちらにしても、現実と対比してみた場
合、あまりに粗雑な概念ですね。オウム
真理教が出てくると、「昔だったら全共
闘になるような連中が今はあんなった」
などという言い方でされる。しかし、
注意してもらいたいのは、サリンは人し
か殺せないけれども、爆弾は物だけ壊す
こともできるわけです。

マンデラは、すでに六〇年代初めに、
アパルトヘイト体制に対して武装闘争を
始めた時に、最初からその問題をきちん
と考えていた。これはすごいことです。
言い換えれば、暴力革命か非暴力平和主
義かというもすると不毛な問いを、彼
だけが実践的に解いたとも言える。マン
デラはアパルトヘイト政権にとられる
前から死刑廃止論者で、獄中でもずっと
死刑廃止論者であり続け、彼が解放され

う曖昧な場所として、いわば日本帝国主
義の中にあるアジア主義的な要素が曖昧
な政治を展開し得る場所じゃないかなと
いう判断があつて、おそらくそのへんの
判断の違いが、その後の情勢ももちろん
あるんだけど、連合戦線の発想で
向こうに行つた人たちの十分な行動プラ
ス政治を展開できなかった。「国際的な
政治場」っていうことを重信さんなんか
も言っていたんだけど、その「国際
的な政治場」を設定し得なかつたと思っ
たんです。それは、アラブの人たちにとつ
ての日本人のアラブでの運動ということ
と、もう一つは日本国内の政治について
国際的な大きな政治場の中で変革の可能
性をつくつていくという、その両方にお
いて、ちよつと疑問があつたんだろうと
思います。ほくのような人間が決定的に
そちらに引き寄せられなかつた大きな理
由は、たぶんそれだろうと思います。

鵜飼 世界革命ということが言われ、そ
の一方で「世界革命運動情報」誌のよう
な形で、実際に六〇年代の世界がどう動
いているのかということに熱い気持ちで
注視し、紹介していく作業が六〇年代半

大統領になると南アではすぐ死刑を廃止
するわけですね。今の「真実と和解委員
会」が非常に困難な局面を抱えていると
いうのは当然のことだと思つて、その
理念と、今言つたようなマンデラの思
想、解放闘争の渦中において武装闘争を
どう限定するか、権力を握つたら死刑を
どうするか、といった問いに一つ一つ真
剣に答えていく彼の歩みとは一つなが
りなんです。

非常に雑多な現象を含む「武装闘争」
を総体として否定することなく、しかし
この二〇〇年の歴史の中で、その途中に
マルクス主義という大きな出来事が介入
し、ロシア革命以後の七〇年があつたな
かで、革命の観念がどう変化してきたの
か。われわれ自身、連合赤軍と東アジア
反日武装戦線の四人のメンバーが確定死
刑囚になつていく状況の中で死刑廃止運
動と出会つた、そういう世代に属してい
ます。改めてこの問題を問う時、革命の
問いと死刑の問題を、ばらばらにはな
く、一緒に考えてみる必要があるのでは
ないか。

たとえば一九世紀の半ばのフランスで

ばから進んできていたということと、一
度外に出て闘うというイメージとは、確
かにつながつてはいたんでしよう。しか
し、それと同時に、かなり大きな時代の
枠組みで、二つ考えてみるべきことがあ
ると思います。一つは革命というイメー
ジあるいは観念のこと。それに触れない
とこの議論はできない。

これは一つの補助線だけでも、フラ
ンス革命から二〇〇年、ほくは試みにロ
ベスピエールとネルソン・マンデラを、
この時代の入口と出口に置いてみる。二
人とも弁護士です。ロベスピエールも最
初は死刑廃止論者だった。それが一八世
紀の啓蒙思想家でありベッカリア的な
死刑廃止論者だった彼が、権力を行使す
る過程で、ルイ一六世ばかりでなく、革
命の同志たちも大量に処刑していきやが
て自分も断頭台の露と消える。それから
二〇〇年、革命の思想と実践の歴史があ
り、その果てにネルソン・マンデラが登
場した。ネルソン・マンデラも武装闘争
をやつた人です。解放前のアルジェリア
の解放区で武装訓練をし、「民族の槍」
というANCの武装部隊を組織して武装

は、政治的左翼は死刑廃止論者ではあり
得なかつたわけです。つまり、フランス
革命を肯定しようとするれば王殺しも肯定
しなければならなかつた。左翼が「あれ
は正しかった」と言えば死刑を肯定する
ことになつてしまふ。だからビクトル・
ユゴーが「死刑囚最後の日」を書いた時
は、彼はむしろジロンド派に近い人道主
義的自由主義の歴史認識に立っているわ
けです。当時ボードレールは死刑廃止論
者を揶揄するようなことをいろいろ言っ
ています。

これは今から考えると非常に重要な思
想の転回点ではあるんだけど、それに
六〇年代末まで、日本の左翼思想はき
ちんと出会つていなかつたということ
は事実ですね。大島渚の「絞死刑」のよ
うな重要な成果があつたにもかかわら
ず、それが当時の武闘の質、あるいは内
部ゲバルトの質、あるいは肅清の質に、す
べて跳ね返つてきていた。問題はもちろ
ん日本に限定されません。たとえばパレ
スチナ独立国家で死刑をどうするか。こ
れはアラブ世界の問題でもあるわけです。

平井 革命時の、そして第三世界の「例外状態」から「人権」以前に回帰してしまうのか、「人権」概念そのものを豊穡化していくのか、ということですかね。この点でたとえば、これはニューヨークの詩人たちの動向から知ったんですけれども、マンハッタンハーレムでボエック・トリ・リーディングみたいなものが再び盛んになっている、と。黒人やラティーン、アジア系の人たちも交えてニュー・ハーレム・ルネッサンスとさえ呼ばれているらしい。そういう人たちの詩を見てみると、ニューヨークで結成されたというものが、ニューヨークで結成されたらしいんですね。これは明らかに古いメンバールたちの再結集というよりも、新しい世代が新しいブラックパンサーをつくろうという動きのようで、現実には去年結成大会が行われた。

つまり、パンサーは一九六九年に、いわゆる国内派、ヒューイ・ニュートンはじめゲッター派と呼ばれる人たちと、エドドリッジ・クリヴァーを中心とする

督がたいしたものであるか、文化人がたいたものであるかということは、また別の問題として。

「帰国者」に未来のイメージを透視する

鶴岡 ネグリは、欧米のメディアでは、そういう扱いはされていないよね。彼は哲学者と言われている。その違いははっきり言っておきたいね。ネグリと足立が、一人一人の頭の中で、同時代の獄中にある政治犯としてつながらないようだとやっばりやります。

平井 そうですね。一人の人間が何をしようとしてどう生き、そしていまそこにいるのかということを抹消しようという行為なわけで、これは許すことはできない。

鶴岡 もう一つの補助線は、フランス革命の歴史にもつながるわけだけれども、フランス革命以前に、たとえばラファイエットなどはアメリカの独立戦争に参加しているわけです。ヨーロッパの革命の理念には、王政に対する闘いがあるところならどこにでも行って闘うという思想

国外派と呼ばれる、アルジェリアに亡命したりアフリカに行くような人たちとの間に分裂していく。当時これは、人民戦線派と武装闘争派の分裂のように言われなければ、必ずしもそういうヨーロッパ三〇年代的な区分けが有効でないことが近年分かってきた。これをトゥーサン・ルベル・チュールからフアン、マルコムX、グリ、サンにいたる四〇〇年を超えるアフリカからの離散の系譜の中でどう考えるのか。この闘いの全体が南アフリカ闘争に繋がっていったわけです。パンサーのこの問題は、ぼくらのように国内でいろいろなことをご二〇年ぐらいの間やってきた人間たちと、今回帰って来させられたような日本赤軍の人たちとの間に横たわる問題と、たぶん無関係ではないだろうと思います。国家を超える公共空間をどう創り出すのか、近代の諸規範をどう豊穡化するのか、という。それを若い世代はどう考えるのか。

イタリアでは、ネグリが自ら帰る形で収監されている。ネグリが今度書いたのが『エンパイア(帝国)』という本です。「帝国」と「帝国主義」は厳密に区別し

が含まれている。ラファイエットからゲバラに至る革命家の系譜、そこに、国際主義の、一つの理念という以上に、具体的な実例に沿った形でのイメージがあった、それはスペイン内戦の時の国際旅団もそうですね。

七〇年代初期には、日本からだけじゃなくて、ヨーロッパからもアメリカからも、たくさんの方がパレスチナに行きました。ジュネは「ああいう若い連中は、お喋りばかりしていて、ぜんぜん役に立たなかつた」と例によって口が悪いけれど、「リッダ闘争」には敬意を表しています。

いずれにしても、大きな時代の最後にあのような試みがあったということは事実であり、まぎれもなく歴史の一部です。だから、一方で赤軍の世界戦略ということもありながら、他方で世界革命の最前線に闘う、自国の革命よりも一時的にそういう作業を優先させるということも、二〇世紀の戦争と革命の文法の中ではあり得たことだということ。それに対して新左翼の様々な部分からも、一方で派手に武装闘争をやっているということに對する羨望もありながら、他方で「日本に

なければいけないと思うんですけども、かつて帝国主義ということの問題の祖上に直接のほらせるようなスタイルの運動ではなかつたアウトノミア運動、そこに関与した思想家の中から「帝国」という発想が今出てきている。

そういう、大きな意味で二〇世紀の革命運動を再考する時期が来た中で、この問題が考えられていることだと思えます。これはかなりきちんとおさえておかないと、国内問題として処理する、しかも刑事事件として処理しようという日本国家の側の公法的な文法のあり方に抵抗できないかなと思います。

もう一点、ご二〇年ぐらいの経験の中から言うと、足立さんに対して、ぜひ「映画監督」という言い方をジャーナリズムもしくなりました。山谷で映画を撮っていた佐藤満夫が殺された時も、それを「山谷 やられたらやりかえせ」として完成させた山岡強一が殺されたときも、ぜひ「映画監督」という言い方はしなかつた。せいぜい「自称映画監督」です。ぼくはこうした操作に非常に怒りをおぼえますね。それは、映画監

テーマがないから、ある種精算主義的な方向で海外に道を求めたんだ」という批判も出てきました。ただ、それが全体としては、いま言ったような時代精神のいちばん最後に現れた形だということは見とおかなければいけない。

当時の社会党書記長——委員長だったかな——の佐々木更三が、「リッダ闘争」の時、「あんなことをするんだつたら日本でもやればいんですよ、日本で」と言っていて(笑)、社会党左派というのはこういうことを言うのかと妙に感心した覚えがあるけれども、しかし、アラブ赤軍というのは、逆に言えば、一つの亡命形でもあったわけですね。解放区が世界のどこかにあり、それはソ連、中国、アルジェリア、北朝鮮など国家でもありえなかったわけだけれども、冷戦の終焉以降の展開の中で、かつてであれば尊敬される革命家であり得た人たちが、国際刑事機構のお尋ね者として捕まり、送還されて来る。これは、彼ら自身というよりは、世界が変わったという側面のほうが、ぼくは強いと思う。言うまでもなく、ソ連の消滅は決定的だったと思います。

「極楽ですか」という本の最初で、谷川雁が日高六郎宛の公開書簡でこんなことを言っている。ちょうどソ連が消滅した時期です。「ソ連の消滅は亡命の時代の終わりだ」と。じゃ、どんな時代が始まるのか。「難民の時代が始まる」と雁は言っている。三〇年代の歴史、たとえばハンナ・アレントの『全体主義の起源』などを読むと、われわれは三〇年代は亡命および難民の時代であって、「亡命」と「難民」を対立させて考える習慣はなかった。それをほつきり谷川雁は、「亡命」の時代が終わって「難民」の時代が始まると言い、日高六郎に「私もあなたも一人の難民だ」という言い方をしている。これはすごく面白いなと思ったんです。

このあと日本という社会がどういう方向になっていくかわからないけれども、逃げるしかないとしたら、どこに逃げるのか。逃げられないとしたら、この社会でどういう難民になるべくわれわれは運命づけられているのか。その点で、亡命地から送還されてきた、いわば「難民」としての「帰国者たち」の中に、いかに

してわれわれが、自分たちの同時代あるいは過去のイメージではなく、未来のイメージを透視することができるのか。このあたりのことが、思想的に問われているのじゃないかと思えます。

平井 亡命とか移動ということ、革命につきものとされた。母国を異化する、そこから得られた経験とか世界の見方の深い変更というのは、圧制と闘う人々にとって大きな意味を持っていたわけですね。この経験をフォークロアの貴種流難譚と見るのではなく、近代の革命に固有の必要条件として捉えるべきではないでしょうか。これは、難民という形をとるのかもしれないけれども、これから先も手離す必要はないし、手離さないだろうと思います。六〇年代に「袋は袋を破れるか」で抽象的な世界革命論が怖るべき世界独裁権力へいたる逆説をついた谷川雁が、インターネット資本主義の上に乗ったユーロ・アメリカ社会民主主義国家群という形で極大化した袋が、ついに裂けていくその「破れ目」としての「難民」を最後に語ったんじゃないか。そういう意味で、足立さんたちの三〇年間の経験を自

分たちのそれと具体的に突き合わせる時が来ていると思えます。

もう一つ、最後に言っておかなければいけないのは、アラブー日本関係の中で彼らの三〇年間の何が付加えられたのか、あるいは付け加えられなかったのか。彼らが帰って来たとしても、依然としてアラブ諸国でもパレスチナでも闘争は続くでしょう。それは、湾岸戦争とソ連崩壊以降かなり形は変わっているし、非常に苦しい局面にいると思うけれども、消えることはないし、消すわけにはいかない。そのことを「神の国」という地球を一周した最後の原理主義状況を見据えながら、アラブの人々も交えて討論していくべきだろうと思います。エドワード・サイードたちとの接点もそこに生まれてくる。

（二〇〇〇年六月一〇日、「文藝」二〇〇〇年秋号初出）

兵士たちのメモリアル

森恒夫

赤軍派の獄外に残された指導者として、日本共産党（革命左派）との共闘を追求、連合赤軍結成から共同軍事訓練の過程での12名の「死」に対して、赤軍派サイドでの「最高責任者」であった森は、73年1月1日、東京拘留所で自殺。拘留所はなぜか、通例を破って、その死亡記事のつた日刊紙を無修正のまま、関係被告に渡したという。44年大阪生まれ。大阪市大で赤軍派に入る。享年28歳。

もしほが絶望感の大きさに敗北したら、この手紙を公表してくださるか、この内容を御遺族、他の被告同志、同盟、革左に明らかにして下さい。（略）

（6）「自己批判書」の誤り——権力への屈服、解体は以下の諸点において顕著です。（イ）唯統、唯軍主義極左路線——「統一共産主義

化」論——整風、新党建設を全面的に擁護していること。（ロ）にもかかわらず（それ故に）革命内部の問題として肅清を考へられず、権力に「自己批判」し、「死刑」で自己を武装解除していること。（ハ）そして肅清の原因を、方法の誤りに歪曲していること。

（二）それ故全く総括の核心に切り込まず、実際は開き直りの総括となっており「自己批判」と呼べる代物ではなく、反マルクス・レーニン主義の産物である。この事が一四名の同志の死を「高次な矛盾」として侮辱し、同志達の真の闘いを全く評価せずに、同志達が「新党をめざして死んだ」という事で名誉を回復しようとして、実は屈折した闘い、思想的解体状況等を切り捨て、傲慢な独裁者の目で結局同志達に更に多くの泥をかぶせた事にはつきりできています。

死後に至るも同志達の名譽を傷つけ、その闘いを侮辱し、そして権力に引渡したのです。（ホ）同時に、新党建設擁護故に、赤軍革命左派の歴史を歪曲、清算し、特に革命左派獄中指導者のその側で正しい「唯統主義批判」を罵倒、中傷している権力に対するまたとない獲物を与えています。又、多くの同志（分組組の）、遺族の方々やその他の人々に全く誤った革命戦争への観点を与えるものであり、こうした人々を侮辱するものです。（ハ）更に、浅間山荘の闘いを無視しています。その他この「自己批判書」が客観的に果たした役割は、徹底した反動的、反プロレタリア階級的なものであり、とてつもない害毒を流すものです。ほくは、それ故、分護公判の同志達、遺族の方々、弁護士、モップル、遺族委の人々に早急にこの「自己批判書」の反動性、反プロレタリア階級性を自己批判し、この毒草を刈り取る闘い、権力にこの文書を利用させず（赤軍、革命左派を清算し、新党が正しいと言ひ、それが都合がよいし、マルクス・レーニン主義のかけらもないのでいくら

でも利用できるのです）、革命戦争派の利益を守る闘いを呼びかけるつもりです。（略）

（7）以上、ほくの自己批判の出发点ですが、何故ほくが今迄のことすら判らなかつたのかと言ひますと、三月一六月迄は全く「自己批判書」を正しいと教条化していた期間で、その後前橋で「今回の問題について」を読んで「統一共産主義化」論の誤りに気付きつつも、いぜん「めざした事は正しかった」に止り、一〇月東拘に來て坂口君の手記を読んで「死刑」要求の敗北性に気付きましたが、同時にそれで権力への屈服のつかさきに消耗し、もっぱら「統一共産主義化論」をつくったほくの個人的責任をのみ心情的に主張したのです。この頃から序章八号八木論文ののっかかっていきます。そして問題を、イデオロギーにすりかえ「作風」問題のみをみていきやがて「作風」問題「遠山批判」↓革命左派山岳ベニス↓革命左派批判に一面化し、ますます政治路線上の総括イデオロギー上の総括から遠ざかっていったのです。（塩見孝也宛書簡より 72・12・31）

〈過激派〉映画の系譜

日本赤軍と映画をめぐる

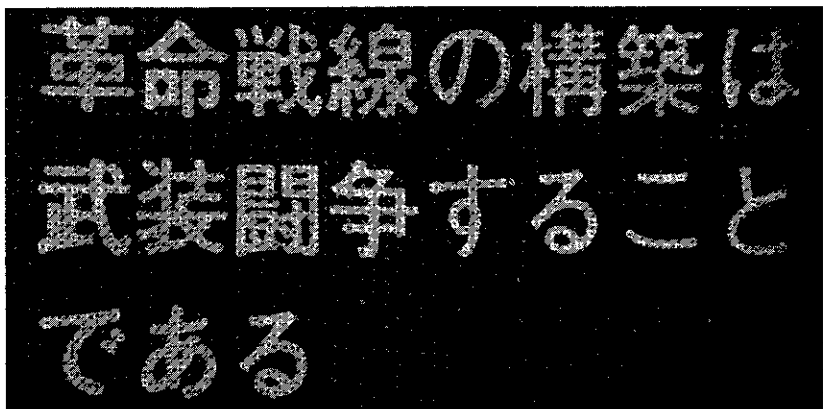
平沢剛

Hirazawa Go

日本赤軍と映画の関係は、いうまでもなく71年、足立正生『若松孝二の「赤軍PFLP・世界戦争宣言」』に始まる。（前史として、共産主義者同盟赤軍派との関わりで考えると、大菩薩峠の意志と共闘すべく、羽田空港の爆破へと向かう『現代好色伝／テロルの季節』（69）、よど号のメンバーからの手紙を明読する『性賊／セックスジャック』（70）などが挙げられる。）純粋な党派ではなく、若松プロを軸としたラディカルな映画人の広範な集合体として、荒井晴彦を隊長に赤バス上映隊が結成され、全国上映が展開されていった。こうした上映運動展開、松田政男、足立等によって『映画批評』を中心になされた理論構築は、『映画Ⅱ運動』史的に考えて、ひとつの金字塔を成したと言える。また、それらは日本だけにとどまらず、映像と音を奪った相手（パレスチナ人民）に〈返還〉するためパレスチナキャンプでの上映も行われたフィルムに焼き付けられた多くのコマンド達が、戦闘によりこの世を去っているなか、その〈返還〉は家族や友人達に果たされたのであった。更に、この映画を媒介として、足立を始め、上映に

関わった和光晴生、岡本公三が映画から政治へと越境し、パレスチナ革命へ身を投じていくのであった。また、キャンプ上映後に、松田によってフランスを皮切りにヨーロッパでの上映運動が展開されていたが、ヨーロッパ一斉蜂起計画なるものに巻き込まれ頓挫させられた。（これが実現していれば、運動の映画が、映画祭などでほんの数回上映されるだけではない上映展開や南米、アフリカを中心とした世界からの亡命映画人との交流、理論交換といった新しい可能性が開けていたのではないだろうか。松田の国外追放は、ジガ・ヴェルトフ集団としてパレスチナへと向かったJ・L・ゴダールが、挫折した『勝利まで』（70）を再編集した『ピア&セア』（75）の完成の前年であった。）

足立若松は帰国後、すぐさま『天使の恍惚』（72）において、爆弾闘争に移行していた日本を舞台に武装闘争劇を撮りあげる。続く『女子高生・恍惚のアルバイト』（72）では、売春をして蓄えた資金でハイジャックをする女子高生が描かれた。これが、監督・若松孝二、脚本・足立正生の最後の映画となる。同じく72

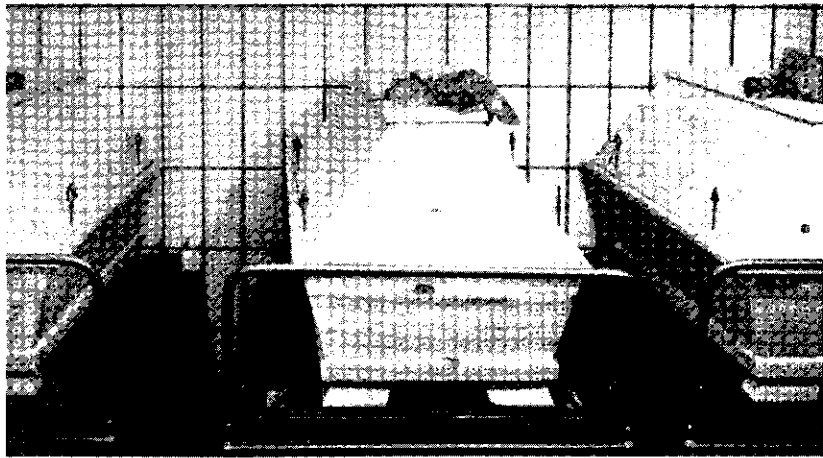


【赤軍-PFLP・世界戦争宣言】より

年には、山本晋也がピンク映画のフットワークの軽さを生かして、早々に連合赤軍の浅間山荘を下敷きにした『ボル／総括／狂気の欲情』を撮っている。男女の性関係を軸にした肅清の末、一人の男が生き残り、そこに不思議な男が現れて新たな指令を出して幕を閉じる。

73年には映画ではないが、特異な映像が存在する。テレビ番組『三時のあなた』においてなされた、山口淑子（李香蘭）による重信房子インタビューである。日航機ハイジャック直後に行われた撮影は、最小限の機材で行われたため、時折りクローズアップが交えられたフィックスの長廻しで、『パレスチナの、日本赤軍の闘いとは何か』が語られていく。『赤P』とはまったく異なった場所、闘争の意味を明快に伝えた映像だと言える。それは、山口が72年のリッダ闘争の際に、ガッサン・カナファニーといったPFLP幹部の取材を行い、その前年にはライラ・ハレドのインタビューに成功、同枠で「中東レポート」として放映し、その後、難民キャンプの子供を養子にしようとする、といったパレスチナへの加担に帰するところが大きいだろう。

足立が日本を離れたのち、若松は『売春婦マリア』（75）において、マリアと呼ばれる新宿の売春婦の客に、コマンドになるためアラブへと旅立つ丸木戸定男という男を登場させている。続いて、『聖母観音大菩薩』（77）では、爆弾闘争を行っている青年が描かれる。出身地の村にある原発を破壊しようとするが、村人に追いつめられる。母親と妹は青年が生きていることを呪い、自殺するよう懇願する。結果的に彼はそれを受け入れることになる。村人や母妹のような閉鎖的社会的な排除は、『秋



『秋のドイツ』より

のドイツ』(77、ライナー・ファスビンダー他)に共通していると言える。この年、ドイツ赤軍、バーター・マイン・ホフ集団による経団連会長の誘拐と殺害、ドイツ特殊部隊の強行突破によるハイジャック機奪還の成功、4人の獄中メンバーの不可解な自殺、といった一連の事件が起き、(過激派)に対する社会のヒステリー状態や既成の秩序への盲目的な従属が広まっていった。それに対して、異議申し立てを行うべく9人の映画人によって、事実を見つめる時代の証言としてのオムニバスが作られた。『鉛の時代』(81、マルガレーテ・フォン・トロッタ)ではこの試みを更に発展させ、ドイツ赤軍が投げかけた問題提起に、ジャーナリストの姉がすべてを捨て去りながらも、妹の獄中自殺の真相を究明することによって答えていこうとする。

80年代に入ると、『コールガール』(82、小谷承靖)において、難民キャンプに医療ボランティアで訪れた医師が、あまりの悲惨な現状に憤りテロリストとなるが、強調されているのはパレスチナ革命ではなく、人を殺すことの罪悪感や内ゲバのみである。同様なズレのある映画に、『烈火青春』(82、パトリック・タム)がある。当時の香港を舞台にした青春映画であるが、総括を逃れて香港にたどり着いた赤軍兵士が登場する。最後、追手と海辺において日本刀での壮絶な決闘を繰り広げるが、敗北し切腹を命じられる。日本に対するステレオタイプと東アジアにおいて「日本」と「軍」から想起されるであろう残酷なイメージをそのまま反映した作品と言える。『最近の日本映画でも同様なものに『鬼畜大宴会』(98、熊切和惠)がある。おそらく連合赤軍の同志殺しに材を得ていると思われるが、無知ではすまされない間違いが多

い。』続いて、『ドクカン爆弾娘』(85、デビット・チャン)では、自家製爆弾の取引相手として登場する。また、『大福星』(86、エリック・ツァン)ではアラブ経由で武器の密売人として、『香港東京大捜査線』(88、アーサー・ウォン)では、恋人同士の赤軍として登場し、革命のための資金作りのため宝石強盗を行っていく。どちらの映画も資本主義的な発言、日本的記号が目立つ一方で、何かと言つと「革命のため」という大義を劇的に持ち出してくる。ただ、世界の映画を見渡してみても、日本赤軍を名指して敵役、悪役に使っている映画は珍しいのではないだろうか。

東アジア反日武装戦線・さそりの黒川芳正が獄中監督をした『母たち』(87)は、獄中において(写すこと)の出来ない、不在の主人公達の表象をめぐり、彼等の母親にカメラを向けたドキュメンタリーである。『キスより簡単』(89、若松)は、ラストシーンで男がパレスチナを訪れる。クレジット部分に、武装訓練や戦闘を行っているコマンドのスタイルを重ねていく。87年に始まったインティファダが最も激化した時期であった。『出張』(89、沖島勲)では、東北の山奥で活動しているゲリラ部隊が登場する。身代金目的に誘拐されたサラリーマンが、反発しながらも解放された後に、彼等に向けて「頑張れよ」と連帯の挨拶を送る。『禁断の園・ザ・制服レズ』(92、瀬々敬久)は、75年反日の一斉逮捕を引いて南千住を舞台に、現在から(鉛の時代)に迫ろうと試みている。『シンガポールスリング』(93、若松)は少しずれるが、観光旅行にきた日本の新婚夫婦が様々な事件に巻き込まれながら、アポリジニの解放闘争に身を投じていく様を描いている。『サイコ』(99、三池崇史)、『独立少年合唱団』(00、緒方明)は、同様

に連合赤軍に依っているが、非常に御都合主義的に(事件/出来事)を乱用しているだけと言えよう。特に前者は、永田洋子を連想させる死刑囚に対し、刑の執行までもおこなっている。『ホワイトアウト』(00、若松節朗)に描かれる「赤い月」なる(過激派)は、日本赤軍と反日に想を得ているが、特に反日の一連のビル爆破闘争が大きなモチーフとなっている。ちなみに、『パトル・ロワイアル』(00、深作欣二)では、反日の「腹腹時計」が爆弾作りのテキストとして近未来に受け継がれている設定である。以上、日本赤軍を中心に(過激派)映画の系譜を見てきたが、その表象は、必ずしも望ましいものばかりではない。むしろ、誇張、曲解、捏造され、ステレオタイプが形成されている方が目立つと言えよう。連合赤軍以降、反日の闘争以降、そして、冷戦崩壊後の相次ぐ日本赤軍の逮捕のなか、(鉛の時代)は幾重もの層を成しながら、より巧妙に私達自身がその渦中にあることを忘却させようとしている。それに対抗、凌駕すべく、長谷川和彦の『連合赤軍』の完成に思いを馳せ、足立正生の映画への帰還を待ちながら、私達は、新たな「映画」運動の構築へと向かわなければならぬのである。

参考文献 『映画への戦略』 晶文社 足立正生『薔薇と無名』 若狭書店 松田政男『白昼夢を撃て』 田畑書房 松田政男『俺は手を汚す』 ダケレ出版 若松孝一 第二次『映画批評』 1970・10・73・3 『映画芸術』 3月臨時増刊『足立正生享年』

赤色残侠伝

平岡正明

Hirooka Masahiko

1 一九六〇年、夜のプラットホーム

一九六〇年六月四日の品川駅頭だ。全学連の部隊は朝一番の列車発着を阻止するために東海道線ホームを占拠していた。あと一本最終を見送る前だったから夜中の十二時前だったろう。ホーム新橋寄り先端で騒ぎがあった。カメラを持った男がかまれている。た。

「ぼくは日大写真科のものです。スパイじゃありません」彼は顔を赤くして抗議した。小学校時代の同級生だった。当時の日大は右翼の拠点校だった。誤解が解け、彼が同じ学生として闘争を記録するために現場にやってきましたと告げると、日大にも右派の目をかすめて闘争を記録するチームが出来ていると知って拍手が起きた。

その様子を見守っていたリーダーにきくと、日大にもブンドがいるよ、と隊長Sは小さな声で言った。俺が足立正生の存在を知

ったのはこの六・四品川駅頭である。ブンド組織論の先端が深部に達しているという感銘があった。組織論の感動はこれが二回目である。

島 同盟ができたのは一九五八年の十二月十日ですが、同盟ができた動機は、国会デモ、羽田デモに示されたところと同じような状況を何べんもこれまでに繰り返してきたからです。直接の動機は警職法闘争だった。(大幅に中略)

大きな話にきこえるかもしれないが、日本の労働運動の指導の面では、将来は西尾新党・全労とほくらの同盟、この二つに分れてくるのではないかと思う。(座談会「トロツキストと書かれても・共産主義者同盟に聴く」、島成郎・吉本隆明・葉山岳夫、「中央公論」一九六〇年四月号)

引用箇所はすぐに決った。雑誌に縁が引いてあったからだ。四月号ということは、三月に町に出ている。大学生は春休み、受験

生は入試期間で、なにか地ゆれがする短い休暇の感があり、ブンド書記長はじめて一般誌に登場発言するというのもあって、「中央公論」のこの号は貪り読まれた。機関紙「戦旗」、理論機関誌「共産主義」、社会学理論誌「理論戦線」は市販されていないなかつた。

一九五八年、高校二年時、級友三人とメーデーに行ったのが俺のデモの第一回目。刑法改悪に反対するためだったが行動のしかたを知らず、メーデーに参加してどこかのデモ隊に加わろうと学校を脱けだして明治外苑に行くと、あまりの大群衆にたどらうろろし、新宿に向う隊列に「日本共産党法政大学細胞」と大書されたほうもなく大きな赤旗があった。三疊敷ほどもある大旗の竿の先端を腹巻きのような革のベルトで支えた学生を先頭に、五人横隊の大学生の列が蛇行し、交差点では渦を巻く。その隊列にいられてもらって、明治外苑から解散地の新宿ミラノ座前噴水のところまで駆け通したように記憶するが、実際には歩いた区間もあつただろう。体力が保ちほしめない。これが全学連か、と圧倒された。三人の高校生がこの隊列の中で戦論的な蛇行を経験したのは、日共からブンドが離陸しようとする激しい内部討論の時期だった。「直接の動機は警職法闘争だった」と島成郎が言ったその一端に、数時間、高校生がかすつたということになる。

そして一九五九年十一月二十七日だ。全学連は国会構内に突入した。テレビ中継を板橋区の友人宅で見ている。黒白テレビに、全学連と東京地評労働者二万のジグザグデモが、新聞社のニュース撮影用ライトに照らされる新能のように、ライトが消されると大蛇のように映しだされ、津波のシムプレビコルとすり足のザ

ツ、ザツという足音に、いよいよ自分も来年は大学に入つて、全学連に加わる時期が来ていると身震いした。

武装闘争はプロパガンダの最高の形態である——「赤P」を出すのはまだはやいが、先頭を切つて国会に突入した全学連の姿が鮮烈だったから、そしてそれが学生の単独行動ではなく警職法が上程されるやただちに結成された国民共闘会議の行動の一環だったから高校生をとらえたのである。

一回のデモ参加だったが、それがひきつづいて右派教師への反抗を継続させたから、警職法を粉砕した闘争は自分の勝利でもあると充実感をおぼえたハイティーン的眼に、現実の闘争のなかでスターリン主義左派を割つて成立したブンドはたのしかった。

トロツキスト受難史の宙天から下りてくる4トロや、一九五六年ハンガリーの民衆蜂起を鎮圧したソ連軍への憤激からはじめた革共同とちがい、闘争現場でスターリン主義左派を割る、これ處ブンド的ということの一つだ。だからブンドは革共同から、戦術左翼、不徹底な反スターリン主義、理論面における宇野弘藏経済学、黒田寛一哲学、対馬忠行ソ連論のゴツタ煮と非難された。

ゴツタ煮けつこう。リンゴのゴツタ煮、ゴツタ煮だからバップだ。純血主義はかばそく、混血・雑血・売血の方向で黒くなつて、黒カン哲学だらうと宇野経だらうと、石コロ、薪雑棒、腐つたトマト、そんじよそらのものを手にとつて武器にするという戦術左翼が俺の性にあつた。

性だつて？ ああ、俺の無産階級性にな。スターリン主義左派を割る。よど号赤軍派が北朝鮮に革命の国際根拠地建設を企画して飛んだことも、アラブ赤軍がパレスチ

ナに飛んで PLO の中のマルクス主義左翼、ハバシユ博士の PFLP と国際共同軍事行動を行ったことも、そして不幸にも連合赤軍が、日本共産党革命左派や京浜安保共闘と無理に組織統一して内部殺戮のうちに壊滅したことも、左派を割って前衛党を創出するというブンドの発想をひきついでたものだ。

一九六〇年に入ると俺はおぼろげに共産主義者同盟の存在を知っていた。吉本・葉山（東大自治会委員長で逮捕状が出ていて、警官隊が東大内導入されるかどうかが焦眉だった人物）・島三者鼎談が「中央公論」に掲載されたのは三月であり、この雑誌は当時の総合雑誌の中で文学・思想・政治論文の内容でトップをきって影響力が大きかった。だからのち右翼に狙われた（深沢七郎『風流夢譚』を狙った右翼が社主嶋中邸を襲い、お手伝いさんをぶくむ家人二人を刺殺した。一九六一年二月の事件）。ブンドは組織論のない戦術極左にすぎないという悪口も流布されていた。一・二七のあとで、その中継を見た友人 E（彼も入学と同時にブンドに入る）の家に遊びに来ていた板橋区の若い共産党員が、暗い顔で、労働者と学生の行動を賞讃した前言を翻し、あの行動は階級的展望なしのプチブルの盲動だった、と言ったのはブンドに対してだった。共闘の最左翼に位置すると言っただけで組織論がないはずのブンドが、はじめて書記長の口から、「大きな話になるかもしれないが」、日本の労働者組織は近い将来、ブンドが全労（同盟）かの争いになるだろうと宣告され、島成郎がドン・キ・ホーテと言われたのはこの展望だった。総評も社会党も左右に両極分解され、共産党系労組はこちらに乗りかえて、日本の労働運動はブンドと同盟の間でまっ二つ。胸のすく大言壮語だった。

一九六〇年六月四日、国鉄労働者が一番列車をとめようとする時限ストの応援に来た品川駅東海道線発着ホームで、日大写真科の学生が公安のスパイとまちがえられた一悶着の輪の傍で、早稲田の隊長 S が、日大にもブンドがいる、と小声で教えてくれたことは、島成郎三月のブンドか同盟かという壮語に次いで、こちらの組織論の先端が深部に達しているという感動をあたえてくれた。ただ、感動を受けた俺の方が三月とはちがっていた。六月には俺は同盟員の一人だった。

顔を真赤にして自分はスパイではないと抗議した彼は、王貞治の最初のライバルである。投手で中軸打者で、彼が通った文京八中は野球が強かったがいつも王貞治のいた墨田二中に負け、高校は日大三高に進んだが彼のチームはまたいつも王貞治のいた早実に敗れ、自分は王貞治に勝てないのだと野球を捨て、日大写真部に進んで記録写真と映画を手がけるようになったのである。

足立正生の存在と名を知ったのは彼からではない。旧友は日大ブンドの秘密党員ではなかったと思う。一途に、同じ学生が闘っているのを記録してきたのである。右派学生の包囲をぬけて坐りこみ現場の品川駅にやってきた彼の存在から、日大に深海魚のようにポウッと光って同志がひそんでいるという手ごたえがあったのである。

日大は六万人なのだ。六万！小都市なみの学生数だ。いつか、この巨大な大学が動き出すという最初の手ごたえが六月四日品川駅ホームだった。一九六〇年代後半、右翼との武闘に勝利して白山通りをうめつくした日大全共闘銀ヘル部隊の最初の雨滴の一つ

が品川駅ホームでエピソード的に出会った小学校時代の同級生だったと思っっている。

足立正生が一九六〇年段階の秘密同盟員だったかどうかは知らない。そうであったほうが話はいやいが、そうでなくてもいい。足立の存在はブンド以上のものだからだ。右派拠点校腹中のブンド細胞の存在は異教徒のようなものだろう。俺は単位自治会だけで同盟員十七人というブンドの巣みたいな早大二文班に属していたから、ワラ半紙四分の一大の紙片に「必読後焼却」とガリ版刷りされた内部通達を一般学生に見られるというようなヘマはやらなかったが、党派性がバレたから身の危険を感じるということとは全然なかった。スケスケでもよかった。スケスケでも、のちに犯罪者同盟を生むだけの暗さと黒さを俺は保持していた。足立はもつとだったろう。ブンドは六〇年秋に中執が解体し、戦旗・プロト通・革通の三派に分解したが、日大フлакシオンは、どの派に属そうとアカはアカと狙われたから、論争があっても分派はなかった。足立正生が俺のことを論じてくれた文章にある。

「彼の遠まわしの論理は、六〇年安保ブンドの頑固一徹。好んで半殺しに出会った政治生命の不死身の警戒心であり、歯切れのよさ加減は、党略論理がつかんでしまうプラグマティズムへの反逆なのだろう。」（『平岡正明論』映画への戦略）

そのとおりだが、これは俺のこと以上に足立正生は自分のことを言っている。そういう足立も潜行は快楽であったということを書かないと返信にならない。敵包囲下にあつて党略論理について出されず、どんな敵も自分ほど暗くはなく、どんな状況も自分の想像力ほど複雑ではないと、ガードを固め、一撃で敵を倒す機

をうかがっているのは快楽である。革命か反抗か。革命は勝利をめざすが、反抗は刺しがいを狙う。刺しちがえればどんな敵も倒せる。そういう男が記録写真撮影者の背後に息づいていることを駅ホームで感じた俺の直感は悪くなかった。

デモ隊員の認識力について記す。
全学連が国鉄スト支援のために品川駅にすわり込みに行ったのは、ブンドと共同戦線を張っていた革共同が、自分たちは田町保線区の動力車労組に組織をのぼしているからという言に義理立てしたからだ。品川を選んだことは適切だった。

「品川アー……品川ア……山の手線、新宿……方面行乗換へエ……品川アー……お早く願います……」

と云ふ特別に異様な割れ鐘声を聞くであらう。記者も変な声だなどと思つて、窓から首を出して見た一人であったが、不思議なことに怒鳴つて居る駅夫の顔が見えない。変だなど思つてキョロキョロ見まはすと、それはホームに備へ付けられた蓄音器で、声自慢の駅夫に吹きこませたものだとかわかった。

夢野久作、大正一三年の『東京人の墮落時代』書き出しである。『九州日報』記者杉山泰道（夢野久作の本名）は震災の年、救援船備後丸に乗船して震災直後の東京に来た。その翌年にも東京に来た。一年で東京は復興に目途をつけた。だが何かが変わった。品川の先で、何かが変わっている。そのことを九州からの急行列車が品川駅に着いて、シューとシリンダ内の蒸気余圧を白い湯気にして吐いているうちに、レコードでアナウンスする駅名に直感する。

久作のルポを追跡調査してわかったことは、彼が東京に入ったなりレコードによる駅アナウンスを異様と感じたのは、品川駅が、軍事列車発着拠点として震災後の帝都再建計画の主要な一環になっていたからだ。現在の品川駅のホーム配置はこうなっている。

山側に私鉄京急線高架ホームがある。これは独立している。しかし軍港横須賀へのバイパスである。地表に国鉄ホーム群が整然と並んでいる。①②番が山の手線。③④番が京浜線。⑤⑥と⑦⑧が団体臨時ホーム。ふだんは使われない二本の空のホームである。⑨⑩が東海道線急行ホーム。⑪⑫が湘南電車ホーム。⑬⑭が横須賀線ホームで、これは横須賀線と湘南電車が別のレールを走るようになってから新設された。いちばん海側に高架の新幹線レールが走って、これは品川駅を無表情で通りすぎる。

この基本的レイアウトは関東大震災直後に決定されたものである。ふだんは使用されない団体臨時ホーム二本というのが、軍隊列車発着ホームだった。日中戦争、太平洋戦争を通じて日本兵はここで列車に乗りこみ、行く方を告げられないまま戦地に向った。この品川駅レイアウトに対応するのが田町の操作場である。蛙を呑みこんだ蛇の腹のようにふくれ、いったい何本レールがあるのかもしれない巨大な操車場。これは帝都の西向きの心臓弁だった。ここで帝都に入り出てゆく巨大な物流をコントロールする。東向きの方は田端操車場である。全学連がスト支援部隊を品川に出したのは、心臓部の弁にあたる田町操車場に動力車労組の戦闘的な労働者が多いことと、かつて軍隊列車進発ホームだった二本の空きホームがあって、いくらでも大人数の支援部隊がつかえられることと、機動隊との衝突があった場合、動きまわる余地が

あるからだった。高架の東京駅で戦闘があれば落ちて死人が出る可能性がある。

六・四スト支援の拠点が品川駅だったということは、軍国主義時代の亡霊がデモ隊を呼びこんだのである。この磁場によびこまれた人物を点綴しておこう。

十時過ぎだったと思うが、学連部隊がつめていた湘南電車ホーム（現在の⑪⑫番）に六月行動委員会が来た。松田政男が行動隊長だった。「私たち、六月行動委員会は、戦闘的インテリゲンツィアを代表する吉本隆明氏とともに……ました。」この……のところに六月委による六・四闘争の位置づけがぐるのだが、内容は忘れた。

マイクを渡された吉本隆明はやや迷惑げに言った。「そんな大げさなことでなく、その、あれです。座り込みに来ました。いっしょに戦いましょう。」拍手があった。

終電後に、学生にはジャムを塗った食パン二切れが配られた。終電が出た後も、品川駅の労働者は学生部隊がすわり込むホームの電灯を全部落さなかった。ほんやり明るいホームをはずれて、東京寄りの暗がり、鶴見俊輔が新聞記者から貰った大きなぎり飯を食べていた。この日、鶴見俊輔は国民的英雄だった。都立大教授竹内好と、京大教授だった鶴見俊輔は、岸内閣の如き反人民的政府下にある官学の禄を食まずと声明を發して大学を辞めた。民主が独裁か、とこ両所は獅子吼した。

民主が独裁かという竹内・鶴見の問題のたてかたは、反ファッショ統一戦線デイトロフ時代の二段階革命論的な問題提起であり、生産点における労働者階級のゼネストを以って岸内閣を倒す

という主題に水を差し、民族民主統一戦線を主張するヨヨギを利するものである、という批判がトロツキスト活動家上部にはあった。国鉄労働者がようやくにして時限ストを打つたのだから、次はゼネストだという方向にすべての宣伝煽動を集中させなければならぬ、と。俺は「民主が独裁か」でもいいと思った。二者択一のスローガンでデモの人数が増大するならそれでいい。今の段階では量が質だ。

夜が明けた。時限ストは終わった。学連部隊は引きあげずにいた。一番線向うの空地に葉っぱを着た国鉄労働者が一人立って、手をメガフォンのように口にあてて、言った。「全学連の諸君、おれは労働者だ。ストライキは成功した。一番列車はとまった。あとは労働者にまかせてくれ。この場を引き上げてくれ。たのむ。」「ヨヨギだよ」と先輩活動家が言った。男が労働者であることは疑われないが、保線区のとこの駅のといわず、自分を絶対値一労働者であることを強調して、労働者物神傾向にある学生生活活動家をビビらせようとするテクニクは経験豊富な共産党員だ。彼は学生たちが電車の姿を見るやわらわらとホームから線路に飛び降りて電車をとめてしまふことを恐れたのである。階級闘争が激化する時期には、松田発言や吉本発言に傍点をつけて示した部分のような微妙なところで、インテリ語だったり、指示代名詞のリニューアルチックな使いかたなりに反応して、相手の層的な、ないしは党派的な匂いを察知して共闘関係を調整していくものだ。

それにしても労働者が学生に、「帰ってくれ、たのむ」とはね。単身、肉声で語りかけてくるのはえらいが、音吐朗々たる泣き節だ。「品川ア……山の手線、新宿方面乗換へ……。」

2 六月十六日、空城の計

軍事は赤軍派が最初に提起したのではない。一九六〇年六月、安保の中で埴谷雄高に、三池で谷川雁によって提起された。安保から行こう。国会周囲をうずめつくすデモ隊の中で埴谷雄高は、自ら「陰謀家として」と言いながらこう問題提起した。

「あらゆる革命は支配層を心ならず防衛していたものが支配層から離れ自己の出身地である被支配層の側へ自覚的に復帰することによって成就する。換言すれば、支配層が裸にされたとき成就する。その逆転する防衛者の根幹は軍隊である。そして、これまでこの革命の歴史が教えるところによれば、軍隊が被抑圧者の一翼として武器をもって立つ決定的な瞬間、殆んどすべての警官は抑圧者の眼をも被抑圧者の眼よりも隠れて何処にもいなくなり不思議な行方不明の状況を現出する。いわば双方からともに見放される不運な宿命を負わねばならぬ根本理由は、まず第一に、武器の保持者でない彼等に双方から決定的な価値が認められぬからであり、第二には、日頃から人民に接触している彼等に対して、日頃接触をもたぬ軍隊とまったく反対に、近いものが激しく憎み合って、遠いものが却って親しみ合うという政治の原理がきびしく働くからである。」（「自己権力への幻想」「民主主義の神話」所収、現代思潮社新書）

このあと埴谷雄高は六〇年夏の六月行動委員会の総括集会で「自衛隊を出させたかった」と言っている。

一九六〇年三月二十八日、三池争議最激昂局前ホッパー前ビケットラインで、谷川雁は次のように労組下部に軍隊があらわれた

ことを問題提起した。

「午後にはひとりのおとなしい労働者が刺殺されるにいたった。再び指令によらない武装が一夜にして整えられた。この瞬間に、闘争の質に関するもつとも重大な決定が組合統制によらない方法で決定されたのである。(中略)

この日、現場にいた目撃者として私は証言することが出来る。この日「一九六〇年三月二十八日」こそを越える大衆が戦後労働運動のワクをのりこえた、決定的のりこえた日であったことを。それはもはや労働組合の体系にとじこめられた運動ではなかった。防衛的であるにせよ、かくて三池は戦後はじめて躍りてた労働者の自然発生的な武装闘争となった。(中略) 私たちは自分たちの軍隊の姿を、といって悪ければその前駆的形象をはじめて眼のあたりに見たのである。

端的であるが、大隊単位の部隊編成がなされた。大隊長のいるところ大隊旗をもった労働者がしたが、くりかえし演習が実施された。三池艦隊とよばれる木造船の海軍が登場した。最高潮時には二万人の第一線戦闘要員と家族をふくむ一万人の補給要員が組織され、炊事から衛生にいたるまで、この三万人の戦時編成師団はほとんど想像もできない滑らかさで活動した。(中略)

指導の上部にいくにしたがって軍隊のおもかげはなくなり、ただの労働組合にすぎなかった。しかし底部にいくにしたがって、それは実態としてまごうかたなき軍隊であった。大衆は進んでそれぞれの分隊長や小隊長の決然たる指揮を要求した。(中略) 軍隊というスタイルをとった、下部からの組織化の方向なしに、三池がこれまで隔絶していた中小鉦をふくむ坑夫の気分とあれほど密

言はつくづく真実である。より強力な敵が手つかずのままでは階級闘争は決着しない。機動隊でケリをつけられたことが安保闘争の限界であった。

ではいつ、自衛隊が出てくる可能性があったか。六月十六日だった。六月十五日、全学連は国会突入し、警官隊に激突して樺美智子が殺された。押し戻されたあとも大群衆は国会をとりまいて去らなかつた。防壁がわりに正門前に並べられたトラックがひきずり出された。ひきずり出したのは学生だが、火をかけたのはだれか。俺は学生服の男がトラックの下にもぐりこんだのを見ている。当時、学生はわざわざ学生服を着てデモに行っていない。梅雨空とはいえ六月だ。

一台燃えればあとは次々だ。トラックがひき出される。ひっくり返される。ガソリンが雨に濡れた斜面を流れる。火をつけられる。炎が斜面を走る。

遠くでタイヤが破裂するような音が続いた。催涙弾だ、という声が伝わってきた。きたら投げかけさせ、と口々に言いかわしていたところに頭上でガンと一発。だれも催涙弾を知らなかつた。古い外国のニュース映画で見たままの、手投げ式のものだと思ひこんでおり、短い筒の銃銃から発射され、空中で炸裂するものだと知らなかつた。呼吸がつまり、眼が痛んで立ちくらんでいるところに青い乱闘服の機動隊が突っ込んできた。顎を殴られて倒れたが、立ち上れたので逃げた。三宅坂を左に折れた。機動隊はまだ追ってきた。敗走するというのは口惜しいものだ。相手の数は雪崩れをうって逃げる群衆のおそらく十分の一、密集隊形を崩さずひたひたと追ってくるのに、踏みとどまって反撃できない。

着することはとうてい考えられなかつた。それは三池を支援する他の炭鉦、とくに中小鉦で、シユトルム・ウント・ドラックとでもよばなければならぬような熱狂をひきおこした。

では、この軍隊的発想はどこから思いつかれ、借用されてきたか。いうまでもなく、赤軍や八路军ではなかつた。あきらかにそれは敗戦以前の日本帝国主義陸軍であり、戦中派の体験がその支えとなっていた。「(定型の超克)第三章「三池に出現した軍隊」前掲『民主主義の神話』所収

反戦平和論を軸としてきた戦後左翼には、日本敗戦からたった十五年後、戦争を忘れるほどたつぷり食ったわけでもなからうに、三池と安保という眼前の闘争のただなかで谷川雁、埴谷雄高の両左翼思想家が軍隊の必要性を声高く宣言したことは青天の霹靂であった。軍隊は右翼という度し難い偏見にとらわれているのは、戦後左翼が左翼にすぎず、革命家ではなかつたのでしかたないが、俺が軍隊の問題をこのように考えることができなかったのは未熟さのゆえだ。埴谷雄高が希んだように、六〇年安保闘争の首都街頭へ自衛隊が治安出動したらどうか。

民衆の生活を常時監視しているために警察と民衆の間には接触嫌悪感が生じて、ために警官が民衆の側に寝返ることはなく(推測するに警官は民衆のあんがいなずるさときたなさを知っており、民衆はまた自分たちを色眼鏡で監視している警察を嫌悪するからだ)、より強力な暴力が登場したときに消える運命にあるならば、自衛隊がデモの民衆の前に出てきたときに警官隊の自信喪失がはじまるだろう。

革命はより強力な敵を発見しながら前進するというマルクスの

半蔵門近く、追いつめられて曲れなくなり、濠の傾斜ととまらなくなつて水に飛込んだ学生を機動隊員がひきずり上げるのを横目で見ながら逃げた。

法政大学に逃げこんだ。右翼の襲撃とでも思ったのだろうおぼさんもまじえた宿直の生協職員が血相変えて飛び出してきたが、すぐに事態を察し、門をひらいて、入れ入れと学生、市民、野次馬の別なく校内に入れてくれた。催涙弾のきつい上シャツだけ脱いで、階段教室の床に倒れこんで眠った。

翌朝、握り飯が用意してあった。大学生協はどこでも共産党系が多かつたが、トロダスタだと言っている事態ではなかつた。男たちは逃げこんできたデモ隊員が眠っている間、徹夜で門のところを見張ってくれた。おぼさんたちは飯をたいて握り飯をつくつた。海猫が鳴くからニシンが来ると、赤い筒袖のヤン衆がさわぐ。雪に埋もれた番屋の隅で、わたしや夜通し飯を炊く……といふうなかにし札作詞、北原ミレイが歌う「石狩挽歌」が好きなのは、あの日、徹夜で飯を炊いてにぎり飯を結んでくれた法政生協職員への感謝の気持もある。天保時代の百姓一揆の記録に、炊き出しに出た女たちが、ムシロ旗で戦う男衆に応えるべく、飯の熱さで掌が赤く腫れるほどにぎり飯づくりに献身することが書きとめられているが、これをうるわしい姿と読むだけではまちがいだらう。米がないから一揆に立ち上るのだらう。女たちの掌が飯の熱さで腫れるほど米を炊くのは水盃の意味もあるだらう。

六月十六日は白い握り飯一箇からはじまった。早稲田に戻ると、一夜にして学生の顔が変わっていた。建物の外に群れている。外でデモの準備をしたりプラカードを作っている。プラカードは、ハ

ガキ大のボール紙に「反対」と二文字書いて木の柄に画鋲でとめただけのものだ。つまりコン棒。学生たちの表情には悲痛さのほかに解放感もあった。

樺美智子の死が学生を解放した。警官が学生を殺すならこっちもやり返す。腹をくくった者の解放感がある、それがどう見てもコン棒でしかないプラカード作りに出ている。殺されたのが樺美智子だということは活動家にはわかっていた。一文ブンドの女子活動家に樺美智子と高校時代の友人だった者がいて、彼女が遺体確認しているのだが、一般学生にたくしたのではなく、名前を言ってしまうのが悲痛で、また死者は六人だという噂も流れ、活動家にも噂の当否がわからなかった。六人殺されても不思議ではなかった。南通用門から入った中庭で学生と警官隊が二度目の衝突をしたとき(一度目の衝突で死者が出た)、ぶつかりあう学生と機動隊の圧力で人間が盛り上ってしまい、俺の足は地面から離れていた。

死者の数と名前はわからなかったが、東大の女子学生が死んだ、ということば伝わっていた。それをきいて、これまでデモに出たことのない学生まで甲い合戦にとりあえずキャンパスに蟻集していた。催涙弾の臭いをさせて戻ってきた者は一晩闘いぬいて生還した勇者だった。大きく三波に分けて出発したように記憶する。主流派も反主流派もなかった。その間にもサークル別、クラブ別の小集団が三々五々出発する。それと同じ光景がこの大学でも見られた。遺影などありはしないが、樺美智子の霊がなぐさめられるとすれば、死の翌日の全学生の隊伍にあっただろう。新兵を勇者に変えるのは戦友の死である、というのはほんとうだと思う

空城の計という。泣いて馬謖を斬ったのはこのときである。日本では三方ヶ原の合戦で武田信玄の軍に敗れた徳川家康がほうほうの体で浜松城に逃げこみ、命じて城門を開け放させておいたところ、これも策があると判断した武田軍が城攻めをせずに通過した。この二つの例から見ると空城の計は追いつめられた側の捨身である。恐れず攻め手が突入すれば孔明も家康も首を討たれた。階級闘争に空城の計などというものはあるのか。自民党政府は空城の計を弄さねばならないところまで追いつめられていたのか。壇谷雄高が、自衛隊を出させたかった、と言ったのはこの六月十六日の光景にちがいない。

ベニス傘持ちホーデンつれて、入るぞヴァギナのふるさとへ。尾崎士郎「ホーデン侍従」の破簾句を想い出す。足立正生が映画『性遊戯』の終局、両翼にホーデンを従えてボナパルっているベニスの如き国会議事堂を遊撃するに、裸の女に国会正門前を走らせるシーンをもってしたのもまた、六月十六日。せつかく権力が国会正門をあげはなつてデモ隊を誘い込む罫をしかけてくれたのに、その挑戦に乗り、その罫に入りこんで、再度、国会突入をやらなかった口惜しさを見つめてきたからにちがいない。

六月十六日デモを警官は読めなかっただろう。樺美智子を殺されて怒り狂った学生がなにか読めなかった。ブンドさえも呑みこまれる怒りだった。労働者も、労組幹部や社共の統制を振り切つて、暴発したら、もう手をつけられない。だから警官隊は退いた。しかし国家権力にもう後はなかったのか。そんなことはなかっただろう。自衛隊がいた。それは手つかずのままいた。六・一六の国家権力にとって空城の計が破られるということは自

れる。ものすごい闘志の渦が々と国会に向つた。これがブンドの終りであった。ブンドは方針を出せず、大衆に呑みこまれた。

国会正門はあげはなれてあった。正面玄関前の広い敷地には人がいない。投光器が打水でもしたように清められた広い空間を照らしていた。植込の蔭にも警官隊の姿はなかった。ただ怒号する人の群が門外にうねっていた。早稲田最終部隊とともに国会についたが、地下鉄で行つたのだから、都電を借り切つて行つたのか記憶がない。ふだんは田村町交差点が警視庁前か三宅坂下に張られた関東近県から応援に集められた警官隊の阻止線をぬけてから国会前に入るのだが、この日は、学生の先行部隊が追い払つたか。警視庁の判断で引いたのか、阻止線はなかった。たぶん後者だろう。デモ慣れしていない近県派遣の警官隊などが阻止線に配置されると、この日の学生はいつもとちがうのだ、襲いかかられ、市民にも袋叩きにされ、一中隊丸ごと拉致でもされようものなら、応援部隊を出すことになり、これもたちまち民衆の大海に呑まれて壊滅するだろう。火に油を注ぐことになる。

スポーツと国会前にぬけた。すでに日は傾き、投光器が煌々と無人の前庭を照らし、投光器後ろの闇にひそんでいるだろう機動隊の姿は見えなかった。国会正門は口をあげてデモ隊を誘い込んでいた。「罫だ」と学生は口々につぶやいた。罫に入るべきだった。あれは空城の計だったのか。諸葛孔明が魏の大軍と戦つたとき、馬謖の軍律違反で前進基地の街亭を失い危機に陥つたが、城をあげはなち、望楼に登つて琴を弾じる姿を魏軍に見せ、きつと城中に策があると魏の大将司馬仲達に思わせて魏軍を退かせたことを

衛隊を治安出動させるか否かのボーダーラインということだったろう。

チャンスだったのだ。俺は投光器がかつと光をなげつける国会正門前庭のだれもない空地へ一人で歩いて行って坐りこまなかつたことを悔いた。一人やれば二人つづいただろう。排除されれば、十人がすわりこんだらう。十人が排除されれば、十一人かたまりの群が、そこに一つ、あちらに二つ、バラバラにすわりこんだらう。それを排除するために投光器の後ろの闇だまりから、乱闘服を着た機動隊員が警棒をふり上げて突進してきたら、外からデモの群衆が仲間を助けようと殺到した。乱闘になつたら、あの日は群衆が勝つただろう。敵がちがう。殺気だつてもいる。突つこんできた群衆に国家権力側にかりに秘密狙撃班なりがあるの日用意されていたとして、銃器を使つたか。それはないだろう。昨夜のように警官隊が催涙弾を発射したとする。今度は群衆は罫に逃げただろう。前に逃げると、国会開催中である。再度国会突入は、議事堂内集会ということになるだろう。

デモ隊が建物内に入れば、自民党陣営にパニックが生じる。社共だつてあわてふためくがね。六・一五までにすでにパニックにおちいついていた議員はいた。自民党議員のパニックは、かならず失政の引き金をひく。

十六、十七、十八の三日間、夢中だったから罫の前でしりごみした自分の口惜しさはあまり感じなかったが、敗けてから口惜しさはまました。

暴動は統一戦線のすぐれた形態である。ブンドが、各人・各單位の用意に応じて順次ヤマノコ式に暴動を起こせ、と方針を出し

ていたらどうだったか。

もつとも多くの大衆を闘争に参加させる形態が暴動である。大衆は組織の枠をのりこえて暴動に参加する。樺美智子が殺されて学生がそれぞれの党派性から解放されて端的な武装をはじめたとき、ブンドは暴動を提唱すべきだった。暴動というものは自然発生的なもので「方針提起」ができるものではないと思うが、安保闘争の衝撃はスラムまで届いていた。山谷暴動である。基幹産業の闘争を重視するブンドは都市下層社会の分析ができなかったし(都市と農村の二重構造が都会内二重構造に変化しつつあること)、方針提起も介入もできなかったが、俺は個人的趣味として野次馬に出かけ、酔漢も老人も野次馬も加わる暴動という統一戦線の組織力に祭りだ。山谷の指導部なき暴動はそれまで労働組合に組織できなかった未組織労働者を街頭で組織した。

暴動には死んでもかまわぬような快楽がある。これがピンク映画時代の足立正生が執拗に追及してきた存在論的ラジカリズムである。芸術的直観は存在の根へ下向するものであって、それは大衆の実存の深部に反乱の原基も見出す革命の直観に等しい。なお「反乱」と「暴動」の別を言えば、暴動は自然発生的、盲目的に低次なものであり、反乱は方向性と計画性をもった高次なものであるという論は、インテリのまちがいだ。反乱だから鎮圧される。指導部がやられると全体がやられる。戦後階級闘争史の経験によれば、九割九分まで指導部は日和見装置である。反乱は暴動より低次なものである。暴動とは、自己権力創出に至る統一戦線の端的な運動である。

六月十六日に俺を尻ごみさせたのはまず恐怖だ。投光器の投げ

かける光の輪の中に出たら射殺されるという恐怖があった。第二は前衛意識だ。俺はブンドから方針が出るのを待っていた。再度突入方針を知らない。それは、早大二文班でも、全学連が国会突入を決めたことを知って、肺病で活動休止中の同盟員二人が病いをおして出てくるという決意構想を要するものだ。他の何か、たとえば国家機関の別の場所をやる、というようなことを。そして暴発しようとするノンポリ学生に対して、学連の決定を待てる。自分が抑止する側にまわった。不遜にもブンド一年生のガキが、十六、十七、十八日の三日間は、小鳥がとまってもグラリと傾くような微妙なバランス状態にあったこともたしかだ。六月十五日に機動隊に追われて吉本隆明が警視庁裏庭に追いこまれて逮捕された。「ひねた全学連」と思って訊問した刑事が、詩人と知って釈放したが、かりに訊問者がウルトラな公安委員かなにかで、この男こそ全学連の黒幕と功名にはやって吉本隆明を数日間留置したらどうなったか。死者の中に吉本隆明もいる、という噂が流れただろう。そんなことでも天秤が傾きかねない情勢はあったのである。なにかが起るかもしれない。期待しながら、黄色い袈裟を着た妙信講の僧侶たちが叩く団扇太鼓の音とともに六月十九日、空は明けた。いわく、「壮大なセロ」。

組織嫌いが狂的なエゴイズムにいたるタイプの男がいる。かつて、「あんたも世界革命を一人でやる方法を考えているのか?」と足立正生にたずねた。「そうだ」とやつは言った。

ところで、埴谷雄高が望んだごとく、一九六〇年六月に自衛隊が治安出動したらどうなったか、と考えておくことも無駄ではない。自衛隊はなにもできなかっただろう。強い軍隊は経験ある下

士官の層にありと言われるのだが、対外戦争はさておいても、階級闘争場面の経験の蓄積ということにおいては、街頭行動では労働的、市民運動的限界はあるとはいえず、デモ隊のほうが上だ。勝つとは、民衆が自衛隊を押し返すことではない。鎮圧を命じるウルトラな指揮官の命令を隊員がきかないということであり、それからはじめればよいと思う。

民衆に向けて発砲を命じるウルトラな指揮官は百人のうち何人か。地に伏せる民衆を狙って銃口を下げて射ち狂った兵士は千人のうち何人か。

鎮圧出動部隊の水平射撃は、デモ隊を地面に伏せさせるためだ。射撃が目的ではない。ただし流れだまや跳弾がどこに行くかは弾丸にきいてもわかるまい。

軍隊の発砲が民衆を殺傷してしまつたらとりかえしのつかないことになるだろう。

だから自衛隊は出したかった。

埴谷雄高は一九六〇年六月に、既存の軍隊が、民衆の渦の中で民衆の側に寝返るケースを考察したが、谷川雁は筑豊炭田にあって、人民の軍隊の創出に立会った。炭坑夫が労働組合の下部に、かつて経験した軍隊生活の記憶を再現して人民の軍隊の端緒をつくり出し、「帝國主義戦争を内乱へ」というのはそういう形もあるのだと告げた。

既存の軍隊を民衆の側に寝返らせようとする安保闘争の都市蜂起型よりも三池が先行し深化していたのは、三池労組下部が筑豊の中小炭鉱の坑夫たちに下向きに突破して、労組の枠を超えて、労働組合運動が労働者運動に揚棄される組織論を提出したことだ。

支援を越えた合流があり、労組が労働者評議会へ成長する糸口である。「二万人の第一線戦闘要員と家族をふくむ一万人の補給要員が組織された。」(谷川雁)

前線と銃後をあわせもつ戦闘集団、ないしは生産と戦闘を具有する三池における炭坑夫の軍隊は、玉碎的戦闘にはたけても補給線確保に劣るかつての日本軍よりも萌芽的にすぐれたものだったと言えるだろう。一九一四年メキシコ革命時のパンチョ・ビリヤ農民革命軍と従軍婦やら、ガンジー印度独立軍の木綿布織りなどは、戦争と生産を具有した人民の軍隊の見本であるが、外国のパルチザン組織を手本にしなくても、百姓一揆がそうだった。いま一度、歌をきこう。

私じゃ夜どおし、飯をたく。三池の軍隊は百姓一揆という史的に豊富なナシヨナリズム領域に接続するのである。

日陰者の自衛隊を軍隊に公然化することをもってナシヨナリズムの結集環とする三島由紀夫の上からの組織化構想は、百姓一揆の記憶をパルチザンの中によみがえらせようとする谷川雁のサークル村構想の倒錯であった。石原慎太郎が三島由紀夫の「悲願」を継承しようとしている。ざっと描きだすと、かつて関東軍が統帥権を干犯して、つまり軍隊を動かすのは大元帥天皇の命令によるということを無視して満洲で独断専行したように、自衛隊の動員令は首相の権限であることを「干犯」して、首相の頭越しに災害救助の名目で、あるいは実際に救災活動の必要によって、都知事が自衛隊を動かす。三島の出師の「恋敵の情」(天皇制的心情)と異って、石原慎太郎の独特なところは、災害時の「三国人」の脅威をいたてて自衛隊の救災出動に治安出動の性格を持たせよ

うとすることだ。これではまるで関東大震災時の朝鮮人暴動のデマと戒厳令施行と同じだ。石原慎太郎の三國人理解はいいかげんなものではない。「フアンキー・ジャンプ」のヒロイン沙和子の仇名はキムである。「乾いた花」の殺人者の名前は葉である。葉は香港人と日本軍人の混血で「筋の悪い素人」である。「死んでゆく男の肖像」の主人公の前に執拗に立ちふさがるノミ屋のボスは朝鮮人である。俺はそれらの太陽族小説の傑作を読み返して驚いた。ものすごく優秀である。反抗する良家の息子たる太陽族は、かれらが軍国主義の遺物みたいな老権力者から権力を奪ってリーダーシップを確立してゆく過程で、戦後闇市の三國人の肉体との衝突を通じて、サッカーでの、ボクシングでの、パー券売りでの、ポーカー賭博での、諸々の場における腕力沙汰を通じて、石原慎太郎は戦後過程における鮮烈な存在としての三國人をよく描きだしている。

彼は日本の戦後過程で三國人が必然であったことを知っている。知っているから、帝国主義的復活をとげた日本のリーダーに自身自身を裏返したとき、必然であった三國人も裏返して叩きつけようとする。

そして一たん動いてしまえば軍隊はとまらない。石原内慎太郎莞爾変換なんてね。

自衛隊を軍隊に公然化しようとするのは独占ブルジョワ階級の階級本能のようなものである。敵階級が軍隊のオーナーとしての対民衆出動を研究しつづけているのに、東欧スターリン主義国家群が連続崩壊したことにこり、重信房子が逮捕されたからとがっかりして軍事を否定しては、左翼の遠慮のしすぎというものだ。

の東洋型の伝統による。

炭坑夫が闘争の最昂揚局面で大日本帝国陸軍を思い出したというのは、農民兵を思い出したことではなからうか。ロシア革命の告げるところによれば、ロシアの農民は自然成長的に農民評議会を作りださなかつた。制服を着た農民としての兵士評議会を経て、労兵ソヴェートを形成して農民はロシア革命に合流した。三池の炭坑夫が、上部は労働組合、下部は軍隊という二重構造にいたったとき、その下部とは、労働者・兵士・農民三相の自己権力を萌芽していたと見る。

革命はその必要によって、既存の軍隊を人民の側に寝返らせる説得と、民衆の軍隊を創出する過程とを同時に進行させる。民衆の軍隊を創出する過程とは、戦闘集団の組みかえ、道具の武器への転換、非戦闘員をふくめた補給網の創出等のすくわれて組織論的な領域での実践である。一九六〇年、日本の階級闘争は三池と安保の両端から軍隊を提起した。しかし二つの軍隊論は結合しなかつた。

この問題で、安保の方が決定的におくられていたのである。戦闘的労働組合の下部に生れる大日本帝国陸軍。その幻の大日本帝国陸軍はそれ自体が労働者・兵士・農民ソヴェートを萌芽していること、それは上に向って労働組合に貧弱化するのではなく下に向って開かれて、大手単組を越えて中小炭坑の労働者の熱狂的な支持を受け、農民闘争（と水くさい言いかたより百姓一揆と言いたい）と結合して、農村が都会を包囲する東洋型革命の地平に立つこと。これら一切をブンドは言わなかつた。谷川雁が都会の低温のニヒリズム、炭坑夫の高温のアナーキズムと呼んで安保闘争を

一九六〇年六月段階の三池闘争は問題提起した。人民の軍隊の端緒が革命軍に成長したことをしめすメルクマールはなにか。谷川雁はこう回答した。「元憲兵准尉といった大隊長のかたわらには政治委員の影すらみえないからといって、これは葉の花におう邪馬台国の白日夢にすぎなかつたのだらうか」と書いて、軍隊付政治委員の存在であると示唆している。中国紅軍の政治委員というのは本来の東洋的な発想であつて、諸葛孔明がそのはじまりだと言われる。兵士に政治状況を説明して自分たちの作戦行動が革命の何処にあるのかを位置づけさせる軍隊内教師役であつて、作戦面には口を出さない。民衆の自然発生的抵抗が解放運動に高まるための存在たる政治委員なしではじまつたから三池の武装は電光石火だつたのではなからうか。まず軍隊化。ついで政治委員という順を守らないと際限ない党派闘争におちいる。

暴動は統一戦線であるという性格を三池は安保の首都街頭より鮮烈に見せた。下層のナシヨナリズム領域へ道をひらくことよつて筑豊の炭坑夫の軍隊は、既存の軍隊を民衆の側に寝返らせる都市型の工作に左翼クレータより階級性が大きく、したがつて農村は都会を包囲する。

農村は都会を包囲するという毛沢東テーゼは東洋反乱史の型そのものであつて、西洋の革命は封建諸侯の束縛を逃れて自由都市を建設した市民階級が、都市を拠点に教権と王権を打倒したが、東洋にあつては都会は城壁でかこまれた皇帝とその官僚の支配下にあつて都市に自由はなく、自由は農村にあり、農民革命軍が都会に攻めのはつて官僚制を打倒するというかたちをとつた。三池闘争が安保闘争よりも日本階級闘争の深部に達していたのは反乱哀れんだのも無理はない。ブンドから赤軍が生れたのは、六〇年ブンドの輝かしさの継承ではなく、まさに六〇年ブンドの歯がみしたくなるようなダメさからであつた。

過去を振り返つて別の観点からの異議申し立てをしよう。九州の炭鉱では、ピケットラインの労働者が右翼に刺殺されたことを契機に、坑夫は大日本帝国陸軍を思い出して武装した。では六〇年時点の東京の労働者部隊が、右翼との抗争から、帝国陸軍を思い出すかといえば疑問だ。思い出すのは闇市ではなからうか。日本敗戦の一九四五年、坑夫は次々に兵隊にとられて、北九州炭鉱地帯の坑夫はその四パーセント近くが朝鮮人坑夫であつたこと。大陸の撫順炭坑帰りの者が多かつたこと、そして石炭が明治以来のエネルギーの根幹であつて、炭坑夫はもつとも密集した労働者部隊であつたことなどから、労組下部に大日本帝国陸軍が現出した。この条件は東京になかつた。

炭坑夫の武装自衛は右翼との衝突から生れている。警官隊との衝突で労働組合員が軍隊化するということがあるだらうか。公権力の介入は過程ではなくむしろ結果である。右翼との衝突は闘争の過程である。

3 あねさん待ちまち

足立正生と俺は六〇年ブンドにはめずらしく強烈なナシヨナリストの一面を持つていた。雑誌「血と薔薇」4号の敗戦処理のために足立正生をたずねたのだから、一九六九年だ。彼は素纏をゆでていた。ご馳走になつた。刻んだ茗荷のつゆがいい味で、湯上

りに浴衣に袖をおすような江戸前の味がした。うまい素麺がな
くちや無法松の話にはならないよ、と彼は言った。

無法松の話はだれでも知っているが、その頃は春陽堂文庫にし
か入っていないから岩下俊作原作『無法松の一生』を読んだもの
はすくなく、素麺ではじまりうどんでおわるのが無法松だ、と要
約してのけるような相手に会うのははじめてだった。人力車夫富
島松五郎は小倉警察剣道師範に喧嘩を売って打ちすえられ、三日
寝込む。四日目、起き上って、「兵、腹が減った、なにか食わせ
い」と言う。松五郎をしたっている弟分の兵と呼ばれる男は、筑
一杯山盛りの素麺を茹で、無花果の植わった井戸端の冷たい水に
浮かべた真白な麵を持ってゆくと、松五郎は何本か残しただけで
きれいに平らげ、元気になった。終幕だ。老いた松五郎はうどん
屋に入り、素うどんと一合の酒をのみ、しみだらけの壁に頭をも
たせかけて小声で民謡を歌っていたが、立ちあがってゆつくりと
小学校の方に歩いてゆき、石垣に腰を下ろして小学生の歌う唱歌
をききながら死ぬ。

清潔感がなくては『無法松の一生』はだめなんだ、と足立は言
った。そしてこどもの頃、祇音太鼓では彼の属した町の連でなか
なかの撥さばきの上手として知られていた自分を語った。足立正
生は福岡の出身であるが、彼は通学の帰りに団栗の実を峠の鴉に
ぶつけて小学校に通ったということと語って他人を笑わせ、ため
に山里離れた山間部に育った野生児というイメージを強化するこ
とに役立ったが、俺は足立は根つ下の都会人だと思ってる。
俺だつてこどもの頃は夕方になると下駄を空に投げあげて蝙蝠を
とろうと遊んだ。蝙蝠は額から出す超高音の鳴き声をリーダーに

絹街道は、東風が西へ向けて吹き抜ける歴史の生命線であり、
逆の方向、西から東へ吹きだまされたのは梅毒菌だけである。そ
の東風が烈風となつて最後のオアシス、チゲリス・ユーフラテ
スを包み込んで竜巻をおこし、砂嵐となるのが、中東の人口ネ
ゲブの砂漠である。

日本人は、右翼汎アジア思想の名のもとに満蒙を駆け抜けな
がらベンガル湾に葬られ、僧衣をまとつて何度かこの地を往来
して神かくしにあった。アーノルド・トインビー老は、梅毒菌
の伝播図を解説しながら西から来た。(中略)

あのオリオンの星となつたマハデイ(導きのもの)の孫弟子
たちと、赤軍となつた被占領地の息子たちの力を支えて来た、
この新しい怒りは、再び、全てをネゲブの砂漠の中へ埋めてし
まうだろう。(季刊ドラキュラ 1号)

唐十郎や三上寛や俺に似ており、あるいはアングラ劇舞台上
つた磨赤児のセリフまわしにびびったりと感じさせるこの文体は、
それぞれの立場で「好んで半殺しの目に出会つた」同世代者が身
につけた比喩の強さであるが、先行するこんなものにも似ている。

他のすべての労働運動が、三池闘争を再び疎外させた地点に
根柢を求めたとき、おれたちは三池闘争よりも一けたほどちが
う原形形態に接近した。異質の疎外形態を創造しつつ闘つた。
だれが何とおうと、三池ホッパー前の状況は思想的にも行動
的にもおれたちによって越えられたのだ。その原因はどこにあ

して暗闇を飛ぶから、下駄を獲物と思つて飛びかかり、翼を下駄
の鼻緒の間につこんで落ちてくると言われていたのだが、そん
な間抜けな蝙蝠なんているものか。そんな遊びをしたのは東京本
郷なのだ。足立正生が鴉に団栗をぶつけたのが人里離れた山間部
ときまつたものでもなかるう。団栗で鴉を仕とめたというなら、
あいつは生れつき山岳ゲリラ向きだと言うけどな。

足立正生と語りあつた最初のナショナル的領域の話は無法松
であつて、夢野久作ではなかった。俺はソバ好きで、うどんは風
邪をひいたとき厚着して、短冊に切つた長葱と玉子をどじこんだ
煮込み七味をたっぷりふりかけてふうふういって食うものだと
決めていた。じつさい関東人はうどんは得意ではない。足立正生
の茹でた素麺をすすりながら無法松の話をして、うどんを食う美
意識というものがあることをはじめて知つたのである。冷たい井
戸水に洗われて鉢のなかにとぐるを巻いている白い素麺のような
清潔感が無法松になればならなかった。無法松が、通天閣下の
屋台将棋でフンドシのわきから手をつつこんでキンタマの毛をぬ
きながら、東京の関根名人を破る手を工夫している坂田三吉のよ
うになつてはならない。無法松には、妻帯せず、木賃宿の一室に
柳行李に収められるだけの身のまわりのものを持ち、人力車夫を
捨てて腰弁階級(勤め人)に変わりつつある車夫仲間を横目に、市
井一介の俠氣に生きる男のすがすがしさがなければならなかった。
そのように語る足立正生に俺は感じた、赤色無法松! そのよ
うなナショナルな領域を通過して彼は世界革命を考へるのである。
「俯瞰願望、ネゲブ砂漠の神」と題された一九七三年秋の文章は
次のようにはじまる。

つたか。三池が意識の「炭鉱」から一歩身を引いて「炭鉱」を
維持しようとしたのに対して、おれたちは故郷の粘性性と肉體
の具足性を棄てつくすことに集約される「炭鉱」の意識構造の
枠をさらに前方へ向けて破ろうとしたからだ。(谷川雁「筑豊炭田
への吊辞」『日本読書新聞』一九六三年四月八日号。のち「影の越境をめぐ
つて」に収録)

一度だけ和文邦訳する。アラブ赤軍政治委員として左翼誌にア
ピールを書くときとちがつた「ネゲブ砂漠の神」といううねるよ
うな文章は、美学誌『季刊ドラキュラ』(編集長は唐十郎だつた
か)に発表されたので、比喩的であることが即足立正生の戦闘で
ある。一般誌は不特定多数が読む。左翼用語を符丁のように使つ
てすますわけにはいかない。裸の足立個人が不特定の読者に向き
あうのだ。日本人は右翼汎アジア思想の名のもとに満蒙の地をか
けぬけネゲブの地に至つたというのは、「コーラン」を研究した
大川周明。トルコのプリンキポに亡命中のトロツキーを訪れた橋
本欣五郎。満州を策源地に世界最終戦争を構想した石原莞爾をさ
す。ことに石原莞爾だろう。

満州を策源地に、世界最終戦争、右翼、石原莞爾。
パレスチナを国際根拠地に、PFLPと共同して世界戦争宣言、
左翼、足立正生。

対応する。対応すると断言したのは、『石原莞爾試論』の連載
を俺は準備していたからだ(連載開始は『第三文明』一九七四年
十二月から)。「国際根拠地と革命」という章で、俺は昭和初期右
翼武断論とアラブ赤軍の類似を、比喩的に、つまり右翼を語って

左翼を語らず、徹底的に論じた。

またある者は「僧衣をまといて何度かこの地を往来して神かくしにあった」というのは田中智学の国柱会を指すだろう。ネゲブ砂漠はユダヤ教の神とキリスト教の神とアラーの神とがひしめく場所である。これら啓示宗教の溶鉱炉へ仏教徒がちよっかいを出して神かくしにあったということだろう。

後半の「オリオン」の星となったマハディの孫弟子たち」というのは、イスラエルのリツダ空港(テルアビブ)を攻撃した奥平剛士、安田安之、岡本公三の三人を指し、「赤軍となって被占領地(パレスチナ)の息子たちの力を支えてきた新たな怒り」とはアラブ赤軍を指す。英国の歴史学者アーノルド・トインビーが解説した梅毒菌の伝播図というのはたぶん、トインビーの著作「ハンニバルの遺産」のことだろう。映画「赤P」を徹底分析した長大な論難的論文「戦争の映画か革命の映画か」で俺は「ハンニバル域外にあり、砂漠のゴリラ」という章を設け、足立正生を紀元前のカルタゴの英雄ハンニバルと重ねて、これも比喩的に語った。ペイルートはフェニキアの故地にある。そのフェニキアの植民地から発展したのが北アフリカのカルタゴ、現在のチュニジアとリビアの境のあたりだ。カルタゴの猛将ハミルカル・バルカがスペインに建設した第二のカルタゴがカルタヘナである。ハンニバルはスペイン根拠地から大軍を発してアルプスを越え、イタリアに入って背後からローマを衝いた。平岡は階級闘争を「ブルターク英雄伝」で解説すると言われたくもなから詳論しなかったが。それら個々の絵解きよりも注目すべきことは足立正生がネゲブの礫漠に立つて、この地点を地球を動かすテコの支点と思ひ定め

たこともここで述べる必要はない。谷川雁の最良の思想は、恩を仇で返した俺にひき継がれたということをおけばよいのである。

思想的、行動的に四通八達する筑豊の坑道はディエンビエンフーの地下を掘り進むベトナム軍の暫壕に通じると言うもよし、ベトナム密林の下を掘り進む解放戦線の輸送路であつてもよし、在日朝鮮人詩人金時鐘の長篇詩『新潟』の一節、「海にかかる／橋を／想像しよう。／海底をつらぬく／坑道を／考えよう。」という海峽を越えて半島から大陸につらぬく足跡であつてもよい。足立正生にはそれがネゲブ礫漠だつた。

『鎖陰』は俗に言う「穴なし小町」の物語。一九六三年、日大新映研製作のこの実験的作品は、坑道今だ通じずということ象徴してはいないか。犯罪者同盟の猥褻書『赤い風船』あるいは牝狼の夜』事件とのあまりの類似に驚く。この事件は、一九六三年十一月二十七日、諸富洋治が本の万引きで逮捕され、持っていた鞆のなかから同人誌『赤い風船』が出てきたことからはじまる。諸富ほど俊敏な男がなぜドジったかという、早稲田の古本屋でサド『悪徳の栄』を万引きしたのは彼の情婦であり、その女性が小児麻痺で逃げきれないと判断して、自分が盗んだことにしたというのがほんとうのところだ。この女性が『鎖陰』だつたのである。鎖陰という語ではなく、もっと下世話に「腰がカーブして入らない」状態であり、ものすごく頭がよくて、険のある美貌の持主だつたその女は、ズベ公で処女だつた。その顔立ち、女優若林美宏に似ていた。状況劇場の李礼仙、自由劇場の吉田日出子、若松映画の若林美宏と称されて六〇年代を彩った三名花の一人で、若

たことだ。支点は歴史性と革命家の決意の交点に成立する。その論理があたかも谷川雁の「筑豊炭田への弔辞」を継承したかのように見えるのだ。

谷川雁はボタ山が自らの重量で自然発火し、炭住が傾き、いがらっぽい道にベンベン草が生えはじめた筑豊の半ば廢墟に立つて回想した。三池闘争はホッパー前を突破できなかった。武装した警官と軍隊化した労働者数名がホッパー前でにらみあつて、ともに化石化したように硬直して、正面衝突は回避された。このホッパー前状況は、六月十六日の国会正面の空城の計に等しい。力づくで突破できなかった。戦後労働運動史が警官隊と正面から武力衝突してこれを突破できなかった地点を「ホッパー前状況」と呼び、国家を突破して現出するその先の真空におびえて、ふたたび労働組合運動に後退した三池闘争を越えて、中小炭鉱大正炭の坑夫たちは大正行動隊を組織し、警官隊および右派の襲撃に際し、坑底二千米ートルへ退却するという戦術を実行した。炭坑夫以外には入ってこれない坑底の労働者司令部。「だが何といおうと、三池ホッパー前の状況は思想的にも行動的にもおれたちによって越えられたのだ。」

石炭は日清日露戦争以来の日本近代産業のエネルギー源だつた。その石炭の時代が終わろうとするとき、坑夫たちはついに難攻不落の地下司令部という「思想と行動」に到達したのである。

筑豊炭田がついに掘りぬいた地下の王国から四通八達する坑道がどこに通じるかという具体性を谷川雁は提示していない。彼が大正炭坑闘争がおつたあとと上京してブル転したこと、提唱された内容の輝かしさは当面関係がない。その谷川雁と俺が闘争し

松作品『狂走情死考』出演のあと自殺した美宏だ。『赤い風船』がエロ本として摘発されたのは写真家吉岡康弘によるその妻美宏の毛つきヌードが載っていたためだが、足立正生と吉岡康弘は自分の妻の出産を撮影したという共通点を持つている。げんに二人は友人だつた。諸富の彼女が美宏に似ているのは偶然である。足立正生が撮つた実験色、前衛色の強い集団日大新映研と早大犯罪者同盟は美術や音楽の友人をだいたい共通にしていた。当然、俺は足立正生の名を知っており、六・四の品川駅ホームで、日大にもブンドの秘密細胞がいると知つたその男は足立正生にちがいないと思つてた。

だいたい後になって足立正生から直接聞いたことがある。『鎖陰』を制作していた時期、男五人で、ペニスを使わずに女一人をいじくつたことがあるそう。十本の腕、五十本の指による愛撫というのは強烈だ。快美感の頂上で女は脱糞し、子宮まで産んだという。女は狂い、自分が愛撫(というより拷問だ)された部屋を訪れてきては、「ごめんさいごめんさい」と泣きながら謝つては、糞臭が消えないと畳を拭いて帰るようになった。

足立のグループと俺のグループは、価値＝強烈さというパタイエのテーゼを実行する徒であり、変態領域に突入して性的実験を、ブンド分派の陰謀として行つたのである。足立正生の『梔』『鎖陰』『銀河系』はきれいに俺の『鞆人宣言』『犯罪あるいは革命』に関する諸章『鞆人ふうのきんたまのにぎりかた』(一九八〇年に執筆十六年後に場を目をみた小説)に対応する。

しかし、それでも一九六八年の暮まで俺は足立正生に会うことがなかった。会つたのは『性遊戯』の試写室だ。それは一撃だつ

た。俺は足立ピンク映画に一撃をくらい、そして一撃にして足立の思想的深部を理解し、最初の足立論を書いた。奇しくもその時期は、語学産業の専務になり下った谷川雁相手の労働争議によつてクビになり、日本ナシヨナリズムとは、憎つき九州野郎の地金をひっくり返さないと出てこないと悟った直後のことだった。

【性遊戯】論の冒頭をかかげる。

足立正生は国会議事堂の尖頭が陽根のさきつちよの形をして、いることに気づいた数少ない男の一人だと思ふ。新作『性遊戯』(若松プロ作)のラスト・シーンで、彼はあの威圧的な両翼にホーデンをしたがえてボナパツているよ、といった風情のなにもないやつらの建物の全景を撮らず、愉快なことに、馬糞型ピラミッドのさきつちよにある議事堂の尖頭だけをとりえ、それに配するに、チャペルセンター前の並木通りを、ゲシユタポ・ルツクに身をかけた数名の若者と半裸の娘たちを走らせてみせたのはすばらしく印象的である。滑稽でもあるし、かつ衝動的だったといいかえてもいい。あるとき国会がベニスのように見える。したがってそれを遊撃するのは娘たちの裸身でなければならぬ。(足立正生における敵への挿入)『映画評』一九六九年一月

国会議事堂尖塔がテラテラ亀頭のように光つてベニスのように見えるという感覚は、既述の如く、六月十六日の怨みの感覚である。放射射前の「男根」は裸女をもつて迎撃する。またゲシユタポ・ルツクの若者を走らせたことは、ドイツ共産党がファシスト

臣ではないこと、隊士の月給制、行動の輪番制の廃止などの諸点で近代的軍隊であった。

西洋式の軍事技術を学んだ下士官による不正規軍の創出は、役に立たない藩兵との抗争を経てこれを打倒し、明治維新を招来した。

エンゲルスの説いた抵抗の軍隊はパルチザンでなければならなかった。これと左翼の手工業的発想が結びついて、人民の軍隊はパルチザンでなければいけない、という観念が支配的であったときに、ロシア革命の軍事人民委員トロツキーは、世界革命を闘うための正規軍という概念を提起した。正規軍は志願によらず徴兵による。それはソ連一國社会主義を防衛するための軍隊ではなく、勝利した個々の社会主義国の軍隊を結びあわせたものでもない。世界革命の軍隊である。

ブンド赤軍派の新らしさは、日本国内の個々の反権力、反体制闘争の足し算にはなく、国際軍事行動を行う主体をいきなり建軍するということにあった。世界同時革命論である。大菩薩峠で軍事訓練を行つて大量逮捕者を出したことを反省したのち、国内では山岳戦を行う部隊と、ハイジャックで北朝鮮に飛んで国際根拠地をつくるうとした部隊と、アラブ赤軍とを同時に遂行しようとしたことは、世界革命を闘う赤色正規軍の創出というトロツキー軍事理論の影響ではなかったか。アラブ赤軍が同志殺しと浅間山莊銃撃戦で壊滅した連合赤軍の獄中兵士を厳しく批判しつつ、外国で外国の大使館を占領し大使館員を捕虜にとり、交戦国間の捕虜交換の手法で奪還した牢破りの方法は、世界革命の軍隊という概念から生れたものと見る。

と組んでワイマール議會を焼きうちした悪行の比喩である。同じようなことを考える男もいるものだ。『驢騾人ふうのきんたまのにぎりかた』で国会議事堂を最後まで防衛する反革命軍は、ひよこ色のピキニ水着を着てライフルを構える二百人の娘っ子である。革命軍はこれをとらえ、赫々と燃える夜宮のたき火で女を焼いて食つちまう。

足立も俺もかならずしも荒唐無稽ではなかった。太平天国に陰門陣という陣形があつたそう。城壁にずらりと全裸の女たちをおつぽりて並べるのだそう。そうすると女陰の呪力で攻め手は大砲が射てない。これを破るためには大砲の横に坊主を並べればよいそう。剃り上げた僧侶の頭は男根に似ているからだそう。こういうのが実際に行なわれたという。これじゃアジアの植民地化を狙う列強軍隊に勝てない。

アジアの軍隊がヨーロッパの軍隊に次々に敗れて、トルコが、ベルシヤが、インドが、ベトナムが植民地化されるのを見たエンゲルスは、アジアの抵抗は、藩兵の正規軍から離脱し、西洋式の軍事技術と操典を身につけた下士官によって指揮される不正規軍(パルチザン)でなければならぬと論じた。封建諸侯の藩兵の軍事水準、型式主義、官僚制では西洋の軍隊に歯が立たなかつた。そう指摘したエンゲルスは、西洋式軍事教育を受けた下士官に指揮された不正規軍が、長州の奇兵隊(十分以外の博徒、力士などから隊士を募集したから奇兵隊)や、幕府側では新撰組であることを知っていたかどうか。副長土方歳三が創出した隊規は、主君なき武士道(主君なき武士道はありえない)と主張した芹沢鴨の水戸学と対立して芹沢を斬、組長近藤勇に対して隊士はその家

このような思想は六〇年ブンドはむろん、六〇年段階に安保と三池の両端で軍事を構想した者も考えたことはなかつた。

世界革命のための正規軍という思想を一面で強烈なナシヨナリストでもある足立正生はどこで受け入れたか。俺はその観念の力、思弁力だつたと思つている。価値は強烈さのバタイユ的命題から、強烈な観念は快楽であるという芸術家的認識を経て、ドタマでイカす、というレベルに至る。ドタマでイカすとは、美に向つて射精すれば芸術になり(若松プロ時代の足立正生)、暴力イメージに向つて射精すれば革命家になる。

多くの論者はピンク映画作家の彼がいかなる論理をもって赤色革命家になったかを納得しようとして、ピンクの溶液に赤の顔料を加えて眺めたりしているが、足立正生においては、両者は最初から同じものだ。存在論にウエイトがかかると芸術にドタマでイカし、戦略論にウエイトがかかると革命にドタマでイカす。「思想」とは即、アカの思想のことであると戦前の検閲官のようにかたく信じ、革命思想こそが観念の華であると度胸をきめていることがドタマでイカすということである。

足立正生がドタマでイカして真赤になった道筋は、あれやこれやのバレスチナ文献を探さずとも彼の作品にくつきりと出ているではないか。たとえば足立脚本、若松孝二監督の『死にたい女』は三島由紀夫と森田必勝の自衛隊本部での割腹事件に即座に反応して、右翼の建軍思想の鼻面を叩いたものである。

三島と森田の市ヶ谷自衛隊本部での割腹は一九七〇年十一月二十五日である。

足立正生が『死にたい女』の脚本執筆したのは七〇年十一月二

七日・二九日の二日間である。

若松孝二が水上温泉で撮影したのは同十二月三日から九日の七日間である。

三島割腹事件半月後に、事件をパロディ化した映画ができた。この速度は、大坂曾根崎の森で実際にあった心中事件に取材して、近松門左衛門が「曾根崎心中」を一週間後に芝居小屋にかけていた速度に匹敵する。

若松・足立組は、三島盾の会事件の前夜、女と寝ていたために騒起に間にあわず死にそこねた青年がいる、と設定する。

同様に、盾の会事件前夜自分の肉体を通過して行った男たちがみんな死んでしまった少女がいる。

十年前、心中をしそこなつて、女を斬っただけで逃げた男がいる。

十年前、胸に刀傷を受けた女がいる。

この四人の死にぞこないが、事件ののち、北国に逃げて雪深い温泉郷で一堂に会す。数日前の過去と十年前の大過去に傷をもつた四人の美男女が温泉宿に会するのだから性の饗宴になることはピンク映画だから当然だが、なぜそれが右翼の建軍思想をピシヤリと鼻先で叩くのかを解く前に、その後のことを二つ指摘しておこう。

角川映画に「戦国自衛隊」(原作半村良)が出来た。この映画は三島由紀夫盾の会の騒起から洩れた者の悲哀を描いているようにも見える。角川春樹の心情は盾の会に近いように見えた。藤沢周の芥川賞受賞作「ブエノスアイレス午前零時」は、過去を喪った連中が雪深い温泉郷のホテル広間に集ってタンゴを踊る光景が、

若松映画「死にたい女」の輪舞を思わせるものだった。藤沢周のコメントでは若松映画の影響はないとのことだったが。

死にそこなつた四人はなぜ北へ向つたのか。トンネルの先に三島由紀夫の師匠川端康成の雪国があったのか。もつと先に北一輝の出た、佐渡があるからか。

若松孝二と足立正生は三島事件の沈降地点をはかつていたのである。自衛隊を軍隊に公然化することをもって右からの国民的結束と三島由紀夫の建軍論は、北海道上空でソ連機と緊急発進のかけあいをする航空自衛隊の教官隈太茂津の発言にリアティーを持っていた。ソ連機が領空侵犯をすれば自衛隊機が緊急発進する。自衛隊機がソ連領に入りこめばソ連機がスクランブルをかけてくる。ジェット機の速力をもってすれば国境線突破は一瞬である。そのたびに緊急発進する戦闘機乗りは、戦闘状態に至らないだけで、実質的に戦争状態にある。北海道上空では戦争が日常化されている。それなのに自分たち自衛官は日陰者であり、足の遅い民間機に気がねしいしい訓練をつづけている現状では、国防の義務を完うすることができません、と訓練生のミスで全日空機と岩手県上空で空中衝突し、乗客全員を殺してしまつた教官隈太茂津一尉は、いかにも職業軍人らしい悪びれない態度で声明した。

民間右翼が情動的に北方でのソ連の脅威を語るのと現役の戦闘機乗りが語るのとはわけがちがう。北海道自衛官の危機意識こそ、石の先端で石を割ること、すなわちクーデタの前段の契機になる。二・二六反乱がリアティーをもちえたのは東北農民の疲弊があつたからだ。農民出身の日本の兵士は東北を襲う飢饉を座

視できなかつた。

三島事件の衝撃波が北国に沈むときが危険である。雪崩をおこしかねない。したがって沈降地点を雪のパロディーで溶かしてしまふ。それが「死にたい女」という若松・足立組の回答であつた。

足立正生が「赤P」に至る道筋は永山則夫映画、「略称・連続射殺魔」の風景論にある。

「赤P」上映運動の露払いとして、というより防衛線として、布川徹郎NDU主催の四日間連続シンポジウムが一九七一年九月二十六日から行なわれ、竹中労の司会で、大島渚、太田竜、白井佳夫、布川徹郎、松田政男、平岡がパネラーに立ち、布川徹郎ドキュメント作品「モトシンカカラヌー」「倭奴へ」、大島渚「ユンボギの日記」、亀井文夫「上海」の四本が上映された。強力な作品、強力なパネラーである。これで盛り上げ、九月三十日、マイクロバスによる「赤P」の全国上映隊運動柿落としとして新宿京王名画座で「赤軍—P.F.F.L.P.—世界戦争宣言」が上映された。

シンポジウム席上、白井佳夫が戦前の亀井文夫のドキュメント映画「上海」は、足立・佐々木守・松田らによる略称「連続射殺魔」に似ていると発言した。そのとおりだった。「上海」は幻のフィルムであり、白井佳夫でさえも初見であつた。そのみか、四日後に初公開された「赤P」も「上海」そっくりだった。三者の関係はこうである。

一九三七年の暮に制作された亀井文夫「上海」は、帝国主義戦争における雨の上海の風景である。

一九六九年暮に制作された「略称・連続射殺魔」は、永山則夫が足跡を印した地点の風景のみを写すことによって、流浪するブ

ロレリアアートが見たものは資本主義が現出する均質化された風景である。

一九七一年夏に制作された「赤P」は、革命戦争における磔漠地帯の風景である。

4 ハンニバル

上州高崎の宿だ。日が傾いていた。獄卒にひかれて唐丸籠が通る。日本一の旅人が御用弁になって、江戸に送られて打首になるんだ、という町の衆のささやきを耳にした忠治は、もしや、と唐丸籠に近づいた。日光今市旅人大天狗覚太郎と書かれた札と網うたれた唐丸籠の中に座していた男が顔を上げて、光る眼が、忠治とあつた。やはりあのおかただ……見送る忠治の目に、押送の一行は「梅鉢」と看板の出た宿にはいった。梅鉢屋ならよく知っている。今夜、救出しよう。

忠治は小料理屋に入つて夜まで待つ。ほろ酔い気味に座布団三枚並べてゴロリと横になつていたが、九ツの鐘を聞いて起き、外に出る。按摩の笛の音がする。仕舞の灯を落とそうとする夜鷹ソバの屋台がある。犬が吠える。スルスルッと忠治は梅鉢屋の庭に忍び入つた。六尺棒をかいこんで番卒が居眠りしている。恩人を救うためとはいいながら、人を斬りたくねえ。思案した忠治の目に廊下のはずれの廁が見えた。しめた！帯を解き、脱いだ着物で長脇差をしついで松の枝に結びつけ、禪一丁に短刀一本持つて、汲取口から忍びこんだ。待つこと久し、ペタッ、ペタッ、番卒につきそわれて囚人が用を足しに廊下を渡る冷飯草履の音がす

る。

卒「寝入りばなに起こしやがって、さつさと用を済ませる」
賊「やかましいやい。おれア江戸に着けばいのちのねえ身体だ。罪人には窓からの風に当るのが楽しみ。小使くらいゆつくりさせろい」

怒鳴り返しておいて、一人ごととしてつぶやく。ああ情ない。未練じゃあないが、あと二つか三つ、おれには娑婆に仕残したことがある。ここで当て節一つの名調子。へため息は、いのちを削る鉋という。

忠治の頭に生暖かいものがかかった。かまわず、チンコの濡をきる大天狗覚太郎の左手をつかんだ。いきなり便所の穴から出てきた手に覚太郎は驚いた。ひっこんでからまた短刀をさし出す手が来た。これで縄を切つて逃げろと言うんだ。ためらわず短刀を受けとつて縄を切った。キンカクシのはめ板をこじつてはずして穴をひろげた。もぐりこんだ。背中があった。おぶされというんだ。唐丸籠の押送に足が萎えている。忠治は大の男を背に、松の木の枝に結びつけた着物と長脇差しをかかえこみ、裏木戸をあけて、夜の街道を、逃げた、逃げた。

揮一本、夜目に生白い男の肌と、背負われて逃げるやつれた囚人の息づかいがきこえるような名演である。

やがて一字の地藏堂、忠治は覚太郎をひとまずそこにかくまうと、裏手の小川で全身の糞尿を洗い流し、着物をまとい、颯爽とした男前をとりもどすと、男の前にピタリとすわつて言った。「親分さん、おなつかしい。高崎の宿で姿をお見かけしたとき、受けた恩を思い出してお救い申しました」

ずり出して改変させる過程が、権力勝利と反権力壊滅のショーになるという敵の時刻表をひき裂く牢破りというのは痛快である。赤軍派は牢破りのやりかたで日本左翼の枠を超えた。外国大使館で人質をとつて、戦争捕虜交換の論理で同志奪還をするというのは反戦平和左翼の発想ではない。かれらはあまくないと思わせたのは人選である。中に坂東国男、浴田由紀子、泉水博三人がいたことがそれだ。坂東国男はあさま山荘銃撃戦で逮捕された連合赤軍兵士である。アラブ赤軍は連赤の同志殺しを、革命をけがしたもつて厳しく批判した。重信房子は水田洋子をゆるしがたいものと思つていただろう。しかし心情をこえて坂東の戦闘力を買つて脱獄者に指名した。

うちのものではない、という論理で、どれほど多くの行動者が組織から切り捨てられたか。義侠の徒は自ら籍をぬくが、鉄砲玉にしたてられたものは、維新时期にあつては相楽総三の赤報隊が明治権力確立後に斬られ、やくざは破門され、党は除名をもつて放り出し、戦後革命運動では朝鮮戦争時の在日朝鮮人共産主義者組防隊が日本共産党の平和ボケ路線へ転換で切り捨てられた。あは、うちのものではない。

浴田由紀子の献身性は疑いない。第二次テック闘争で彼女は支援共闘に加わり、またポナベ決死隊遺児ダニエル・ロベス・ドサルアの日米両政府への太平洋島民の戦時賠償要求闘争では、「知られざる皇軍」ポナベ島民決死隊を通じての太平洋戦争の正体をつぶさに知つて、日米両帝国の戦争にまきこまれたミクロネシア人の悲劇に涙した。「テック闘争」にしろ「ポナベ決死隊」にしる説明するのに一晩かかる。そういう複雑な闘争のなかで、なに

覚太郎はしばらく忠治の顔を見ていたが、「お若いの。おれアお前の顔と声を思い出せねえ。わからねえ。」そこで忠治は語る。「今から六年前、あつしが馬子をしてたとき、木崎街道三杉のところ、客がなく、ほんやり空馬を曳いて帰るところを親分さんが声をかけて乗つてくれたうえ、あつしの顔をつくづく見て、小僧、やくざにやなるなど五両の金を下さつた。あれから六年、わけあつてやくざ渡世に入つちまったが、親分さんの意見をおぼえていた」しばし絶句して覚太郎は言う。「それだけの恩で、おまえは生命を張つておれを助けてくれたのか」。ちよつど時間となりました、このつづきはまた口演。

虎造節国定忠治伝「唐丸籠破り」の段である。世界一の牢破りだ！ 先代虎造は次郎長伝が十八番だが、国定忠治を語らせてもごらんのとおりである。この段は「義侠」の原型に近い。ほんらいの義は代償を求めないものだ。忠治に覚太郎を救出させたのは衝動的とも言える原始の火で、このことがあつて覚太郎は若き国定忠治に惚れこみ、名を日光の円蔵とあらためて忠治と義兄弟の縁を結び、国定一家を上州にその人ありと知らしめるようになるのだが、それは後の話であつて、義の原始的、盲目的な力が、ぶーんと糞のおう関東美学の中に貫徹するような一段を、うどんを食いながら足立正生と聴いてみたいものだ。

革命運動には牢破りは不可欠である。一七八九年七月十四日、バリの民衆がバスチーユ監獄の牢破りに行ったときにフランス革命は始まつている。

俺は牢破りの物語が好きだ。国家権力が犯人を監獄という腹中につっこんで、あとは密殺するなり、裁判という国家の劇にひきが正義でだれが戦う者であるか見ぬく眼をもつたのだと俺は思う。しばらく姿を見せないでいると思つたが、反日武装戦線事件で姿を見た。刑事が彼女を逮捕しにきた日、彼女の眼前で斎藤和が青酸カリを嚙んで自殺した。殺人者は自殺しなければならぬという古典的な刺客の姿である。彼女は反日武装戦線のメンバーである。その「うちのものではない」浴田由紀子をアラブ赤軍は指名した。目の前で斎藤和の自殺を見た浴田由紀子を指名したのも重信房子だろうと俺は思つている。彼女も奥平を失つている。浴田由紀子は看護婦である。彼女を指名したのは心情だけではない。チンペイ、と浴田由紀子は緋名があるのだが、奪還される兵士として指名されたとき、「チンペイ、行つてきます」というような調子で飛び立つた彼女を見て、俺はまいった。スゲエ……。

そして泉水博だ。泉水博と仁平……名を忘れた、その二人の一般徒刑囚をアラブ赤軍は指名した。仁平という人は忘れたが、泉水博はやくざである。服役中の、仲間を飛ばし、権力に屈しない態度をかかれて指名されたという。彼は一九三七年、横浜戸部の生れた。戦後闇市時代に、テキヤの親分に、弱者いじめはするな、と教えられて生成した。泉水博の話は野毛に残っている。横浜市中区野毛、横浜らしくない横浜、闇市上りの庶民の町、大道芸の町。俺が好きなのは野毛の衆は、アラブ赤軍が泉水を指名したとき、さすが赤軍は目が高いと言つた。日本人、朝鮮人、中国人混成チームの伝馬船が官憲の目を出しぬいて密貿易船から闇物資（砂糖とか、バナナとか、米軍の医療品とか）を陸揚げしたという武勇伝が昨日のこのように語りつがれているのである。

松下竜一「怒りていう、逃亡には非ず」——日本赤軍コマンド泉

水博の流転」といういい本がある。泉水に対して流されたデマをうちやぶった本だ。泉水は他の赤軍コマンドとちがつてやくざの出のために、身もちが悪く、革命戦士の規律にたえられなくて酒に溺れてダカー高原を追放され、フィリップンに流れて殿様気分の生活をしていたところを逮捕されて日本送還されたというデマをだ。

事実に対する。肥後親分が泉水に「弱きを扶う」ことを教え、アラブ革命が「強きをくじく」ことを教えた。泉水のコマンドとしての生き方は松下竜一の本を読んでいたが、かりに泉水がフィリップンで殿様生活していたとしてもそれがどうした。赤色風小僧なんていうのはカッコいいではないか。

泉水をやくざ上りだからと他のコマンドと差別するような論調は気に入らない。三島由紀夫の首をはねた介錯人森田必勝はその場で自決したが、三島だけ葬式を出し、森田を棺の外に置いた文壇文士同様に気に入らない。

水滸伝は教える。三教九流を合して哥弟となす、と。イデオロギーがちがいが、系統がちがっても、生死をともにした者は兄弟である。

三人から推して、脱獄した他のメンバーも全部、優秀な連中が選ばれたのだろう。アラブ赤軍はベイロートの根拠地から発して各地に飛んでいる。逮捕された地点を見るとわかるのだが、丸岡修が一九八七年に東京で、同年六月フィリップンのマニラで泉水博が、浴田由紀子が一九九五年にルーマニアで、翌年吉村和江がペルーで、城崎勉がネパールで逮捕された。リストは松田政男文責「越境へのクロニクル」(映画芸術)二〇〇〇年三月増月号「足立正

陣がはさまれていた。報道陣は事件のネタを提供しつつづけるかぎり、金嬉老の味方だった。遠景は中景、中景は近景の人質となつて、金嬉老に手を出せなくなった。その中心にあつて金嬉老は、かつて自分をためつけた小泉という刑事に「あやまれ」と要求した。単純なのか複雑なのか、具体的なか抽象的なのか、つかみどころのない要求である。

不思議なのは旅館の女将をふくめた人質たちで、屈強な労働者たちはその気になれば隙を見て金嬉老に襲いかかる機会はいくらでもあつた。彼らにそのつもりはなかった。金嬉老はライフルを風呂場の鏡に立てかけたまま悠々と入浴し、人質たちはまるで金嬉老を守るかのように一団となり、女将はいそいそと世話をする仕末だった。

金嬉老は銃をつきつけることによって人質を解放したのである。ひらたく言えば、金嬉老の人質になった数日間はいかれの生涯でいちばん華やかな時間だった。人質たちは労働者も旅館の女将も、金嬉老のしつらえた舞台で傍役を演じればよかった。自分たちが反抗すれば金さんは青酸カリを囓んで自殺するから、と男たちはおびえてみせ、お客さんに万一のことがあったら私は宿の女将として面目がない、と女主人は日本女の健気を演じた。必死の抵抗者が銃をつきつけて向きなおったときに、銃をつきつけられた多数派の方が解放される、という逆理が実現することを金嬉老は証明した。これは賊の論理ではなく、革命の論理ではなからうか。金嬉老は、警官隊が突入する気配を見せたなら、人質を盾にすることではなく、彼らにダイナマイトを警官隊に投げつけさせることも考えていたのではなからうか。宿の女将を縛りあげ、浴衣の胸

生青年)による。リストの示すように、アラブ赤軍は逃亡して穴にひそんでいたのではない。国際根拠地から撃つて出ている。そして一九九七年二月、足立正生、岡本公三、戸平和夫、山本萬里子、和光晴生の「ベイロート5」がベイロートでレバノン右派に逮捕され、岡本公三のみ亡命者と認められ、他の四人は日本送還。同年七月、西川純がボリビアで逮捕され、二〇〇〇年十一月、重信房子が大坂で逮捕された。

この日、米大統領夫人ヒラリー・クリントンがニューヨーク州で上院議員当選。にこやかに手を振る五十三歳の腰のあたりには色香さえあつた。地味な服装で護送される重信房子と対比して同じ年頃の二人の女闘士に運命というものを感ずる論潮もあつたが、勝敗は兵家の常。

逆になる可能性も歴史にはあるのだ。運命好きの世論のために俺が占つてあげるが、ヒラリーは米国初の女大統領になるだろうよ。理由は「ヒラリー」という名前だ。エベレスト初登頂は英人ヒラリー卿だったから、男のヒラリーが山を「征服」したのなら、あたしだってヒラリー、ヒラリーと女の大統領になってみせる。権力の分析なんて、人相見、手相見、姓名判断で十分だ。

アラブ赤軍は金嬉老を脱獄指名する考えはなかったか。

金嬉老こそ天才である。寸又峽富士屋旅館に立て籠った金嬉老の戦術配置は、自殺用青酸カリ、六人の屈強な建築労働者をふくむ人質と人質ごと爆死する腹に巻いたダイナマイト、遠距離を狙撃できるライフル銃、というように自分の肉体を中心に置いて、同心円的に、前方へ前方へと構築されていた。ダイナマイトとライフルの間には、金嬉老自身が予期できなかったことだが、報道

元をちよつとはだけさせるなどという日本浪漫派的SMの演出をこらしてさ。女に刃物をつきつけて、おれの命令に従わなければこの女の生命がないとも言えはいいだろう。

俺は金嬉老に自決の意志はなかったと思つている。「謝れ」という要求のしかたがそうだ。この要求は、「金さん、すまなかつたな」から、「旧日本帝国の朝鮮支配と戦後過程での朝鮮人差別を謝罪し、あわせて朝鮮戦争特需で立ち直つて日帝の復活をゆるし、ふたたび東南アジアを経済侵略する日本国民の一人である自分を恥じる」まで、どのレベルでの謝罪も成立する。刑事は金嬉老に謝罪した。一刑事が日本国民を代表して謝罪したわけではあるまい。人質の生命を守る警察官の責務として謝るふりをした、と刑事は言えるし、そのように刑事の逃げ道を金嬉老は用意していた。要求はとおつた。金嬉老は武装を解けばよかったのである。無窮花の思想といえるかもしれない。生きられるところまで生きて抵抗し、自殺して楽になつたりはしない、という朝鮮民族の美学だと思つている。死のテーマと結びついたとき美学は強いのである。こと宗教ならば、それは殉教になる。

金嬉老によって俺は差別主義者を脱することができた。一九六〇年四月、韓国の学生革命が独裁者李承晩を倒したとき、日本全学連は韓国の学生に続けと呼号して安保闘争を戦つたし、日韓条約反対闘争時には、フランスのアルジュリア、日本の韓国という対応に、OAS(植民者からなるフランス右翼)のクーデタ計画に反対してパリ街頭に出るフランス全学連、日韓条約を第二の対日屈辱条約ととらえて張勉政権反対のデモにソウル街頭に出る韓国学生と呼び、自分たちも東京街頭でデモをやつたが、その

とき俺はマルクス主義者になっていたにもかかわらず、まだ朝鮮人嫌いだ。高校時代に日暮里で朝鮮人高校生と喧嘩したことがしこりになっていたのだ。そのしこりがとれた。

金嬉老の寸又峽蜂起によって、在日朝鮮人・韓国人問題の所在に気づいた日本人は多い。

在日二世の反差別闘争の十年分くらいが、一挙に前進したことも事実である。

金嬉老の天才はふたたび静岡刑務所で発揮された。数年を経ずして彼は牢名主同然になった。新聞雑誌の閲覧自由、散歩も運動も思いのまま。金嬉老は小さな違反を看守に犯させるのである。その罪をほめかして次々やらせる。そうして看守たちに自分の犯したミスの数々におびえさせ、自縄自縛に追いこみ、金嬉老の言うがままにさせられるのである。やくざのゆすりのテクニクとは言える。それ以上に金嬉老のカリスマ的呪縛力だ。

「あの人にものを頼まれて、いやだと言えぬわけがありません」——金嬉老担当の静岡刑務所の看守の言ではない。セルゲイ・ネチャーエフを担当した帝制ペテルブルグのセントペトロポール要塞監獄の看守の言だ。囚人が看守を支配した例はネチャーエフと金嬉老の二人だ。ネチャーエフが具体的にどのよう看守を切り取っていったのかはわからないが、カリスマの意志力だとは言えるだろう。露帝アレクサンドル二世の暗殺を企てる人民の意志が獄中のネチャーエフとの連絡に成功した。露帝暗殺を実行するか、ネチャーエフ救出をやるか、と人民の意志は問うた。二つの同時遂行は不可能。ネチャーエフは言下に答える。皇帝を打倒せよ、ぼくは待てる。

ぴったりの姿があるか。歌詞カードを読んだ。へだから出会ったことも、憂気様、真昼の夢。

金嬉老を論じたのだから永山則夫にもふれよう。「黄金の卵」、六〇年代末、独占資本は中学を卒業して集団就職しに上京してきた少年たちをそう呼んだ。俺は「黄金の卵」という独占の言いぐさに、安保ブンドの怨霊を感じる。若年労働力の枯渇が賃金高騰をひきおこし、日本資本主義の危機を招来するというブンド・プロ通派姫岡玲治の「秋の階級決戦論」は大はずれだったが、六〇年代末の永山則夫の足跡を愚直に、細大あまざらずドキュメントした足立正生、松田政男、佐々木守の映画「略称・連続射殺魔」は、日本社会の構造変化をドラスチックに描き出しているのである。六〇年代を通じて、集団就職少年をふくむ底辺労働者の流砂が日本をひんまげんばかりに蓄積されていた。その激発が犯罪である。六〇年代のはじめ、日本の都市人口は農村人口より少く、六四年段階に至って都市人口が農村人口を追いぬくや、高度成長経済期に都市集中化現象が起こり、六〇年代を通じてみた人口移動は概算、農村から都会へ三千万人である。農村は荒廃し、都会は市民社会と都市下層社会の二重構造にいたる。産業構造の変化にともない、単純重労働部門に、かつて朝鮮人徴用工をあてたように、六〇年代には試験的に「企業研修生」という名目でアジア人労働力をあてていたが、やがて3K部門に外国人労働力を密輸入し、好況時には彼等を労働ビザなしで労働させ、不況時には放り出して帰国させるといふぐあいに、都市内二重構造はやがて都市内「第三世界」の観を呈すにいたった。

六〇年ブンドの「秋の政治決戦論」は、安保三池と連続して資

こうして彼は自らの生還の可能性を閉じ、ネヴァ河の湿気に鉄が腐る地下牢獄につながれて、鎖につながれた箇所から壊疽をおこして死ぬ。死ぬ前に彼はとほもない脱獄プランを立てている。看守に露帝の衣装をさし入れさせ、皇帝に化けて堂々と正面から出て行くというものだ。その実行にかかり、看守に、あの人の頼みを拒めるものではないと言わせている。

成功の可能性はある。これはプガチョフのやり口だからである。コサック反乱者プガチョフは、自分はドイツ女エカテリーナ女帝に毒殺されたロシア皇帝であると名乗って、ロシア農民の火のような支持を得た。捕えられたプガチョフは、自分を悩ませた反乱者の顔を一目見んものと牢獄に忍んできたエカテリーナに、「さらばだ、女房どの」と不適な笑いを残して刑場に消えた。

ネチャーエフの話はルネ・カナック「セルゲイ・ネチャーエフ」(佐々木孝次訳)の記憶をたどって書いている。現代思潮社から出たあの翻訳書の担当者は松田政男だったはずだ。ついでに松田政男をやっつけよう。「映画芸術」臨時増刊の「足立正生零年」はよく俺なしでできたな。

庄野真代の流行歌に「飛んでイスタンブール」というのがあった。筒美京平の作だ。へそして出会った人、金嬉老、真昼の夢。俺は椅子からズリ落ちた。ありうる！イスタンブールの迷路のような舗道。昔は東ローマ帝国ビザンツ帝国の都コンスタンチノープル。今はトルコの首都イスタンブール。東西文明の接点で、近くにトロツキー亡命地プリンキボ島もあった血腥い歴史、町の一角に、又つと金嬉老がライフルを構えて出てくるというイメージの鮮烈さに俺は震えた。赤軍コマンド隊長の金嬉老。これほど

本と労働の衝突が行なわれたからには、秋に決戦が来なければならぬという判断あるいは希望の、経済分析的理由づけをむりに探して若年労働力の枯渇ということを言わざるをえなくなつたのであり、就職先がいくらでもある時期に革命的情勢がくるわけではないという常識に逆らつた理論家姫岡玲治は気の毒であったが、まさにその若年労働者の都市集中が六〇年代犯罪の激発をひきおこしたのである。

永山則夫の足跡を追って、彼が見ただろう地点をフィルムに収め、風景論が提出された。理論化は主に松田政男が行った。風景、流浪するプロレタリアートが見る帝国主義の客観。風景、帝国主義が出現させた圧倒的に外在的で敵対的なもの。

深刻な考察である。そのように永山映画をもってとらえた風景論だから、戦前に亀井文夫が撮影した「上海」の、大日本帝国軍隊の火薬と鉄によって破壊された風景と、ヨルダン軍の攻撃を受ける直前のジェラシ山中に待機するPFLPコマンドの礫漠の風景の近似を指摘することができた。最初に指摘したのは白井佳夫で、亀井「上海」の撮影日誌を早稲田の演劇博物館で読んで、「略称・連続射殺魔」および「赤P」のシノプシスと綿密につきあわせたのは俺だ。

松田政男は風景の前で立ちどまった。大島浩「絞死刑」とラストシーン。白光のハレーションの前で、不可知論的に髪をかき上げて懐疑する批評のポーズとそっくり、帝国主義が現出する風景の前で主題を神秘化するなんて、まるで松田はインテリ野郎みたいだ。戦争でぶっこわされたあの上海の風景と、待機するジェラシ山のコマンドの側の風景はちがう。ちがわないでどうする。

映画オルガナイザー松田の罪は、風景を見る流浪するプロレタリアートの目という主題の次の主題、原基とは越境するプロレタリアートであるという布川徹郎の記録映画を白眼視したことだ。反戦青年委の記録「鬼つ子」。コザにカメラをすえてコザ暴動の予感をとらえた「モトシンカカラス」。佐藤栄作訪韓の鼻先で釜山の在韓被曝者たちがソウルの日本大使館へ原爆後遺症治療のための日本渡航と韓国での医療施設設立を訴える「倭奴へ」。中国国連復帰と台湾の国連議席刺奪の時点で山岳地帯に入って台湾ネイティブ（いわゆる高砂）が、日本語で「また戦争やりてえなあ」と述懐する「アジアは一つ」、ここにこの作品を右翼映画と罵った松田は、孝侯賢「悲情城市」で、二・八起義時の国民党軍の入山を防ぐために列車をとめて、ヤミ族の戦闘員が日本語で「どこへ行くか」と誰何する場面を何と見るか。さて布川映画のその次はボナベ独立運動の記録「太平洋戦争草稿」。一九七六年の建国二百年祭時点のアメリカへ、勝利したベトナム兵の眼と化してカメラを持ちこみ、スー族インディアンの反米戦争を軸に叛アメリカ史をとらえたのが「バスタード・オン・ザ・ボーダー」だ。

足立正生がバレスチナに去った後、革命ドキュメント映画はもっぱら布川徹郎によって撮られているのである。映画批評家松田政男は、布川を嫌い、そして布川に協力する竹中芳、平岡の窮民革命論者をもっと嫌いであるために、布川に反目し、時には敵視した。ケツメドの小さい奴だ。

風景論は発展している。上田誉志美・山本教彦「風景論の成立——志賀重昂と日本風景論」（海風社、一九九七年）は、志賀の論がゴルドン、チェンバレンら英人地理学者の著作を下敷にした

ことをつきとめた。ということとは、自然を征服の対象にする欧米流論理を日本風景論に導入してしまったために、独占資本による山川草木の破壊に抵抗する神道的な論拠も右翼はなくしてしまつたということになるだろう。

俺はマイルス最晩年の「ハンニバル」という演奏が好きだ。メロディはブラームス交響曲第四番第一楽章の「騎士の動機」に近い。マイルスは黙っているが、彼は青年時代、クラシック音楽教育の殿堂ジュリヤード音楽院に学んでいて古典の素養がたっぷりあるから、ひょいと、昔耳になじんだブラームスが出たのだと思うが、若きアルトサクソ奏者ケニー・ギャレットのラプソディックなメロディとからみあうマイルスのトランペットが、古代英雄の風格を帯びている。この二人のからみを聴いて、ザマの戦いに敗れて斜めの陽ざしの中を単騎落ちてゆくハンニバルにローマの若き武將スキピオが追いつき、地中海の戦鬪を分けた二人の宿敵同士が、くつわを並べて戦場の彼方に去る姿が浮かんでくるのである。二人はカルタゴとローマをふり切ってしまったのではなからうか。なんでマイルスがこんな曲をつくったのかしらん、マイルス故郷のセントルイス近くに「ハンニバル」という小さな町があつて、晩年のマイルスもホームシックにかかったのかと思わないでもないが、そうだ、これは合衆国黒人のブラック・ナシヨナリズムの一つなのだ。

ハンニバルは十六年にわたってイタリアを蹂躪した。四度ローマ軍を大敗させ、ローマ城外に迫ったが、ローマを屈服させられなかった。逆にローマは若き英雄スキピオをアフリカに遠征させ、根拠地カルタゴを衝いた。カルタゴ元老院はハンニバルを呼び戻

した。ローマ軍とカルタゴ軍は現在のリビアの一角、ザマの平原で激突する。この戦いで不敗のハンニバルはついに敗れた。

これでハンニバルの歴史がおわったわけではない。十六年間、イタリアの地にあつてローマをおびやかしたハンニバルは、その先十五年間、中東のセレウコス王朝の地をさまよって、反ローマ同盟軍を結成してはローマ帝国の占領軍守備隊と戦うのである。イタリア再度侵略を夢見ながら、最後は毒杯をおおる。俺はその論をジャズ書「黒い神」に「ハンニバルの遺産」というタイトルで書き下したのだが、フェニキア（レバノン）に裏切られてセレウコス朝の地を彷徨うハンニバルは日本送還された足立正生を焼きあわせていると見ぬいた友人が三人いた。

島成郎告別式の通知が届いた。大山倍達先生との対談「武道論」を出してくれた先輩が平岡にも出して言っておいてくれたものだ。十一月十一日の告別式に出ようと、葬儀に皮ジャンでもあるまいから背広の袖に手とおすと、ムラッと俺の謀叛気が舌を出した。やめた。二千年おわり近くのピンソロゾロ目の11月11日、ブンド書記長の霊に片手拝みの分かれを告げては、敵階級が喜びすぎは

すまいか。一九六〇年五月のいく日か、俺が入盟した日の面白い光景がある。隊長Sに逮捕状が出ているおそれがあつて、俺は彼を護衛してデモ現場から新橋の雑踏にまぎれた。「夜来香」のネオンが見えた。ここなら刑事をマケそうだと直観した。入るとチャイニーズ・ムード旺盛の店内で、スケスケ・エレベーターに乗って、支那服を着た歌手が扇をゆるゆる舞わせながら「蘇州夜曲」を歌っていた。チャイニーズ・ムードというのはほんとにおたすね者に似合う。気分がよくなった隊長Sは疲れが出て眠った。

その何日か後、彼は入盟書を渡しながら、頭をかいて言った。眠つちまつてはすかしかつたから、これをきみに渡すのを遠慮した。入れ。あつさり署名して俺は隊長Sに返した。ガリ版刷りの文面には、「生涯を世界革命に捧げることを誓う」とあつた。天に誓うとも、人民に誓うともなく、ただ誓うだ。誓い受理の代理人ブンドはつぶれたけどな、誓いは誓いだ。とり消したおぼえない。

KAWADE夢ムック

文藝別冊

赤軍1969→2001

2001年1月30日発行

編集人

阿部晴政

発行人

若森繁男

印刷人

北島義俊

発行所

株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話：03-3404-1201

<http://www.kawade.co.jp/>

印刷所

大日本印刷株式会社

東京都新宿区市ヶ谷加賀町1-1-1

本文組版

有限会社メディアファクトリー

定価1200円(本体1143円)

©KAWADE SHOBO SHINSHA Publishers

2001 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

本誌掲載記事の無断転載を禁じます

【文藝別冊・バックナンバー一覧】

- 「永山則夫」
- 「90年代J文学マップ99」
- 「タカラヅカ」
- 「須賀敦子」
- 「黒澤明」
- 「淀川長治：ありがとう、映画の語り部」
- 「手塚治虫」
- 「J文学ブックチャートBEST200」
- 「[スター・ウォーズ]とジョージ・ルーカス」
- 「Jコミック作家ファイルBEST145」
- 「宇多田ヒカル」
- 「金子みすゞ：没後70年」
- 「Jフォトグラフィアー」
- 「白洲正子」
- 「グレン・グールド：バッハ没後250年記念」
- 「Jミステリー」
- 「安倍晴明：陰陽師・闇の支配者」
- 「作家と猫」
- 「最恐ホラー・ナビ2000[日本篇]」
- 「Asian Travellers」
- 「水上勉：恋しと鎮魂の文学」
- 「心の詩集」
- 「カザルス：バッハ没後250年記念」
- 「ジョン・レノン：没後20年」
- 「誰でもわかるニーチェ」
- 「柳澤桂子」

ご注文のしかた

●ご注文は最寄りの書店にお願いいたします。書店の店頭にて品切れの場合も、当社に在庫のあるものは、書店がお取り寄せいたします。

●当社より直接お求めの場合は、営業部（電話03-3404-1201）までお電話下さい。お届けは代引き宅急便でのご案内です。その際、代金は書籍代金（本体価格に消費税5%を加算）のほか、宅急便代として380円を申し受けます。なお、ご注文からお届けまで7～10日を要する場合がございます。あらかじめご了承ください。

※2月刊行予定

- 「ビル・エヴァンス」
- 「ビートルズ」

写真提供：毎日新聞社

KAWADE 夢ムック

文藝別冊

Asian Travellers

アジアントラヴェラーズ

小林紀晴
責任<写真>編集



【写真】

小林紀晴未発表写真カラーグラビア
ASIA CONSTRUCTION
マレー半島4×5紀行1998~2000

【インタビュー】

沢木耕太郎「歩くこと、歩いていくということ」
蔵前仁一（旅行人編集長）、西川敏晴（地球の歩き方編集長）

【エッセイ】

前川健一、下川裕治、島田雅彦

【トラヴェルソヴェルズニューウェイブ】

星野智幸、角田光代、清野栄一、素樹文生、古川旧出男

【旅するブックチャート フィクション×ノンフィクション BEST100】

河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2 ※価格は税別
Tel.03-3404-1201 <http://www.kawade.co.jp>



9784309976013

定価 本体 1143円 +税

ISBN4-309-97601-8

雑誌 62181 - 88

C9431 ¥1143E



1929431011432